
魔法少女リリカルなのはS T S 神となりし転生者の軌道

アルビオン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはS T S 神となりし転生者の軌道

【Nコード】

N 8 1 3 8 K

【作者名】

アルビオン

【あらすじ】

え？まじ？俺死んじやったの？まあいいや・・・

それじゃいつちよ暴れますか！！！！

神様に殺された青年 ながれ 流 つかさ 士がりりなのの世界で

大暴れする小説です。

オリ主最強チートなのでそれが嫌だという人は回れ右で戻ってください

それでもいいって人は見て下さい。題名変更しました

1話

俺の名は流^{ながれ}士^{つかさ}、俗に言うオタクだ。今日俺は借りていた「魔法少女リリカルなのは」のDVDをツタヤに返しに行ったのだが、その帰りに

「ぎゃあああああああ!!」

トラックにひかれて死んでしまった・・・

「マジかよ・・・まだ生きたかったのに・・・」

どうしよう、などと考えていると目の前に1人の少女がいた。

「ン？君は誰だ？もしかして俺をあっちの世界に連れて行く使者みたいなものか？」

「いえ、違います。私は創造神のアリエルと申します」

「ほうほう、で、そのアリエルさんは俺に何の用だ？」

「実は・・・あなたはまだ死ぬべき人間ではなかったのです。」

「・・・ハ？」

ナニッテルンダ？コノヨウジヨハ・・・

「簡単に言うと、私のミスであなたを殺してしまったんです・・・」

「・・・エ？てことは今の事故で俺はホントは死ななかったってこと？」

「はい。」

「・・・なにしてくれとんのじゃあああああ！！！！」

「なあ、俺がこれから生きるはずだった人生は？！どうなんの？！」

「・・・そのことでも1つ話があります。」

「なんだ？生き返らせてくれるのか？」

「いえ、この世界に生き返ることはできません。ですが、他の世界に転生させることはできます。」

「・・・エ？てことはリリなのの世界にも・・・」

「はい、行くことができます。」

「その話乗ったあああああ！！！！」

「・・・というわけでリリなのの世界に転生することになった。あ、でも魔法が使えないんじゃないじゃあ・・・」

「なあ、チート能力とかがつてつけれるの？」

「はい、あなたが望むことなら全て叶えます。」

よっしゃあああああ！！！！これで怖いものなしだ！！

「じゃあ、これとこれとこれ・・・」

「全部叶えましたけどこれじゃ向かうところ敵無しですよ？それじゃあつまらないじゃないですか。」

「いいのいいの、それでも。」

「そうですね・・・まあいいです、ではどの時期にします？」

「それじゃあ・・・無印の時に。それと原作ブレイクするけどいいよね？」

「そこは大丈夫です。それではいきますよ?」

「よっしゃ!それじゃあいつちよやりますか!」

「では・・・えい!!--!」

「ン?ってまじかアアアアアアア!!--!!--!」

俺はアリエルが出した穴に落ちて行つた・・・

2話

「・・・ああああああああああ！！！！！！」

俺は今現在進行形で空から落ちている。何でかって？さっきアリエルとかいう幼女に落とされたんだよ。・・・って、こんなこと考えてる場合じゃねえ！！このままじゃ地面に激突しちまう！！しかない、早速レアスキル使おうか！！

「・・・レイ・ウィング！！」

俺は魔法を発動して何とか激突を防いだ。

「ふう・・・危なかった・・・しかし、このレアスキルかなり役に立ちそうだな。」

俺が今使用したのはレアスキルのうちの1つ『わが手に集いし魔法』というものだ。簡単に言ってしまうえばありとあらゆる魔法と「魔法のようなもの」が使えるというものだ。ちなみに今使ったレイ・ウィングは体の周りに風の結界を作りそれでできた浮力で空を飛ぶというものだ。元ネタはかの有名な『ロバーズ・キラ』が出てくるアレなのだが・・・おっと、話がそれだな、このほかにもいくつかレアスキルがあるが、そっちは後々出すでしょう。で、その前に・・・

「ここどこなんだよ・・・」

俺はどこか知らない公園に下りていた。辺りを見ると犬の散歩できていた近隣住民がいた。俺は見られたと思ったが此方に気づいてい

なかったので安心した。

「ここにいてもしかたないな、歩いて散策するか。」

そついいながら俺は公園を出た。

しばらく歩き、俺はある喫茶店の前にいた。そう、あの『翠屋』の前に……

「……ここがかの有名な魔王の実家か……まあ、店先にいるのもなんだし入るか。」

そうして俺は翠屋のドアを開いた。すると奥から茶髪でツインテールの可愛い少女が来た。

「いらっしやいませー」

そう、彼女こそこの後『管理局の白い悪魔』と呼ばれる『高町なのは』なのである。

「ご注文は何にしますか？」

「じゃあこのアップルパイと新作シュークリームで。」
「かしこまりました。」

・・・やばいな、あの可愛さは。俺の理性が吹っ飛びかねん。そんなことを考えていると厨房から女性が出てきた。

「ご注文のアップルパイとシュークリームです。」

彼女は『高町 桃子』、知つてのとおりなのは母親である。

「ありがとうございます。」

俺は微笑みながら御礼を言った。しかし桃子さんはホント若いな、これで3人子供がいるんだからびつくりだよ。

しばらくして俺は店を出た。へ？お金？んなもんアリエルに頼んで用意してもらったよ。具体的に言つと1000万（笑）財布がもうパンパンだよ。

「さあ次は図書館にでも行くか。」

そっついながら俺は図書館へと歩を進めた。

「・・・ここが図書館か・・・」

俺は今図書館の前にいる。何の用かって？決まってるだろ、最後の
夜天の王に会いに行くんだよ！！

「さてと・・・はやてはどこに・・・お、いたいた。」

はやてのいる方を見ると上のほうの本を取ろうとしているのだから必
死になっている。か・・・可愛ええ・・・お持ち帰りしたい・・・
っは！だめだだめだ！！俺は崩壊しそうな理性を抑えこみ、はやて
の元へと向かった。

「はい、君が取りたかったのはこれかい？」

「あ、はい。どうもありがとうな。」

「いいのいいの、他に取りたいのはある？」

「それじゃ、これとこれとこれ・・・」

俺は車椅子に乗った少女『八神 はやて』に頼まれた本を彼女に渡した。

「ホンマありがとうな。家まで送ってもらったりして。」

「そんなこと気にしなくてもいいから、そういえば名前聞いてなかったね、なんていうの？」

「そついやそつやったね、ウチは八神 はやてっていうんや、君は？」

「俺は流 土っていうんだ、よろしくね、はやて。」

「よろしくや、土君、そういえば土君の家ってどこにあるんや？」

「隣町にあるんだ。」

「そつなんや、今度遊びに行つてええか？」

「いいよ。」

「わかつたわ、あ、ウチの家ここや。」

「へえ、結構おつきいんだね。」

知つてはいたがかなりデカイな、ヴォルケンズが暮らせるだけある

「そつなんよ、だから一人で暮らすにはちよつとね。」

「そつなんだ、1人暮らしで寂しくない？」

「そつでもないんよ、病院の石田先生もいるし・・・それに。」

「それに？」

「土君もいるしね。」

「それはうれしいね。じゃあもう遅いから帰るね。」

「せやな。それじゃ土君、また明日ね。」

「また明日。」

そつして俺ははやての家から離れていった。

「まだあの淫獣の念話が無いつてことはまだなのはは覚醒しないな。」

それに今日はもう遅いし、寝るか。」

そういつて、俺は最初に来た公園のベンチで意識を手放した。

2話（後書き）

士「かなり急な展開だったな。」

作者「まあそういうなよ、ラハール様、感想ありがとうございます。また、あなたの言葉がわたしの原動力になります。」

士「おーい、作者！次回予告やるぞー。」

作者「お、前日には・はやてと会った士、そしてなのはが覚醒したのを境に本格的に介入を始める！！次回、第3話 初戦闘

作、士「ドライブイグニッション！！」

3話

「ん・・・もう朝か・・・」

俺は欠伸をしながら公園のベンチから立ち上がった。なぜ公園で寝てたかというと、転生直後で家がないのである。

「・・・神の野郎に戸籍と家も頼んでおくべきだった・・・」

いまさら後悔しても仕方ない。仕方なく俺は図書館に行くことにした。え？何でかって？そりやはやてに会いにいくためだよ。

「さ、到着つと・・・はやてはどこに・・・お、いたいた、はやて
く！！」

「あ、土君！！おはようさん！」

「おはよう、はやて。今日は何の本をとりん？」

「いんや、今日は本を返しに來ただけなんや。」

「じゃあ今日は暇なんだ・・・じゃあさ、これから喫茶店行かない
？」

「え？それってもしかして・・・デート・・・／／／」

「まあそうゆうことになるかな？いく？」

「うん！いこか！！そういえば、どこいくんや？」

「翠屋つてとこ。すごくおいしいよ。」

「そうなんや・・・楽しみやな！！」

こうして俺達は翠屋へ向かうのだった・・・

カランコロン・・・

「いらっしやいませ」

「はあ・・・いい店やね」

「だろ？この前来たときに気に入ってさ・・・」

「そうなんや、まずすわるか？」

「そうしようか。」

「あらあら、彼女とデート？」

「そんなかんじですね。」

「へ！？彼女って・・・うちのこと！？・・・／＼／」

はやてが顔を赤くして縮こまってしまった。うん、可愛すぎ・・・お持ち帰りしたい！！・・・ツハ！！いかんいかん、理性が崩壊しかけた。てか桃子さんもくすくす笑ってないで何とかしてくれよ！！

「・・・はやて、注文何にする？」

「せやな・・・じゃあこのショートケーキにするわ。」

「じゃあ俺はこのシュークリームにするかな。すいませーん！」

「はい、今行きまーす！！」

奥の方から男の人の声がした。いまの声は・・・おそらく土郎さんだろう。・・・てかはやての顔がまだ赤い、何でだ？・・・もしか

して俺フラグ立てた！？まじかい・・・成立させようかな・・・いや、もう少し様子を見るか。

「はい、ご注文は御決まりでしょうか。」

「えーと、ショートケーキとシュークリームください。」

「かしこまりました。」

やっぱり土郎さんだった。うん、若いね、ものすごく。見た目20代だよ、あれ。そんなことを考えてると、急に念話が聞こえてきた。

（だ・・・誰か・・・聞こえていたら返事をしてください・・・）

俺は返事をしなかった。ここで返事をしてしまうとなのはが覚醒しない恐れが出てくるからなそれだけは避けないと・・・ん？土郎さんがこつちを見ている・・・横？・・・あ、はやてがちょっと顔を膨らませてる・・・

「土君、ひどいやんけ。何回も「土君」って呼んだのに・・・」

「あ、ごめんごめん、ちよつと考え事してたから。」

そういつてはやての頭を撫でた。気持ちいいのか「んっ・・・」

なんて声を出してる・・・もうほんとにお持ち帰りしようかな・・・このままだつたら理性が持たない。

「お待たせしました、ショートケーキとシュークリームになります。」

「ありがとうございます。」

桃子さん、ナイス！！俺とはやては注文したものを食べ、暫くした後店を後にした。

「はやて、今日は楽しかったか？」

「うん、すっごく楽しかったよ!!」

「そうか、それはよかった。」

「でな？土君に頼みがあるんやけど・・・」

「何？はやて」

「今度うちの誕生日なんねん、せやからその日にうちに来てほしいんや。」

「うん、わかった。いいよ。」

「ほんま！？うれしいわ」

「そう？じゃあ日にちが近くなったら教えてね。」

「うん!!じゃあ今日はもう遅いからお別れやな。また誘ってな？」

「うん、またね。」

俺ははやてを家にとどけたあと、夜まで何をやるか迷っていた。

「さあどうしようか・・・神にもらった能力の確認でもするか。」

俺は最初に来た公園に結界を張り、そこで能力の確認を始めた。

「それじゃあまずは・・・こいつだな・・・変身!!」

俺はディケイドライダーを召喚し、そのまま仮面ライダーディケイドに変身した。

「仮面の軍勢は良好・・・よし、次だ。」

俺が使った『仮面の軍勢』というレアスキルは、簡単に言えば平成ライダーになれるというものである。決して白い仮面の集団ではない。

「現れる・・・ゲート・オブ・バビロン!!」

次に使ったのは『ゲート・オブ・バビロン』。これは次元の狭間に空間を作るものであり、中に色々な物を入れることができ、食べ物、決して腐らず、冷めることもない。因みに俺は武器などを入れている。

「えーと・・・お、あつたあつた。」

今回はデモン・ブラッドという宝石でできたタリスマンを取り出した。・・・やっぱこれ、ロストロギアに指定されそうだな・・・いろんな意味で・・・

「んじゃ、次だ・・・メタモルフォーゼ、フォーサインパルス!!」

俺はレアスキル『メタモルフォーゼ』を使い、インパルスガンダムに変化した。このレアスキルは自分の好きなロボット、MS、MAになれるというものである。因みに今回インパルスになったのは・・・思い付きだ。

「メタモルフォーゼ良好・・・次はこれだな・・・アンサー・トーカー発動。」

次に発動したのは『アンサー・トーカー』というレアスキル。これは発動中はすべての問いに対する答えが出せるというものである。この際、目が年輪のような感じになる。

「・・・よし、目も変わっているな・・・んじゃ、次いくか・・・トレース・オン!!」

俺はレアスキルを使い、GNソードを投影した。このレアスキルは『トレース』といい、自分が考えたものを投影できるもので人間以外なら何でも投影できる。

「うし、こんなもんか・・・んじゃ、出るか。」

俺は結界を解除し公園に出た。するとあたりはすでに暗くなっていた。

「お、ちょうどいいな・・・いた、ここから南に二キロ先か・・・よし、いくか!!」

俺はなのは達がいる方にむかって勢い良く飛んだ。するとすぐに化け物に追われてるのはとフェレット・・・ユーノ見つけた。

「見つけた・・・メタモルフォーゼ・・・ウイングゼロカスタム!!」

俺はウイングゼロカスタムになり、なのは達に襲い掛かろうとした化け物・・・ジュエルシードに向けてツインバスターライフルを撃

つ
た。

[illegible]

「おい、二人とも大丈夫か？」

「……あ、はい。大丈夫です。」

「ならいいが……二人とも、ちよつとそこどけてくれないか？」

「それはこっちのセリフです!! あれはとても「危ないんだろう?」

「じゃあ何で!？」

「人が襲われてるのを見て見過ごせるわけないだろう。それに、あんなヤツにやられるほど俺はやわじゃない。それとも、俺の攻撃に巻き込まれて消し炭になりたいのならいいが・・・」

今2人は俺の射線上にいる。俺の攻撃に巻き込まれてはいけないので忠告した。すると2人は納得したようであの後ろに隠れるようにさがつた。

「よし、いい子だ……。じゃあ、いっちょぶっ放しますか!!」

俺はそういった後、ツインバスターライフルを両手で構え、最初の攻撃でいまだに動けない化け物に向けて発射した。すると銃口から道路と同じくらいの太さのビームが発射され、化け物を消し飛ばした。ビームが過ぎ去った後には、大きく抉れた道路とジュエルシードだけが残っていた。

「あちゃー、やりすぎたかな？でもまあいいか……。なあ、これ封印しなくていいのか？」

「あ、いますす！！」

なのはに向かつてそういうとジュエルシードの元に向かい、そのまま封印した。

「あの・・・さっきはどうもありがとうございました。」
「いいのいいの、そんなこと。」
「あの、少しあなたについて聞いてもいいですか？」
「そうだな・・・あしたしてくれないか？今日はもう遅いし。」
「そうですね。じゃあ明日みだり翠屋に、だろ？」・・・はい。」
「わかった。明日翠屋にいくよ。あ、俺の名前は流士だ。」
「わ、わたしはなのは、高町なのはっていいいます。」
「僕はユーノ、ユーノ・スクライアっていいいます。」
「そうかい、じゃ、また明日な、なのは、ユーノ。」

俺はそういうと元いた公園に向かった。

3話（後書き）

士「だいぶ豪快にいったな。」

作者「いいんだよ、それくらい。」

士「ほんとにか？レアスキルも一気にばらしたし。」

作者「どうせばらすんだから、いいじゃないか。」

士「まあいいだろう、んじゃ次回予告やるか。」

本格的に介入を始めた士、そして士は黒い魔導師と出会う
次回 第4話 フェイト・テストロッサ

作、士「ドライブイグニッション!!」

4話 フェイト・テストロッサ

「・・・ふぁー、昨日はよく寝たな・・・」

俺はいつも寝てる公園でいつもどおりに起きた

「さて、今日の予定は確か・・・なのはとユーノに昨日のことを話す、はやてに会いに行く、フェイトとアルフを助けるぐらいか。まあ後はその場の成り行きでと・・・」

俺はそういいながら、公園を後にしたのは待つ翠屋を目指した

カランコロン

特に何事もなく翠屋につくことができた

「いらっしやい・・・ませ」

「おう、昨日の約束どおりきたからユーノ連れてきてくれるか？」

「わかったよ。」

「あ、それと・・・シュークリーム1つ。」

「うん、いまもってくるね。」

なのははそういうと厨房の奥に足早に入っていった。・・・そこま
である必要があるのかどうか分からない、俺は何処にも行かない
ぞ？そんなことを考えてると奥からシュークリームを持ったなのは
がやってきたユーノは・・・お、いたいた、なのはの肩に乗ってや
がる。羨ましい・・・

「はい、シュークリーム。それじゃあお話聞かせてもらおうよ？」

「まず、きみは魔導師なのか？」

「うーん・・・魔導師とはちょっと違うかな？」

「どういうこと？」

「魔導師というより魔術師といったほうがあってる。」

「魔術師？」

「ああ、様々な世界にいるんだが、どいつもこいつも随分と内気で
滅多に人前に出ることはないな。」

「へえ、じゃあ昨日のあれは？」

「あれは俺のレアスキルだ。他にもいくつかある。」

「レアスキル？」

「レアスキルってのは個人が元々持つてるスキルのことで、色々な
能力があるんだ。でも普通複数持つてることなんて無いんだけど・
・」

「ほえ、そうなんだ、他にはどうゆうのがあるの？」

「他には・・・トレースつてもものあるぞ。」

「どういう効果なの？」

「簡単に言つとロストログア生成能力だ。」

「え！？そんな能力きいたことないよ！？」

「そりゃそうだろ、俺の能力は真正銘突然変異のレアスキルだか
らな。」

「・・・なんだが空気になってるの。」

「おお、すまん。聞いたかったのはこれだけか？」

「うん。それとお願いがあるの。」

「ん？なに？」

「その・・・友達になつてほしいの。」

「友達に？」

「うん、そうなの。」

「・・・俺なんかでよければ喜んで。」

「ありがとう！！そっういえば名前いつてなかつたね、私はなのは、高町なのはだよ。」

「なのはか・・・いい名前だな。俺は士、流 士だ。よろしくな、なのは。」

「うん、よろしく。」

「それじゃあ俺は行くから。」

「またね。」

「ああ、またな。」

俺は翠屋から出て、図書館に向かった。すると道の途中で・・・

「ちょっと、なにするのよ！！」

「うるせえ！！おとなしく乗れ！！」

「誰かたすけて！！」

人攫いに出くわした。

「どんだけ運悪いんだよ・・・さっきの声からして攫われたのはアリサとすずかだろうな・・・あ、あいつら逃げようとしてやがる・・・しかたない、助けに行くか・・・」

俺はそっういと『仮面の軍勢』を使い、仮面ライダークウガに変身して車を追いかけた。しばらく追いかけるとどこかの倉庫についた

「「「「「「「「ギヤアアアアアアアアアア!!」「」「」「」「」

今の攻撃でほとんどの敵が蒸発した。非殺傷設定にするべきだったな、これ

「くっ、てめえ!!そこから動くな!!」

「あ?・・・!!」

敵の頭領がアリサとすずかの頭に拳銃が当てられてた

「ようし、まずはその装甲見たいなのを解いてもらおうか。」

「ちっ・・・わかったよ・・・」

俺はメタモルフォーゼを解除した

「へへっ・・・じゃあお前には死んでもらおうか・・・死ね!!」

敵の頭領は俺の頭を拳銃で撃ちぬいた。しかし

「はっ!!死にやがったぜ!!これでもう邪魔する奴はいね・・・なっ!!」

「そんなんで俺が死ぬわけねえじゃねえか!!メタモルフォーゼ!アレックス!!」

「や・・・やめてくれ!!・・・ギヤアアアアアアア!!」

俺はガトリングガンで頭領を蜂の巣にした

「ふう・・・2人とも、大丈夫か?」

「ちよっとアンタ!!なんで頭撃たれても死なないのよ!!」

「ん？ああ、俺は頭が鋼みたいに固いんだ。」

「そうなんだ・・・まあいいわ。助けてくれてありがとう。」

「ああ、んじゃ、あとは任せたぜ。」

「ちよつと！！乙女をこんなところに・・・て、もういっちゃったし・・・」

俺は足早に現場から離れた。なんでかって？そりゃあんなどこにいたら殺人犯にされちゃうもん。そんなことをいいながら空を見るともうすっかり暗くなっていた

「もうこんな時間か・・・お、魔力反応あり！！これは・・・フェイトか！！！！」

俺はフェイトと思われる魔力反応があったところに向かった。すると、案の定トカゲの化け物に苦戦しているフェイトとアルフがいた

「さあ助けにいきますか・・・メタモルフォーゼ・・・マジンカイザー！！！！」

メタモルフォーゼを使い、マジンカイザーになった俺はフェイトに今にも襲い掛かりそうなトカゲに攻撃を仕掛けた

「フェイト！！危な！！2人とも、離れる！！ターボスマッシュパーンチ！！」何だい！？」

俺はトカゲに向かって攻撃し、二人の前に降りた

「2人とも、大丈夫か？」

「ああ、そんなことよりアンタ何者だい？」

「何、2人を助けるもの・・・とでもいつところか。あ、そうだ、

「今から俺の前に出るなよ？」

「そうゆうわけには、俺の攻撃に巻き込まれて消滅したいのか？」

・

「わかりました。」

「そうだね、アンタに任せるよ。」

どうも2人はさっきの攻撃に恐怖したらしい。・・・なんでだろう？少し大きめのクレーターができただけに・・・

「よし、いい子だ。んじゃ、いっちょ暴れますか!!!!」

俺はそういい、トカゲに向かって攻撃した

「光子カビーム……ム……!!」

G
A
A
A
A
A
A
A
A
A
A
A
!
!
?

「まだまだあゝ！ルストトルネード！！！」

「G
U
A
A
A
A
A
A
A
A
! ! !
?」

「止めだ！！ファイヤーブラスター……！！！！」

「GUGYAAAAAAAAAAAAA!!!」

トカゲはあつけなく消えていき、そこにはジュエルシードが残っていた

「ずいぶんとあつけなかつたな。ま、いいか。おーい！こ
れ封印してくれー！」

「え？あ、はい。．．．ジュエルシード、封印！．．．あの、助けてくれてありがとうございました。」

「いいっていいって。んじゃ、俺はもう行くからな。」

「あの！……名前を教えてもらってもいいですか？」

「ん？あぁ、俺の名は士、流士だ。よろしくな。」

「はい。私はフェイト、フェイト・テストロッサです。で、こっち

は私の使い魔のアルフ。」

「よろしくね、士。」

「ああ、じゃあ俺は行くから。」

「うん、またね。」

「ああ、またな。」

俺はそういい、その場を後にした

「・・・なんだかすごい人だったね、アルフ。」

「そうだね、フェイト・・・でも、これはやりすぎじゃあ・・・」

「そうだよね・・・結界張つとけば良かった。」

2人がさつき土が戦っていたところを見ると、核戦争でもあったのかと思うくらいひどい状況になっていた・・・

4話 フェイト・テストロッサ（後書き）

作者「やりすぎだボケ！！」

士「しかたないだろ、やっちゃったモンは。」

作者「なんでそうなんだか・・・まあいい

今回は「魔法少女リリカルなのは」転生者は最初から最強でした」

から、猿飛佐助君が来てるぞ。では、どうぞ」

佐助「猿飛佐助だ、よろしく。

そうそう、今回プレゼント持ってきたんだった、ホレ」

作者「温泉のペアチケット3枚？」

佐助「ああ、キラ達に渡しといてくれ」

作者「わかったよ」

佐助「それと、士と模擬戦したいんだがいいか？」

作者「ああ、いま士説教中だからまた今度でいい？」

佐助「そうなのか、それじゃダチになっていいか？」

作者「それならいいよ。」

士「じゃあ今から俺達はダチだ、よろしくな、佐助」

佐助「ああ、よろしくな、士」

作者「それじゃ、2人とも、次回予告やるから。

次回 第5話 2人の魔導師」

一同「「ドライブイグニッション！！！」」「」

5話 2人の魔導師 上

「ふあゝ・・・もう朝か・・・」

俺はいつも通り公園で起きた

「・・・流石にもうそろそろ拠点がないのはきつくなってきたな・・・よし、部屋を借りよう。」

流石に拠点がないとこれからの行動に支障がでそうなのでマンションの一室を借りる事にした

「さて、どこにしようか・・・フェイトの隣の部屋にするか。」

借りる部屋も決まったので、俺は変身魔法を使い不動産へ向かった

「すみませーん、部屋を借りたいんですが・・・」

「はい、どこにしますか？」

「じゃあこの部屋で・・・」

無事に部屋を借りることができた。身分証明書とかどうしようなんて考えたけど財布の中に入ってた。神め・・・やるな

「んじゃ、早速部屋にいきますか!?!」

俺は瞬歩を使い、一気にマンションへ向かった。ちなみに瞬歩は試

しにやってみたらできました。

「ここか・・・でかいな。」

瞬歩を使ったおかげで5秒でついた

「んじゃ、部屋はいけ〜ん。」

自分の部屋に入ってみたが、やはりでかかった。一軒家と遜色ないほどでかい。

「ここに住むのか・・・なんか寂しいな。」

そんなことをつぶやきながらも部屋の中を確認した。持ち物がないので片付けなどは特にない。何しよう・・・そうだ、フェイトのところに挨拶に行こう

「んじゃ、いきますか。」

ピンポン

「はい、今いきまーす。どちら様で「よう、俺だ。」・・・どうしたの？」

「何、今日隣に引っ越してきたから挨拶に来たんだ。」

「そうなんだ・・・上がってく？聞きたいこともあるし。」

「いいのか？「うん。」じゃあ、上がってくわ。」

俺はフェイト宅にお邪魔することにした

「フェイトー、誰がきたん「俺だ。」・・・何しにきたんだい？」

「隣に越してきたから挨拶に来たらフェイトに上がってけって言われたからちよつとな。」

「本当なのかい？フェイト。」

「本当だよ、アルフ。」

「そうかい・・・警戒してごめんね？」

「謝らなくてもいいよ。で、聞きたいことって何？」

「この前のことなんだけど、あれってバリアジャケット？」

「ああ、あれか？あれはバリアジャケットじゃない。あれは俺のレアスキルだ。」

「レアスキル？」

「ああ、『メタモルフォーゼ』って言ってな。どんなのかって言うと・・・」

「どんななの？」

「口で説明するより見せたほうがいいな・・・メタモルフォーゼ・・・ガンダム！！」

俺はレアスキルを使い、ガンダムになった

「ほえ・・・こりゃすごいね。」

「この装甲、すごく堅そう・・・」

「まあな、ちなみにこのレアスキルには非殺傷設定なんてものはな

い。」

「エ！？てことはあの攻撃を人に向けて撃つたら・・・」

「間違いなく蒸発するね。」

「・・・巻き込まれなくてよかったね、アルフ・・・」

「そうだね、フェイト・・・」

「そういえば、あの場所はどうなったの？」

「あの場所は・・・核爆弾が爆発したんじゃないかってぐらい大変なことになってるよ・・・」

「まじで？もつと加減したほうがいいか・・・」

「あれで加減したの？」

「ああ、もし全力で攻撃してたらこの海鳴市が地図から消えることになってたぞ。」

「あんた、規格外すぎるよ・・・」

「そうかい。で、他に聞きたいことはあるか？もうそろそろ行こうかと思うんだが・・・」

「じゃあ、これからこの前みたいに助けてくれる？」

「・・・それは断言できないな。」

「どうして？」

「実はな、俺の友達にジュエルシードをこの町に落とした張本人とそいつの手伝いでジュエルシードを集めてる奴がいてな、そいつらの面倒を見なくちゃいけないんだよ。だからいつでも助けに行けるって訳じゃないし、もしかしたら敵として目の前に現れるかもしれないしな。」

「・・・」

「だが、俺もフェイトが危険なときには助けに行く。お前に怪我して欲しくないしな。そうそう、もしジュエルシードを集めてる途中で白いバリアジャケットをきたお前同じくらいの歳の魔導師とあつたら戦わないで話し合え。ちゃんと話をすれば何とかなるかもしれない。これは絶対だ。もし戦うようなら俺が邪魔するからな。聞きたいことは他にあるか？」

「じゃあ、最後に・・・友達になってくれる？」

「友達にか？俺としてはもう友達なんだが・・・分かった、フェイト。お前は俺の大切な友達だ。」

「ありがとう、土。」

「じゃあ俺はもう行くぞ。」

「うん、またね。」

俺はフェイト宅を後にし、いったん自分の部屋に戻った

「さて、次はなのはとユーノだな。」

なのは達にも同じことを伝えないといけないので俺は翠屋へと向かった

カランコロン

「いらっしやいま・・・土君、どうしたの？」

「ちよつと伝えないといけないことがあってな・・・ユーノをつれてきてくれるか？」

「わかったよ、ちよつとまっててね。」

なのはユーノがいる奥の方へ向かっていった

「じゃあ俺は・・・あそこの席にでも座って待ってるか。」

一番奥の席に座り、なのはを待っていると肩にユーノを乗せたなのはがきた

「おまたせ。で、話って？」

「ああ、実はなのは、お前達以外にジュエルシードを集めている奴がいる。ちなみに俺の友達だ。」

「エ！？どうゆうこと！？」

「そのまんまだ。理由は知らんが、この前危ないところを助けたらジュエルシードを追ってたみたいなんだよ。」

「でも、ジュエルシードって危険なものなんだよ？どうして？」

「知らん。俺に聞くな。どうしても知りたいんだったらあつたときにでも聞け。」

「でも、それだったら戦うことに・・・」

「そうそう、そのことなんだが、そいつと会っても絶対に戦うな。

話し合え。そうすれば互いに怪我することもないしもしかしたら最良の道が開けるかもしれない。」

「でも、戦うことになったら・・・」

「そのときは俺が止めに入る。」

「・・・わかったよ。」

「ちなみにだが、そいつのバリアジャケットは黒主体の水着みたいなものだからすぐにわかるぞ。」

「うん、わかった。」

「じゃあもうそろそろかえ」「待って。」どうした？」

「土君、今日暇でしょ？今日すずかちゃんって友達の家遊びに行くんだけど一緒に行こう？」

「俺でいいならいいぞ？」

「じゃあ決まり!!」

俺はすずかの家に行くこととなった

5話 2人の魔導師 上（後書き）

作者「時間と気力が持たなかったなので2つに分けました」

士「がんばれよ」

作者「まあそういうな。あと、今回も佐助が来てるぞ」

佐助「よう、元気が士」

士「ああ、元気だ。で、その荷物は？」

佐助「お前がちゃんと飯食ってるか心配になったからな。作ってやろうと思って」

もってきたんだよ」

士「そりやすまん。で、何を作るんだ？」

佐助「ご飯と味噌汁と鮭の塩焼きとあとは士と作者、なにか食べたいものは？」

士「じゃあ豚のしょうが焼きで」

作者「んじゃ俺も」

佐助「わかった、じゃあ少し待っていてくれ

20分後・・・

佐助「おーし、できたぞ!!」

士「おお、うまそうだな!!」

作者「それじゃ・・・」

一同「「いただきます!!」「」」

士「うめえ!!そして久々に飯まともに食った気がする。」

作者「たしかにこれはうまい!!」

佐助「そうだろ?うちの作者も認めてるからな。」

作者「そうなのか、んじゃ、いったん次回予告入れるか。」

佐助「んじゃ俺がやるわ。次回 第6話 2人の魔導師 下」

一同「「ドライブ・イグニッション!!」「」」

6話 2人の魔導師 下（前書き）

すいません、更新がかなり遅れてしまいました。

これからはもっと早いペースでの更新ができるように精進しますのでこれからこの小説を応援してください。

では、魔法少女リリカルなのは　くチート？何それおいしいの？　が始まります。

6話 2人の魔導師 下

俺はいまなのはとともに月村邸の前にいるのだが・・・

「なあなのは、ここはどここの国の宮殿だ？」

「にはは・・・」

でかい、想像してたよりも遙にでかいのだ。たとえるならば米国の白い家だ。

「いつまでのここに居るのもなんだから中に入るか。」

「そうだね。」

ピンポーン

「はい、あ、なのはちゃんいらっしやい。で、その人は？」

「ん、俺か？俺はなs「ああー！！！！アンタあの時の！！」お前は・・・」

俺がこの家の住人である月村すずかに自己紹介しようとしたところ奥のほうからものすごい轟音と共にバーニングアリサことアリサ・バニングスが走ってきた

「アンタいまものすごく失礼なこと考えてなかった？」

「んなわけねえだろ。」

「そう？ならいいけど。」

くっ、なんて鋭いんだ、ニュータイプじゃないのか？こいつ

「そういえばまだ自己紹介してなかったな、俺の名は流 士、なのは友達だな。」

「ふーん、あたしはアリサ・バニングスよ、よろしく士。」

「私は月村すずか、よろしくね士君、みんな、ここで立ち話もなんだから中に入ろうよ。」

「それもそうだな、じゃ、おじゃまします。」

こうして俺は月村邸へ入っていった

その途中・・・

「そういえば、士君と2人はどこで知り合ったの？」

「ああ、そういえばいつてなかったな。俺がこの2人とあったのは5日くらい前で、誘拐されたところを助けたんだったよな。」

「そうそう、急に現れて犯人達をばっさばっさと・・・なんだか気持ち悪くなってきた。」

「流石にあの光景はきつかったらな。」

「あの光景って？」

「腕が千切れたり人が蒸発したりマシンガンで蜂の巣になったり・・・」

「あれは凄かったね、ほんとに・・・」

「まさに地獄絵図だったよね、あれ・・・」

「な、何がなんだかよく分からないのー！ー！！」

すずかとアリサが少し涙目になり、なのはがオーバーヒートした。その後、テラスのような所につき、俺たちは座り、3人は談笑、俺はというと・・・

「アンタ凄いわね・・・」

「ひいふうみい・・・うちの猫全部いるよ。」

「まじかい・・・まあいいか。」

猫にものすごくなつかれた。因みにいまの状態は頭の上に一匹、肩に2匹、太ももの上に2匹、自分で持っているのが1匹、足のところに残り全部とこの凄いことになってる

「ふう・・・はやてをつれてきた方がよかったかな？」

「はやてつてだれなの？」

「ああ、この前図書館で知り合った子でな、足が不自由で車椅子生活してるんだ。」

「へえ、そうなんだ。」

「まあ、また今度来るときにでも誘うさ。っとすずか、ちょっとトイレ貸してくんねえか？」

「いいよ、そこをまっすぐ行って右にいけばあるから。」

「あんがとよ。」

俺はそのままトイレに行くふりをし、家の死角に入った

「さて、どんな姿で介入しようか・・・2人には顔見せたから隠す必要はないんだよね・・・あ、そうだ、宝具のテストもかねてあの姿で行こう。」

そういったあとすぐにトレースでアーチャーの服を出し（サイズは土に合わせた）すぐさま着替え、なのはが行動を起こすのを待った。因みに肌の色と髪の色もアーチャーと同じものになっている

「んじゃ、まずは・・・トレース、オン」

俺はトレースで黒い弓とカラドボルグを投影し月村邸の屋根に乗り、なのはとフェイトの到着を待った。するとなのはが森のほうへ走っ

て行っただけでカラボルグを構えた

「あいつらが俺の行ったこと守ってくれればいいんだが・・・ん、遠くの方から魔力反応が2つか、あれはフェイトとアルフだな。」

フェイトとアルフの魔力反応がなのは達の向かうのを感じた俺は千里眼を発動させ2人の様子を伺った。するとフェイトがなのはに向かってフォトンランサーを一発撃ったのが見え、すぐさまカラボルグを真名開放し放ちフォトンランサーを撃ち落とした

「あつぶね、間に合ってた。んじゃ、あいつらの元に向かうか。」

俺は黒い弓をしまい、刃の無い剣、ゴルノヴァを作り、なのは達の元に向かった

俺はなのは達の元に着き、着地した。すると2人と2匹が驚いた顔をしていたので

「おーい、お前ら、何戦ってんだよ。俺が今朝いったことも忘れたのか？」

と満面の笑みで言い放った

「ちょっとアンタ、何すんだい！！」

「それはこっちの台詞だ。なのは、フェイト、まさか俺が今朝言ったことも忘れたわけじゃないよな？」

「「お、覚えてるよ。」」

「なら互いの格好を見ながら言ってみる。」

「えっと、『黒主体の水着みたいなバリアジャケットを着た子と会っても絶対に戦うな、話し合えそうすればお互いに怪我のしないしもしかしたら戦うよりよっぽどいいことになるかもしれない』だったっけ・・・」

「私は『白いバリアジャケットを着た同じくらいの歳の魔導師とあっても戦わないで話し合え、ちゃんと話し合えば理解しあえるかもしれない。』だったような・・・」

「・・・ところどころ違うがまあいい。さて、それをいったんなら互いのバリアジャケット見て何も思わんのか？」

「「え？・・・ああー！！！！」」

「ようやく気づいたか。さて、2人とも互いに謝りなさい。」

「「ご、ごめんなさい。」」

「よろしい、それじゃあ後は自分達でできるな？あ、あと今回のジユエルシードは俺が預かるから、いいな？」

「でも「約束破った罰」うう・・・」

「んじゃ、俺は帰るから、じゃあな。」

俺はそういい残して家に向かった。因みにあのあとなのはとフェイトは話し合い和解し、友達となったそうだ。ジユエルシードは2人

で集め、一定量集まったら決闘をし、勝ったほうが入れるということになった

「ただいま〜ってもだれもいないんだっな。」

「あ、おかえりなさい。」

「アリエル！？なんでここに！？」

「実は、神界でクーデターが起きてしまい、向こうにいれなくなっ
たんです」

「まじかい・・・で、命からがらここに逃げてきたと。」

「はい、ですが私はいまでもクーデターを起こした者たちに狙われています。」

「てことはここに來た理由は・・・」

「今回のクーデターの首謀者である死神のマキナを倒して欲しいのです。」

「死神か・・・俺なんかで倒せるのか？相手は神だろ？このチート能力でもきついつて。」

「確かに、それにマキナは地獄にいた者たちをほとんど蘇らせてしまったので、かなり厳しいと思います。なのであなたに新しい能力を授けます。」

「新しい能力？」

「はい、具体的には『超速再生』、『鋼の体』、『直視の魔眼』、『エレクトロニクスマスター』、『ハイデライトウォーカー』です。」

「・・・これだけあれば神だろうがなんだろうが倒せるな。」

「マキナを放つて置けばこの世界が消滅します。ですから必ずマキナを倒してください。」

「ああ、そういえばそいつはもう動いてるのか？」

「いえ、私がマキナに封印を施したので恐らくあと10年は持つと思います。」

「10年か・・・ちょうどストライカーズときか・・・あと、どういった奴が蘇ったんだ？」

「えっと・・・半分男で半分女みたいな人とか金の鎧をきた自分のことを王とか言ってる人とかです。」

「あしゅら男爵にギルがメッシュかよ・・・めんどくさっ。」

「では私ももう寝ます。土さん、おやすみなさい。」

アリエルはそういうと奥の部屋に向かった。・・・ちよつとまで、なぜ奥の部屋に行く？

「なあアリエル、お前どこに住む気だ？」

「どこってここですよ？」

「・・・なんでさ。」

かくして、波乱に満ちた一日が終わった。

6話 2人の魔導師 下（後書き）

士「遅い！！なんでもっと早く更新しなかったんだ！！」

作者「忙しくて更新する暇が無かったんです。」

士「言い訳なんて聞きたくないわ！！大体更新が遅れた所為で俺の出番がすくなか ったじゃねーか！！」

作者「怒るところこ！？」

士「だまれ！！キサマは今すぐミンチにしてやる！！」

作者「ミンチはやめて！！」

士「黙って逝けやあ！！！！デイス・フランク！！」

作者「ギヤアアアアアア・・・」

士「星になったか・・・しかたないな、御礼は俺から言うか。

magune様、デイスティニープラン様、感想ありがとうございます。」

神「magune様からロンギヌスの槍10本とコタツ（デンドロビウム型）

が届いてるよ」

士「あれ、アリエルこっちきたのか。」

神「うん、あとディスティニープラン様からニコルのピアノ伴奏が入ったCDが

届いてるよ。」

士「ニコルのか・・・今度あっち行ってアスランと聞か。」

神「士、次回予告」

士「ああ、わかった。次回 第7話 なのはとはやての出会い」

士、神「ドライブイグニッション!!」

いまさらなキャラ設定

流 士

性別 男

年齢 18歳↓9歳

身長 185cm↓150cm

体重 60kg↓40kg

好きなもの 宝具、なのは達、ガンダム、アーチャー、アリエル

嫌いなもの 管理局の腐った上層部、KY、マキナ

魔導師ランク EX（GOD）

（○）内は本気でキレた場合

魔力量 ∞

顔立ち どう見ても流竜馬。背広を着れば堅気の人にしか見えない

性格 基本的に他人の言うことをすんなりとは聞かない（特に管理局）だがなのは達のいうことは聞いている

レアスキル

メタモルフォーゼ

効果 自分が知っているロボット、MS、MAになることができる。
一部分のみ使うこともできるが、少し扱いが難しくなる。

仮面の軍勢

効果 クウガより後の仮面ライダーなら全てなれる。（サブライダーも含めて）何かしらの条件が必要なものでも難なく使うことができる。ベルトを他の人につけることもできるがその場合条件を満たしていないと変身できない。（ファイズなど）各最強形態にもなれる。

この手に集いし魔法

効果 自分の知っている魔法や魔法のようなもの、能力がすべて使える。正直言つてこれだけでも世界最強になれる。

トレース

効果 某正義の味方の固有結界の進化版。これは自分が名前と形を知っている物を創ることができる。だが一度の創造に使う魔力の量が半端ではない。（1回の使用で機動六課全ての魔力を消費する）これを連続で使えるのは士の魔力が無限だからこそである。

王の財宝

効果 まんま英雄王のと同じである。

答えを出す者

効果 某金色の魔物のと同じである。

超速再生

効果 どんな致命傷でもほんの数秒で完治する。存在ごと消し去らないと恐らく殺せない。

鋼の身体

効果 本来に身体が鋼になる。ローアイアスよりも堅い。まさに最強の身体。

直視の魔眼

効果 存在する全ての物質の内包する死を点や線として見る事ができる。線を切ればそこが死に、点をつけば存在そのものが死ぬ。本来は使いすぎると廃人に近い状態になってしまうのだが、土の場合は永遠に発動してられる。

エレクトロニクスマスター

効果 電気を自由自在に操ることができる。さらにコインなどでレールガンも放てる。

ハイデライトウォーカー

効果 真祖の吸血鬼になる。普通は不老不死になるが、土の場合は力や能力だけで不老不死にはならない。吸血することに力が増していく。

7話 3人娘の出会い 上

どうも、流 士です。突然ですが、現在進行形でものすごく困っています。なぜかというところ・・・

「うーん、後5分・・・」

「・・・なんです。」

隣でアリエルが寝てるんです。昨日別の部屋に入ってたよね！？なんで!?

「・・・しかたない、アリエル起こすか・・・、おーいアリエル、起きろー。」

「ん・・・ふあゝあ、おはよう士。」

「お前はなぜ俺のベッドで寝てる、あと敬語はどうした敬語は。」

「だって夜怖いんだもん・・・それと敬語やめたのはこっちの方が親近感もてるかなって思ったんだけど・・・だめだった?」

アリエルはそういうと涙目+上目使いで見してきた。クツ、これじゃ反論できないじゃないか!!

「いや、それはいいんだが「じゃあこれから一緒に寝ていい?」

いや、それは・・・「だめ?」う、

・・・わかったよ、好きにしてくれ。「やったー!!」ハア・・・

「

この娘には何を言ってもだめな気がしてきた、この先どうなるんやら・・・

「まあこれはいいとして、今日はなにしようかな・・・久しぶりに
はやてに会いに行くか。」

「土出かけるの?」

「まあな、お前も来るか?」

「行く!」

「んじゃ、準備しろ。っても何も無い」あるよ。」・・・なんであ
るんだ?」

「こつちに来るときに天界からもってきた。」

「用意周到だなおい。あ、そうだ、お前は俺の妹って言うことにす
るからな。」

「どうして?」

「そのほうが何かと都合がいいからだ。あとあとな・・・」

「?、まあいいや。」

「それとお前の名前も変えないとな。」

「え?どうして?」

「流 アリエルなんて名前変だろ、だから流の苗字に合う名前を考
えんだよ。」

「へえ、じゃあどんなのにするの?」

「そうだな・・・流 夏海ってのはどうだ?」

「夏海・・・いい響きだね、これにするよ!!」

「気に入ってくれてよかったわ、でも念話とかのときは本名でよぶ
からな?」

「分かったよ、お兄ちゃん。」

「へ?お兄ちゃん?」

「だって私が妹なんでしょ?だからお兄ちゃん」

「まあいいか、それじゃあ行くぞ、夏海。」

「はい!!」

というわけで、新しい妹ができた俺は家を出た

ピンポン

「はいはい、今いきまーす。どちらさんでしょうか？」

「俺だ、はやて。」

「土君やないけー！最近図書館来てくれなかったからどうしたのか
と思っとったわー！」

「ごめんごめん、こっちもいろいろあつたんだよ。」

「まあええわ、で、隣にいる子はだれや？」

「ん？ああ、こいつは俺の妹だ。夏海、挨拶しなさい。」

「はい、流 夏海って言います、よろしくおねがいしまーす！」

「夏海ちゃんやね、うちは八神はやてゆうんよ、よろしくな。で、
土君はどうしたんや？」

「何、久々にはやての顔が見たくなつたんだ。それと今から翠屋行
くから一緒に行くか？」

「ええんか？」

「ああ、いいぞそれくらい。」

「それじゃお言葉に甘えて。」

「それじゃ、行くか。」

こうして、俺ははやてと夏海とともに翠屋へと向かった

カランコローン

「あ、いらっしやい土君。」

「その言い方だと俺が来るのが分かってたような感じがするんだが・
・・」

「なんとなくそんな感じがしたの!!」

「そんな胸張って言うことじゃないつつの。」

「そつえばその子達は誰？」

「ん？ああ、こっちが前言ってたはやてだ。それとこっちは俺の妹だ。」

「八神はやてって言います、よろしくな。」

「流 夏海っていいいます、よろしくお願いしまーす!!」

「私は高町なのはっていうんだよ、よろしくね。」

カランコローン

「あ、フェイトちゃんいらっしやい。」

「・・・もしかしてなのは私が来るのわかってた？」

「なんとなくなの!!」

「だから胸張ってまで言うことじゃないだろ。」

「あ、土いたんだ。」

「ああ、お前よりちよつと前にな。」

「で、そこにいる2人は？」

「俺の友達と妹。」

「八神はやてっていいいます、よろしくな。」

「流 夏海って言います、よろしくお願いしまーす。」

「私はフェイト・テストロッサっていうんだ、よろしくね。」

「さて、全員の自己紹介が終わったところでなのは、注文いいか？」
「いいよ、何にするの？」

「俺はこのカルボナーラで。」

「じゃあうちはオムライスで。」

「私はカレーライスで。」

「それじゃあ私はミートスパゲッティで。」

「かしこまりました。それじゃあ出来次第持つて来るね。」

そついうとなのはは厨房の奥に入ってしまった。すると入れ替わりで
士郎さんが出てきた

「君が士君だね？」

「はい、そうです。」

「実は君に頼みたいことがあるんだけどいいかな？」

「はい、俺に出来ることなら。」

「そうか、それはよかった。実は私が監督しているサッカーのチームのゴールキーパーが怪我してしまつてね、君に今日の試合代理で出て欲しいんだけどいいかな？」

「俺でいいならやりますよ。」

「ありがとう、それじゃ私は失礼するよ。」

士郎さんはそういい、厨房の奥へいった。それにしてもサッカーか、ルールどうしよう・・・あ、そうだ、『答えを出すもの』使えばいいのか、よし、そうしよう

「お兄ちゃん、何１人で不気味な笑ってるの。」

「何、サッカーの試合のときにどれくらい相手を絶望させるか考えてたんだよ。」

「何さらつと怖いこといっとなのや。」

「そつだよ、それに相手が絶望するまでやらなくてもいいよ。」

「いいんだよ、相手が絶望するほどの圧倒的な実力でねじ伏せる、それが俺のやり方だ。」

俺が独自の持論を発言していると、なのはが料理をもってきた

「おまたせー、それじゃ食べようよー!」

「わかった、ん？なのは、1つ多くないか？」

「あ、それ私のなの。」

「ほう、そうなのか、それじゃ」

「「「「「いただきます。」」「」「」」

30分後・・・

「「「「「ごちそうさまでした。」」「」「」」

「さて、どうしたものか、サッカーの試合まで時間もあるしな・・・

」

「ふえ？土君サッカーの試合でのの？」

「ああ、さつき土郎さんから代理を頼まれた。」

「そうなんだ、じゃあいつぱい応援するからがんばってね!」

「ああ、そうさせてもらうよ。」

なのはにそういい、席を立とうとしたとき

「お前が土か。」

シスコンがでしゃばってきました。正直かなりウザい

「はい、そうですが、何か？」

「今すぐ俺と戦え!!俺に勝たなければなのはやらん!!」

いつ俺がなのはをもらうことになったんだよ

「はあ、別にいいですけど、貴方如きが俺に勝てると思ってるんですか？」

「なっ！！・・・いいだろう、いまから道場に来い！！切り捨ててやる！！」

結局シスコンと戦うことになりました

「ほう、よく逃げずに来たな。」

「それはこっちの台詞ですよ、シスコン。」

「なっ、俺はシスコンではない！！」

「そんなことはいいですからさっさと初めてさっさと終わらしましうか。」

「それもそうだ・・・な！！」

シスコンがそういうと最初から神速を使い俺に何度も切りかかってきた。因みにそれぞれの得物は俺が

通常の刀と同じ長さの木刀、シスコンが小太刀と同じ長さの木刀2本である。俺は斬撃を全て自分の木刀で弾き、シスコンの手に握られていた木刀を粉々に砕いた

「何っ！？」

「はあ、全くだめですね、まず神速が遅すぎる。あれじゃ簡単に見切られてしまいますよ。次に斬撃一つ一つに威力がなさすぎる。あれじゃ相手に切り傷1つ入れられませんね。最後に殺気が弱すぎる。本当に相手を倒そうとするならこれくらいの殺気はないと。」

俺はそういうものすごい強さの殺気をぶつけた。するとシスコンは手足が震えだし、今にも気絶しそうになっていた。その後、士郎さんがものすごい形相で走ってきた

「恭也！！今の殺気はなん・・・」

「どうしました？士郎さん。」

「・・・さっきの殺気は君のかい？」

「はい、そうです。」

「そうか・・・ところで、君はここで何をしているんだ？」

「そのシスコンに戦いを挑まれたんでボコにしていただけです。」

「・・・きみは本当に9歳か？」

「一応生物学的にはそういうことになっていますが。」

「そうか、わかった。」

「あ、士郎さんこれからこのシスコンに止めをさすのでそこで待っててもらっていいですか？」

「あ、ああ、わかった・・・」

「ということで、覚悟しろシスコン。」

俺はそういうと右足を前に出し、抜刀術の体制に入った

「飛天御剣流、奥義・・・天翔龍閃！！」
あまかけりゅうのひらめき

俺が天翔龍閃を使った瞬間、シスコンが吹っ飛び壁に激突、そのまま気絶した

「ふう、士郎さん終わりましたよってどうしたんですか？固まったりして。」

「・・・あ、いや、あまりにも速かったから一瞬何が起こったかわからなくてね。」

「そうですか・・・まあいいです。あ、土郎さん、サッカーの試合もうそろそろじゃ無いですか？」

「あ、本当だ。よし、急いでいこう!」

俺はシスコンを放置したまま道場を出た

7話 3人娘の出会い 上（後書き）

作者

「またもや時間と気力の問題で二つに分けました」

士

「そこ頑張れよ」

夏海

「そつだよ頑張ろつよ」

作者

「俺には俺の苦勞を理解してもらえる味方はいないのか・・・」

士

「まあ、そういうことだな」

夏海

「そつだね」

作者

「もういいよ、お前なんてフラグ乱立男にしてやる」

士

「夏海、このカス消すから手伝って」

夏海

「わかったよ」

作者

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

い

士

「今更謝つても遅い！！ダイナズトプレス！！」

夏海

「その通り！！メガブラント！！」

作者

「ぎゃああああああ・・・」

士

「星になったか・・・んじゃ、俺達で御礼言つとくか、雨季様、デイスティニープラン様感想ありがとうございました」

夏海

「デイスティニープラン様からトツカノツルギ×2とガーベラスト
レート×2

が届いてるよ」

士

「雨季様からは桃子認定・世界一の野菜炒めか、どれ、一口・・・
何これ、

うますぎて、逆に何もいえない・・・」

夏海

「私にも食べさせて・・・凄い、美味しすぎて何もいえない・・・

士

「うまいものも食べたことだし、次回予告いきますか」

夏海

「じゃあ私がやる！！次回 第9話 3人娘の出会い 下」

士、夏海

「「ドライブイグニッション！！」」

8話 3人娘の出会い 下

「みんな、この子が今日代理で入ってくれる流 士君だ。」

「流 士だ、今日一日よろしくな。」

「さて、自己紹介も終わったことだし、今日の試合がんばれよ!!」
「『『『『『『『『『『『』』』』』』』』』』』』」

俺は今海鳴市内のサッカーグラウンドで土郎さんに頼まれたサッカーの試合の試合に出ている。なんでも、今日出るはずだったゴールキーパーの子が骨折して出られなくなり、しかもこの試合が大会に出るための最後の切符をかけた試合ということで、俺に白羽の矢が立ったようだ。しかし、なぜ俺なんだろう。他のチームメイトを出せばいいのに。土郎さんはなのはから色々話を聞いて決めたっていったけど俺何かしたか?というかなのは、土郎さんにどういう風に伝えたんだ?

「これより、試合を開始します!!」

考え事をしてるうちに試合が始まっていた。すると相手チームがボールを取ってそのままロングシュートしてきた。しかもゴールの角に向かって。普通小学生はジャンプ力が足りずこのボールは取れない。だが俺は違う、この程度の高さはどうということはない。俺は軽くジャンプし(といっても軽くゴールの角に届くが)ボールをキヤッチ、そのまま味方にパス。したはずなのだがどうやら加減を間違えたらしくボールはそのまま・・・

「ありや、ゴールしちゃった。」

相手ゴールに入ってしまった。本当は入れる気無かったのに・・・

ほらきたよ・・・

「はい、なんですか？」

「さつき君が使ってたのは神速かな。」

「いいえ、ちがいます。あれは瞬動と縮地です。」

やっぱりこのことか・・・

「縮地って、あの仙人が使う縮地か！？」

「はい、そうです。」

「・・・土君、縮地を教えてくださいませんか？」

「土郎さんには神速があるじゃないですか。」

「神速と縮地では圧倒的に縮地のほうが速いし、戦士としての血が騒ぐんだ、たのむよ。」

「・・・はあ、わかりました。でも俺は教えるのは苦手なんでこれを使って習得してください。」

俺はそういつて一冊の本を渡した

「これは？」

「これは俺が実際に使ってた縮地の習得法が書いてある指南書です、あげますのでこれを使って習得してください。ちなみに普通の人がこれを使って習得しようとする最低70年かかりますので。」

「君はどれくらいかったんだ？」

「初回一発、試してみたらできました。」

「・・・まあいいか、これは使わせてもらっよ。」

そういうと土郎さんはかなりあきれた様子で帰っていった。しかたないよな、本当のことだし・・・

「士くん、おいてくよー!!」

「あ、わりいわりい。」

なのはに呼ばれた。なんでもこれから翠屋で祝勝パーティーがあり、その主役が俺だというのだ。確かに3点取ったけど・・・俺なんかでいいのか？そんなことを考えながら歩いていると・・・

「・・・!!」

「ジュエルシードか・・・」

ジュエルシードが発動した。しかもこれまでとは比べ物にならないほど大きな魔力を持っている。

「夏海、海鳴市一帯に広域結界を。」

「強度は？」

「最高で。」

「了解!!」

俺は夏海に広域結界を張らせ、戦闘体制に入った

「さて、ぼちぼち封印に行きますか。」

俺がそういつてジュエルシードを封印しにいくとする。すると・・・

「な、なあ士君、うち全然状況が読めないんやけど・・・」

俺の後ろにはやてがいました

「え！？はやてちゃん！？それに夏海ちゃんいま魔法使ったよね！？」

「士、どういこと！？」

「そのことについては後で話してやるから今は全力ではやてを守つとけ！！」

俺はそういつとジュエルシードの元へ一気に飛んでいった

「さて、俺の勘が当たってればあの魔力は・・・」

そう呟きながら飛んでいると、ジュエルシードが見えてきた。その姿は西洋に出てくるような悪魔とまったく同じであった

「そんじゃ、早速試してみますか。」

俺はそういった後、自分に変身魔法をかけた。ちなみに姿は知る人ぞ知る『ロバースキラ』リナ・インバースである。そして俺はその姿のまま敵の視界に入る。すると・・・

「キキキ、シネ、リナ・インバース!!」

かん高い声で叫びながら攻撃してきた。そして同時に敵の正体もわかった。こんな容姿をしてさらに、リナ・インバースの名を知っている者、それは・・・

「やっぱり魔族か・・・マキナの野郎の仕業だな、これ。」

俺は敵の攻撃をよけながら呟き、敵の動きが止まったと同時に攻撃を開始した

「さあて、反撃開始だ!! エルメキア・ランス!!」

「キキキ、ソンナモノアタルカ!!」

手始めに出の速い魔法で攻撃してみたが、あっさりかわされた

「ほう、これかわすか・・・ならば!!」

「!! ドコニッタ!？」

「ここだ!! ブラム・ブレイザー!!」

「ナニ!？ ガアアアアアア!!?」

俺は虚空瞬動で敵の後ろに回りこみ、威力の大きい魔法をぶつけた

「さあとどめだ！ーラ・テイルト！ー！」

「ガアアアアアアアアアアア・・・」

白魔法最大の魔法を放ち、それをくらった魔族は消滅していった

「ふう、これでいいな。おーい、なのはとフェイトどっちでもいいから封印しにこーい。」

「なのは、私が行くよ。」

「おねがいね、フェイトちゃん。」

「ジュエルシード・・・封印！ー！」

「おし、これで終了つと。んじゃ、翠屋に行きますか。」

そういつて翠屋にいくとしたとき

「いや、まだおわってないで？」

はやてのことを忘れていました

「・・・ああ、忘れてた。なあはやて、このことの説明は翠屋についてからでいいか？」

「それでもいいけどちゃんと説明してな？」

「ああわかったからわかったからそう迫ってくるな。」

俺ははやてにそっぴい聞かせ、翠屋に向かった

「ほんなら、翠屋についたから説明してもらっで？」
「はいはい、それじゃまず・・・」

30分後・・・

というわけだ。わかったか？」

「わかつんやけど、その魔法はうちにも使えるん？」

「ああ、才能だけならなのはやフェイトよりもあるぞ。」

「ならいますぐ教えてや！！」

「うん、無理。」

「なんでや！？」

「なのはたちが使ってる魔法を使うにはデバイスっていう機械がいる。あいにく俺は持っていないしなのはたちも予備みたいなのはない。」

「そうなんや・・・」

「まあ大丈夫だ、俺の見積もりではお前は今年のクリスマスあたりには使えるようになる。」

「どうしてわかるんや？」

「何、ただの勘だ。」

その後はやてに他の魔法は教えられるけどっていったら今すぐ教えてっていわれた。でもなあ、これ教えたら確実にはやてssランク超えるな、将来的に。そんなことを考えてるとパーティーもお開き

になりはやてには後日魔法を教えることにし、俺は家に帰った。

「ふう、今日も疲れたな。もういいや、今日は寝よう・・・」

俺はそのままベットに倒れこみ、そのまま寝た

ちなみにその後夏海が俺のベットに入り込んできたが、気にしない
気にしない

8話 3人娘の出会い 下（後書き）

作者「もうグダグダだ・・・」

士「文才ねえな、オイ」

作者「あんまりそれゆうな!!」

夏海「だって本当の事じゃん」

作者「ひど!?!」

士「そういえば何でスレイヤーズの魔法が多いんだ?」

作者「ああ、それはな、俺が初めてみた魔法が出てくるアニメがスレイヤーズだったんだよ」

夏海「へえ、じゃあさ、どのキャラが一番好きなの?」

作者「ん?それはもちろんリナだ!!」

士「悪人に人権は無い!!ってか?」

作者「まったくもってその通りだ。」

夏海「まあいいや、それじゃ雨季様、ディステニープラン様、感想ありがとうございます」

作者「ディステニープラン様からソードカラミティのシュベルト

ゲーベルが届いてるぞ」

士「王の財宝にいらておくか、作者、それは？」

作者「それは雨季様からの贈り物だけど中には何が・・・うわ！？
なんだこりゃ！？」

夏海「気持ち悪い！！！」

士「こいつを消すぞ！！いくぞ夏海！！」

夏海「うん！！」

士、夏海「ドラグ・スレイブ！！」

作者「いや、俺も巻き込まれるって！！ぎゃあああああああ・・・」

士「作者も巻き込まれたけどまあしかたないか、夏海、次回予告頼むぞ」

夏海「はい、次回 第9話 KY登場、貴様に人権は無い！！」

士、夏海「ドライブ・イグニッション！！」

9話 K Y登場、貴様に人権はない！！

「ふぁゝ、もう朝か・・・」

普段通りに起きる俺、しかし実際は少しワクワクしていた。そう、今日は時空管理局、つまりはあのK Yが来るのだ。どうやってなぶり殺してやろうか・・・いまから楽しみである。

「さて、まずは夏海を起こそうか・・・おい、夏海！起きろー。」

「うーん・・・後5分・・・」

「ったく、しかたないな、ここは強行手段に出るか。黄昏よりも暗き存在、血の流れよりも紅き存在、時の流れに埋もれし、偉大なる汝の名において・・・」

「ちよつとまつて！！今起きるから！！」

夏海が涙目になって飛び上がってきた。そしてそのままこちらを睨んでくる。正直言ってただ可愛さが2乗化されてるだけだ

「そんな起こし方しなくてもいいでしょ。」

「起きないお前が悪いんじゃ。それより顔洗って来い。」

「はい。」

「いったか、さて、俺は朝飯でも作りますか。」

そう一人呟き俺はキッチンに向かった

「さて、何を作ろうか・・・」

正直言って何を作ろうか迷う。俺としてはやはり朝は和食がいい。この世界に転生してから間もない時期はいつも翠屋で朝食を取って

いた。しかし、翠屋は喫茶店。基本は洋食なので和食が恋しくなってきたのだ

「やっぱ定番なのにするか。」

結局の所、鮭の切身と味噌汁、漬け物にご飯とかなり定番なものを選んだ。まあ作りやすいから別にいいけどな。

料理ができたのでテーブルに並べていく。因みに食器や材料などの類はなぜか『王の財宝』

の中に入っていた。入れた覚えはないんだけどなあ・・・

「顔洗ってきたよ。」

「おお、それじゃ食べるか。」

「いただきます。」

30分後

「「ごちそうさまでした。」」

久々に料理したはずなんだが前より数段腕前が上がってた。某赤い

弓兵よりも上だろう。それはそれで嬉しいな。

「夏海、今日はなのはの家に行くぞ。」

「翠屋じゃなくて？」

「翠屋は生憎定休日なんだ、それに俺は土郎さんに用があるしな。」

「ふーん、まあいいや。」

「それじゃ、すぐ行くから準備しとけよ。」

「はい！！」

夏海は元気よく返事をし、そのまま走って部屋に戻っていった

「さて、後はどうやってKYをなぶり殺しにするか・・・色々試したい術式もあるしな・・・うーん・・・そうだ、これにしよう。

クツクツク、待ってるKY、精々首を洗って待ってるんだな・・・」

なんか性格がエヴァに似てきたような気がする・・・気のせいだな？気のせい

「お兄ちゃん、準備できたよー。」

「おし、行くか！！」

俺と夏海は意気揚々となのはの家向かった

ピンポン

「はい、今行きまーす。どちらさまでしょうか？」

「俺だ、なのは。」

「あ、土君、どうしたの？」

「土郎さんに用があつてな、いまは道場か？」

「うん、なんか昨日からずっと籠りっぱなしだけど何かあったの？」

「いや、ちよつと渡したものがあつてね。それとなのは、俺の用が済むまで夏海と遊んでやつてくれないか？」

「わかったよ、夏海ちゃん、こっちで遊ぼ？」

「うん、わかった！！」

夏海となのはが遊び始めたのを見た後俺は土郎さんがいる道場に向かった

「土郎さん、いますか？」

「ああ土君、どうしたんだい？」

「いや、縮地の練習が捗っているか見に来たんですよ。どうですか？」

「いや、これが難しいものでね、今は何とか足の裏に気を溜めれるぐらいだよ。」

「・・・普通そこまで行き着くのには3年はかかるんですけど・・・あなたは天才ですか？」

「初回一発でできた君に言われたくないな。」

「そうですよね。」

俺と土郎さんで楽しく談笑していると、道場の戸が開き、そこからシ

スコンが出てきた。

「流 士！！俺と勝負しろ！！俺に勝たなければなのはやらん！！」

「なにいつてんだかこのシスコンは・・・」

「ああ、私は土君ならいつでも大歓迎だよ？」

「なににですか？」

「なのはの貰い手。」

「あの、俺まだ9才ですよ？せめてあと10年たってもしなのはに貰い手が現れなかったら考えますよ。」

「その言葉、たしかに聞いたからな。」

「おい、聞いているのか！？」

「ん？ああ、聞いているよ、勝負だろ？別にいいけど。」

そういつて俺は道場の隅に置いてあった木刀を取り、シスコンの前に立った

「土郎さん、試合開始のコールをお願いします。」

「ああ、わかった。では・・・試合開始！！」

試合開始と同時に俺はシスコンの懐に潜り込み、そして・・・

「神鳴流決戦奥義！！真・雷光剣！！」

キツイ一撃を食らわしてやった。その後シスコンは宙を舞い、そのまま床に落ち気絶した

「・・・土君、君は幾つの流派が使えるんだ？」

「使おうと思えば全て完璧に使えますが・・・土郎さん、どうしたんですか？」

「いや、あまりにすごいから驚いてただけだ。」

その後俺は士郎さんに縮地のコツを教えた。時間にして約3時間、これで士郎さんは縮地の1つ前と言える瞬動と虚空瞬動を会得した。それにしても士郎さんは呑み込みが早い、というか早すぎる。マジで天才だあの人

「それじゃ俺は行きますね。」

「ああ、また頼むよ。」

俺は道場を後にし、なのは達のところに向かった

「夏海―行くぞー。」

「はい、じゃあまたね、なのはちゃん。」

「またね。」

そういつて帰ろうとしたそのとき

「――!!」

（ようやくきたか・・・）

「お兄ちゃん!!」

「ああ、いくぞ――!なのは、夏海、ユーノ――!」

「うん――!」

「わかったの――!」

「はやくいこう――!」

ジュエルシードが発動、俺達は急いで向かった

ジュエルシードが発動している地点に向かうと、すでにフェイトが戦闘を始めていた

「フェイト！！大丈夫か！！」

「士！！私は大丈夫！！」

「フェイトちゃん！！いま加勢するよ！！デイバインシューター、シュウウウウト！！」

「無論、俺もだ！！フレア・アロー！！」

「私もだよ！！フリーズ・アロー！！」

昨日戦った魔族とは違い魔力量が少ないようで、すぐによろけた

「一気に畳み掛けるぞ！！バースト・フレア！！」

「わかったよ！！フリーズ・ブリット！！」

「デイバインイイイイイン・バスタアアアアア！！」

「サンダアアアア・レイジ！！」

俺達の攻撃を何発も食らったジュエルシードは、そのまま活動を停止した

「なのは、封印頼む。」

「ジュエルシード・・・封印！！」

「さて、これでジュエルシードはあと10個だな。」

「もう少しで集まるね。」

「まあな、あ、そうだ。なのは、フェイト、今からここで模擬戦やったらどうだ？」

「模擬戦？」

「ああ、まあ中間結果みたいなもんだ。どうする？」

「私はやるよ。」

「なら私もやる！！」

「よし決まりだな。」

2人はそういつてお互い距離をとり、いつでも始められる体制に入
った。

「それじゃ・・・試合開始「ストップだ！！ここでの戦闘は危険す
ぎる！！」

試合開始と言おうとした直前、2人の間に急に人が現れ、バインド
をかけた

「時空管理局執務官、クロノ・ハラウンだ。艦で詳しい話w「オ
ラアアア！！」ぐふお！？」

・・・遂に、遂にあのKYが来た！！俺は奴の腹部にとび蹴りを一
発食らわした

「なのは、フェイト！！少し離れる！！」

なのはとフェイトに離れるように言うと、2人は離脱を始めた。し
かし、あのKYが黙って

見てるわけがなく、2人に向かってスフィアを発射した。なのはは
危なげにも全てかわしたが、フェイトはかわしきれずに1発当たっ
てしまった

「キヤアアアア！！」

「フエイトちゃん!!」

「フエイト!!」

おそらく今到着したと思われるアルフが出てきた

「アルフ!! フエイトを頼む!!」

俺はそういったあとKYを見た

「貴様!! 貴様が行ったのは公務執行妨害だぞ!!」

「黙れ、この地球には時空管理局なんて組織は存在してないし、そんな組織を俺は知らない。」

「何!? 魔道士が管理局を知らないわけないだろう!!」

「憶測だけで喋るな糞餓鬼、貴様の常識が全てだとは思うな。」

「くっ、これ以上話す意味はない。貴様を公務執行妨害で逮捕する!!」

「はあ、しかたないな。ラス・テル・マ・スキル・マギステル!! 来たれ雷精、風の精《ウエニアント・スピーリトウス・アエリアーレス・フルグリエンテース》!! 嵐を纏いて吹けよ南洋の風《クムフルグラティオーニ・フレット・テンペスタース・アウストリーナ》!! 『雷の暴風』《ヨウイス・テンペスタース・フルグリエンススタグネット》!! 固定!! 掌握!! 魔力充填術式兵装『疾風迅雷』《アギリタコンプレクシオースプレメントウカルディオーネ》!! 『フルミニス』!! ・・・さあ貴様にはこの『闇の魔法』マギア・エレベアの実験台になつてもらうぞ、精々逃げ回れ。それと、この術式ははじめて使うんだ、手加減はできないからな!!」

「だまれ!! スティン「遅い!!」!?!? があ!?!」

「その程度か!! 貴様の力は!!」

俺は何度もクロノを殴る。その回数はすでに300を超えていた

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル！！影の地統ふる者スカサハの《ロコース・ウンブラエ・レーグナンス・スカータク》！！我が手に授けん《イン・マヌム・メアム・デット》三十の棘もつ霊しき槍を《ヤクルム・ダエモニウム・クム・スピーニス・トリーギンタ》！！『雷の投擲』！！！！」

ヤクラーティオー・フルゴリス

クロノに向けて雷でできた槍を4本投げる。その槍は寸分狂わずクロノに当たり、そのまま地面にクロノを縫い付けた

「ガハア！？うう・・・ブ、ブレ・・・イズ・・・」

「明確な隙ができていない状態での砲撃魔法など意味はない！！ラス・テル・マ・スキル・マギステル！！来たれ雷精、風の精《ウエニアント・スピーリトウス・アエリアーレス・フルグリエンテース》！！嵐を纏いて吹けよ南洋の風《クム・フルグラティオーニ・フレット・テンペスタース・アウストリーナ》！！『雷の暴風』！！」

ヨウイス・テンペスタース・フルグリエンス

俺が放った『雷の暴風』は、クロノに直撃し、クロノを吹き飛ばし気絶させた

「ふう、随分と粘ったがやはり雑魚は雑魚か。」

俺がそういつてその場を立ち去ろうとしたとき

「ちょっと待ってもらえないかしら？」

空にモニターが現れ、一人の女性が映し出された

「貴様、何者だ？」

「私は時空管理局所属艦『アースラ』艦長であり、そこであなたにボロボロにされたクロノ・ハラオウンの母親のリンディ・ハラオウ

ン提督です。」

「で、貴様は何が言いたい？」

「なぜ私の息子を攻撃したのか教えて頂戴。でないとあなたを公務執行妨害で逮捕しなくちゃなくなるから。」

「はあ、貴様もか。理由を話す前に1つ、俺は貴様ら時空管理局などという組織はまったく知らない。」

「魔道士が時空管理局を知らないわけないわ。」

「だが俺となのは生まれも育ちもこの地球だ。そんな状況で貴様らのことを知る術などないぞ？」

「ならどうしてあなた達は魔法が使えるの？それにその子はデバイスもってるじゃない。」

「はあ、なのは肩にいるフェレットからもらった。そして俺はデバイスなど使ってない。」

「！！ならどうやって魔法を！？」

「教える義理はない。で、もう話すことはないのか？」

「まだ攻撃した理由を聞いてないわ。」

「攻撃した理由か、それは貴様らがなのはとフェイトを攻撃したからだ。」

「それだけの理由で攻撃したの？」

「それだけ？・・・どうやら貴様らは今すぐ死にたいらしいな。メタモルフォーゼ、ウイングガンダムゼロ。」

「！！！」

俺はウイングゼロになり、アースラのある方向に向き、ツインバスターライフルを発射、その砲撃は亜光速で進み、アースラの右側を掠り宇宙に消えていった

「貴様ら、これ以上騒ぐようだったら撃沈するぞ。」

「わ、わかったわ。でもここで立ち話しもなんだからこっちで話さない？」

「断る。こっちは疲れてるんだ、話がしたかったら明日俺の家に来

い。魔力垂れ流しておくから自分で見つけて来い。」

「わかったわ。」

そっいつて俺はその場を去った

「土君、あんなこといつてよかったの？」

「別にいいんだ、なのはとフェイトに攻撃したのは紛れもない事実なんだし。」

「そうだよ、もしあの攻撃が当たって怪我なんてしたら一大事だよ。」

「ああそうだ、それにあいつはフェイトに当てやがったんだ。本当は極上の苦しみを与えながら殺したかった……」

「土君、考えが物騒だよ。」

「そっいつな。あ、そうだ、なのは、今日は俺の家に泊まってけ。」

「ふえ！？」

「明日連中が俺の家に来るだろうからいちいち俺の家に来るのめんどくさいだろ？だから泊まってけて言ってるの。」

「でも一回お母さんに確認取らないと……」

「んじゃ、これ使え。」

「わかったの。……あ、お母さん？今日……うん……わかったの。」

「どうだ？」

「いいよっていつてたの。」

「よし、んじゃいくか。」

こうして俺達と管理局の1回目の会合が終わった

9話 KY登場、貴様に人権はない！！（後書き）

作者「グダグダが抜けない・・・」

士「あきらめろや、今更じゃないだろ」

夏海「うん、あきらめたほうがいいよ」

作者「ひどい・・・」

士「そこで落ち込んでろや。夏海、アレ頼むぞ」

夏海「はいはい。雨季様、ラハール様、ディステニープラン様、感想ありがとうございます」

士「雨季様からはデモン・ブラッドのタリスマンか。王の財宝にこれとこ」

夏海「ラハール様から黄昏の指輪と碑文、佐助が1回召還できるカードがきてるよ。」

士「ほうほう、ディステニープラン様からはケルベロス×2とオルトロスか。これも王の財宝にと」

作者「士、佐助から模擬戦の申し出がきてるぞ」

士「わかった、次くらいに戦うって伝えといて」

作者「ラハール様、士が戦うようなので佐助の能力などの詳細をお

願います。」

夏海「次回予告やっていい？」

士「いいぞ」

夏海「それじゃ、次回 10話 交渉と呼べない交渉はするな」

「「ドライブ・イグニッション!!」」

番外編 最強バグVS最強チート

作者「さて、今回は士と佐助の模擬戦やるぞー!!」

「「「「「「わー!!」」」」」」

士「また随分と賑やかな・・・」

佐助「まあいいだろ。」

作者「2人にはこれをかけて戦ってもらいます!!」

乖離剣エア

士「エア!？」

佐助「また大層なものを・・・」

作者「それじゃ、早速いつてみよー!!」

士「さて、お前と戦うのは初めてだったな。」

佐助「ああ、正直言ってお前と戦える日が来るのを待ってたよ。」

士「それは嬉しいな。」

佐助「それじゃ、やるか。」

士「ああ、手加減は無用だぞ？」

佐助「ふっ、当たり前だ!!」

佐助はそういい、アロンドイト・改を持ち、突撃してきた

士「そうこなくっちゃ!!トレース・オン!!デュランダル!!」

俺も剣を投影し、応戦した

佐助「不滅の刃か!!クロススラッシュ!!」

士「そういうことだ!!斬岩剣!!」

2人の刃が交わり、衝撃波が起こる。そして2人とも自分の得物が折れてしまう

士「不滅の刃を折るとかどうよ？」

佐助「それはこっちの台詞だ。」

士「まあいい、トレース・オン、干将・獬耶!!」

佐助「次は夫婦剣か!!」

佐助はそういい、王の財宝から虚空ト黄昏ノ双牙を取り出す

士「いくぞ!!」

俺は突進し、切りかかるが簡単に防がれる

佐助「甘い!!」

士「くつ、ならば!!壊れた幻想!!」
フロックン・ファンタズム

俺は剣を投げつけ、そのまま爆発させる。が、直撃したはずの佐助はほとんどダメージを受けていなかった

士「・・・なんでさ。」

佐助「この双剣にはダメージを最小にしてくれる効果があるんだよ。」

士「なにそれ、どんなチートだよ。」

佐助「そういうなよ。」

士「しゃあねーな、本当なら使いたくなかったが・・・」

俺はそういつて一枚のコインを取り出す

佐助「ん?なにするきだ?」

士「なあ、レールガンって知ってるか？」

佐助「……まさか……！」

士「原理云々は置いて、こういうのを言ってみただぜ？」

俺はそういつて一枚のコインを指で弾く。するとそのコインは音速を超え、佐助に向かって飛んでいった

佐助「うお！？あぶね……！」

佐助は手に持つ双剣で防ぐが、衝撃で双剣が後ろのほうへ飛ばされてしまう

佐助「っ痛――、なんて威力だ。」

士「ようやくそのチートじみた双剣を落とせたぜ。」

佐助「流石だな、だがチートじみた武器なら他にもあるぞ……！」

佐助はそっくり、王の財宝から一本の大鎌を取り出す

士「なんだ！？この禍々しいオーラは……！」

佐助「この鎌の名は黄昏ト万死ヲ刻ム影、俺のお気に入り武器だ。」

士「なんかとんでもないのがでてきたな。ならこっちも、メタモルフォーゼ、真ゲッター……！」

佐助「ゲッターか、いいぜ、殺りがいがある!!」

士「いくぜ!!ゲッターアアアアトマホウク!!」

佐助「環伐乱絶閃!!」
わかくらんぜつせん

佐助の斬撃が幾つも飛んできた。どの斬撃も一撃で命を刈り取るには十分な威力がある。

士「うお!!あぶねえ!!」

佐助「よそ見してる暇はないぞ!!オメガファイア!!」

士「ならば!!ゲッターアアアアビイイイイム!!」

2つの莫大な力がぶつかり合い、ものすごい爆音と衝撃が当たり一面に広がった。その中で俺は空に飛び上がり、黒鍵を1000本投影した

佐助「うおっ、煙たつてなんだありゃ!？」

士「いくぞ!!火葬大聖典!!」

黒鍵を発射、地面に刺さった黒鍵は一気に燃え上がり、あたり一面が炎の海と化した。佐助はその中を突き進んでいた

佐助「あちい!!消火だ消火!!オメガクール!!」

士「1発で消すかよ、その火を」

佐助「よそ見するなと言った筈だ!!」

俺が少し余所見をしている間に佐助は俺の後ろに回りこみ、鎌を振り下ろしていた。すぐさま回避するも、回避しきれず右腕を肩口から持っついていかれた

士「があ!!」

佐助「これで右腕はなくなっただな。」

士「ふっ、はたしてどうかな?」

俺が不適に笑う。すると肩にある傷口からいきなり腕が生えてきた

佐助「!! 超速再生か!!」

士「そういうこった!! ガーヴ・フレア!!」

俺は手のひらから赤黒い炎を発射した。佐助はそれをぎりぎりかわした。

士「なあ、1回全力全開で攻撃しないか?」

佐助「いいな、それ。やろうか。」

士「そんじゃ、いくぞ!! はああああああ!!」

佐助「俺もだ!! はああああああ!!」

士「ストナアアアアアサアアアアンシャイイイイイイン!

！
」

佐助「ベタスター！！」

2つの究極はぶつかり合い、膨大な量の光を撒き散らしながらあたり一面を瓦礫に変えて消えていった

士「うおーう、1歩も動けねえ、無限の魔力でも体は有限か。」

佐助「俺もだ、もう指一つ動かせねえ。」

士「なあ、この勝負引き分けでよくね？」

佐助「賛成。」

士「というわけだ、作者！！助けてくれ！！」

作者「何が助けてくれだー！！この空間が消滅しかけたぞー！！もう少し加減をしろ加減を！！」

士「そんなこといってもな」

佐助「加減したらすぐやられちまうしな。」

結局俺達は夏海に助けもらった。

番外編 最強バグVS最強チート（後書き）

士「作者が消えたため、作者なしで進めて行きます」

佐助「今回の模擬戦、暴れすぎたか？」

士「いいんだよ、どうせ修理費は作者の財布から出るんだから」

夏海「ねえねえ、あれやっていい？」

士「今回は佐助と2人でやってくれ」

夏海「はい。」

佐助、夏海「雨季様、ラハール様（うちの作者）、ディステイニープラン様、感想ありがとうございます」

士「雨季様から・・・言峰麻婆？」

夏海「これ食べないほうがいいよ、体に悪いよ。」

佐助「何か書いてあるぞ？何々、『拷問用に使ってくれ』だつてさ」

士「ディステイニープラン様からはGNファング×8とGNランチヤー、GNステルスフィールド発生装置か、これは王の財宝にいれとこ」

夏海「そつえば佐助、なんでデバイス使わなかったの？」

佐助「・・・向こうに忘れてきたんだ・・・」

士「そりゃ災難だな・・・」

夏海「それじゃ、ここら辺でお開きにしよう!-!」

士「それじゃ、今回は佐助も一緒だ。」

佐助「わかった、では・・・」

「」「ドライブ・イグニッション!-!」「」

ラハール様、どうでしたか？佐助の性格や能力などに間違いはありませんでしたか？これから佐助を使いたいのですのでそのときはまたよろしくお願いします

10話 交渉と呼べない交渉はするな

どうも、流 士です。今俺は2日前よりもひどい状況になってます。どうなってるかというところ、上・夏海、右・なのは、左・フェイトです。・・・なんでフェイトがいるの！昨日鍵掛けたよな！？

「とにかくこいつらおこすか・・・アクア・クリエイト」

「はぶ！！ちょ・・・つめたー！！」

「ふえ！？はにゃー！？」

「わっ！？つめたい！？」

3人の顔めがけてとても冷たい水を落としてやった

「よう、お目覚めはどうだった？」

「どうだった？じゃないよ。」

「つめたかったよ。」

「あんな起こし方しなくても・・・」

「あれが家のやり方だ。あ、そうそうフェイト、何でお前ここで寝てるんだ？」

「えっと、昨日なのはが土の家に入っていくのが見えてちょっと羨ましいな。なんて思ってたきちゃいました・・・」

「昨日鍵掛けたはずなんだけど。」

「この部屋に移してきちゃいました・・・」

「おいおい、むやみやたらに魔法使つなよ、管理局に見つかったまうぞ。」

「ごめんなさい・・・」

「それに、夜急に抜け出したらアルフが「フェイトー！！どこにいるんだー！！」ああなっちまうぞ。まあ、もうなってるけど。」

「

（アルフ、フェイトならこっちにいるぞ）

（え！？どうして！？）

（昨日の夜こっちに転移したらしい）

（わかった！！ありがとう！！）

念話で事情を説明すると、アルフはすぐさまこっちにとんできた

「フェイトー！！心配したんだぞ！！」

「ごめんねアルフ、もう夜に急にいなくなったりしないから。」

「もう、急にいなくなったりしたからあの鬼婆のところに行ったのかと思ったよ。」

アルフの言葉にフェイトは少し反応した。アルフがいつてる鬼婆とはプレシア・テストロッサ、フェイトの母親のことである。

「うん、確かに最近報告に行っていないけど・・・もう、行かなくていいよね？」

俺とアルフはその言葉に耳を疑った。フェイトは母親のことを第一に思ってる。故に母親の言うことは全て聞いてきた。今回のジュエルシードもそうだ、母親に集めてこいといわれたから集めに来たのだ。だが今の言葉はこれまでの行動を否定するような言葉だった。だから俺とアルフは耳を疑ったのだ。

「本当に、本当にそれでいいのかい？」

「うん、1分1秒でもみんなといたいから。」

アルフはフェイトのその言葉に涙した。これでフェイトが傷つくことがないと思つてのことだろう

「2人とも、そこで感動してるのはいいいんだが、外に珍客が来てるぞ？」

そういつて外を見ると、リンディ・ハラウンと、一人の女性、そして全身を包帯でぐるぐる巻きにされ、車椅子に乗せられてるKYがいた

「ほう、随分と早いじゃないか。」

「そうでもないわ、ここを見つけるのに昨日から8時間も探してたんだから。」

「それほどまでに時間がかかるものなのか？」

「あなたの魔力がこの町に充満してるから、あなたの反応がこの街全域から出るのよ。」

「そうか、まあ立ち話もなんだからまず入れ。」

俺はそういつてリンディ達を家の中に入れた

「夏海、結界を二十重に張っておいてくれ。」

「はいはい。」

夏海に結界を張らせた。するとリンディ達は目が飛び出そうになるほど驚いていた

「これで結界の外にいる者に聞かれることはあるまい。」

「凄い・・・」

「さて、まずは改めて自己紹介といきますか。そうじゃ、なのはから。」

「高町なのはです。」

「ユーノ・スクライアです。」

「フェイト・テストロッサです。」

「フェイトの使い魔のアルフだよ。」

「流 夏海です。」

「そんでもって流 士だ。」

「じゃあ次は私達ね、時空管理局所属艦『アースラ』艦長リンディ・ハラウン提督です。」

「時空管理局執務官クロノ・ハラウンだ。」

「時空管理局所属艦『アースラ』通信士エイミィ・リミエッタだよ！！」

「さて、今日ここに来たということはまだ聞きたいことがあるという事でいいんだな？」

「ええ、あなた達がジュエルシードを集めてる理由を教えてほしいの。」

「それは僕のせいなんです。僕が・・・」

それからユーノの長い話が始まった。時間にして30分、よくもまあそこまで喋れることだ。

「それは立派なことね。」

「だが同時に無謀で「お前は喋るな。」むぐう!？」

KYがあまりにも五月蠅かったので口にさるつぐわをはめてやった

「あの、ロストロギアって何ですか？」

「ロストロギアっていうのは・・・」

これまたリンディさんの話も長かった。何でこんなに喋れるんだろ・・・ちよつとびっくりさせてやろうか

「ほう、その定義にあてはめるのならこれもそのロストロギアとい

うことになるのか。」

そういつて俺は王の財宝から1本の剣を取り出す。するとリンディさん達が目を見開いて驚いていた。よし、作戦成功！！

「土君、何なのその剣は？それにものすごい魔力よ、それ。」

「これか？これは神剣デュランダル、別名不滅の刃。その名のおり決して刃こぼれ一つ起こさず切れないものはこの世に存在しない神話で語り継がれている剣だ。この剣に込められてる魔力がここまですで大きいのは神が作り出した剣だからだ。」

「にわかには信じられないわね・・・」

「信じる信じないはそちら次第だ、それにこの剣以上の魔力を誇る剣だつてあるんだぞ？なんなら見せてやってもいいが・・・」

俺はそういつて俺に後ろに王の財宝を開く。するとデュランダルと同格、またはそれ以上の魔力がある宝具が幾つも浮かんでいた。リンディさん達は流石にここまでものすごいものが出てくるとは思わなかったようで顔が蒼白になっている。クロノとエイミィにいたつてはすでに気絶していた。雑魚め・・・

「さて、十分驚いてもらった所で話を戻そうか。」

「ええそうね。では今回のジュエルシード回収については管理局が全権を持ちます。」

「「え！？」」

「あなた達も今回のことは忘れて、今までどおりの生活に戻るといいわ。」

「で、でも・・・」

「今無理に決めるとは言わないわ。明日また「まで。」・・・なに？」

「貴様、なぜ本当のことを言わない。」

「どういうこと？」

「わからないのなら核心に近づいた言い方をしてやる。なぜなのはとフェイト、それに夏海と俺を利用しようとした？」

「そんなことはな「ならなぜ再度の話し合いが必要になる？」・・・

」

「やはりか・・・大方あの艦に俺達の魔力を測る機械でもあったのだろう？それで測った所非常に優秀なことがわかった、ならばそれを利用しようと、そう思ったのだろう？リンディ・ハラウン。」

「・・・」

俺の予想通り黙り込んでしまった

「言つとくが、俺は貴様のような本当のことを話せぬような輩に力なぞかさんぞ？」

俺がそういうとリンディさんはしばらく黙り込んでしまった。これで何も言わないようなら突き放すだけだ

「なのは、フェイト、ジュエルシー「待つてくださいー！！」・・・なんだ？」

「騙そうとしていたことは謝ります。ですが我々も満足に封印できるのはクロノ・ハラウンだけ、人手不足で困ってるんです！！ですから、どうか協力してくださいー！！」

リンディさんはそういつて土下座してきた。あとは2人に任せるか

「なのは、フェイト、これはお前らで決める。」

「・・・わかりました、協力させてください。」

「私も協力させてください。いいよね？アルフ。」

「あたしはフェイトがやるっていうならやるよー！！」

「僕も今回のことの張本人なので協力させてください。」

「私も協力するよ!!」

「だそうだ、まあ、なのはとフェイトがやるってんなら手伝ってやる。ただし、条件はつけさせてもらうぞ。」

そういつて俺は4つの条件を出した

- 1、俺と夏海については管理局に一切報告しない
- 2、俺の能力については一切触れない
- 3、このことが終わったらジュエルシードを俺に譲渡すること
- 4、テストロッサとつく者にクロノを近づけさせないこと

この4つだ。流石にこれにはリンディさんも難色を見せた

「1、2、4は何とかなるけど、3は正直言つて無理ね。」

「ほう、ならば宝具の雨を降らせてでも奪つていくぞ?」

俺がそういつとリンディさんは顔を蒼白にした。流石に並みのロス・トロギアを遥かに凌駕している武器を雨のように降らされたら幾つ命があつても足りないと思つたのだらう

「わ、わかつたわ、何とかしてみるわ。」

「ええ、もうないから私達は帰るわ。」

そういつてリンディさんは気絶してる2人を連れて転移した。その後なのはとフェイトも自分の家に帰つたので結界を解除した

「さて、まだ2時か・・・暇だな。」

「なら修行したらどう?」

「おお、それいいな。んじゃあそこ使うか。」

俺はそういつて王の財宝からダイオラマ魔法球を取り出した

「んじゃ、ちょっとくらいいつてくるわ。」

「いつてらっしゃーい。」

夏海に見送られながら俺はダイオラマ魔法球の中に入っ

た俺は最初にこう呟いた

「・・・・・・・・・・なんでさ。」

なぜ俺がこういつたかという、本来ダイオラマ魔法球の中には生物はいない、後から放り込んだりしない限り無人なのだ。俺もこれを使うのは初めてなはずなのだが・・・・・・・・なぜか目の前に人がいる。しかも・・・

「貴様、何者だ？」

アーチャーなのだ。これには俺も正直、というかもものすごく驚いている

「何者だ？はこっちの台詞だ。ここは冬木市じゃないし今は聖杯戦争もやってないぞ？」

「なに？ならば・・・同調、開始・・・^{トレス・オン}確かに、凜とのリンクも切れてる、だがなぜ受肉している？」

「なあアーチャー、ここに来る前に何か変なこととかあったか？」
「変なこと？・・・そういえば鏡のような魔方陣に吸い込まれたな。」

「サモン・サーヴァントかよ、あとで夏海に聞か・・・」

「しかし、私はどうすればいいんだ？」

「どうするもこうするもな・・・あ、なんならこっちくるか？」

「と、いうと？」

「簡単に言えば一緒に住むって意味だな。どうする？」

「他に行く当てがないのだからな、そうさせてもらう。」

「わかった、んじゃ一回出るか。」

「待て、どうせ暇なのだろう？ならここで手合わせでもしてみないか？」

「なんで暇なことがわかったんだ？」

「顔が暇そうな顔をしていたのでな、で、どうする？」

「それじゃその誘いに乗るとしよう。」

俺とアーチャーは互いに距離をとり、自分が使う得物を出した

「その剣は・・・デュランダルか。」

「ああ、なんせ英霊が相手だからな、本気で行かないとすぐにやられちゃう。」

「ふっ、まあな。」

アーチャーはそういい、干将・獬耶をもって構えた

「では、サーヴァントアーチャー……」

「流士……」

「「推して参る!!」」

そういつた次の瞬間、アーチャーがものすごい勢いで突っ込んできた。そしてそのまま両手に持った干将・獬豸で切りかかってきた。俺はそれをデュランダルを使って紙一重でかわし、反撃を加えた。だが、相手は英霊。そんな生半可な攻撃が効くはずもなく、全て交わされてしまった。

「ふう、流石は英霊だな。」

「この程度でやられてはこちらも面目が立たないのな。」

そういつてまた斬り合いに戻る、今度は俺から斬りかかる、がどれもかする程度で決定打にはならない。対してアーチャーはこちらの攻撃を難なくかわし、隙を見つけては攻撃してくる。

「くつ、弓兵とはよくいったものだな!!」

「無駄口をたたく暇があるのか?」

その言葉を聞いた瞬間、右腕に激痛が走った。右腕を切断されたようだ

「これで片腕はなくなったぞ。」

「はたしてどうかな?」

次の瞬間、右肩口から腕が生えてきた。流石にこれにはアーチャーも驚いたようで少し後ずさりした

「……貴様、本当に人間か?」

「生物学上はまだ人間だ。」

俺は手に持ったデュランダルを消し、こう唱えた

「ここからは先ほどのようにいくとは思うなよ？メタモルフォーゼ・
・マジンカイザー！！」
「・・・なんでさ。」

アーチャーが一人つぶやく。まさかお前からそれが聞けるとは思わ
なかったよ

「さて、いくぞ！！光子カビーム！！」
ブロックンファンタズム
「くつ、壊れた幻想！！」
「まだまだあ！！ルストトルネード！！」

酸化作用がある竜巻を3つ出す

「ならば！！I am the bone of my sword・《体は剣で出来ている》“熾天覆う七つの円環”！！」
ロー・アイアス
「く、やはり硬いな、その盾。なら・・・ファイヤーブラスター！
」

流石のローアイアスも超高温の熱線には無意味だったようで、すぐ
に割れてしまった

「！！ならば奥の手を使うまでだ！！」

I am the bone of my sword
体は剣で出来ている。

S t e e l i s m y b o d y , a n d f i r e i s
m y b l o o d .

血潮は鉄で 心は硝子。

I h a v e c r e a t e d o v e r a t h o u s a n d
b l a d e s

幾たびの戦場を越えて不敗。

U n k n o w n t o D e a t h .

ただの一度も敗走はなく、

N o r k n o w n t o L i f e

ただの一度も理解されない。

H a v e w i t h s t o o d p a i n t o c r e a t e
m a n y w e a p o n s

彼の者は常に独り 剣の丘で勝利に酔う。

Y e t , t h o s e h a n d s w i l l n e v e r h o
l d a n y t h i n g

故に、生涯に意味はなく。

S o a s I p r a y , u n l i m i t e d b l a d e
w o r k s

その体は、きつと剣で出来ていた。

次の瞬間、世界が変わった。緑があふれる森は、丘陵へと姿を変え、
無数の剣を生やしていた

「これがアーチャーの固有結界か・・・」

「そうだ、そして貴様が挑むは無数の剣、剣戟の極地、恐れずして
かかってこい!!」

「上等!!マジンパワー、フルパワー!!」

俺はエネルギーを完全解放し、アーチャーに向かって飛んでいった

「はああああああ!!」

「甘い!!」

アーチャーの言葉とともに無数の剣が宙に浮き、こちらに向かって
一斉に飛んできた

「このくらい!!ルストトルネード!!」

酸化作用のある竜巻を再度だし、飛んでくる剣を次々に風化させて
いく。だが、アーチャーはすでに次の攻撃に移っていた

「偽・螺旋剣!!」
カラドボルク

「マジかい!!?ターボスマッシャーパンチ!!」

何とかカラドボルクを防ぐ。その後アーチャーを見てみるとかなり

荒い息づかいになっていた。恐らく魔力が残り少ないんだろう

「アーチャー、次の攻撃で決着をつけないか？」

「ふっ、それもいいな。」

俺は力をため、アーチャーは1本の剣を出した

「カイザアアアアア・・・」

「約束された《エクス》・・・」

そして・・・

「ノヴァ！！！！」

「勝利の剣！！！！^{カリバー}」

2つの閃光が世界を包み、崩壊させた

「大丈夫か？アーチャー。」

「ああ、問題ない。しかし、君は強いな。」

「英霊にそういわれるなんて、夢にも思ってたな。」

結果は俺の勝利で終わった。最後の最後で俺の攻撃が通り、アーチャーを吹き飛ばしたようだ

「んじゃ、ここからですか。」

「そうだな。」

俺はアーチャーとともにダイオラマ魔法球の中から出た

「あ、お帰り〜」

「おう、ただいま。所でよ、お前ダイオラマ魔法球になにかした？」

「え？なにもしてないよ？」

「じゃあなんでこいつがあの中にいたんだ？」

俺はそういつて後ろをさす。そこにはアーチャーがいた

「ああ、この前サモン・サーヴァントしたんだっ！！」

「やっぱお前が原因か・・・でもなんでこの中に？」

「きつと座標がずれたんだと思う。」

「・・・なんか納得いかないけどいいや。んで、アーチャーはこれからここに住むことになるけど、いいんだな？」

「ああ、問題ない。」

「ならいいか、んじゃ。飯作るぞ飯！！」

そういつてキッチンに向かおうとしたとき

「まて。」

「ん、どうした？」

「何、今回は私が作るうと思ってな。」

「お、いいのか？」

「ああ。」

「それじゃ、頼むぞ。」

その後、アーチャーは手馴れた手つきで料理をこなしていった。流石だ

「出来たぞ。」

「おおつ、これまた豪勢だな。」

「ねえねえ、早く食べようよ」

「それもそうだな。んじゃ」

「」「いただきます」「」

アーチャーの料理はかなり美味しかった。これならいつそ料理担当はアーチャーにしたほうがいいな

30分後・・・

「「「ごちそうさまでした」「」」

「さて、今日はもう遅いし寝るか。」

「そうだな、私も眠くなってきたしな。」

「英霊も眠くなるのか。」

「完全に受肉したのでな、ほとんど人と同じだ。」

「そうなんだ、んじゃ、アーチャーはこの部屋使って。」

そういつて俺がさすのは俺の隣の部屋。大きさは俺の部屋と同じである

「わかった、それじゃ。」

「「おやすみ」「」」

こうして、色々ありすぎた1日が終わった

10話 交渉と呼べない交渉はするな（後書き）

作者「調子に乗ってアーチャー出しちゃいました」

士「これからどうすんだよ。」

作者「一応レギュラーにするよ?」

夏海「駄作者がそんなにキャラ増やしていいの?」

作者「駄作者つてひどい!」

士「ラハール様、雨季様、ディステイニープラン様、感想ありがとうございます」

作者「俺のこと無視!」

夏海「雨季様から・・・魚?」

士「こりゃカジキマグロだな。しかもモンハンのだし・・・」

夏海「ディステイニープラン様からはアロンドイト（ガンダム）とエクスカリバー×2（ガンダム）、GNバスターソードがきてるよ」

士「ほうほう、これは王の財宝いきだな」

夏海「ラハール様からは・・・「今度佐助にもたせます」だって」

士「了解。んじゃ、ここらで次回予告ヨロシク!」

夏海「はいはい。次回 第11話 決戦!!なのはとフェイト!
!」

「ドラライブ・イグニッション!!」

士「あ、そうそう。アーチャーは次回から結構出るのでよろしくお
願いします」

アンケート実施します

作者

「今回はあるアンケートをとりたいと思います。」

士

「アンケート？」

作者

「10年後のマキナ戦に向けての戦力強化をたくてさ。」

夏海

「この前アーチャー出したじゃん。」

作者

「アーチャーだけじゃ力不足だろうし使いたいキャラとかたくさんいるんだもん。」

アーチャー

「ほう、私だけでは力不足と？」

作者

「いたのかよ！？・・・まあ可能性としてないわけじゃないし。」

士

「まあいい。で、候補はあがってんのか？」

作者

「まあ一応、このメンバーの中から選んでもらおうと思う。」

- 1、アルトリア・ペンドラゴン
- 2、メドューサ
- 3、クー・フリーン
- 4、佐々木小次郎
- 5、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル

士

「英霊率たけえな。」

作者

「だって英霊かつこいいじゃん。」

夏海

「じゃあなんでエヴァ入れたの？」

アーチャー

「大方作者の趣味だろ。」

作者

「なっ！？違う、断じて違う！！」

士

「ならなんだってんだ？」

作者

「士の嫁に「死にさせ！！」『巨神ころし』《ティタノクトノン》
「！！」ぎゃあああああ……」

士

「ふう、消えたk「復活!!」速えなオイ。」

作者

「もう一個アンケート用意してるからな。」

夏海

「へえ」

作者

「というわけで読者様が好きな世界を下から選んでください。」

- 1、 なのはの世界
- 2、 ゼロ魔の世界
- 3、 BLEACHの世界
- 4、 とある（インデックス）の世界
- 5、 ネギまの世界

アーチャー

「このアンケートは今後何かに使うのか？」

作者

「使うよ。大体時期で言えばA'sが終わったくらいで。」

士

「随分と先だな。」

作者

「そんなことはいいの。それじゃあ皆さん、魔法少女リリカルなのはチート？何それおいしいの？」を」

「 「 「 「 「
今後ともよろしく願います 「 「 「 「 「

11話 決戦！！なのはVSフェイト！！

士side

「なのは、封印頼むぞ」

「わかったよ。ジュエルシード・・・封印！！」

俺達が時空管理局に協力し始めてから1週間、かなりのハイペースでジュエルシードが集まった。これまでは発動してから向かっていったが今は発動前に発見できるのでいままでもよりも幾分安全である

「士、それ何個目？」

「えーと・・・これが最後だ。」

「やった！！ようやく集まった！！」

「ほう、探し物は全て見つかったのか。」

アーチャーもすでにこの輪の中にすっかり入っている。5日前に皆と会わせたときなんてなのはとフェイトがびびって仕方なかったのに・・・

「まあな、しっかし長かったな」

「そうだね。・・・あ！！そうだ！！」

「ん、どうした？」

「ジュエルシードが全部集まったらなのはと決闘するって約束だった！！」

「ああ、そういえばそんなこと言ったな。でもフェイトはもう母親のために集めてるわけじゃないんだからやんなくてもいいんじゃない？」

「まあそうだけど、やっぱり1回全力でなのはと戦いたいんだ。」

「お前は戦闘狂か？」

「戦闘狂・・・まるでランサーだな。」

「まあいい、1回クロノに聞いてみるわ。」

クロノに通信してみる。すると・・・

「ん、どうした？」

「いまからここでののはとフェイトの決闘やるから許可出せ。」

「そんな急に言われても許可は「ならば貴様で新たな術式を試す。わ、わかった。今すぐ許可する！！」

そういつてクロノは通信を切った。『闇の魔法』マギア・エレベアにびびりすぎだろ

「というわけで許可が出た。んで、いますぐやるのか？」

「いますぐじゃなくて準備とかもあるから2時間後で。」

「フェイトもそれでいいか？」

「うん、私もアルフ呼んできたいし。」

「んじゃ、俺も一回家に帰って夏海呼んでくるわ。」

「それじゃ、2時間後にここで！！」

俺達は一回家に帰った

「そういえばアーチャーはどうするんだ？」

「私も観戦させてもらうよ。」

「そうか、なら邪魔が入らんように淫獣を踏みつけておいてくれな
いか？」

「その程度自分でやればよかるう。」

「こちらもちやねばならないことがあるんだ。」

「そうか、ならば仕方あるまい、その役引き受けよう。」

「ありがとう、んじゃ一旦家に帰るか。」

士side end

なのはside

私は今、家に向かっています。っていうのも2時間後にフェイトちゃんと模擬戦するからユーノ君を呼びにいくためだからなんですけど。

「レイジングハート、頑張ろうね!!」

《はい、マスターならきつとフェイトさんにも勝てますよ》

「そうだね、絶対勝とうね!!」

《そのいきですよ、マスター》

なのはside end

フェイトside

「遂に来たね、バルディッシュ。」

今日は遂に来た模擬戦の日、正直言って勝てるか心配です

《はい、マスターはいままでなのは嬢に勝つために頑張ってきました、だから大丈夫です。マスターなら勝てます》

そうだね、今まで頑張ってきたんだ、それを全て出し切ればいいんだ

「うん、ありがとう、バルディッシュ。」

《どういたしまして》

フェイトside end

士side

「さて、2人とも準備は出来たか？」

あれから2時間がたった。現在いる場所は原作でなのはとフェイトが戦った場所である

「大丈夫!!」

「うん!!」

「それじゃ今からルールを説明する。時間は無制限、どちらかが気絶、及び魔力切れ、降参した時点で終了、ギャラリーはどのような状況になっても試合中は手を出さない、出した場合はその時点で助けられた方は負け、わかったか？」

「わかった。」

「では・・・試合開始!!」

試合開始の合図と共にまず、フェイトが斬りかかった

「ハアア!!」

「!!レイジングハート!!」

《プロテクション》

なのははそれをプロテクションで防いだ

「デイベインシューター、シュウウウウウト!!」

「バルディッシュ!!」

《サイスフォーム》

フェイトはバルディッシュを鎌に変え、迫りくる魔力弾を切り裂いた。フェイトは基本自身の高機動を生かした一撃離脱戦法を主軸として戦っているのでラウンドシールドを使うことが少ないのである。はに比べて術式の構成が甘い、すなわち脆いのだ。そのシールドになのはの高火力魔法が当たりでもしたらシールドの維持に魔力を持つてかれてしまう。其れでは話にならないのでフェイトは今のよう
な行動に出たのだ

「ほう、今の行動はなかなかのものだな。」

「そうだな、フェイトは自分がどんな戦い方が適しているかをしっかり把握している。」

そういつて正面に視線を戻す

「アークセイバー……！」

「……避けれない……！！！」

《プロテクション》

フェイトの攻撃にレイジングハートがオートでシールドを張る。しかしこの行動がミスだった

「え！？」

「やった……！」

なのはの動きが止まった瞬間、フェイトはなのはに向かってバインドを掛けた

《すみませんマスター、行動を誤りました》

「行くよ、バルディッシュ。フォトンランサー・ファランクスシフ

ト・・・」

「フェイト!!」

「なのは!!今援護を!!」

「アーチャー頼む。」

「承知した、ふん!!」

ユーノが手を出そうとしたのでアーチャーに踏ませた

「ふぐえ!?!」

「貴様は話を聞いてなかったのか?手を出したら助けられたほうが負けだといったろう。」

「でもあれはだめなんだよ!!」

そうこうしてる内にフェイトが魔法を発動させた

「・・・ファイア!!」

なのはに向かって幾つもの砲口から秒速3発ほどの感覚で魔力弾が発射され、殺到した

「なのはー!!」

下でユーノが叫んでるが無視しよう。なのはだが、煙が濃く、まったく見えない。唯いえるのは魔力弾の全てがなのはに直撃したということである

「決まった、か?」

「いや、まだだろう。」

煙が晴れる。そしてそこにいたのはバリアジャケットこそボロボロ

だが、まだ余力を残しているのはだった

「へえ、攻撃が終わればこのバインドって言うのも解けちゃうんだ。」

まだ自分の知らなかったことに感心するのは。それを見たフェイトは驚きつつも追撃を試みるが

「!？」

「えへへ、やっと捕まえたよ。」

なのはのバインドに捕まってしまった

「今度はこっちの番だよ!! デイバイイイイイン・・・バスターアアアアア!!」

なのははフェイトに向かって砲撃魔法を放つ。フェイトはバインドのかかってない左手でシールドを張り凌ごうとしている

「くっ、うう・・・ああああ!!」

フェイトはなのはの砲撃を耐え切った。が、なのはは既に

「受けてみて!! デイバインバスターのバリエーション!!」

自身のもつ最大の攻撃を放とうとしていた

「全力全開!! スターライトオオオ・・・ブレイカアアアアアア!!」

なのはの最大砲撃は放たれた。フェイトは既に魔力の大半を消費したらしく、なのはの砲撃になすすべなく呑み込まれてしまった

「・・・惨いな・・・」

「・・・いうな、アーチャー・・・」

その光景を見ていた俺とアーチャーは少しの恐怖を覚えながらそう呟いた。まああの砲撃を防げないわけでもないしはつきり言って何処かのアカイアクマとか黒くなった暴食騎士王とかいつもお腹がくうくうしてる黒い子よりは断然怖くない。てかそんなの相手にするくらいだったら狂化したヘラクレス100人と戦った方がいい

「・・・ってフェイトが海に落ちそうだな。」

俺はフェイトが海に落ちるのを阻止するために縮地で一気に接近して首の付け根と膝の裏を持ち、所謂お姫様抱っここの状態でそのまま『魔法の射手 氷の1矢』を自分のすぐ下に撃ち、足場を作って着地した

「う・・・土？」

「フェイト、大丈夫か？」

「うん・・・でも、負けちゃった。」

「そうだな、だがそれは今回の話、また今度やった時に勝てばいいだろ？」

「うん、そうだね。」

「フェイトちゃん、大丈夫!？」

「自分で撃つといてなに言ってるんだよ。」

「だ、だってフェイトちゃん強いから・・・」

「まあいい、2人とも怪我はないな？」

俺がそう聞いた直後、頭上に巨大な魔力反応が現れ、その後巨大な紫色の雷が襲い掛かってきた

「フェイト、なのは！！俺の後ろから出るなよ！！I am the bone of my sword. 《体は剣で出来ている》
《“ロー・アイアス 熾天覆う七つの円環”！！」

7つの花弁を模した盾が紫の雷を防ぐ。数瞬たった後雷が消えたので俺はローアイアスを消した。ローアイアス是一枚たりとも破られることはなかった

「お母さん・・・」

フェイトが悲しそうに呟く。原作では非常に怖がっている様子だったが俺が介入したせいでそういった細かい所が変わってきている。今回みたいにいーいことならばいいんだが・・・

「アースラ、そっちは大丈夫か！？」

回線を開き、問いかける。すると・・・

「アースラ本体は大丈夫よ、でもジュエルシードが9個奪われたわ。」

「その程度なら後で取り返せばいい、それとそっちに今から転移する、転移ポートを起動しておけ。」

「わかったわ。」

そういつて回線は切れた

「なのは、フェイト！！今からアースラに転移する！！アーチャー

「！！ユーノとアルフを！！」

「承知した！！2人とも、行くぞ！！」

アーチャーが2人を連れてこちらに来たので転移を開始する。転移を開始してからものの数秒でアースラについた。まずはブリッジに！！

「リンディ、あの雷の発生源はつかめたか？」

「ええ、発信源は時の庭園。そして攻撃してきたのは恐らく・・・プレシア・テストロッサ。」

「フェイトの母親か。」

「恐らくはね。でもなんで実の娘に向かって？」

「簡単なことだ。自分を裏切ったからもう用済み、って具合だろう。」

「艦長、時の庭園の座標特定できました！！」

「わかりました、武装隊はプレシア・テストロッサの確保に向かってください！！」

リンディさんが武装隊を時の庭園に送り出す

「フェイトさん、少しの間隣の部屋に行ってもらえませんか？母親を逮捕する所を見せるのはしのびないので。」

「待て、もう遅い。見ろ、武装隊がプレシアの元についたぞ。」

そうやって画面に目をやると、武装隊がプレシアに迫っている映像が映し出された

「私のアリシアに触らないで！！」

そうやって武装隊を吹き飛ばすプレシア

「アリ・・・シア・・・？」

フェイトが驚愕した表情で画面を見る。するとプレシアがこちらに向かつて喋りだした

「そうよ、貴方はアリシアの代わりに作り出した人形、でもせっかくアリシアの記憶を持たせて生み出してあげたのに全然違う、アリシアの記憶を持つてだけの唯の出来損ない、私も母親の役を演じ続けたけどもう限界、貴方みたいな出来損ないの母親であるだけで虫唾が走る、フェイト、私はあなたのことがずっと大嫌いだったの、だからもう私の前に現れないで。」

そういつて回線が切れた。俺はフェイトを見る、原作ではこの後フェイトは心が折れる。が、フェイトの目にはまだ光が宿っていた。原作ではその手から落とすはずだったバルディッシュもその手にしっかりと握られてる。すると、フェイトがこう呟いた

「それでも、それでも貴方は私の母さんだよ。」

フェイトのその言葉には、とても強い思いが込められていた

11話 決戦！！なのはVSフェイト！！（後書き）

作者「今回はちょっとシリアスに終わらせてみました。」

士「珍しいな」

夏海「ねえ、なんで今回私の出番がないの!？」

作者「いやあ、なんかたまにはねえ」

アーチャー「唯作者が入れるのを忘れてただけではなくてか？」

夏海「え!？そうなの!？」

作者「それはアーチャーの予想だろうが!！」

アーチャー「まあいい、まずはマサト様、ディステイニープラン様、雨季様、（。D）様、ラハール様、SILVER様、mark un様、清浦刹那様、感想とアンケートにお答えしていただき、感謝する」

作者「んじゃあまずはアンケートの結果から発表します!!」

アルトリア・ペンドラゴン・・・2

メデューサ・・・1

クー・フリーン・・・2

佐々木小次郎・・・4

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル・・・3

次は世界の方!!

なのはの世界・・・3

ゼロ魔の世界・・・2

BLEACHの世界・・・0

とある（インデックス）の世界・・・3

ネギまの世界・・・2

となり

ました!!」

士「予想に反してアサシンの人氣が凄いな」

夏海「これで真アサシンとかだったら0表だったんじゃないかな？」

アーチャー「ありえるな」

作者「まあまあ、あ、因みにアサシンは無印終了後に登場（予定）だから」

士「そうかいそうかい、あ、プレゼントがきてるぞ」

夏海「デイスティニープラン様からアビスガンダムのビームランス、ライジングアロー、タクティカルアームズ？！、タイガーピアスが届いてるよ」

アーチャー「雨季様からはライトセイバーか、よし作者、試し切りの的になれ」

作者「ちよ、それひどくない！？」

士「その隙につと」

夏海「私も」

アーチャー「私も行こうか」

作者「ぎゃああああああああ・・・」（士と夏海とアーチャーに切られまくった。哀れ）

アーチャー「さて、次回予告は私がやろう。次回 第12話 決戦！！時の庭園！！」

「」ドライブ・イグニッション！！」

士「そっいえばライトセイバーは剣の丘に刺さったのか？」

アーチャー「ああ、すっかりとな」

12話 決戦！！時の庭園！！

「リンディ、いまから俺達で時の庭園に向かう。お前はこれから起こるであろう次元震の抑制と倒れてる武装隊の回収をしてくれ。」

「わかったわ、でもあなた達だけで大丈夫なの？」

「何、俺達だけでも十分だ、それに今回はクロノも連れてく。これだけいれば何が来ようと跳ね返せる。」

「そう、じゃあ頼むわ。」

リンディさんはそういうと一足先に時の庭園に向かった

「フエイト、大丈夫か？」

「うん、大丈夫だよ。それに私は母さんを助けないといけないから。」

フエイトの目には断固たる強い意志が宿っている。道を踏み外した母親を助けるという断固たる意思が

「ああ、そうだな。そのためにまずは時の庭園を止めないとな。」

時の庭園は現在次元空間を航行中、そのままアルハザードに向かうためにジュエルシードで次元の裂け目を発生させ、そこに突入しようとしている。このままでは9個のジュエルシードによって発生した次元震でいくつもの世界が滅んでしまう

「最悪の事態だけは避けたいな・・・（夏海、聞こえるか？）」

（どうしたの？お兄ちゃん）

（今から時の庭園に突入する。お前はそこから直接きてくれ）

（わかったよ、それと時の庭園からマキナの力の一部の反応がある

の

（何！？わかった、それはどこからだ？）

（わからない、でも時の庭園の中にいるのは確か）

マジか、てことは奴の狙いはジュエルシードか

（わかった、見つけ次第排除する）

俺は夏海との念話を切り、なのはたちと共に転送ポートに向かった。転移自体はものの数秒で終わり、原作でなのはたちが最初についた場所に転移された

「皆遅いよ」

「夏海ちゃん！？なんでここに！？」

「ああ、俺が呼んだ。」

「でも危ないよ！？」

「大丈夫、お前らより何十倍も強いから。」

「で、でも・・・」

「今はそんなこと言ってる場合ではなからう。見ろ、敵がおまちなだ。」

アーチャーの言ったとおり、既に目の前には100を超える数の敵がいた

「うわっ、いつの間に・・・はあ、仕方ないな、全員下がれ。」

そういつて右手を後ろに下げ、構えを取る

「何をするの？」

「こいつらを蹴散らす。いくぜ・・・ラカンツ！！インパクトオオ

「!!」

突き出された右手から膨大な量の気が放出され、奔流となって敵に殺到した。直撃を受けたものは塵も残さず消え、直撃は回避できたものの、その余波を浴びたものは四肢を吹き飛ばされた

「い、今の砲撃は何だ!？」

「何だっって言われてもあの時お前に使うはずだったけど流石に消えると思って使うのやめた砲撃、とでも言えいいのか？」

クロノはその言葉を聞いた途端全身を震わせ黙り込んでしまった

「クロノだ黙り込んでしまったがここで立ち往生している時間もない、リンディが次元震を抑えてる間がリミットだ。それを超えれば全員そろって虚数空間行きだな。」

俺がそういうと全員が先程まで敵がいた道を走り出した。途中敵の生き残りが何体か攻撃してきたがそこは各自で防がせた。するとなのはが・・・

「そっいえば土君、虚数空間って何？」

「ああ、虚数空間ってのは平たく言えば魔法がまったく使えない空間のことだ。万が一魔導師が落ちたら重力に引っ張られて際限なく落ち続けるな。」

「な、なんか怖い・・・」

「なんかじゃなくて実際に怖いものなんだって。まあでも、脱出できないわけじゃないぞ？魔力が使えなくなるだけであって他のものは使える。例えば気とか神力、妖気だな、まあこの中にそんなのが使えるのがあるかどうかもわからんけど・・・」

「土君は何か使えるの？」

「俺か？俺は気だけだ。」

（私はこれでも創造神なんだから全部使えるよ？）

（んなことわぁーってるから、大体神力使えるなんていったら最悪管理局でモルモットにされるぞ？）

（やだ！！絶対にやだ！！）

（だったら力のことは人前で言わない事。わかった？）

（わかった！！）

そんなことを話していると分かれ道に差し掛かった

「分かれ道か、上が動力炉で下がプレシアか・・・俺と夏海で動力炉に向かう、他は全員プレシアの元に行ってくれ。」

「わかったの！！」

「うん！！」

なのはとフェイトの返事を聞いた後、俺達は二手に分かれた

「夏海、死人の蘇生ってできるか？」

「魂とその器があれば出来るけど、魂の管理は死神の管轄だから・・・」

「」

「ならその死神に言えば・・・」

「忘れた？その死神がマキナなんだって。」

「ああ、そうだったな・・・でも今なら大丈夫なんじゃね？」

「え？」

「だってよ、マキナの反乱からけっこー時間たってるだろ？なら空いた穴だつて塞がってるだろ。」

「確かに・・・今確認してみる。」

夏海がそういうと何処かに連絡を取った。すると嬉しそうな顔になってこちらを向いた

「天界の方も大分復旧が進んで死神も新任がついたって!!」

「よし、これでアリシアの蘇生の手はずは整ったな、後はプレシアの改変、ジュエルシードの回収、そしてマキナの手下の排除か・・・やる人が多いな。」

「お兄ちゃん、前見て前!!」

夏海の声に反応して前を見ると、そこにはこれまでよりも巨大な敵が10体ほど攻撃の姿勢をとっていた

「雑魚は消えろ!!」

俺はそう吼え、右手に1つ赤い槍を投影する。そして高々と跳び上がり・・・

「突き穿つ死翔の槍!!」
ゲイ・ボルク

思い切り投擲した。投擲したその槍は幾重にも分かれ敵に殺到、その凶刃にて体を貫いて敵を虚数空間に落とした

「動力炉が近いな、夏海!!行くぞ!!」
「うん!!」

俺と夏海は目の前に迫った動力炉に向かった

士 side end

フェイト side

「なのは、急ごう!!」

「うん!!」

既に時の庭園の崩壊は始まっている。早くしないと、母さんが……!! 見えた!! あのと奥に母さんが!!

バァン!!

私は勢いよく扉を開ける。そこには母さんと母さんがアリシアって呼んでた子が入ってるポッドがあった

「フエイト……なにしにきたの? 私は二度と私の前に現れないでっつていったでしょう。」

「あなたを……助けに来ました。」

「あなたが? ハッ、笑えるわね。……もう一度言うわ、私はあなたが大っ嫌いな、だから二度と私の前に現れないで。」

「……でも、それでもあなたは私の母さんだから!!」

「聞き分けのない子ね……もういいわ、消えなさい。」

母さんがそういつて攻撃を放つ。私はもうだめかと思った、でも……

「ふざけんじゃねえええええ!!」

私の大切な親友が助けてくれました

フエイトside end

士side

間一髪俺の砲撃がフエイトを守った。だが今の俺には安堵などない、

あるのはそう・・・フェイトに攻撃したプレシアへの怒りだけであつた

「てめえ、フェイトの気持ちわかってんのか！？お前に笑顔になつてほしいっていつてずっとがんばり続けたフェイトの気持ちを！！」

いつもの皮肉めいた話し方ではなく、怒りに身を任せ叫ぶ

「気持ち？そんなものわからないわ。」

「てめえはフェイトの母親だろ！！なのになぜわかつとしない！！」

「母親？私がフェイトの？私はあんな人形の母親じゃないわ。」

「ふざけんじゃねえ！！どいう形だろうがてめえがフェイトを生み出したんだろが！！」

「黙りなさい！！私の娘はアリシアだけ、あんなのは私の娘でもなんでもないわ！！」

プレシアが叫んだ途端、プレシアの足元が崩れ去つた

「！！天の鎖よ！！」

俺は王の財宝から天の鎖を取り出しプレシアを助けた。ゲート・オブ・バビロン エルキドゥ 天の鎖は本来神性のないものには何の意味もないが、それでも通常の鎖程度の強度があるので人一人引き上げるのに使うくらいなら何の問題もない。

「あなた！！何で私を助けたの！？」

「決まつてんだろ！！てめえが死んだらフェイトが悲しむからだ！！いいか！！てめえがフェイトをどう思つてようがフェイトの母親であることにかわりはねえんだ！！それを拒絶しててめえは現実

から逃げてるだけだ！！現実と向き合え！！」

俺がそういつて立ち上がったその時

「があ！？」

遙か後方から一条の光が伸び、俺の右腕とプレシアの心臓を貫いた

「母さん！！」

フェイトが叫ぶがとき既に遅し、プレシアは虚数空間に落ちていった

「土君！！右腕が！！」

「この程度大丈夫だ！！」

俺がそういつと、右肩から腕が生えてきた。なのはたちがそれを見て驚愕しているがそんなはどうでもいい。俺は攻撃が放たれたほうを見た、そしてそこにいたのは・・・

「貴様らの仕業か！！カンツェル！！マゼンダ！！」

2体の魔族、カンツェルとマゼンダであった

「ほう、我らの名を知っているのか。だがそんなことはどうでもいい、マキナ様の命によりお前はここで死ぬのだからな！！」

カンツェルが先ほど俺の腕を吹き飛ばした光線を撃って来る

「I am the bone of my sword . 《ロ・ファイアス体
は剣で出来ている》 “ 熾天覆う七つの円環 ” 」

だが俺も馬鹿ではない。俺は熾天覆う七つの円環を具現化し、光線を弾いた

「何!？」

「さあ・・・断罪の時間だ。トレース・オン、エクスカリバー、アヴァロン。」

創造するはアーサー王が使った至高の聖剣、約束された勝利の剣、
そして聖剣の鞘にして最高の防具、全て遠き理想郷

「くつ、くらえ!!」

カンツェルは聖剣とその鞘の力に怯え、攻撃を乱射してくる。マゼンダもカンツェルに習い攻撃してくるがアヴァロンの前では無意味でしかない

「真名開放、全て遠き理想郷!!」

カンツェルとマゼンダの攻撃は全てアヴァロンによって防がれた

「さあ、貴様らの罪を数えろ!! 真名開放!! 約束された勝利の剣

聖剣から発せられた光の奔流は瞬く間にカンツェルとマゼンダを包み込み、叫びを上げさせる間もなくそれを無に帰した

「・・・夏海、転移の準備を。」
「わかったよ・・・」

その場に重い空気が流れる中、俺達はアースラへと転移した

「リンディ、次元震の抑制はどうだ？」

「もう大丈夫よ、あなた達のほうは？」

「・・・最後の最後でプレシアが殺された。」

「！！・・・そう。で、その遺体と殺した犯人は？」

「遺体は虚数空間に落ちた。犯人は・・・俺が消滅させた。」

「そう・・・他に連絡は？」

「このあとアースラの訓練場を貸してほしい、男子禁制で。」

「何をする気？」

「何、ちよっとしたことだ・・・」

「・・・わかったわ、詳しい話はアースラに戻ってからするわ。」

そういつてリンディとの通信を閉じる

「・・・フェイト、すまない。プレシアを助けることが出来なかった・・・」

俺は隣で蹲っているフェイトに謝罪する。・・・あの時俺がもっと確りしていれば・・・クソッ、チート並の力があつたって助けることが出来ないんじゃないか！無意味じゃないか！！

「土・・・土のせいじゃないよ、だから泣かないで。」

確かにフェイトの言うとおり今回のことは俺のせいではない。だが

実はカンツェルとマゼンダは俺が気づける程度の距離しか離れてなかった。それに事前に夏海から何かがいることは聞いていた、それなのにキレて前しか見えなくなってしまうカンツェルの攻撃に気づくことが出来ず、最悪の事態を招いてしまった

「だがあれは完全に俺の不注意が招いた、それなのに」「土、聞いて。」「。。。。」

「私だって母さんが死んだことはすごく悲しい。でも、土が泣くのを見るのはもっと悲しい、だから泣かないで、土。」

俺はその言葉を聞いて自らの愚かさに気がついた。俺が守らなければならぬのに逆に心配されるようじゃ意味がない、ちゃんとフェイトやなのは、皆を守るようにならないとフェイトにも示しがない

「フェイト、ありがとう。おかげで見えなくなってたものが見えたよ。」

俺はフェイトに向かってそういった。もう俺は迷わない、フェイトやなのは、皆を守るためにも！！

12話 決戦！！時の庭園！！（後書き）

作者「・・・何で俺つるされてるの？」

夏海「私の出番が全然ないからだよ！！」

アーチャー「私の出番もないのだが？作者よ」

作者「すみません、本当すいません」

士「ついでに言うけどなんかだんだん本編がややこしくなってるのか？」

夏海「確かに・・・」

アーチャー「十中八九作者の仕業だな」

作者「俺のせい！？俺のせいなの！？」

アーチャー「当たり前だろう」

士「まあいいや、まずは作者を消そう」

夏海「さんせい！！」

アーチャー「私も賛成だ」

作者「ひどくない！？俺の扱いひどくない？！」

士「黙れ、そして消える。『千の雷』!!」

夏海「『燃える天空』!!」

アーチャー「天地乖離す開闢の星!!」
エヌマ・エリシュ

作者「マジかあああああああああ・・・」

士「よし、五月蠅いのはなくなったな」

夏海「それじゃ次行くね、雨季様、デイスティニープラン様、ラハール様、感想どうもありがとうございます」

アーチャー「デスティニープラン様のところのガトーとリイン？から土宛にマゴロク・E・ソード、夏海宛にロンギヌスの槍がきてるぞ」

士「エヴァンゲリオン関係か、丘には刺さったのか？」

アーチャー「ああ、干将・獏耶よりも簡単なつくりだったからすぐにな」

夏海「雨季様から・・・淫獣人形だつて」

士「なんか紙が張つてあるぞ？なにに・・・踏んでよし、潰してよし、ストレス発散にご使用ください・・・アーチャー、切り刻んでみてくれ」

アーチャー「後でな、それとラハール様から万能ソーダ×50と快癒の水×50と帝の気魂香×50と不思議な焙じ茶×50が届いて

るぞ」

士「佐助から手紙か・・・」「万能ソーダでプレシアさんの病気を治してやってくれ」・・・すまん佐助、それはできそうにない・・・」

夏海「いつまでもめげてたってしょうがないよ、お兄ちゃん」

士「・・・だな」

アーチャー「もうそろそろ次回予告をいれたほうがいいんじゃないのか？」

士「そうだな、今回は俺がやるわ。次回 第13話 無印終了、そして新たなサーヴァント?!」

「・・・ドライブ・イグニッション!」

13話 無印終了、そして新たなサーヴァント！？

俺がフェイトに立ち直らせてもらった直後、リンディがアースラに帰着した。因みにフェイトはなのはのもとに向かった

「リンディ、遅かったな。」

「ジュエルシードを持つてくるのに手間取ったのよ。で、訓練場を使つて何をする気？」

「何、唯の死者蘇生だ。」

「死者蘇生！？」

「ああ、フェイトの姉であるアリシア・テストロッサを蘇生させる。本当はプレシアもたち合わせたかったんだがな・・・」

「プレシア・テストロッサの蘇生はできないの？」

「無理だ。魂を入れる肉体があれば出来るのだが生憎その肉体は虚数空間の何処かだ。」

「そう、フェイトさんにそのことは？」

「言っていないし言う気も無い、フェイトにはアリシアは例外だと伝える予定だ。」

「わかったわ、こちらも口を滑らせないように気をつけるわ。それとフェイトさんのことなんだけど・・・」

リンディが何か言おうとしたとき、急にになかがここに転移してきた

「士の魔力を辿つて来たけど・・・ここはアースラか？」

「佐助か、久しいな。」

「お、士。久しぶりだな。」

「あなたは誰ですか？」

「あ、自己紹介が遅れてた。俺は猿飛佐助って言います、士の親友です。」

「まあそういうことだな。」

「そういえばこの前送った物役に立ったか？」

「プレシアに使ってくれて言ってたアレか・・・」

「その様子だとあまりいい結果じゃねえな？」

「・・・ああ、あと少しつてところで魔族に腕ごとやられた・・・」
「腕ごと！？腕は大丈夫なの！？」

まだいたのか、リンディ

「大丈夫も何も即座に再生させたから特に？」

俺がそういうとリンディは頭を抱えてしまった。まあどうでもいいからほっとこう

「そうか・・・まあ今更くよくよしても何もかわらねえからな。」

「まあな。で、お前は今回何をしにきたんだ？」

「アリシアの蘇生の手伝い。」

「それが。一応蘇生はやるけど手伝いはいらんな。それにやるのは俺じゃない。」

「え？お前じゃないの？」

「夏海に任せてある。訓練場を男子禁制にしてな。」

「徹底してんな・・・」

「そうでもないとロリコンが入り込むかも知れん。」

「いたのか？」

「ああ、アースラのクルーの中に5人はいた。そいつらだけなのは達を見る目が明らかに違った、アリシアはポットのまま持ってきたから服を着てないしな。」

「そうか・・・って、お前は見たのか？」

「いや、夏海から聞いた。」

「まあそうだよな。」

「当たり前だ。で、いまから一応向こうに行くけどお前はどつする？」

「そんなもんついてくに決まってんだろ。」

「んじゃ、いくか。」

そういつて俺と佐助は訓練場の入り口まで行った

「なあ土、なんでアーチャーがいんだ？」

「この前夏海が召還したみたいなんだがなんでか別荘の中にいた。」

今現在俺と佐助は男子禁制にしている訓練場の前にいる。一応アーチャーに門番的なものを頼んでおいたのでロリコンどもが寄ってくることが無い

「土よ、夏海はもしかして・・・」

「それ以上言うなアーチャー、絶対に夏海に遠坂の呪いがかかってるわけ無いんだ。」

そつだ、あれは遠坂に代々伝わる呪いだ、夏海は関係ない、絶対にそつだ

「それよりもアーチャー、不審な人物は見えないか？」

「いや見てはいないな。」

「そうか、それはよかった。」

「で、士よ。そこにいるのは誰だ？」

ようやくその話題に入った

佐助

「やっとかよ・・・俺は猿飛佐助、士の親友だ。」

「猿飛佐助・・・忍者か？」

「違う、断じて違う!!」

「アーチャーもボケるようになったか・・・」

「ボケてなどいない、ただ率直な感想をいったまでだ。」

「はぁ・・・その皮肉めいた口調何とかなんないのか？」

「無理だ、セイバーや凜にも何度かいわれたが結局直らなかったかな。」

「マジかい・・・」

そんな話をしていると夏海から連絡が入った

（ようやくと出番だよ!!）

（メタな発言やめい!!）

（まあいいじゃん。で、アリシアの蘇生終わったよ!!）

（わかった、もう入っていいのか？）

（うん、もう大丈夫だよ）

どうやら蘇生が終わったらしい

「夏海からの連絡、蘇生が終わったようだ。」

「案外時間かったな、もういつていいのか？」

「ああ、アーチャーはどうする？」

「私はここにいますとしよう。」

「了解、んじゃ門番頼むぞ。」

「承知した。」

門番は引き続きアーチャーに頼み俺と佐助は皆が待つ訓練場へと向かった

訓練場の中には現在なのは、フェイト、夏海、エイミー、リンディ（いつ来た）、俺、佐助、アリシアがいる。淫獣とKYはアーチャーにボコにさせといた。気分的に

「うゝ・・・ここは？」

アリシアはまだ意識が覚醒しきってないようで眠たそうな感じだ。これをロリコンが見たら出血過多で失血死だな、主に鼻から

「佐助、少しはなれてくれ。アリシアと話してくる。」

「わかった、俺はなのはたちと話してくるわ。」

佐助をなのは達のところへ行かせた後、俺はアリシアの元に向かった

「こんにちは、君がアリシア・テストロッサでいいかな？」

「うん、そうだよ。お兄ちゃんは誰？」

「私は流 土って言うんだ。」

「・・・お兄ちゃんは何で悲しい顔してるの？」

「・・・お兄ちゃんはね、君に謝らないといけないことがあるんだ。」

それから俺はアリシアに全てを話した。その途中アリシアが泣きそうになり、話すのをやめようと思ったがアリシアに「最後まで話して」と言われたのでプレシアの最後までを話した

「本当にごめんな、あの時俺がもっとしっかりしていれば・・・」

俺は今にも罪悪感に押しつぶされそうになりながらもアリシアに謝罪した。それを聞いたアリシアはこういった

「お兄ちゃんのせいじゃないよ、それにお兄ちゃんはお母さんが殺されたときにすごく怒ってくれた。だからありがとう、お兄ちゃん。」

その言葉を聞いた俺は泣いた。俺は礼を言われるようなことは何もしていない。いや、怨まれて当然のようなことをした。だけどアリシアはありがとうと、心から俺に言ってきた。その言葉が、俺の心に響いた

「ありがとう・・・アリシア。」

アリシアは笑顔でその言葉を聞いてくれた。そしてそれを見た俺はフェイトのときと同じく決意した。この笑顔を守ると

俺とアリシアの話が終わった頃合を見てなのかリンディが話しかけてきた

「話も終わったようだしちょっといいかしら？」

「ああ、いいぞ。アリシアもいいか？」

「うん、いいよ。」

「ならフェイトさんも呼ぶわね、フェイトさん、ちょっとこっち来てもらえないかしらー！」

「はい、今行きまーす！」

リンディが呼ぶとフェイトが駆け足でこっちに向かってきた

「リンディさん、どうしたんですか？」

「ちょっとあなた方に話があるんです。」

「何？話って。」

「フェイトさんとアリシアさん、今回のことで親がいなくなっちゃったから・・・」

どうやら話とはフェイトとアリシアの養子縁組についてらしい。原

作ではフェイトだけだが今回はアリシアを蘇生させたのでアリシアも一緒だ。このまま行けばフェイトとアリシアはリンディの養子になる、そうすれば2人とも管理局に入局するだろう。アリシアは本来リンカーコアを持っていないが夏海が蘇生させたときにAランク相当のリンカーコアをつけたと言ったからなのはやフェイトと同等の魔導師になるだろう

「士さんの養子縁組に入ってもらえないかしら？」

・・・予想外だった。まさかリンディからそんな言葉が出るとは・・・

「ちよつと待てリンディ、なぜ貴様がそんなことを勝手に決めているんだ？」

「あら、一応アーチャーさんに了解はとってあるわよ？」

アーチャー・・・勝手に決めるなよ・・・

「大体当の本人達の上承も得てないのに・・・」

「フェイトさん、アリシアさん、いいかしら？」

「私は・・・それでいいと思います。」

「私も私も！！」

「本人達の上承も取れたことだしいいわね？」

「はあ、わかった。親は一応アーチャーにしとくか・・・」

「え？士さん両親は？」

「物心ついた頃には既にいなかった。」

嘘だ。元の世界にはちゃんという。でももう会うことは出来ないし会う気も起きない。俺は今の生活で満足しているしな

「そう・・・無神経なこと聞いてごめんなさいね・・・」

「気にするな。」

「士は親がいなくて寂しいって思ったことがないの？」

「無い。つか今は夏海にアーチャー、なのはやフェイト、アリシア、はやて、佐助、アルフって大事な家族や友達がいるんだ、いちいち悲しんでなんていられないな。」

俺がそういうとフェイトは嬉しそうな顔をした。アリシアは良くわからないという顔をしている

「さてリンディ、養子縁組の件は管理局が全て行くと見ていいのか？」

「ええ、こちらですぐにでも。」

「なら俺達は帰らせてもらおうとしようか。」

「一応後日アースラにきてもらうことになるけどいいかしら？」

「その程度なら問題ない。」

「わかりました。では転送ポートの準備を「その必要は無い。」え？」

「次元世界単位の転移程度ごくごく簡単に出来る。」

「・・・本当あなたは規格外ね・・・」

「この程度で規格外などといわれても困る。俺が知ってる中には平行世界を移動できる奴もいる。」

そう、あのハツチャケ爺さんこと宝石翁である

「す、すごい人がいるのね・・・」

「人じゃない、吸血鬼だ。」

「・・・」

リンディは言葉を失ったようだ。まあ仕方ないか、平行世界の移動

や吸血鬼など空想の域を出ない言葉が連発したのだから

「黙っているのならもう行くからな。佐助、帰るぞ。」

「お、話は終わったのか。で、何を話してたんだ？」

「フェイトとアリシアを俺の養子縁組に入れるって話。」

「マジか！いいな。それ。」

「羨ましがるな。お前も作者に頼め。」

「帰ったら頼んでみるわ。」

「お兄ちゃん、早く帰ろ。」

「はいはい、んじゃ帰るか。」

こうして今回の事件、PT事件は幕を閉じた

「さて、家に帰ってきたわけだが・・・なんでいんだよ、アサシン」
「拙者も状況がつかめぬのだ。」

家に帰ってきて茶の間に入ると何故かアサシンがいた

「夏海が召還したんじゃないか？」

「てか佐助、お前いつまでいる気だ？」

「一応最後まで。」

「そうかいそうかい。で、アサシン、召還されたときに何か見えたか？」

「たしか・・・鏡の様な陣のようなものが見えたな。」

「またサモン・サーヴァントか・・・夏海、お前だな？」

「アースラで召還しようとしたんだけどまた失敗しちゃったみたい・・・」

「・・・これは間違いなく遠坂の呪いだな・・・」

「明日除霊でもしてもらうか・・・」

夏海には遠坂の呪いがかかっていることが判明。夏海って神だよな！？一応創造神だよな！？神にもかかるってどんだけ強力なんだよ！てかアレは遠坂の血筋にだけかかる呪いのはず・・・なぜ！？

「まあいいか、アサシン、お前どうするんだ？恐らく受肉してると思うが・・・ここで暮らすか？」

「拙者自身行く当ても無いのでな、そうさせてもらっつ。」

「んじゃアーチャー、飯頼む。」

「ふむ、今日は人数も多いし何時もより腕によりを掛けるとしよう。」

「えっと・・・状況がよく・・・」

「私もわかんないよ」

「簡単に言々と家族が増えたってことだ。」

「そつえば士、ジュエルシードは？」

「ああ、既に受け取って・・・って何でお前が知ってる？」

「うちの作者がいつてたから。」

「あまりメタな発言は控えてもらいたいんだが・・・」

「気にするな。」

「はぁ・・・」

「料理が出来たぞ。」

「はやっ！！てかいつ作ってた？」

「お前が私に料理を頼んだ所からだ。」

「流石はブラウニー、やるのが早い。」

「なあ早く食おうぜ。」

「待て待て、皆席についてからだ。」

俺がそういうと皆席についた。フェイトは少しそわそわしているがその内なれるだろう。アサシンは静かに待っている。アリシアと佐助は今か今かと待っている

「今日の料理だ。」

アーチャーが持ってきた料理はどれも美味しそうでありそして量がすごかった

「さて、食べるか。」

「いただきます」「」「」「」

45分後

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

「いや、さすがアーチャー。とても美味しかった！！」

「うん、あんなに美味しい料理初めて！！」

「そうだな、あれほどまで美味しい料理は英霊となる前も食べたことが無いな。」

それぞれがアーチャーの料理に感想を述べる。それを聞いたアーチャーは嬉しそうな顔をしている。・・・珍しいものが見れたな

「さて、腹も一杯になったことだし寝るか。」

「そうか、なら俺は帰るわ。」

「そうか、ならこれをもつてけ。」

俺は佐助に2本の剣を渡す

「これは・・・剣？」

「ああ、名を烈光の剣、ゴルン・ブラスト・ソード斬妖剣という。」

「何か能力があるみたいだな。」

「ああ、能力は・・・グーグル先生で調べてくれ。」

「そうか・・・んじゃ、いくわ。じゃあな!!」

そういうと佐助は元の世界に帰って行った

「んじゃ、寝るか。フェイトたちは・・・」

「わ、私は・・・こっちで寝たい・・・」

「私はお兄ちゃんと寝るー!!」

「お兄ちゃんと寝るのは私だよー!!」

「ず、ずるいよ!! 私も一緒に寝るー!!」

そういつて3人に引きずられていく俺

「アーチャー、アサシン!! ニヤニヤしないで助けてくれー!!」
「無理だな。」

「アーチャー、あつちで囲碁でもやらないか？」

「それもいいな。」

そついつて2人はそそくさとその場を離れた

「まじかあああああ！！！！」

結局俺は3人と寝ることになった。俺の平穩はどこにあるんだ・・・

13話 無印終了、そして新たなサーヴァント!? (後書き)

作者「無印終わったー!!」

士「長かったな」

夏海「もっと話を切り詰めても良かったんじゃない?」

作者「やだ!!それは絶対にやだ!!」

アーチャー「まるで餓鬼だな」

アサシン「餓鬼よりひどいかも知れん」

作者「ひどっ!?アサシンひどっ!?」

士「作者うるさい」

夏海「作者がうざいから次行くよ、雨季様、ディスティニープラン様、感想ありがとうございます」

士「雨季様から・・・エスカリボルグが届いてるぞ」

アーチャー「なんだこれは?解析できん」

夏海「ディスティニープラン様のところのガトール少佐とリイン?とリョウさんからお兄ちゃん宛にビームサーベル(GP02仕様)、私宛にミストルティン $\times$ ∞ 、作者宛に亜空間インコム $\times$ 3(望めば、どこからでも出て来るインコム。3つの内2つはリフレクターイン

コムで、もう1つは強化されたインコム。) がきてるよ」

士「なぜに準サイコミュ兵器・・・」

作者「俺がオールドタイプだからだろ・・・」

アーチャー「そんなことより次回予告はどうするんだ？」

作者「次回予告の前に報告を、これから2、3話は日常的な話になると思いますので。次回予告はアサシン、頼むぞ」

アサシン「承知した。次回 第14話 悪の転生者登場 すこしグロいです」

「「「「ドライブ・イグニッション!」「」「」」

作者「ラハール様、佐助を使わせて頂きありがとうございました。これから也使わせてもらおうと思うのでその時は宜しくお願いします」

作者「ちよつとネタばらし、次回の転生者は一発屋です」

士「言うなボケ!」

14話 悪の転生者登場（前書き）

何気に今回が今までで一番長いです

14話 悪の転生者登場

士 side

P.T事件から早1週間、フェイトとアリシアは無事うちの養子となった。ジュエルシードも21個全てが手に入った。最初は管理局が五月蠅いだろうと思っていたがリンディがジュエルシードは全て虚数空間に落ちたということにしてくれたので何のいざこざも起きなかった。それとアサシンが町の剣道場で師範代の仕事を始めた。最初は出来るかどうか心配だったが流石は侍、門下生のいい見本になっている。アーチャーは翠屋でウェイター兼料理人の仕事についた。こちらの方はなんら心配は無いがアーチャーは仕事服に少し不満があるらしい。見に行ってみよう。それとあの日(アサシンが来た日)以来フェイトとアリシアが俺のことをお兄ちゃんと呼ぶようになり、さらに夜俺のベッドに忍び込むようになった。正直言ってやばい。いつか理性が崩壊するかもしれん。因みに夏海は少し不満らしい。ヤンデレ化しなければいいが・・・

「お兄ちゃん→のこれ何？」

「読者への説明だから気にするな。それより今日は翠屋に行くぞ。」

「翠屋に？」

「なんでいくの？」

「アーチャーがどんな格好で働いてるのか気になって。」

「それは面白そうだな、拙者も行くこうか。」

「アサシン、道場はどうした？」

「今日は休みのようだ。」

「そうか、んじゃ30分後ぐらいにいくとするか。」

俺がそういうと皆は自分の部屋に戻った

「さて、今のうちに少しでもデバイスを作っとくか。」

そういつて奥の部屋に入ろうとする。すると夏海から念話が入った

（お兄ちゃん、ちょっと大変なことが・・・）
（どうした？）

（今天界のほうから連絡が入って、下級神の一人がこの世界に幾らかの能力を持った転生者を入れちゃったんだって。）

（その程度なら別にいいんじゃない？）

（確かにただ転生したんだったら別にいいんだけど・・・目的が目的だから・・・）

（どんな目的なんだ？）

（・・・主要女性キャラを雌奴隷にするだって・・・）

（！！・・・で、天界はそいつをどうすれと？）

（力を全て剥奪後、魂の状態にしてから天界に送還・・・つまりは殺せってことだね。）

（・・・わかった、見つけ次第実行しよう。それと今日翠屋に行く前にはやての家に行くぞ。）

（え？）

（そいつがはやてを襲わないなんて道理は無い。いや、まだ一人なのをいいことに一番最初に狙うかも知れんしな。）

（わかったよ、それじゃ切るね。）

そういつて夏海からの念話が切れた

「はあ、転生者か・・・こりゃ腹くるしかないか・・・」

俺自身、殺人はしたくない。だが今回はほっとくとなのはやフェイト達にまで被害が及ぶ。それだけは避けなくてはならない。何があ

つても

「おい、準備できたかー！！行くぞー！！」

「はいー！！」

「いまいくー！！」

「拙者も行くのでしょうか。」

「わかったよー！！」

俺は不安を抱えながら家を出た

士side end

転生者side

遂に・・・遂に俺はこの地に降り立った！！なのはやフェイト、はやてにヴィータ達を雌奴隷にしてハーレムを作るために！！

「・・・知らない魔力があるな、恐らく他にも転生者がいるのか。
だが俺は負けない、なんせ無限の剣製に王の財宝、真祖の吸血鬼の
身体まであるんだからな。」
アンリミテッド・フレイグド・トウオクスバヒロン

それにただかAランク程度の魔力だ、そんな雑魚に俺が負けるわけねえ！！

「クッククク・・・アーハッハッハッハッハ！！」

転生者side end

士side

俺は今はやての家の前にいる。途中かなり強力な魔力を感じたのでそれが転生者だろう

ピンポン

「はいはい、どちら様ですか？」

「ようはやて、俺だ。」

「なんや土君やないけ、えらい久しぶりやなあ。」

「こつちも色々忙しいんだ。で、はやて今日は暇か？」

「うん、暇や。」

「そうか、んじやいまから翠屋行かないか？」

「ええけど、土君一人？」

「生憎こつちは一家総出だ。」

「へえ、まあええわ。今準備するわ。」

「わかった、んじやここで待ってるわ。」

10分後

「おまたせ、ほないこか？」

「あいよ。」

はやての準備が出来たので再度翠屋に向けて動き出した

「そういえばなんか見慣れない人がおるけど・・・」

「ああ、アサシンとアリシアに会つのははじめてだったな。」

「私はアサシンという、よろしく頼む。」

「私はアリシアっていうんだ、よろしくね!!」

「宜しうな、アサシンはん、アリシアちゃん。」

「そっちはやて、俺達が来る前に誰か来なかったか？」

「一応心配なので確認を取っておく」

「いや誰も来ておらんよ？」

「そうか、わかった。」

「そっちは家族で来てるっていつてたけどなんでフェイトちゃんがおるんや？」

「フェイトがうちの養子になったからです、はい。」

「ホンマ！？ええな、それやったら一日中土君のこと独占できるやん。」

「ちょっ、何いつてるのはやて！？」

「だってそうやん、うちだってもっと土君にくつついていたいわ！」

「はやてがさういうと夏海とアリシアが言い合いしだした」

「だめだよ！！お兄ちゃんは私のだよ！！」

「違うよ！！私のだよ！！」

「ちょ、ちょっと二人とも！！」

「フェイトが止めに入る。俺では収集がつかないのでありがたい」

「お兄ちゃんは私のものだよ！！」

「フェイト、お前もか！？」

「そっちはな、お主こそ内心うれしいのだろう？」

「なんでこいつらこんななんだろう・・・」

そんなこんなで歩き続け、無事翠屋に到着した

カランコローン

「いらつしやいませ！！って土君、どうしたの？」

「アーチャーの様子を見に来たんだが・・・いるか？」

「いるよ、今呼ぶね。アーチャーさん、ちょっと来てくださーい
！！」

「なにかね？こちらも忙しいのだ・・・が・・・」

なのはに呼ばれアーチャーが現れる。その姿はまごう事無き執事服であった。何故アーチャーがこの服に不満を持っていたかというところの世界に来る前、いわば英霊として凜のサーヴァントとなっていた頃、さらには生前、まだアーチャーが衛宮士郎として生きていた頃からなぜかしら凜やイリヤに執事服を着せられることが多く、毎回その理由を聞くと「何故か着せないといけないって気がするの」と言われ着せられ続けた経験があり、かなり執事服に抵抗があるのだ

「予想はしてたが・・・ここまでとは・・・」

「以前も見たことがあったがやはり似合うな。」

「な・・・なぜ貴様らがここにいる！？」

アーチャーは随分と焦ってる。流石に俺達が総出で出てくると思わなかったようだ

「何故って、アーチャーの様子見がてら飯を食いに。」

実際は転生者がここに来ていないか確認するためでもある

「はぁ・・・なら注文をとるぞ、なにがいい？」

「んじゃあ俺これで。」

「拙者はこれで。」

「私はこれー!!」

「私もこれー!!」

「わたしはこれで。」

「うちはこれにする。」

「了解した、席は適当な所に座っておけ。」

そういつとアーチャーは足早に厨房に戻っていった

「・・・なのは、席頼む。」

「・・・あ、そうだね。案内するよ。」

なのはに先導され俺たちは翠屋で最も大きい席（6人用）に座った

「さて、皆座ったか？」

「「「「うん（ああ）。」「」「」」」

「よし、それじゃ軽く会議を始める。」

「会議って何について？」

「議題は『アーチャーの執事服姿について』だ。皆アーチャーを見てどう思った？」

「何か天性めいた何かを感じたな。」

「うん、あれは絶対にずっ着せてたほうがいいよ。」

「「「あの格好のままでいたほうがいい。」「」」

「そうか。やっぱりそうだな、凜やイリヤの気持ちわかるぞ。今は。」

「で、今回の会合はこれで終わりか？」

「いや、まだある。現在アーチャーのデバイスを作成中なんだが、実を言うとバリアジャケットのデザインに非常に困っている。でだ、ここは一つ、皆の意見を聞きたい。」

「やはり執事服だろう。」

「その意見に賛成。」

「私もいいと思うよ。」

「私も賛成。」

「うちも賛成や。」

「皆もそう思うか・・・よし、バリアジャケットは執事服にしよう。」

軽い会議が終了した所でアーチャーが料理を持ってきた

「注文の品を持ってきた、存分に味わえ。」

何故か心持アーチャーが不機嫌なのは気のせいだろう

「んじゃ、料理も来たことだし食べますか。」

「いただきます。」

30分後

「「「「「ごちそうさまでした。」」」」」

「ふう・・・流石アーチャー、ブラウニーの名は伊達ではないな。」

「同感だ、彼の腕にはつくづく感服いたす。」

いくら不機嫌でも料理の手は抜かない、それがアーチャークオリティ

「さて、食ったことだし帰るか。」

「ええー！？もっとお話しようよー！！」

なのはが引きとめようとする

「はぁ・・・フェイト、アリシア、はやて、夏海、どうする？」

「私はもつといたいな。」

「私ももつと遊んでいきたいーい!!」

「うちもまだいたいわ。」

「私もそうするよ。」

「わかった、それじゃあ仲良くしてろよ？アサシン、士郎さんの所にでもいくか？」

「士郎？あの小僧がいるのか？」

「いや、衛宮士郎じゃない。高町士郎っていつてかなりの猛者だ。」

「ほう、それは一度死合うてみたいな。」

「字が違う字が。死合いじゃなくて試合だろ。」

「ははっ、そうだな。」

そんなこんなで士郎さんの元に行こうとしたそのとき

「「「!!」」」

俺とアサシン、それと厨房にいたアーチャーがかなり強い殺気を感じた。そして外を見ると、そこには聖骸布に身を包んだ金髪赤眼・ギルガメッシュがたっていた

士 side end

転生者 side

「あの野郎、人の物と気安く喋りやがって・・・!!」

俺は再度翠屋の中を見る。そこには原作にはいなかった9歳ほどの餓鬼と何故かアサシンがいる。そしてなのはにフェイト、はやてらと親しげに話していた

「殺す！！絶対に殺す！！」

俺は気絶するほど強い殺気を奴らにぶつけた。だが奴らは気絶せずこちらを見てきた。その顔は驚愕に満ちていた

「ふっ、力の差を見せ付けられて驚いたか。」

俺は奴らの顔からそう判断する。・・・しかし、まさかサーヴァントがいたとは・・・まあ、どうせあの転生者の餓鬼が神に貰ったんだろ。だがその神もそれ以上の力は与えなかったみたいだな。向こうにしてみれば最悪だがこちらにしてみれば最高だ。奴を殺せば俺の理想を邪魔しようとする奴はいなくなる！！そうなれば俺の理想は誰にも止められねえ！！アーハッハッハッハッハッハッハッハ！！！！

転生者 side end

士 side

転生者と思われる人物はこちらに殺気をぶつけた後、すぐに遠くに転移した。流石にサーヴァント二体にかかられたら勝ち目は無いと見たのだろう

「アサシン、いったん帰るぞ。」

「ああ、その方がよさそうだ。」

俺がアサシンにさういうと、アーチャーが厨房から出てきた

「士、今の殺気はなんだ？」

「聖骸布を纏ったギルガメッシュと瓜二つの奴がぶつけてきた。」

それを聞いたアーチャーは一瞬驚いたが直ぐに冷静になった

「まさかとは思うが奴の・・・」

「宝具を所持している可能性はかなり高いな。」

「ならば私が「いや、今回は俺とアサシンで行く。」何故だ？」

「恐らく向こうはお前の存在を知らない。故にここでの俺達を守りながらいざというときに奇襲することが出来るからだ。」

その考えにアーチャーはこういった

「了解した。なのは達の安全は私が守ろう。」

「頼んだぞ、アーチャー。」（夏海、今から転生者の処分に向かう。）

「

（わかったよ、気をつけてね。）

（ああ、死にはしないさ。）

俺とアサシンはそういい残し、転生者の元に向かった

「ここか・・・」

転生者の魔力を追い、たどり着いた場所は海岸、広さはかなりのものである

「さて・・・いるんだろ転生者！！でてこい！！」

俺がそう叫ぶと空から先程翠屋で見た男が出てきた

「貴様が転生者か。」

「そうだ、俺がその転生者だ。」

「貴様の目的は何だ？」

「知れたこと、なのは達を洗脳して雌奴隷にしてハーレムを作る。それが目的だ！！」

「そのような穢れた目的など、俺が許さん！！」

「無論、拙者もだ。」

「ハッ、たかがAランク程度の魔力しかないでめえに何ができる！！そのアサシン共々ぶつ殺してやる！！」

転生者はその言葉と共に背後に数多の宝具を出現させ、射出してきた

「やはり王の財宝を持っていたか。鋼の身体、発動。」

次の瞬間、俺に宝具の雨が直撃する。だがどの剣も俺に傷をつけることなく地面に落ちていった

「アサシン、大丈夫か？」

「ああ、お主を盾にさせてもらった。」

おいおい、それでいいのかアサシン。転生者はありえないものを見るような目で見てきた

「な・・・何！？何故その程度の魔力で今の攻撃が防げる！？」

「簡単な話だ、貴様が俺の力量を見誤っただけのこと。そしてこれが俺の本当の魔力量だ。」

そういつて海鳴全体に掛けていた認識誤認結界を解いた。その瞬間、転生者の顔が一気に青ざめていった

「何なんだよ・・・その出鱈目な魔力は！？」

「これが俺の本来の魔力、その量は・・・無限だ。」

それを聞いた直後、転生者は悟った。俺が手を出した奴は最悪の敵だと

「貴様は天界から抹殺命令がきてるのでな、早急に終わらせてもらうぞ。」

「何だと！？あの神は天界は介入しないといったぞ！！」

「所詮は下級神の戯言。それにこれは創造神であり俺の妹の決断だ、受け入れる。」

「ふ・・・ふざけるな！！俺はなのは達を雌奴隷にしてハーレムを作るんだ！！それを貴様のようなやつに潰されてたまるか！！」

そういつて転生者が27本の偽・螺旋剣カラドボルグを投影し、射出してきた。どうやら無限の剣製も貰っていたらしい

「壊れた幻想！！」
フロックン・ファンタズム

その言葉と共に偽・螺旋剣カラドボルグが爆発する。が、それでも俺には届かない

「哀れ、だな。さて、今度はこっちから行くぞ！！」

そう宣言し、俺とアサシンは転生者に突っ込んでいった

「くっ、投影・開始！！」
トレース オン

俺は王の財宝からデュランダルを出し、アサシンは手に持つ物干し竿でそれぞれ切りかかった。転生者は投影した干将・獏耶で防ぐも、魔力の練が甘かったようで直ぐに壊れた

「甘いな、アサシン！！」

「秘剣、燕返し！！」

アサシンの究極の剣技が転生者を切り裂く。しかし転生者の身体は即座に再生した

「がああああああ！！」

「！！真祖か！！ならば！！」

俺は王の財宝から歪な短刀を取り出し

「破戒すべき全ての符！！」
ルルブレイカー

転生者の胸元に刺した。すると転生者から魔力が消え、真祖化すらも解けてしまった

「な・・・何をした!!」

「貴様の全能力を剥奪した。これでお前はどこにでもいる様な一般人と同じだ。」

転生者はその言葉に絶望した。神から授かった力がこうもあっさり奪われるとは思っていなかったらしい

「さて、あとは貴様の処刑だけだ。何か言い残すことはあるか？」
「た、頼む!! 助けてくれ!!」

転生者は必死に懇願する。が、俺がそれで助けるわけも無く

「それだけ往生際が悪いんじゃないやあ生かしておくわけにはいかん。消えろ、雷の暴風。」

詠唱を無視して放たれた砲撃は転生者を包み、その身体を塵にかえた

（夏海、転生者の処分終わったぞ。）

（わかったよ、それじゃいまから天界に連絡するね。）

（ああ、頼んだぞ。）

夏海に後のことは頼み、俺とアサシンは帰路についた

「で、家に帰ってきていきなりなんだが、なんではやてとなのはがいるんだ？」

今の時間は夜6時半、はやてくらいの子供が出歩くには遅すぎる時間だ

「今日はここに泊まることにしたんや!!」

「私も泊まるの!!」

どうもアーチャーがいつの間にか決めていたらしい。なのはの方はシスコンが反対したそうだが桃子さんと士郎さんが許可を出したそうで急いで荷物を用意してきたらしい。はやては元から泊まる気だったようだ

「まじか・・・アーチャー、飯頼む。」

「了解した。席について待っている。」

アーチャーはニヤニヤしながら台所に入っていった

「皆席につけー、夏海ーまだかー？」

「いまいくー!!」

部屋にいた夏海も席につき、残すはアーチャーの料理のみ

「少し暇だな、今のうちにデバイスを少しでも完成に近づけておくか・・・」

なのは達が喋っているなか、俺はデバイスの作成に取り掛かった

30分後

「料理が出来たぞ。」

アーチャーの料理が完成した

「お、今回は時間がかかったな。」

「ああ、今回はかりは時間を掛けなければならなかったのだな。」

「早く食べようー!!」

「そうだな、んじゃ。」

「「「「「「「「「「いただきます。」「「「「「「「「「

1時間後

「「「「「「「「「「ごちそうさまでした。」「「「「「「「「「

「よし、そんじゃ今日はこれで遊ぶか!!」

俺が取り出したのは『影響ゲーム』という名の謎のゲーム

「!!!!まて土、それはまさか・・・」

「ああ、宝石翁の作品だ。」

それを聞いたアーチャーは露骨にいやな顔をした

「まあいいだろアーチャー、さすがに生死にかかわるようなゲームじゃないって。」

「・・・はあ、わかった。私の敗北だ、腹をくくってやる。」

アーチャーは少し自棄になりながらもゲームに参加した

「それでは、ゲーム開始!!」

・・・その3時間後、このゲームに参加した全員が真っ白になって倒れていた

「や・・・やらなきゃよかった・・・」

俺の平穩はいつ来るんだろう・・・

14話 悪の転生者登場（後書き）

作者「疲れた」

士「また随分と長く書いたなあオイ」

夏海「また私の出番が少ない・・・」

作者「まあそういうなよ」

アーチャー「私の出番もかなり少ないのだが？」

士「やつちやれアーチャー」

作者「ちよつ、それはやばいって！！まじでやばいって！！」

アーチャー「気にするものか、偽・螺旋剣カラドボルグ！！」

作者「なんでえええええええ・・・」

アサシン「これはまた派手に飛ばしたな」

士「んじゃ追撃の赤原獵犬フルンディング！！」

アーチャー「これで当分は戻ってこれんだろう」

夏海「それじゃ今のうちに、ディステイニープラン様、雨季様、
。D（様、magune様、感想ありがとうございます」
（

士「デイスティニープラン様から作者宛にビームスマートガン、アサシン宛にビームサーベル×2（Sガンダム仕様）、俺宛にサンライトハート&サンライトハート改、夏海宛にバルキリースカート、アーチャー宛にシルバースキンが来てるぞ」

夏海「雨季様からは物干し竿（逆刃刀バージョン）と手紙が来てるよ」

士「手紙？・・・『要を使いたかったら言ってください』か・・・今度戦ってみたいな」

アーチャー「（。Д。）様から私宛に絶装天剣と景仰すべき啓示の剣、士宛にバラーエーナ集束ビーム砲、スーパードラグーン、蜻蛉きりが届いているぞ」

士「景仰すべき啓示の剣の解説も来てるぞ。・・・うわあ、使いずれえ・・・」

アサシン「magune殿からは・・・白い札のようなものが60枚ほど来てるぞ」

士「遊戯王のカードか・・・デッキでも作れというのか？」

アサシン「そういえば士、お主いつの間に制約などつけていたのだ？」

士「ああ、本編のアレね。あれは3日ほど前からつけてたんだよ」

夏海「お兄ちゃん、もうそろそろ時間だよ」

士「わかった、んじゃ次回予告といくか。次回 第15話 デバイ
ス完成」

「「「ドライブ・イグニッション!」」」

15話 デバイス完成。性能は・・・当たり前のようにチートです

「よし、後はここをこうすれば・・・」

どうも、流 士です。今何をしているかというと・・・

「デバイスの完成だ!!」

デバイスを造っていたのだ

「夏海――!!アーチャー――!!完成したぞー!!」

「本当!?!」

「どれ、どんなものかを見せてみる。」

「これが夏海用、これがアーチャー用、そんでもってこれが俺用だな。」

俺は夏海に左手につけるガンドレッドタイプ、アーチャーに右手につける腕輪タイプのデバイスを渡した。因みに俺のは夏海のデバイスの右手用の奴である

「夏海のデバイスの名前はザ・ボス、アーチャーのデバイスの名前はサーヴァント、で、俺のデバイスの名前がスネークだ。」

「ザ・ボス・・・まさかとは思うけど・・・」

「AIはザ・ボスのものを使ってるぞ。」

「私のデバイスのAIはなんなんだ?」

「お前のはセットアップしてからのお楽しみだ。」

「そういえばお兄ちゃんのデバイスのAIは?」

「もちろんビッグボス。」

「だろうと思った・・・」

「まあまあそういうな、んじゃセツトアップしてみますか!」

「そうは言つがどうやればいいんだ?」

「今から手本見せるから見とけよ、スネーク、セツトアップ!」

《了解した、マスター!!》

俺の身体を光が覆う。そして光が晴れたそこには、迷彩服に身を包んだ俺がいた

「まあこんな感じだな。」

「すごい!!次私がやるー!!」

「おう、やってみな。」

「いくよー!!ザ・ボス、セツトアップ!!」

《了解、マスター》

俺同様、夏海の身体を光が覆い、晴れたそこにはザ・ボスのスーツに身を包んだ夏海がいた

「成功だな。」

「やったー!!」

「んじゃ、次はアーチャーと行こうか。」

「了解した、サーヴァント、セツトアップ。」

《・・・》

俺や夏海のAIとは違い、一言も喋らないサーヴァント。だが壊れているわけではないようで、バリアジャケットはちゃんと展開していた

「士・・・これは何の冗談だ?」

・・・アーチャーはかなり不満げだが・・・

「すまん、A Iの方が設定を変えたらしい。」

嘘だ。これが正解だ

「・・・なら仕方ないか・・・」

簡単に信じるなよ、アーチャー

「して、A Iは誰なのかね？」

「そうだな、もう喋っていいぞ。」

《ふう、いつまでも黙っているのは堪えますね。》
「な!？」

《久しぶりですねアーチャー。いや、シロウ。》

「セ、セイバーなのか・・・？」

《ええ。ですが、私だけではありません。》

「?それはどういう・・・」

《こういうことだぜ、アーチャー。》

「!!その声は・・・ランサーか。」

《ああ、因みにこんなのもいるぞ。》

「こんなの・・・？」

《ほう、我のマスターになつたか^{オレ}贗作者!!^{フェイカー}》

「な!?!ギルガメツシュ!？」

《あら、私もいるわよ?》

「キャスターだと?・・・士、これはもしや・・・」

「ようやつと気づいたか。そう、お前のデバイスには第5次聖杯戦争に参加した英霊の魂をA Iに使ってる。まあ、現界してるお前とアサシンは当然入ってないがな。」

「そうか・・・ということはライダーとバーサーカーも・・・」

《はい、私も当然ながらここにいます。》

「・・・やはり君達の声の聞くと聖杯戦争のことを思い出すな。」

アーチャーは少しばかりか懐かしんでいた

《アーチャー、いまさら思い出しても何にもならんだろう。》

「む？この声はいつたい・・・」

《おっと、声を聞くのは初めてだったな。私がバーサーカーだ。》

「バーサーカー・・・すまない、あの時イリヤを助けてやれなくて

」

《いまさら悔やんでも何も変わらぬ。それよりもイリヤのような子をこれ以上出さぬように頑張ってくれ。》

「ああ、そうさせてもらう。バーサーカー。」

「なあ、もうそろそろデバイスの解説に入りたいんだけど・・・」

「ああ、すまん。」

「まあいいか。まず俺と夏海のデバイスだが、待機状態でも戦えるようにパルマ・フィオキーナをつけておいた。因みに非殺傷設定などという生温いものは排除した。セットアップ後だが、俺のデバイスには格携帯兵器への変形機能を持たせた。ハンドガンからロケットランチャー、さらにはレールガンまで多彩な兵器に変形できる。

弾は魔力弾、当然の如く殺傷設定だ。夏海のデバイスにはパトリオットを初期兵装として持たせてある。因みにパトリオットの弾は魔力弾だが空気中の魔力素を吸収、増幅させて使ってるため夏海自身の魔力は使わない。それとザ・ボスにはA I兵器を五機搭載してある。種類はホバー移動により高い機動力を持つピューパ、ミサイルすらかわす反射速度を持つクリサリス、高い火力と防御力を持つ動く要塞コクーン、アルカンシエルと同等の威力を持つ核ミサイルを搭載し、それを使わずともコクーン並みの火力を持つ四足歩行型のピースウォーカー、クリサリス並みの反射速度にコクーンと同等の火力、さらにはピースウォーカーの核ミサイルを搭載した二足歩行型のメタルギアZ E K Eだ。動力源は夏海の魔力、同時に出せるの

は三機までだ。機体が損傷した場合は一旦ザ・ボスの中に戻してやれば修復させる。因みにミサイル等の攻撃は魔力を物質化させたものを使うから質量兵器にはならない。それと格AⅠ兵器のサイズは一番小さいピューパで全高5メートル、全長10メートル。最も大きいコクーンにいたつては全高45メートル、全長60メートルもあるから出す場所は考えるよ？最後にアーチャーのデバイスの説明に入る。まず人格がセイバーの状態では、セイバーの剣術が使えるようになる。それと投影した得物に自動で風王結界がかかるようになる。ランサーでは槍術とルーン、ライダーでは騎馬術と石化の魔眼、キャスターでは魔術、バーサーカーでは十二の試練、ギルガメッシュでは王の財宝だ。それとその人格が担い手である宝具を投影するとすべて真作になり、さらには真名開放の威力が1.5倍になる。因みに乖離剣エアの投影も可能だ。それと最後に、このデバイスの核にはそれぞれジュエルシールドを七個ずつ使っているから壊れた場合などは直しようがないので注意を。何か質問は？」

「ライダーの状態ではキュベレイがつくといっていたが、となると魔眼殺しをつけなければならぬのか？」

「いや、対象を選んで使えるようにしたから魔眼殺しはいらないぞ。」

「パトリオットってどんなの？」

「パトリオットはXM16E1の銃身を切り詰めてストックをなくしたザ・ボス愛用のサブマシンガンだ。大柄なハンドガンの携行性、アサルトライフルの威力を併せ持ち、更にはその銃身の短さからは想像できないほどの集弾性を持つバケモノ……といった所か？」

《因みにパトリオットとは『愛国者』という意味だ。》

「そういうこと。他には？」

「特にないな。」

「私も」

「なら早速模擬戦でもやるか。」

俺たちは一度アースラに向かった

「おいリンディ。」

「うひゃあ!？き、急に現れないでよ!!」

「過ぎたことは気にするな。それよりもその劇物を何とかした方がいいんじゃないか？」

俺はそういつてリンディの持っているお茶・・・俗に言うリンディ茶を指してそういつた

「劇物つて・・・これ美味しいのよ？」

「ありえん、そもそも抹茶をそのような飲み方で飲むのは抹茶に対する冒瀆だ。」

「うつ・・・そうね、そうよね・・・」

「いちいち落ち込むな、こちらも早く用件を済ませたいんだ。」

「用件？」

「ああ、何処か壊滅してもいい犯罪組織はないか？」

「犯罪組織つて・・・何をするつもり？」

「デバイスの起動実験だ。」

「え？それだつたらアースラの訓練場を使えば・・・」

「アースラが沈むことになるがそれでもいいなら使うが？」

「わかつたわ、エイミィ!!この近辺の犯罪組織のリストを!!」

「艦長、何でそんなものを・・・」

「士さんたちがデバイスの起動実験を行いたいから何処か壊滅してもいい犯罪組織を捜してるのよ。」

「そうですか・・・ってデバイスの起動実験ならアースラの訓練場でやれば・・・」

「この艦沈むぞ？」

士がそういつた途端、エイミィがものすごい速度でリストを作成し

ていった

「出来ました!!」

「ご苦勞様、ゆつくり休んでて頂戴。」

「さて、どこから滅ぼせばいいか・・・」

「滅ぼすって・・・あら、ここなら良いんじゃない？規模も勢力もかなりのものよ。」

「リンディ、これは一応デバイスの起動実験だぞ？」

「いいのよ、ここがなくなれば管理局も大助かりだし。」

「管理局の利益につながることはしたくないのだが・・・」

「そう硬いこといわないでお願い。」

「はぁ・・・夏海、アーチャー、いくぞ。」

「で、どこになったのだ？」

「第34管理外世界『ブルーコスモス』に潜伏中の犯罪組織、『ログス』を殲滅する。」

夏海

「『ブルーコスモス』に『ログス』って・・・ガンダム？」

「それ以上言うな、世界が壊れる。」

夏海のメタ発言を抑えつつ、士達は『ログス』の壊滅に向かった

「ここか・・・」

士達はアースラの転送ポートを使い、犯罪組織『ログス』のアジト近くに降り立った

「あの建物がロゴスのアジト？」
「建物というより要塞だな。」

アーチャーが言うとおり、外見は東京ドーム4個分ほどの土地に立つ大要塞である

「MSとかでて来そうだな。」
「いやもうでてるよ、ほら。」

夏海の指す方を見ると、ダガーL3機とウィングダム5機が巡回していた

「・・・連中次元漂流者か？」

「十中八九種デスの世界から来てるな。」

「アーチャー、なんで知ってる？」

「冬木でも放映されてたのでな。」

「見てたというわけか。」

「ああ。」

「まあそんなのはどうでもいい。問題なのは・・・アレだな。」

士がそれを指す。それは砲門、それも陽電子破城砲ローエングリン、しかも二門

「アーチャー、あれを破壊できるか？」

「わからんがやってみるとしよう。」

アーチャーはそういつて黒弓と一本の矢を投影する

「偽・螺旋剣！！」
カランドボルグ

アーチャーが放った矢はローエン格林に向かう。が、到達寸前に何かの薄い膜に当たり、爆発してしまった

「む!! いまのは・・・」

「やはり陽電子リフレクターを張っていたか・・・」

「あ、MSの方も気がついたみたい。」

「何？」

夏海の言葉を聞き、MS達の方を見ると確かに攻撃に気づいたらしく守備を固めてしまった

「あれでは一点突破は難しいな、援軍も呼ばれるだろうし。」

「なら背後から回り込むか？」

「いや、ここから殲滅する。」

「さっき一点突破は難しいといわなかったか？」

「確かに難しいと言った。だが出来ないとは誰も言ってないぞ？」

「フツ、確かにそうだな。」

「夏海、いつでもAI兵器を出せるようにしておけ。」

「わかったよ。それじゃザ・ボス、セットアップ!!」

《了解だ、マスター。》

夏海のほうも準備は出来た。後はぶっ飛ばすだけ・・・

「メタモルフォーゼ・・・ウィングガンダムゼロカスタム。」

士は自らの姿をウィングゼロカスタムにかえ、ツインバスターライフルの標準を合わせた

「威力設定・・・通常サイズのウィングゼロカスタムと同等・・・設定完了。」

トリガーに指をかけ、いつでも撃てる体勢にする。そして・・・

「エネルギーチャージ開始・・・完了。いくぞ・・・発射。」

発射した。その銃口からはMSを一度に5機は巻き込むほどのビームが発射された

「命中確認、敵MS及びローエン格林沈黙。よし、夏海、いけ。」
「わかったよ。クリサリス、ピースウォーカー、メタルギアZ E K E、発進！！」

夏海の掛け声と共に3機のAI兵器が出現し、攻撃を開始した

「アーチャー、俺たちもいくぞ。」

「白兵戦か？」

「ああ。」

「そうか、なら得物は多いほうが良いな。」

「とにかく行くぞ、援軍を呼ばれたら面倒だ。」

「そうだな。」

「スネーク・・・」

「サーヴァント・・・」

「セットアップ！！」

士とアーチャーもセットアップし、バリアジャケットになる。と、士がアーチャーの異変に気がついた

「アーチャー、デバイスを弄ったな？」

「ああ、バリアジャケットを各人格のものになるようにな。」

「ライダーのあれを着るのか？」

「いや、あれは男物に代えさせてもらった。因みにセイバーのもだ。」

「流石はブラウニーとでもいえばいいのか？」

「どうとでもいえ。」

「まあいい、いくぞ！！」

士の声と共に二人は要塞へと突入した。因みに今のアーチャーのバリアジャケットは慢心王のあれである

「な、なんだ貴様ら！！コーディネイターか！？」

「違うな、アブノーマルだ。」

士はスネークをAK-47に変え、兵士の頭を撃ち抜く。兵士はそのまま絶命し、後ろに倒れた

「こいつら絶対種デスから来たな。」

「そうだろうな、この世界でコーディネイターなどという言葉はまず聞かないからな。」

アーチャーも無駄口を叩きながらも現在の人格・・・ギルガメッシュの宝具である王の財宝を使い次々と兵士を串刺しにしてい

く「ふう・・・いかんせん数が多いな。スネーク、タイプ『カールグスタフ』。」

《了解！！》

士の言葉に反応して変形するスネーク。その姿は先程のアサルトライフルではなくロケットランチャーとなっていた

「弾頭は拡散型つと・・・発射！！」

その砲門から発射された弾頭はまっすぐ飛び、一人の兵士に直撃。周りの兵士を巻き込みながら絶命した

「アーチャー、そっちはどうだ？」

「こちらは大分かたがついてきたところだ。マキア・ヘカティックグライアー――！」

アーチャーは管制人格をキャスターに変え、魔術で敵を殲滅していく。士とは違い死体を残さないののでそこまでグロくはない

「夏海――！そっちはどうだ――！」

「こっちも粗方片付いたよ――！」

夏海のほうもA I兵器とパトリオットを使い兵士を蹂躪していた

「これで兵士はいなくなっただな・・・終わりか。」

「いや、まだ終わりではないな。」

「何？」

「みる、親玉のお出ました。」

アーチャーの指すほうを見ると、そこには

「デストロイ・・・」

20機のウィンドム、そして5機のデストロイガンダムがいた

「夏海――！A I兵器を戻せ――！」

「わかった――！」

「士、あれはどうするんだ？」

「原作と同じやり方で殲滅する。」

「できるのか？」

「ああ、できるさ。ネオメタモルフォーゼ、デイスティニーガンダム！！！」

能力を使いデイスティニーガンダムとなる士。だがその大きさはいつもと違い、原寸大まで大きくなっていた

「アーチャー、夏海、ウィンダムどもは任せたぞ！！」

士はそういい、デストロイに突撃していった

「夏海、行くぞ！！」

「うん！！右手に魔力、左手に気・・・合成、咸卦法！！」

夏海の周りにオーラのようなものが現れる。

カラドボルグ

「偽・螺旋剣！！」

「豪殺居合い拳！！」

アーチャーから一条の螺旋剣、夏海から不可視の砲撃が放たれる。それは2機のウィンダムに直撃し、爆散させた

「貴様ら、生きて帰れると思うな！！」

仲間の兵士がやられた事に激怒した兵士が自機のビームライフルを夏海達に乱射してきた

「この程度！！I am the bone of my sword . 《体は剣で出来ている》 熾天覆う七つの円環！！！」
ロー・ファイアス

敵の攻撃を七つの花卉の盾で迎え撃つアーチャー。そしてその盾は一枚と欠けることなくアーチャーと夏海を守った

「オラアアアアア！！」

一瞬硬直したウィンドムを土がその手にもつ大剣『アロンドイト』で斬り裂く。コックピットを焼かれた機体は一瞬の間の後爆発した

「アーチャー！！剣軍で一気に焼き払え！！」

トレースオン

ロールアウト

フリーズアウト

ソードパレルフルオ

「いわれなくとも！！投影開始、工程完了。停止解凍、全投影連続層写！！」

アーチャーの頭上に27の剣軍が現れ、ウィンドムに殺到する。残る17機のうち、7機のコックピット部分に刺さったそれは

ブロックン・ファンタズム

「壊れた幻想」

アーチャーの合図と共に爆散した

「食らいやがれえええええ！！」

アーチャーがウィンドムを殲滅してる中、土は5機のデストロイを相手に奮闘していた

「うらああ！！」

アロンドイトを振り下ろす。が、敵の陽電子リフレクターに阻まれデストロイ本体まで届かない

「ちい！！ならば！！」

士は全身のスラスターを噴かし、デストロイのはるか頭上に跳ぶ

「これならどうだああ！！」

アロンドイトを構え、急降下しながらデストロイを斬る。完全に振り下ろされたその刃はデストロイを両断した

「次！！」

両断されたデストロイが爆発した直後、士は背部のミラージュコロイドウイングを展開し、次の標的に突撃していった

「当たるかよおお！！」

絶え間なく飛んでくるビームの雨を掻い潜り、デストロイの懷に潜り込み

「消えろおおおお！！」

コックピット部分にパルマ・フィオキーナを撃ち込む。コックピットは一瞬で蒸発し、爆発。デストロイもその際に誘爆し、撃沈。残り3機となった

「アーチャー！！そっちは大丈夫か！！」

「ああ！！あと少しだ！！」

「夏海！！残りを重力呪文で殲滅！！」

「了解！！シン・バベルガ・グラビドン！！」

夏海の放つ最上級重力呪文により、残り全てのウィンダムが落ちていく

「後は貴様らだけだ!!」

「だまれ!!我々の理想を叶えるため、貴様らを生かしておくわけには行かない!!」

「貴様らの理想が何かは知らないがこの世界で暴れられては困るのでな、排除させてもらうぞ!!」

直後、デストロイに向かって全力でスラスターを噴かす。デストロイも全身の武器を使って攻撃してきたがミラージュコロイドウィングを発動しているため全て残像に当たる

「無駄無駄ああ!!」

両肩にあるビームブーメランを投擲し、デストロイ1機を沈黙させる

「当たれえええええええええ!!」

続けざまに高エネルギー長射程ビーム砲でデストロイを撃ち抜く。これにより、敵は残り一機となった

「我らは・・・我らは負けられぬのだ――!!」

たった1機で抵抗してくるデストロイ。だがその攻撃は全て避けられ

「うるせえ、ごたごたいつてないでさっさと逝け!!」

アロンドイトでコックピットを刺し貫かれ、そのまま上に斬られた

「夏海、アーチャー、終わったぞ。」

「ふむ、思いのほか時間がかかったな。」

「お兄ちゃん、私あんな能力あげてないよ?」

「あれはこの前別荘の中で開発したんだ。原寸大のロボットになれるけどその分魔力を多く喰う。俺じゃなかったらまず使えないほどにな。」

「流石はお兄ちゃん、まさか能力を強化するなんて。」

「そういうな。んじゃ、ここを消滅させるか。」

「これほどまでの施設をどうやって消滅させるんだ?」

「簡単なこと、消滅呪文を使う。」

「消滅呪文ってあれ?」

「あれだ。」

「じゃあ転移したほうが良いんじゃない?」

「そうだな、それじゃ転移つと。」

士達は最初にいた丘に転移した

「んじゃいくぞ。シン・クリア・セウノウス!!」

士の叫びと共に現れる巨大な天使のような物。そしてそれは施設に突進し、施設を周辺の土地ごと消滅させた

「な、簡単だろ?」

「もう何もいうまい・・・」

「ん? まあいいか。んじゃ、アースラに戻るぞ。」

「はいはい。」

士達は施設があつた場所に出来た巨大なクレーターを背に、アースラへと転移した

「で、あれはなに？」

「なにつて・・・クレーターだが？」

「やりすぎよ！！」

「仕方ないだろ、流石にMSまで出てきたんだ。消滅させないと別の犯罪組織に使われる可能性がある。」

「MS？」

「15m〜25mほどの有人型人型兵器。管理局の技術力を持つてもあと50年はしないと造れないほどのものだ。」

「それって質量兵器じゃない！？なんでそんなものが！？」

「どうやら連中は次元漂流者だったらしい。こちらの世界に来たあとにでも造ったのだろう。因みに連中が元々いた世界の名は『コズミック・イラ』、MSを使った戦争が行われている所だ。」

「その世界の場所はわかる？」

「知っているが攻め込むつもりならやめておいた方がいい。MSの性能は量産機でSランク相当、EーS機ともなればSSSランクにも届くだろう。戦艦も向こうの方が高性能だ。それに戦場は基本的に宇宙だ。魔導士が出れる場所じゃない。」

「で、でもこっちが攻め込まれたら・・・」

「連中はまだ次元転移の技術が無い。管理局側から手を出さなければ問題は無いだろう。まあもつとも今回のように次元漂流者としてこの世界に来るかもしれないがな。」

「・・・それでも質量兵器は封印しないと・・・」

「それだったら地球はどうなんだ？質量兵器の宝庫だぞ？」

「あ・・・」

「忘れてた、か。だが地球から質量兵器を奪おうとはしない方が良
いぞ。最悪核ミサイルの雨が降る。」

「そ、そうね・・・肝に命じておくわ。」

「賢明な判断で結構。それじゃ俺たちも戻るとしよう。」

「待つて、生存者は？」

「あの映像を見ただろう？あの状況で生き残るなど不可能だ。」

士達はそう言い残し地球に転移した

「さて、帰ってきたはいいが時間が時間だな。」

「今の時間は深夜1時・・・けっこー時間かったたんだね。」

「あの物量を1時間やそこらで殲滅できるわけが無かるう。」

「まあそうだよな。」

「ふあゝ・・・私もうねるね。」

「おう、おやすみ。」

夏海はコクンとうなずき部屋に入っていった

「さて、俺は別荘で寝るか。」

「何故だ？ここで寝てもよかるう。」

「あそこの中は外とは違って24倍の速度で時間が流れてる。つま
り外の1時間は中では1日というわけだ。」

「ほう、ということはあの中で1日寝過ごしても余裕というわけか。」

「そういうこと。最近デバイス作りで徹夜ばかりしてたからな、5日ほど寝てたいんだ。」

「そういうことなら言うことは無い。しっかり休養してこい。」

「そうさせてもらう。んじゃ、おやすみ。」

「ああ、おやすみ。」

こうして、波乱万丈に満ちた1日が終わった

15話 デバイス完成。性能は・・・当たり前前の如くチートです（後書き）

士「で、作者よ。なにかいい残すことはあるか？」

作者「ねえ、なんでいきなりつるされてるの？しかも皆さん宝具なんてかまえてどうしたんですか？」

夏海「どうしたもこうしたもないよ！！更新遅すぎ！！」

アーチャー「前々から手をつけてたはずなのになぜこつも遅くなつた？」

作者「すいません、リアルな事情つて奴です」

士「言い訳は聞きたくねえ、まずはお前の判決だ。お前は・・・極刑だ」

作者「え！？ちよつとまつて！！一回考え直して！？」

アーチャー「考え直すことなどする必要が無い。」

夏海「そうそう、邪魔な奴はさつさと消えようよ。」

作者「マジかーーーー！！！！」

士「五月蠅い。では刑を執行する。約束された勝利の剣！！」
エクスカリバー

アーチャー「天地乖離す開闢の星！！」
エヌマ・エリシュ

夏海「突き穿つ死翔の槍ゲイ・ホルク！！」

作者「ノオオオオオオオオオ・・・」

士「さて、ここで感想を送ってくれた皆様を紹介します。雨季様、ラハール様、magune様、感想どうもありがとうございます」

夏海「雨季様から真・大神宣言ゲングニルが来てるよ」

士「宝具か、性能はランクA++の対城宝具、効果は必中、神・魔獣殺し、武器・鎧破壊、更に魔力消費はディバインバスター程度と来たか・・・すさまじいな」

アーチャー

「ふむ、私の丘にも刺さらないか・・・流石といわざるおえんな」

士「ラハール様からは黄昏と薄明の繋がる道の書と黄昏を呼び出す書か」

夏海「なんか書置きがあるよ。『黄昏と薄明の繋がる道の書は佐助の世界のに移動するためのもの。（帰るときも同じ）黄昏を呼び出す書は佐助を呼び出すための本』だって」

士「なんか前にもその手の物を貰ったような・・・」

アーチャー

「気のせいだ。さて、今回の次回予告は私が行おう。次回 第16話 闇の書起動。そして動き出す影」

「・・・ドライブ・イグニッション！！」

A / S 編キヤラ設定（前書き）

所々改正しました。

A / S 編キャラ設定

流 士

性別 男

年齢 9 歳

身長 1 5 5 c m

体重 4 0 k g

好きなもの 宝具、なのは達、ガンダム、アーチャー、アサシン、
アリエル（夏海）

嫌いなもの 管理局の腐った上層部、K Y、マキナ

容姿 見た目は早い話が『新ゲッターロボ』の流 竜馬。他人の言うことはあまり聞かない（管理局の言うことは決して聞かない）が、
なのは達の言うことは何時も聞いている

魔力光 漆黒（黒よりも更に黒い）

創造神のミスにより殺され転生したこの作品の主人公。転生前は公立の高校に通いながらリリカルなのはやF a t e / s t a y n i g h t、真ゲッターロボ ^{チェンジ} 世界最後の日、各ガンダム作品にマジンカイザーなどのアニメを見ながら生活していた。そしてツタヤにDVDを返した帰りに事故にあい死亡、その後神のミスと知り転生する。転生後は神から授かった能力でなのは達と共に行動を開始する。

現在は自分を転生させた神であるアリエル、アリエルが召喚したアーチャーとアサシン、そしてフェイト・テストロッサとその姉であるアリシア・テストロッサと共に生活している

F a t e式ステータス

筋力 EX (G O D) 魔力 ∞

耐久 EX (G O D) 幸運 C + (G O D)

俊敏 EX (G O D) 宝具 E } EX

() 内は本気で切れた場合

希少能力

メタモルフォーゼ

効果 自分の知っているロボット、M S、M Aになることが出来る。一部分のみ変化させることも出来るが少々扱いにくくなる。変化中は常に魔力を消費し、攻撃時に追加で消費する。最大で原寸大まで巨大化できる (その分消費する魔力量は増加する)

仮面の軍勢

効果 クウガより後の仮面ライダーなら全てなれる。(サブライダーも含めて) 何かしらの条件が必要なものでも難なく使うことができる。ベルトを他の人につけることもできるがその場合条件を満たしていないと変身できない。ベルトの召喚に魔力を消費するがその後の使用に魔力は必要ない。各最強形態にもなれる

この手に集いし魔法

効果 自分の知っている魔法や魔法のようなもの、能力がすべて使える。正直言つてこれだけでも世界最強になれる。ただし『とある科学の超電磁砲』の超能力に関しては使えない

トレース

効果 かつて正義の味方を目指した性格破綻者の固有結界の進化版。これは自分が名前と形を知っている物を創ることができる。だが一度の創造に使う魔力の量が半端ではない。（1回の使用で機動六課のフォワードと隊長陣全ての魔力を消費する）これを連続で使えるのは士の魔力が無敵だからこそである。ただし人を創り出すのは世界の理に反するので不可能

王の財宝

効果 この世の全ての財を手に入れたといわれる最古の英雄王の宝具。その中には無限とも取れる量の宝具の原典が収納されている。中に収納されているのは原典だけではなく、何故か金や食材、調理器具などありとあらゆるものがある

答えを出す者

効果 全ての問いに対する答えが『思いつく』スキル。アカシックレコードの一端と繋がっているとも言われている

超速再生

効果 どんな傷だろうと一瞬で直してしまう再生力をもつ。頭だろうと臓器だろうと再生できる。殺すには存在から消滅させる必要がある

鋼の身体

効果 土の守りの要といっても過言ではないスキル。その防御力は熾天覆う七つの円環ロー・アイアスをも超える

直死の魔眼

効果 存在する全ての物質の内包する死を点や線として見る事ができる。線を切ればそこが死に、点をつけば存在そのものが死ぬ。本来は使いすぎると廃人に近い状態になってしまうのだが、土の場合は永遠に発動していられる

エレクトロマスター

効果 ありとあらゆる電気を操ることが出来る。金属に電気を纏わせてレールガンとして発射することも出来る。最大出力で巨大な雷を任意の座標に落とすことが出来る

ハイデライトウォーカー

効果 真祖の吸血鬼の力を得る。通常なら不老不死化してしまうがアリエルから授かったために不老不死ではない。吸血する毎にその力を増す

流 アリエル
夏海

性別 女

年齢 無（創造神であるために時間の概念が無い）

身長 150cm

体重 赤く塗りつぶされている・・・

好きなもの 土、なのは達、アーチャー、アサシン、士やアーチャーの料理

嫌いなもの 管理局、KY、マキナ、士の敵

容姿 どこと無くイリヤに似ている。が、性格は似ていない。お兄ちゃん子

魔力光 純白（白よりも更に白い）

士を転生させた張本人。それでも一応創造神であるため天界での立場は最高。現在は反乱を起こしたマキナを倒すために士と共に行動している。士に対する呼び方はお兄ちゃん。この世界に来てからは士の提案で流 夏海と名乗る

Fate式ステータス

筋力 EX 魔力 ∞

耐久 EX 幸運 B

俊敏 EX 宝具 E→EX

レアスキル

創造の神
クリエイト・オブ・ゴッド

効果 創造神としての能力。全ての平行世界の力を行使できる。その力は絶大で、世界の崩壊をいとも簡単に引き起こす。が、人の創造は世界の理に反するので不可能。蘇生は可能

うっかり

効果 言わずと知れたある意味最悪なスキル。全てのことをそつなくこなし、ここ一番というところでミスをしでかす。その力はもはや呪いレベルである

16話 闇の書起動、そして語られる真実

「それじゃ最後は中級魔法をはやてから1発撃つてみて。」

「了解や!! プラクテ・ビギ・ナル!! 来たれ氷精ウエニアント・スピーガチヤヌーレス・オブスクーランテース 闇の精!! 闇を従え《クム・オブスクラティオーニ》吹雪け《フレット・テンペスターズ》ニウアーリス・ニウイス・テンペスターズ・オブスクランス 常夜の氷雪闇の吹雪!!」

どうも、毎度毎度同じ始め方の流 士です。今何をやっているかというと・・・

「よっしゃ!! 成功や!!」

はい、はやてに魔法を教えています。どうも前に言ってた「今度教える」という口約束を覚えていたらしく、散々頼まれた結果俺が折れ、教えることにした。場所はダイオラ魔法球の中なので時間はかなりある。まあ老化は免れないが

221

「次、フェイトとアリシア!!」

「はい!! プラクテ・ビギ・ナル!! 来れ雷精ウエニアント・スピーガチヤヌーレス・フルグリエンテース 風の精!! 雷を纏いて《クム・フルグラティオーネ》吹きすさべ《フレット・テンペスターズ》アウストリーナ・ヨウイス・テンペスターズ・フルグリエンズ 南洋の嵐 雷の暴風!!」

まあ実際はやてだけじゃなくてなのはとフェイトとアリシアにも教えてるんだけど・・・

「上々だな。んじやなのは、お前は進んでるから上級魔法言つてみて。」

「はい!! プラクテ・ビギ・ナル!! 契約に従い《ト・シュンボライオン》 我に従え《ディアーコネート・モイ》ホ・テュラネ・フロゴス 炎の霸王 来

れ《エピゲネーテート》 浄化の炎 燃え盛る大剣ほとばしれよ
《レウサントーン》ソドムを《ピュール・カイ》 焼きし《テイオ
ン》火と硫黄 罪ありし者を《ハマルトートウス》 死の塵に《エ
イス・クーン・タナトウ》燃える天空！！！！」
「いやー、やっぱなのはちゃんは凄いな。」
「それでもないぞ？魔力の練りは4人の中で一番大雑把だし何より
魔力の限界値が低いからな、必然的に威力も小さくなる。」

因みになのはの魔力は大体ネギと同じ、フェイトとアリシアはそれ
の1.5倍、はやてに至っては2倍もある

「ううー、土君酷いよ。」

「本当のことを言っただけだ。それにこの魔力はリンカーコアとは
違って今からでも増やせるんだから一々めそめそするな。」

「お兄ちゃん、どうやってたら増えるの？」

「簡単だ、一度魔力が空になるまで撃ち続けて無くなったら休憩、
回復したらまた撃ちまくる、これの繰り返しで増えるぞ。」

「どれくらい増えるんや？」

「最大で自分の魔力分くらいは増えるな。」

「それじゃ今からやるの！！」

「やってもいいが他の3人にも同じことさせるんだから結局お前の
魔力が少ないことには変わらないぞ？」

「でもやるの！！」

「はあ・・・だったら向こうに向かって魔法の射手を撃ち続けてろ。」

「わかったの！！」

「それじゃ他の3人は上級魔法教えるからそこで待ってて。」

「・・・はい。」

こんなのほほんとした生活の中、事件はおきた・・・

3日後・・・

「土くくん。」

「ん？どうした？」

「実はな、明日うちの誕生日なんよ。」

「ああ、前そんなこと言ってたな。」

「え！？忘れとったん！？」

「すまんな、色々忙しかつたんでな。」

「うう、あんまりや・・・」

「はいはい、今日家で誕生日パーティー開いてやるから「ホンマか！？」やったー！！」はあ・・・」

てなわけで家で誕生日パーティーを開くことになった。あれ？なんか忘れてるような・・・

（夏海、はやての誕生日の前日って原作で何かあったっけ？）

（えくと・・・確か・・・）

何か重大なことがあったような・・・あ！！

（（闇の書の起動日だ！！））

どうやら俺の平穩は当分無いらしい・・・ちくせう

時はたち夕方・・・

「まあ実際は明日だけどはやて、誕生日おめでとう!!」

「「「「「誕生日おめでとう!!」「「「「「」

「みんな、ありがとうな!!」

現在俺の家ではやての誕生日パーティー中。参加者は主役であるはやて、主催者の俺、料理担当のアーチャー、そして夏海、アサシン、なのは、フェイト、アリシアの8人だ。本当はアリサとすずかも呼ばうと思つたが塾があるからと欠席、シスコンの襲撃も懸念されたが縮地を遂にマスターした士郎さんにより修行という名の虐待を受けているという（なのはの話によれば）。いい気味だ

「アーチャー、料理はできているな？」

「ああ、過去最高の料理を披露しよう。」

「そうか、楽しみだな。」

そついうとアーチャーは台所に置いてある料理を持ってきた。その料理は高級料亭をも遥かに超える出来栄であつた

「さあ、今日のはやての誕生日パーティーだからな、遠慮することなく食べるといい。」

アーチャーのその言葉にはやてはコクンと頷き、一口食べた。すると一瞬驚いた後とても幸せそうな笑顔を浮かべた

「美味ー!!うちの料理より美味しいやんけ!!」

「そうか、それはうれしいな。」

「それじゃ、俺たちも食べ始めるか。」

「「「「「はい（うむ）!!」「「「「「」

30分後・・・

「美味しかった～なの!!」

「さて、皆食べ終わったことだしはやてにプレゼント渡そうか。」

「ほんま!? なになに!？」

「まあまてまて、確かここに・・・あつたあつたこれだ。」

せかすはやてを抑え、俺は指輪を渡した

「指輪？」

「ああ、これは俺が作ったものでな。魔力媒体としても機能するぞ。」

「杖があるやん。」

「杖より携帯しやすいだろ。それに魔力伝達率もかなり弄くつてあるから杖より効率よく魔力を使えるぞ。」

「へえ～、土君ありがとうな。」

「それはどうも。」

「いいな～、私も欲しいな～。」

「私も欲しい。」

「私もー!!」

「なのはとフェイトはレイジングハートとバルディッシュがあるだろうが。アリシアは・・・また今度な。」

「アリシアちゃんだけずるいの!!」

「アリシアはデバイスも持っていないだろ。それにレイジングハートとバルディッシュを魔力媒体に出来るようにしたんだから我慢だ我慢。」

「うう～、わかったの・・・」

「わかればよろしい。んじゃ、遊ぶか。」

「遊び？何するんや？」

「これ。」

そいつって俺が取り出したのは『Fate/unlimited codes』というPS2のゲーム

「フエイト・・・アンリミテッドコード？」

「はやては英語が読めるのか、凄いな。」

「前々から英語の本はよんどったし読み書きぐらいならバッチリやで！！」

「へえ、またそれは・・・」

「士君、やらないの？」

「お、そうだな。アーチャー、セッティング頼む。」

「了解した。（士、このゲームの表紙に凜が載っているは何故だ？）」

「

（ああ、そういえば言っ てなかったな。それはお前がこの世界に来たときに情報流出があったようでな、このゲームの他計3作のFateと名のつくゲームが発売されている。しかもそのうちの一つは第五次聖杯戦争を完全に再現している。ご丁寧に十年前の大災害までな。）

（これはとんでもない情報流出だな。凜が知ったら何をしでかすか・・・）

（まあな、それとゲームの他に漫画のほうにも存在する。今の所確認できているのは第五次聖杯戦争の話と十年前、第四次聖杯戦争の話、そしてある平行世界の話の3つだ。アーチャー、先に一言言っておくが平行世界の話は見ないほうがいい、見たら・・・恐らく驚愕と大爆笑で軽く死ねる。）

（そ、そうか・・・）

念話でアーチャーと話していると、いつの間にか準備が出来ていた。

アーチャー、お前凄いや、マジで

「んじゃ、やるか。」

ゲームを起動させる。モードは対戦モード、キャラは事前に全開にしてある

「まずは手本ということで・・・アーチャー、やるぞ。」

「ほう、私に勝てるんでも？」

「ふ、言ってる。」

俺は1P、アーチャーは2Pを取り画面の前に座った

「この私に衛宮士郎で挑むとは・・・負けを認めたか？」

「何を言う、お前こそ自分を選んでんじゃねーよ。自意識過剰か？」

若干口喧嘩もしながら試合が始まった。先手はアーチャー、その手に持つ干将・猊耶で斬りかかってきた。が、俺も伊達にやり込んでいない。すぐさまかわし殴る

「どうした？その程度か？」

「この程度なわけがなろう。フルンディング 赤原獬犬！！」

「あ、てめえ卑怯だぞ！！かわせねえの使うな！！」

「何を言う、自らの力を最大限に使って何が悪い。」

もう口喧嘩を通り越して一触即発状態だ。アーチャーの攻撃を受けて残り体力が半分を切った俺は、一か八かの賭けに出た

「おらあ！！」

「既にこのような攻撃しか出せぬか。」

アーチャーは素晴らしい攻撃をガードしてくる。だが、その選択はミスだ

「かかった!!」

「何!？」

攻撃をガードされた瞬間、鶴翼三連が発動。アーチャーを切り裂いた

「ここからは俺のターンだ!!」

そして怒涛の攻撃が始まった。次々とコンボを決めていく。アーチャーも何とか脱しようとするがそんなことはさせない

「勝利すべき選定の剣!!」
カリバーン

「ここでカリバーンだと!？」

怒涛の攻撃によりアーチャーの体力は4分の1を切った。俺は止めを刺すべく超必殺技を発動させる

ナインライブズ・ブレイドワークス
「射殺す百頭!!」
「グオツ!!」

同時に放たれる9つの斬撃にアーチャーは倒れる

「・・・俺の勝ちだ。」

「ああ、そして私の負けだ。」

こうして俺とアーチャーの試合が終わった。それと一応言っておくがこれはゲームだ。模擬戦をしてるわけではない

「というわけで次ははやてとなのはな。」

「うちからなん？」

「そういうこと。操作方法はわかるべ？」

「ちよつとわからないの・・・」

「そうか、なら実践で鍛えろ。」

「にゃ！？土君ひどいの！！」

「大丈夫、俺もこれで覚えた。」

「なのはちゃん、諦めが肝心や。」

「皆ひどいのー！！！！」

結局なのはとはやてはちゃんと試合をやった。勝敗ははやての勝ち、なのはは少し悔しそうであつた

3時間後・・・

「ふう、もうこんな時間か・・・なのはとはやては帰らなくていいのか？」

「今日はここに泊まるの！！」

「うちもや！！」

・
そういつて後ろからかばんを取り出す。こいつら本気だったのか・

「泊まるのは別にいいが寝る場所はそんないぞ？」

「いいよ、土君と一緒に寝るから！！」

「あ、なのはちゃんずるいで！！うちも一緒に寝るわ！！」

「待て待て！！なんで一緒に寝ることになつてる！？」

「アーチャーさんが良いっていったの!!」

「アーチャー!! 貴様!!」

「まあいいではないか、こんな経験も今のうちにしか出来んぞ?」

「こいつらだったら10年ぐらいたっても入ってきそうだから怖いんだよ!!」

「土よ、男ならその程度でうるたえるな。」

「マジかい・・・」

サーヴァント2人になんか色々言われた上に逃げられなくなった・
・ちくせう

「もういいや・・・今日はもう遅いから寝るぞ。」

今の時間は夜11時40分、実を言うと後20分で闇の書が発動したりする。まあはやては闇の書を持ってきてはいないがあの本のことで、転移でもしてきそうだな

「このサイズだと4人はきついな・・・夏海、これでかくできないか?」

「出来るよ。どれくらい?」

「万が一のことも考えて6人が寝ても余裕な程度で。」

万が一とはフェイトとアリシアまでがベッドに入り込んでくる事態である。というかほぼ確実に入ってくるな、あいつらの目が一瞬光ったもん

「終わったよ。」

「お、良い感じだな。それじゃ俺は寝る・・・」

俺はそのままベッドに倒れこむ。そしてすぐにこの家全体に結界を

張る。もし闇の書が転移してきてもいいように転移に反応するようにする

「それじゃあ私も寝るゝ・・・」

俺の横に夏海が倒れこむ。まあこれは何時ものことなんだが・・・

「ああー!!土君寝とるー!!」

「あー!!夏海ちゃんずるいの!!」

なのはとはやてがそういつてベッドに入り込んでくる。まあそれはいいのだがあれだけ大きな声を出せば・・・

「ああー!!皆ずるい!!」

「私も一緒に寝るー!!」

やっぱり来たよ・・・既にベッドの上はカオス、俺の右腕になのは、左腕にフェイト、右足にはやて、左足にアリシア、そして俺の上に夏海が抱きついていてる。ああ、動けない・・・

「おい、そのサーヴァント二人見てないで何とかしてくれ!!」

「さて、私も寝るとするか。」

「拙者もそうするとするか。」

「orz・・・」

マジか・・・畜生、アーチャーめ・・・今度凜呼んでやる

「はあ・・・なんで俺の周りにはこんななばっかりなんだろ・・・」

他の5人が既に寝付いている中、俺は一人そう愚痴る。すると・・・

「!!」

この部屋に転移反応が出た。俺は身体にくっついてる5人を起こし、転移してきた物を見る。そこにあったのは・・・

「闇の書・・・やはり覚醒のために転移してきたか。」

「あれ？これうちの本やん。なんでこないところに？」

はやてが闇の書に触れようとしたその時

「闇の書の起動を確認しました。」

闇の書から光が放たれる。余りの眩しさにそこにいた全員が目を瞑る。そして光が収まり目の前を見るとそこには4人の人がいた

「我ら、闇の書の収集を行い、主を守る守護騎士。」

「夜天の主に集いし雲。」

「ヴォルケンリッター。何なりと命令を。」

「え？え？何がどうなってるんや？」

「はやて、落ち着け。」

事態がつかめないはやてを落ち着かせる。すると4人のうちの一人がデバイスと思われる剣を向けてきた

「貴様、何者だ？」

「それはこっちの台詞だ。大体いきなりこんな物騒なものを向けるなよ、危ないだろ。」

「!?!」

驚く相手。何故驚いてるかというと、唯単に俺が相手の剣を無刀取りで奪ったからだ。相手と話している最中に、それも全くわからないような速度で

「まず一つ言っておくがここは俺の家だ。こんな物騒なものは即刻しまつて貰おうか。」

そう促すも誰一人として武装解除しようとしない。なので俺は強硬手段に出た

「しかたないな、破戒すべき全ての符^{ループレイカー}。」

王の財宝から歪な短剣を取り出し真名開放し、それぞれのデバイスに軽く一撃入れる。すると一瞬にして待機状態まで戻った

「貴様、何をした。」

「唯、デバイスを待機状態まで戻しただけだ。まあ2時間ほどは起動できないだろうが。」

そう告げると再びセットアップしようと試みるも起動しないことを確認したようだ

「さて、いい加減自己紹介でもしてもらおうか。流石にいつまでも????で済ますのはかわいそうで仕方ない。」

「土君、何をいつてるの?」

「気にするな、軽く電波が来たただけだ。」

「?」

意味がわかっていないなのは。すると4人のうちの一人が自己紹介を始めた

「私は烈火の将、シグナム。」

「あたしは鉄槌の騎士、ヴィータ。」

「私は湖の騎士、シャマルです。」

「・・・盾の守護獣、ザフィーラ。」

「自己紹介どうも、俺は流士だ。んじゃ、はやてもな。」

「八神はやてです。」

「後はなのは達だけが・・・今はいいか。さて、お前達がどういった存在なのか教えてもらおうか。」

実際は知っているが一応聞いておく。最近原作知識が忘れがちなのでこういったところで思い出さないと

「我々は・・・」

その後シグナムが全てを話した。闇の書のこと、守護騎士プログラムについて、蒐集について、そして蒐集が完了すると何が起きるか。だがやはり真実ではなかった。まあまだ真実を知らないので仕方ないのだが・・・

「ふむ、やはり夜天の書については知らないか。」

「夜天の書？なんだそれは。」

「夜天の書・・・これはその闇の書の真の名だ。」

「何!？」

「今から言うことは闇の書・・・いや、夜天の書の真実だ。」

俺は全てを話した。闇の書が元々は魔法の記録を目的とした魔道書、夜天の書だったこと。歴代の所有者のうちの誰かが改悪し、防衛プログラムと自己再生プログラムが暴走し現在の闇の書となったことを

「・・・それは本当のことなのか？」

「ああ、全て真実だ。」

ヴォルケンリッターの面々も既に蒼白としている。自分達の全く知らないことをこうも淡々と話されては仕方が無いが

「それともうひとつ。はやて、このままではお前は死ぬぞ。」

「え？・・・どういうこと？」

「闇の書は起動後蒐集が行われない場合所有者のリンカーコアから魔力を蒐集する特性がある。現にお前の足が動かないのは闇の書が原因だ。」

「で、でもなしてそれがうちの死と繋がるんや？」

「まだ未発達のリンカーコアに強い負担がかかると表に出てくるんだ。それがお前の場合には足の麻痺だった。そしてこのまま蒐集せずにいると麻痺は進行し今年の年末にはそれが心臓に到達して死ぬ。」

そこまで言うとしグナムが飛び掛ってきた

「それを回避する方法は無いのか！？」

「落ち着け、俺は蒐集しなければこうなるといったんだ。」

「なら今すぐにでも蒐集を！！」

「待て、蒐集にも重大な問題がある。シグナム、全ページが埋まったら何が起こるか覚えているか？」

「それは・・・」

「覚えていないだろ。それは全ページが埋まった直後に闇の書が暴走するからだ。」

「暴走だと！？」

「ああ、闇の書は全ページが埋まった直後に暴走、その世界を破壊して転生する。その際所有者を取り込んでしまうんだ。そしてその結果所有者は死ぬことになる。」

「てことはうち結局死んでしまっん!？」

「いや、まだ望みはある。暴走を開始した直後は少しばかり時間がある。その間に暴走を食い止める。」

「どうやってだ？」

「外側から強い魔力ダメージを与えて弱らせた後管理者権限で闇の書の防衛プログラムを切り離す。こうすればはては一先ず助かる。」

「そうすればうち死ななくていいんやな!？」が、その後が問題だ。
「まだ何かあるん!？」

「今度は切り離れた防衛プログラムが暴走を始める。これを放置すると世界は崩壊、振り出しに戻ってしまう。」

「ではどうすれば!？」

「防衛プログラムを消滅させる。」

「そない簡単にできるん？」

「正直言ってキツイ。だが皆で協力してやれば出来ないことは無い。」

「人数はどれくらいいるのだ？」

「最低でも10人、それにアルカンシエル級の威力の砲撃がいるからそれを行える戦艦とその乗組員、それと一応管理局員も。」

「管理局員!？何故そのような騒動の種を!？」

「証拠だ。」

「証拠?」

「ああ、闇の書は完全に消滅したという証拠を残す。これにより今後はやてが管理局にロストログア不法所持で逮捕されることもなくなる。」

「そうか、それならば管理局員がいたほうが円滑に進むな。」

「だろ?一応呼ぶ管理局員は既に決めてある。」

「信用に足る者たちなのか？」

「ああ、現時点で管理局一信用できる。」

「そうか、ならお前に全て任せよう。」

「一応聞いておくが疑おうとかいう考えはないのか？自分で言うのもなんだがかなり怪しいぞ？俺。」

「なに、お前と主はやての仲が良いこともあるがお前の目は澄んでいる。邪念のようなものは感じん。」

「そうか、それはうれしいことだ。さて、話はこれくらいにしよう。明日がつらくなる。」

「そうだな。ところでここはお前の家だといったが主はやては帰らぬのか？」

「今日は泊まってくと豪語してたぞ。」

「そうか・・・ならば私達も本日は泊まることにしよう。」

「了解、寝床は・・・俺の部屋にでかいベッドがあるからそこではやてと寝てくれ。俺はここで寝る。」

「ならありがたく使わせてもらう。」

そういうとシグナムははやてを抱きかかえて俺の部屋に入っていた。因みに俺の部屋といってもテレビとベッドが置いてあるくらいのとても質素なものなので誰が使おうが全く問題ない

「さて、俺の寝るか・・・明日からが大変だな。」

こうして波乱の一日が終わった。因みに俺とシグナム、はやてが話している最中、ヴィータ達はなのは達と話しこんでいたらしい。時折なのはとヴィータの声が聞こえたのはそれだろう

16話 闇の書起動、そして語られる真実（後書き）

作者「A / S 編突入！！」

士「いつに無くテンション高いなあい」

夏海「ペドの血が騒ぐんじゃない？」

作者「な！？俺はペドじゃないぞ！！」

アーチャー「ならなんだというんだ」

作者「俺はロリコンだ！！」

夏海「うわゝ、言っちゃったよ・・・」

士「作者、ちよつとそこにいろ」

作者「士さん？なんで真・大神宣言グングニルもってるの？それと何で予先をこっちに向けてるの？」

士「そりゃもちろん・・・お前に刺すためだよ！！」

作者「またかああああ！！逃げる！！」

士「無駄だ！！真・大神宣言グングニル！！」

作者「なんでええええええええ・・・」

士「さて、邪魔な奴もいなくなったことだし次行くか。雨季様、デイスティニープラン様、感想どうもありがとうございます」

夏海「雨季様から禁忌『レーヴァテイン』がきてるよ」

士「通常の3倍の攻撃力と弾幕か・・・ロストログアを超越してるな」

アーチャー「デイスティニープラン様から士宛にデイスティニーのバックパック、夏海宛にレジェンドの背部プラットフォーム、作者宛に高エネルギービームライフル、私宛にフラッシュエッジ2とデифアiant改ビームジャベリンがきてるぞ」

士「これはまた大層な・・・金とか大丈夫なのか？」

夏海「きっと大丈夫なんですよ。あ、もう時間だよ」

士「わかった。それでは次回 第17話 蒐集は余裕を持って行いましょう」

「『ドライブ・イグニッション!!』」

17話 蒐集は計画的に余裕を持って行いましょう（前書き）

更新が遅れました、すみません。それと恐らく今回の話は過去最高の長さで過去最低の出来となっておりますので、その所はご了承ください。

17話 蒐集は計画的に余裕を持って行いましょう

士 side

闇の書覚醒から早一週間、いまだに蒐集は行われてなかった。理由は1つ、管理局側の準備が出来ていないのだ。リンディ達に連絡を入れたとき一悶着あったのが原因かと思われる。それと今回アースは出向しないようだ。どうも以前俺が攻撃したのが原因で掠った所の武装が全壊、修理するのに約1年もかかるというのだ。なので家に次元転移でこさせることにした。因みにアースが動けなくなつたので原作とは違いアルカンシエルが使えない。なので俺の能力でミネルバを召喚、陽電子破城砲『タンホイザー』を代用として使用することにした。当初はジェネシスを使う案もあったが使用後廃棄されるミラーの処分に難航しそうなので廃案になった。それとこれは関係ないが最近アサシンが師範代として働いている道場にシグナムが同じく師範代として入ったようだ。やはりニート侍は避けたかったのだろう。ヴィータは原作どおり爺さん婆さんに混じってゲートボールをしている。シヤマルは家で家事をしている。ザフィークラは犬として何時も家でテレビを見たりしている。それと原作と大きく違いシヤマルの料理が美味かった。正直言って驚愕した。元のシヤマルのポイズンクッキングを知っているこちらとしては驚愕以外の何者でもない。はやては家に通い詰めて魔法の練習。最近おわるせかいを習得した。何たる速さであろうか、士郎さんといいはやてといい海鳴は人外魔境なのかもしれない。アーチャーは何時もどおり翠屋でウェイター、アサシンは道場だ。最近アサシンが疲れ気味で帰ってくる。原因は確実にシグナム、というかアサシンに挑む奴なんてシグナムしか考えられない、あの戦闘狂め。フェイトとアリスは私立聖祥大附属小学校の3年生、しかもなのはと同じクラスに編入、楽しい小学生生活を送っている。フェイトは毎日毎日告

白されて困るといつていた。アリシアは特に何も言ってこないが恐らく同じようなものだろう。まああの二人はかなり可愛いから仕方ないといえば仕方ないが。因みに二人に付き合いたい人ができても俺は特に干渉しない。俺は二人の幸せは二人が掴むものと考えてるのでシスコン紛いの行動など決して取らない。まあもしフェイトやアリシアを傷つけるようなことがあれば話は別だが……。夏海はマキナの監視をしている。そのため基本部屋に籠りつきりである。まあご飯の時はちゃんと出てくるし皆で出かけるとなればちゃんと一緒にだから心配は無いが。なのははフェイトが同じクラスになって嬉しいようで少し浮き足模様だ。その為かアリサやすずかに話しかけられても気づかないことがあるようだ。（フェイト談）これが訓練にまで出て来る様であればやばいのだが今の所その様子は無い。なので少しだけ安心である

「お兄ちゃんへの何？」

「あれは読者の皆様への説明的なものだ。」

「説明？わかんない。」

「わからなくても大丈夫。作者も書いてる途中からわけわからなくなってるから。」

そんなことはないぞ！！BY作者

「出て来るな作者。」

「そうだよ、後書きであれだけこられてまだ懲りないの？」

調子こいてすいませんでした。BY作者

「二人ともなに言ってるの？」

「気にするな。哀れな作者^{バカ}に対する罵倒だ。」

「？」

フェイトはわかっていない。まあわからないほうがいいから教えないがな。そんなことを考えてると急に通信が入った

「リンディか。」

「ええ、こちらの準備も出来たわ。」

「そうか、なら転移させるぞ。靴を脱いで持っておけ。」

「どうして？」

「家の中に転移させるんだ。土足で歩かれるのは言語道断だ。」

「わかったわ。じゃあお願いね。」

「承知した。」

一言返事をしてリンディ達を転移させる。今回転移してきたのはリンディとクロノ、そしてエイミイの3人だ

「さて、まずは現夜天の書の主と守護騎士たちを呼ぶか。」

闇の書ではないのかと思う読者もいると思うがこの呼び名は正式なものではないのでこの小説では本来の夜天の書と呼ばせてもらう

「そうね、一応顔合わせも兼ねて挨拶はしたいわね。」

「そのほうがいいだろう。それとクロノ、いきなり暴れたりするなよ？」

「僕はそんなことはしない!!」

「ならあの時いきなり攻撃したのは何故だ？」

「うつ・・・そ、それは・・・」

「反論できなかるう。真の事なのだから。」

「もうそろそろいいかしら、此方も早く挨拶したいのよ。」

「すまない、いま呼ぶ。（シグナム、今何やってる？）」

（土か、今は家で休憩してるのだが。）

（そうか。いま回りに全員いるか？）

（ああ、いるがどうしたのだ？）

（先日言っていた管理局側の協力者が到着した。）

（そうか、幾分遅かったな。）

（どうやら使うはずだった次元航行艦が修理で使えなかったようだ。）

（原因は？）

（俺だそうだ。）

（は？）

（だから俺だ。以前キレて攻撃した際に損傷したらしい。）

（規格外だな。）

（どうとでもいえ。それより顔合わせも兼ねて今後の方針を決めた
いから来てくれ。）

（わかった。）

「今から来るそうだ。」

「わかったわ。それと艦を見たいんだけどいいかしら？」

「まだ完成はおるか製作すらしていない。あきらめろ。」

「まだ！？そんなので大丈夫なの！？」

「大丈夫だ。それとデータならあるぞ？」

「それでいいわ。見せて頂戴。」

「わかった。これがミネルバの全データだ。幾らか此方で改修を施
す点があるからそれ以前の物はこっちに入ってる。」

そういつてリンディにミネルバのデータを見せた。それを見たリン
ディは少したった後疲れた顔でこちらを見てきた

「核融合炉3機にGNドライブって名前の動力炉5機、更に陽電子
破城砲『タンホイザー』にその他武装諸々・・・あなた戦争でも始
める気？」

「別に戦争なんてやらないさ。もしもの時のために過剰に強化した

ただだ。」

「まあいいわ。で、このGNDドライブってどういう機関？」

「GN粒子を無限に生成し続ける動力炉。言ってしまうえば無限にエネルギーを作り出せる機関といった所だ。」

「いまの管理局で製造可能？」

「不可能だ。この製造には木星と同等の重力が必要になる。」

「重力ぐらいなら「更に」・・・」

「これ1つの製造に最低でも50年はかかる。これが元々あった世界では200年も前から製造を開始していたほどだ。」

「な、ならデータだけでも・・・」

「無理だ。ロストログア扱いにして奪っていかうものなら管理局に宝具と核の雨を降らすぞ。」

後ろに王の財宝を展開する。それを見たリンディは以前と同じ顔をして引き下がった

「まあ擬似GNDドライブなら提供してもいいがな。」

「擬似GNDドライブ？」

「ああ、GNDドライブとは違い無限にGN粒子を生成できないが出力は同等、だが人体への影響はかなり酷いという欠陥品だ。」

「その欠陥を直すことは出来ないの？」

「その欠陥があるからこそその擬似GNDドライブだ。これを完全に無くしてしまったらそれはもうオリジナルのGNDドライブだ。」

「そう・・・なら遠慮するわ。」

「そうしてくれ。」

ピンポン

「お、ちょうど来たみたいだな。」

そういつて家の中にシグナムたちを招き入れる

「私は時空管理局所属次元航行艦『アースラ』艦長のリンディ・ハラウンです。」

「僕は時空管理局執務官のクロノ・ハラウンだ。」

「時空管理局所属次元航行艦『アースラ』通信士エイミィ・リミエツタです。」

「うちは夜天の主、八神 はやてや。」

「私は烈火の将、シグナム。」

「あたしは鉄槌の騎士、ヴィータ。」

「私は湖の騎士、シャマルです。」

「・・・盾の守護獣、ザフィーラ。」

それぞれが軽く挨拶する

「さて、挨拶も終わったことだし今後の方針を決めようか。」

「そうね。で、何を決めるの？」

「蒐集をどのように進めるかと最終完成予定日の設定、そしてミネルバについてだ。」

「ミネルバ？なんだそれは。」

「ミネルバについては後でだ。先に蒐集について決めよう。」

「蒐集については何処かの魔法生物のリンカーコアから取るということではないのか？」

「ああ、以前言ったとおり管理外世界の魔法生物を狙う。場所の目は既に立っているしな。」

「どこの世界で行うんですか？」

「第666管理外世界、モンスターワールド。現地には魔法生物のみが生息、島ごとに生息している生物も違う。草食獣は全ての島に生息しているが魔法生物としてのレベルはかなり低い。狙うなら肉食獣だ。一つ目の島にはラプトル程の大きさの肉食獣が5種ほど生

息している。それぞれの個体には身体の巨大なボスが存在する。二つ目の島には鳥竜種と呼ばれる中型の飛竜と甲殻種と呼ばれる蟹型の生物が生息している。鳥竜種は全個体が何かしらの液体、例えば空気に触れた瞬間発火するものや非常に毒性の高い液体などを吐き出してくる。甲殻種の方は非常に強い水流を放ってくる。三つ目の島には大型の飛竜種が生息している。この島に生息しているほとんどの個体がプレスや火炎弾を放ってくる。一発の威力は即死級だ。

それに尾などに毒を持っている個体も存在する。大体この島をメイオンに蒐集していくことになるな。四つ目の島だが、この島には古龍種と呼ばれる個体が生息している。古龍種は全ての個体が自分の身を守るために炎の鎧や風の鎧といったものを身に纏っている。これは近づくだけでダメージを負うような非常に危険なものだ。それに生息する環境が砂漠や雪山の奥地といった局地に生息しているため見つかりにくい。だがその代わりにリンカーコアは非常に質がいい。五つ目の島は生息している個体が2体しかない島だ。各個体には特殊な名称がついていて、火山地帯に生息しているものを覇龍、雪山地帯に生息しているものは崩龍と呼ばれている。この二つの個体は古龍に匹敵するほどの力を持っている。戦う場合は注意が必要だ。六つ目の島だが・・・この島には俺と夏海とアーチャーの3人のみで上陸する。」

「何故なの？」

「危険すぎるんだ。あの島にはこれまでの飛竜や古龍とは逸脱した者しかいない。あの島にいるのは怪獣どもだ。どのような怪獣はこのモニターを見てくれ。」

俺はそういつてスネークを使い40インチほどのモニターを出す

「これは？」

「これは六つ目の島に生息している怪獣たちの画像だ。まずはこいつ、最強の怪獣、星の怒りの体現者、ゴジラ。」

「確かに強そうだが・・・さっきのモンスターたちよりも倒しやすそうだぞ?」

「いや、こいつは『オルガナイザーG1』と呼ばれる特殊な細胞を持つていて生半可な攻撃は一切効かない。更に傷を負わせたとしても小一時間ほどで完治してしまうほどの再生力を持っている。」

「じゃあ一気に潰せばいいわけだな。」

「そうもいかない。こいつの体長はどれくらいだと思う?」

「精々10メートルくらいか?」

「大外れ。こいつの体長は約100メートルだ。」

「100メートル!?」

「ああ、さらにこいつには放射熱線という遠距離技もある。」

「放射熱線?」

「放射熱線というのは、体内の核炉心で起こした核分裂反応の際に出た莫大なエネルギーを喉もとの貯蔵袋に溜め、一気に口から指向性を持たせて発射するゴジラ最強の攻撃だ。その威力は一撃で街を壊滅させるほどで連射も効く。」

「核炉心!? 生物がそんなものを持つてるの!?!」

「こいつはそれほどまでに強力なんだ。しかもこいつは心臓だけになっても生きていられる。」

「それに予備動作は?」

「ある。発射直前に口内と背びれが青白く発光する。」

「わかったわ。他にはどんなのがいるの?」

「ほかに、他にはこんな奴らがいるな。」

俺は他にキングギドラ、ビオランテ、スペースゴジラ、デストロイア、オルガ、メガギラス、ガメラ、ギャオス、レギオン、イリス、ジードスなどの怪獣の説明をした。それを聞いたシグナムたちはそれぞれ疲れた顔をし、ため息混じりにこういった

「……………勝てない。こいつらには絶対勝てない。」「……………」

「だから最初に俺と夏海とアーチャーの3人で行くといったろう。」
「でもこれだけ珍しい生物がいるんだったら観測世界にした方が・
・」

「やめとけ。連中の怒りを買ってミッドチルダに攻撃されるぞ。」
「この世界から攻撃を？」

「ああ、こいつらの攻撃は軽く太陽系を離脱するぞ。それに最も飛距離のある攻撃ができるのはゴジラだ。ミッドチルダに攻撃するなどと造作も無くやってくれるぞ。」

「じゃ、じゃあどうすれば・・・」

「管理局が手を出さなければいいんだ。何があってもな。」

リンディにそういうと黙ってしまった

「さて、場所の説明は終わったことだし次だ。蒐集開始時期はどうする？」

「ああ、それは・・・」

その後、約3時間にわたって会議が行われた

「よし、それじゃ蒐集開始は一週間後。はやては心の準備をしておけ。」

「うん、わかったで。」

「なら今日は解散。リンディ達はこのまま海鳴にいるのか？」

「ええ、このことが終わるまではこの街にいる予定よ。ホテルにでも泊まって。」

「そうか、ならいいが。」

「君はどうするんだ？」

「なに、別荘でミネルバの作製でもするさ。」

「それじゃあ私達もいくわね。」

「ああ、そうしてくれ。」

リンディ達がいった後、俺は別荘に入った。ミネルバを早急に完成させなければ・・・まあ、能力を使えば速攻なんだろうけど

一週間後・・・

「さて、全員集まったか？」

遂に蒐集を開始する日が来た。え？間の期間？んなもんミネルバの作製に皆費やしたわ！！

「最終チェックをするぞ。俺と夏海とアーチャーが第六島に、ヴオルケンリッターは第五島、はやてとなのは、フェイト、アリシア、クロノは第三島に、アサシンが単独で第四島。リンディとエイミイはミネルバで待機。了解か？」

「ええ、大丈夫よ。」

「しつつかし、ほんとに造っちゃうとはね・・・」

「規格外にも程があるぞ。」

「ねえ、あなたこれ終わったら管理局にこない？」

「却下。俺はなのは達の味方だ。お前達は信用も信頼もしてるが管理局自体は全く信用してない。」

「そう、残念ねえ・・・」

「まあいい、まずは蒐集だ。各員転送ポートに移動、デバイスを起動させた状態で待機だ。それとはやて、アリシア、ちよつとこつち

に来てくれ。」

「なに？」

「二人とも、これを履いてくれ。」

「これはなんや？」

「これは俺の魔力を消費して空を飛んでいられる特製の靴だ。お前達はデバイスを持ってないから空を飛ぶのはちょっときついだろ？」

「ほんまか！！ありがとうな士君！！」

「ありがとうお兄ちゃん！！」

「そりやどうも。」

「あー！！ずるいの！！」

「お前はデバイスがあるだろうが。はやてとアリシアはデバイスが無いんだぞ？」

「うつ！！で、でも・・・」

「わかった。今回の蒐集でなのはが50ページ分集められたら何かやろう。」

「本当！？がんばるの！！」

「お兄ちゃん、50ページ分ってどれくらい？」

「大体飛竜種3匹分だからクリアはかなりきついな。」

「士君！！早く行くの！！」

「はいはいわかったから止まれ。それじゃ行くぞ！！」

こうして、俺達はモンスターワールドに降り立った

士side end

三人称side

士は夏海、アーチャーと共に第六島に降り立つ。目の前に広がってたのは開けた丘、奥の方にはジャングル、火山、海と様々な環境があった。そして

二人が呪文を唱えた直後、空から巨大な剣がいくつも振り下ろされ、アンギラスを切り刻んだ。アンギラスは全身に裂傷を負うもかろうじて生きていた

「GUGYAAAAAaaaaaaa!!!」

断末魔を叫ぶが如く叫ぶアンギラス。だがこの咆哮が3人に最悪の状況を生み出した

「なあ、なんか地鳴りが聞こえないか？」

「確かに・・・なんだろう？」

二人はいまだにわからず首を傾けてる。と、アーチャーが叫んだ

「お前ら!!あっちを見る!!」

アーチャーの叫びに答え、指されている方を見る。そこにいたのは

「・・・まじ？」

「わゝお・・・」

「GAGYAAAAA!!!」

モンスターワールド最強の怪獣、ゴジラであつた・・・。一方、なのは達は・・・

「フェイトちゃん!!いくよ!!」

「うん!!」

「デイバイイイイイン・・・」

「サンダアアアア・・・」

「はやてちゃん!!」

「大丈夫!？」

「なのはちゃん!!フェイトちゃん!!いいところ来た、ちょおあい
つ倒すの手伝ってくれへんか!？」

「わかったよ!!デイベインシューター、シュウウウウト!!」
「フォトンランサー、ファイア!!」

なのはとフェイトから計30もの魔力弾が飛んでいく。だが、グラ
ビモス亜種はその甲殻を持って防御、更に全身から火炎ガスを出し
て反撃してきた

「っ!!レンジングハート!!」

《フラッシュムーヴ》

なのははプロテクションでは防げないことを判断するやいなやフラ
ッシュムーヴを使って一気に距離を離れた

「プラズマ・・・スマッシュアアアアア!!」

「デイベイイイイイン・・・バスタアアアアア!!」

なのはとフェイトによる同時砲撃。これを受けたグラビモス亜種は
これまでとは違いよろめき、後ろに下がった。更によるめいた瞬間
腹部に砲撃が直撃しその硬い甲殻がその部分だけ砕けた

「甲殻が砕けた!!今ならいけるで!!」

「ハーケンセイバー!!」

「断罪の剣!!」
エクスキューションズソード

「GUGYAAAAAAA!!?」

フェイトとはやてが腹部に肉薄し、魔力刃で切り裂いていく。グラビモス亜種は大きくよろめき悲痛な叫びを上げている

「アリシアちゃん！！とどめいくよ！！」

「うん！！」

「プラクテ・ビギ・ナル！！契約に従い《ト・シユンボライオン》

我に従え《デアコネート・モイ》ホ・テュラネ・フロコス 炎の霸王来れ《エピゲネ

ーテート》フロクス・カタルセオサウギネー・ロンファイア 浄化の炎燃え盛る大剣ほとばしれよ《レウサントーン

《ソドムを《ピュール・カイ》ハ・エヘフレゴン・ソドマ 焼きし《テイオン》火と硫黄罪あり

し者を《ハマルトートウス》ウーラニア・フロゴシス 死の塵に《エイス・クーン・タナトウ

《燃える天空！！！！》

「プラクテ・ビギ・ナル！！契約により我に従え《ト・シユンボラ

イオン・デアコネート》モイ・バシレク・ウーラニオーノーン 高殿の王来れ巨神を滅ぼす《エピゲネ

ーテート・アイタルース》燃ゆる立つ雷霆《ケラウネ・ホス・テ

イターナス・フティレイン》百重千重と《ヘカトンタキス・カイ》フサト

重なりて《キーリアキス》走れよ《アストラ》キーリブル・アス 稲妻！！千の雷！

！！」

「GUOOOOOOO・・・」

なのはとアリシアの上級魔法を腹部に喰らったグラビモス亜種は断末魔を上げて倒れた

「やった！！倒せた！！」

「うん！！これで2匹目！！」

「あれ？でもお兄ちゃん一人でって言ってなかったっけ？」

「え？」

「なのはちゃん聞いとらんかったんかい・・・」

「うそ～～～～！？」

なのは達は強敵を倒せたことに喜んでいた。因みに一緒に降り立ったクロノは・・・

「ブレイズキャノン!!」

GAAGAAGA

「ふう……これで4匹め……」

一人黙々と飛竜を倒していた。所代わりシグナムたちは……

「くっ、レヴァンティン!!」

《カートリッジロード》

「紫電、一閃！」

「GOGYAAAAA!!!」

「ラケーテンハンマー!!」

崩龍、ウカムルバスと死闘を繰り広げていた。ウカムルバスは他の飛竜種の約5倍の体長を持ち、その動き全てが攻撃と化すほどの重量を持っている。そして防御力も優れており、いくらシグナムとはいえ一撃必殺の一撃を加えることは叶わず、地道にダメージを蓄積させていくしかない状況だった

「はあああ！！」

「クラールヴィント、お願い！！」

とは言うものの流石は守護騎士、ウカムルバスに確実にダメージを溜めていく。シャマルがアルケミックチェーンでウカムルバスを縛り上げ、ザフィーラが殴りかかる。これまでのダメージの蓄積もあってか中々アルケミックチェーンから抜け出せないため、ザフィーラの拳が直に顔面を捉える。ウカムルバスも流石に堪えたようで、後ろによろめいてしまった

「ふう、これで2匹目……拙者も頑張らねばな。」

アサシンが炎王龍、炎妃龍の2匹を討伐した所であった。そして・
・現在大ピンチに陥っている土一行は・

「死ぬ、死ぬうううううううう！！！」

「やばい、やばい
いいいいいいいい
!!!!」

「抑止の守護者は何をしているうううううううう！！！」

「GO GO A A A A A A A A A A A A ! ! !」

「GYAOOOOOOOOOOO!!!」

GURAAAAAA!!!

「PIZZYAAAAAAAAAAAA!!!」

「GYU!!!!!!!!!!!!!!」

「GAGYAAAAAA! !!」

「G Y A G A A A A A A A A A A A ! ! !」

平成怪獣による総攻撃を受けていた。アンギラスを倒した際の叫びがこの怪獣達を呼び寄せたらしく、皆仲間をやられた事に激怒していた

「まずい、これは勝てない!!」

「どうするの！？ アンギラスのリンカー コア取らないの！？」

「無理！！あの中に突撃するのは無理！！」

「士、ミネルバに転移するぞ……さっさとこの星から脱出する……！」

「名案だ！！アンギラスのリンカーコアは諦める！！」

「お兄ちゃん、早く!!」

「行くぞ！！転移！！」

士達は怪獣達の攻撃を掻い潜り、ミネルバに緊急転移した

「ふう、ここまででは追ってこれまい・・・」

「士さん、どうしたの？」

「しくった・・・怪獣達の怒りを買ってきた。」

「え!？」

「この星はもうだめだ、危険すぎる。なのは達が倒した奴らのリンカーコアを蒐集し次第脱出する。」

「わ、わかったわ。エイミー!ー皆に連絡して!ー!」

リンディの呼びかけにより全員がミネルバに転移してくる

「シャマル、リンカーコアの蒐集はここからでもできるか？」

「ちよつと難しいけどやってみます。」

シャマルが皆が倒したモンスターからリンカーコアを蒐集していく。
そして全てのリンカーコアを蒐集し終えた

「何ページ溜まった？」

「信じられませんが・・・300ページほど溜まりました。」

その回答に俺と夏海、アーチャー、アサシン以外の全員が驚く

「さて、蒐集も終わったからさっさとこの星から出るぞ!ー!」

「士君、そんなに焦ってどうしたの？」

「ちよつとしくじっ「お、お兄ちゃん・・・」どうした!？」

「そ、外みて・・・」

士達は夏海に言われて外を見る。すると・・・

「「「GYURAAAAAAAAAAAAAAAA!ー!」」」

「HIGYAAAAA!!!」

[「KYUUUUUUUUUU!!!」

「GYOOOOOO!!!」

キングギドラを始めとする空中戦が可能な怪獣がミネルバに向かって飛んできていた

「やばい！！機関全速！！トランザム起動！！」

「わかったよ！！全速前進！！トランザム！！」

間一髪でトランザムを發動させて一気に宇宙へ飛び去った。その後、ミネルバに向かって数々の光線が発射されるもトランザムの速度には敵わず、空しく空を切ることになった

「……土、お前をやった？」

その後、士達はシグナム達に第六島で何があったのかを根掘り葉掘り聞き出され、説教タイムに突入となった。そして約6時間後、士達は解放された

「
・
・
・
疲れた
・
・
・
」

土はそのまま倒れ、その場で爆睡し始めた。因みにその時夏海が隣で抱きつきながら寝ていたとのことである

17話 蒐集は計画的に余裕を持って行いましょう（後書き）

士「さーて、毎回毎回お馴染の作者処刑タイムです」

作者「なにそれ！？ひどい！！」

夏海「今回は陽電子砲による処刑です」

アーチャー「執行人は今回ほとんど出番の無かったアサシンだ」

アサシン「これをおせばいいのか？」

作者「アサシン！！お願いだからそれ押さないでえ！！」

士「アサシン、押してくれ」

アサシン「承知」

作者「ぎゃあああああああああ！！熱い！！熱い！！いいいいいい
いっつつつつ！！！！」

士「さて、作者の処刑も終わったことだし次行くか。ディステイニ
ープラン様、感想どうもありがとうございます」

夏海「ディステイニープラン様から作者宛にゼク・アインとゼク・
ツヴァイ、お兄ちゃん宛にガンダムMk-？、私宛にシュベルトク
ロイツ、アサシン宛にマゴロク・E・ソード、アーチャー宛にプロ
グレスップナイフ×99999本がきてるよ」

士「どんだけだよ、てかシュベルトクロイツは原作破壊すぎじゃねえか？」

アーチャー「気にしておくだけ損だぞ」

士「そうかいそうかい、んじゃ次回の処刑タイムは今回来たガンダムMk-?を使うとするか」

夏海「そんな使い方しないでおこつよ・・・」

士「まあ気にするな。んじゃ次回予告 次回 第18話 蒐集終了も間近、だけどあいつらにだけは地獄を見せる!!」

「」「」「ドライブ・イグニッション!!」「」「」

18話 蒐集終了間近、だがあいつらにだけは地獄を見せる！！

士 side

「シャマル、蒐集頼んだぞ。」

「はい。蒐集開始！！」

モンスターワールドでの死闘から早一ヶ月、夜天の書は残り150ページにさしかかろうとしていた。何故ここまで蒐集に遅れが出ているかというと、モンスターワールドでの蒐集が行えなくなったからである。あの日の次の日、ミネルバでもう一度様子を伺いに行つた所、キングギドラ、ラドン、モスラ、バトラ、スペースゴジラ、デストロイアの6体が星を守護するかのように展開しており、近くことすら叶わない状態だったので他の星の魔法生物を狙うしかなくなってしまった。そしてリンカーコアの質はモンスターワールドに生息していた魔法生物とは天と地の差とも言えるほど低く、一体で3ページ分集まればいいほうというほどであった。それともうひとつの理由として俺とアーチャーとアサシンが二週間の間行方不明になっていたというのがある。これは夏海が面白い物を作ったから実験台になってくれと言うことで俺達が実験をしたのが原因である。そしてそのまま俺達は二週間の間・・・異世界に飛ばされていたのである。向こうの世界で役目を終えて帰って来た時には既に此方では二週間が経過、なのは達は蒐集を放り出してまで俺達の搜索を行ったということであった。嬉しい反面迷惑をかけたという罪悪感で一杯である。因みに夏海は俺達三人からのお仕置きとなのは達によるO H A N A S H Iタイムを半日にわたって行使され、身も心もぼろぼろになった。

「あと約150ページ・・・7割がた埋まったな。」

「そうですね、この調子で行けばクリスマスには終わりますね。」

「ああ、そしてはやてが耐えられるのは良くて来年の3月・・・最悪今年一杯だからな。」

「士、そっちは終わったのか？」

「シグナムか、こつちも終わった所だ。今から海鳴に帰るよ。」

「そうか、わかった。主はやても帰りを待っているぞ。」

「それは嬉しいな。」

そんな他愛の無い話をしている最中、この周辺に結界が張られる

「ッ！！シグナム、帰りは遅くなりそうだ。」

「どうかしたのか？」

「何、たいしたことではないさ。それともうそろそろ通信を切るぞ。」

「

「あ、ああ、わかった。無事に帰ってこいよ。」

「了解だ。」

俺はシグナムとの通信を切る

「シャル、先に結界を出て家に帰っておいてくれ。」

「貴方はどうするの？」

「厄介ごとを片付けてから帰る。」

「わかったわ。でも無理しないでね？」

「わかってるさ。」

俺はシャルを先に帰し、結界を張ったと思われる犯人に向かって
叫ぶ

「おい！！出てこいよ！！」

そう叫んだ直後、二人の仮面の男が出てきた

「貴様ら・・・何のようだ？」

「闇の書から手を引け。」

「嫌だといったら？」

「ならばここで死んでもらう。」

男はそういつて此方に殴りかかってきた。だが俺がただ殴りかかってきただけの攻撃をよれないわけが無く、頭を動かすだけで軽々と避け、すぐさま縮地で後ろに回り込んで王の財宝から破魔の赤薔薇^{ルグ}を取り出しそのまま男の背中を一閃する。男は背中をその切っ先で切られ、そのまま倒れる。その瞬間、男が頭に猫耳のある少女に変化する

「さて、いい加減監視諸々やめて貰おうか、リーゼロッテ、リーゼアリア。」

「一体何のことだ？」

男は普通に受け答えるがその声には動揺が含まれている。やはり驚いているようだ

「しらばつくれるならそこで寝てる奴から先に殺すが？」

俺がそういうと男は殺気を撒き散らしながら突っ込んできた

「・・・何故わかった？」

「貴様らの行動は全て把握しているんでな。それにこの瞬間も監視されてるんだろ？なあギル・グレアム。」

俺がそういうと、リーゼロッテはひどく驚いた。流石に全てを把握

されているとは思っていなかったのだろう。俺がそう解釈すると空にモニターが出現した

「貴様がギル・グレアムか。」

「ああ、私がギル・グレアムだ。」

「なら問おう。何故夜天の書の主ごと氷結封印した後何処が発見されていない次元空間に封印するなどという手段を使おうとした？」

「それが・・・我々に出来る最善の策だからだ。」

「馬鹿いつてんじゃねえよ。貴様らがやろうとしてるのは最善じゃない、最悪の策だ。」

「黙れ！！お父様の気持ちの知らないで！！」

「んなもんこつちも知ったこつちゃねえよ。どうせクライド・ハラオウンの敵討ちだろ？」

「！！・・・なぜそれを・・・」

「貴様らの計画の全てを知っているんだぞ？その程度の情報など造作もなく掘り出せる。それとギル・グレアム、今回俺達の側に管理局員がついているのは知っているか？」

「何だと？一体誰が・・・」

「そうだよな、認識阻害結果を海鳴全体に張っておいたんだから知らないよな。」

「嘘を言うな！！此方のサーチャーは正常に作動しているぞ！！」

「その傷でよく吼えるな。貴様らのサーチャーは確かに正常に作動している。ただ管理局員を見つけれない用にする特殊な認識阻害結果を張っているだけだ。」

「何故そのようなことを？」

「計画のため、とでもいえばいいのか？」

「その計画とはなんだね？」

「いちいち質問が多い。計画については詳しく教えられん。だがこれだけは言っておく、闇は夜天へと今一度戻る。」

「！！それはどういうことだ！？」

「さあな、自分で検索でもして知りやがれ。それと、この猫どもは殺させてもらうから。」

俺はそういった直後、モニターに向かってパルマ・フィオキーナを撃ちこみ、破壊した

「さて、まずは貴様らの処刑だな。」

「そんなことできると思ってるの?」

「貴様らの命を奪うなど赤子の手首を捻るより楽に出来る。それと殺すといったが厳密に言えば使い魔としての命を終えるという意味だ。」

「どういうこと?」

「こういうことだ。」

俺は縮地でリーゼロッテの後ろに回りこみ、王の財宝から破戒すべき全ての符を取り出して背中に軽く刺す。すると

ルールブレイカー

「ガッ、アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

「ッ!! ロッテ!!」

リーゼロッテが突然苦しみだし、身体がどんどん小さくなっていった。俺が行ったのはリーゼロッテの使い魔の契約の破棄とリンカーコアの破戒。つまりこの瞬間、リーゼロッテは使い魔ではなく唯の猫に成り下がったのである

「貴様!! ロッテに何をした!!」

「唯使い魔の契約の破棄とリンカーコアの破戒を行ったただけだが?」

「嘘を言つな!! リンカーコアの消滅などできない!!」

「信じる信じないは貴様次第だがそう唯突っ立ってるだけでは隙だらけだぞ。」

俺はリーゼアリアにそういつて横からルールブレイカーで一閃する。
リーゼアリアはそれを寸での所でかわし、一気に距離を置いた

「くっ、どうすれば・・・」

「そらっ、避けないとあいつの二の舞だぞ!!」

俺は瞬動で一気に接近し、ルールブレイカーで幾度と無く攻撃する。
リーゼアリアはプロテクションを張り防御しようとする。が、その
行為は間違いであった

「リンカーコアすら破戒するこれが障壁の一つや二つ破戒できぬわ
けないだろ？」

俺はリーゼアリアが張った障壁を切り付け消滅させ、そのままの勢
いでリーゼアリアの腕にルールブレイカーを突き立てた

「アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
!!」

リーゼアリアはリーゼロッテと同様にどんどん小さくなっていく。
そして最後には唯の猫となった

「ふう・・・これで計画が邪魔されることも無いな。さて、俺も帰
るか。」

俺はリーゼ姉妹を置き去りにして地球に転移した

「ただいま」

「あ、おかえり。シャマルさんが先に戻ってきたけどどうしたの？」

「ギル・グレアムの襲撃にあった。」

「あ、そういえば原作でもそんなことが・・・」

「それとちよつとやってしまったことが・・・」

「何やらかしたの？」

「・・・リーゼ姉妹を殺してきた。」

「・・・え？」

「まあ命を奪ったわけではない。使い魔としての命を奪っただけだ。」

「さ、流石にそれは崩壊させすぎじゃない？」

「やってしまったものは仕方が無い。諦める。」

「まあそうだよね・・・蒐集のほうは？」

「八割がた終了といった所だ。」

「てことは今年のクリスマスには間に合うね。」

「そうなることを祈りたいよ。」

俺はそういつて部屋に入っていった。どうも眠気が酷い。最近寝てないこともあるだろうから疲労もMAXだ

「スネーク、適当な時間になったら起こしてくれ。」

《わかった。だが余り無理するなよ？》

「わかってるさ。それじゃ俺はもう寝る。おやすみスネーク。」

《ああ、おやすみ。》

俺はスネークにそっくり、意識を闇に落とした

18話 蒐集終了間近、だがあいつらにだけは地獄を見せる！！（後書き）

士「みじかつ！！もつと書けや！！」

作者「すいません、体力と気力とやる気がそこをつきました」

夏海「駄作者が、いつぺん死んで見る？」

作者「怖っ！！頼むからその鉈を下ろして！！」

夏海「やだっ」

士「夏海、頭を狙えよ」

夏海「うん、わかったよ。えいっ」

作者「ぎゃああああああ・・・」

士「こんだけ痛めつけても次回には蘇生するんだよな、こいつ・・・」

夏海「生き物じゃないね」

士「まあいい、次いくぞ。蓬萊山輝夜様、雨季様、ディスクティニープラン様、感想どうもありがとうございます」

夏海「雨季様からネクロノミコン、レメゲトン、黒い雌鶏、天使ラジエルの書、ルルイエ異本、ガルドラボーク、ピカトリクス、アルモデル奥義書、無名祭祀書、ナコト写本がきてるよ」

士「ネクロノミコンとルルイエ異本はやばくねえか？」

夏海「いや他の8冊も十分やばいよ」

士「まあそうだな」

夏海「デイスティニープラン様からアーチャー宛にマスラオとスサノオ、お兄ちゃん宛にダブルオークアンタ、私宛にガンダムサバーニヤ、アサシン宛にガンダムハルト、作者宛にラファエルガンダムが届いてるよ」

士「なんという大盤振る舞い。流石は神」

夏海「いや、私も神様だよ？」

士「その前に俺の妹だろ」

夏海「まあそうだけどね」

士「さて、もうそろそろお開きと行こうか。次回 第19話 蒐集終了、そして現れる最後の守護騎士」

「ドライブ・イグニッション！！」

PV10万突破記念 士達のトークショー

作者

「さて、今回は番外編ということでトークショーでもやってみようと思います。」

士

「急になんだよ。なにかあったのか？」

作者

「それが・・・アクセス数が10万を突破した。」

士

「・・・え？」

夏海

「・・・まじ？」

作者

「まじで。」

士、夏海

「「な、なんだってーーーーー!!!!!!?」」

士

「こんな駄作をそんなに読んでる読者がいるのか!？」

夏海

「ありえない・・・」

作者

「いや、それは酷くない!？」

士

「だって事実じゃん。」

作者

「うつ!!--反論できないのが悔しい・・・」

士

「まあいい。で、ここでは何をするんだ？」

作者

「冒頭でもいったが簡単なトークショーだ。」

夏海

「トークショーね……」

士

「それより作者を大 処刑しようの会にすれば？」

作者

「No!!」

夏海

「そこはYesって言おうよ。」

作者

「俺の扱いが……orz」

士

「そんなこと気にしてたら持たんぞ？」

作者

「もういいや……さて、何について喋る？」

夏海

「復活早っ、そういえばなんで小説なんて書き始めたの？」

作者

「それか……以前ヨシユア様の小説を読んで、やってみたいな
って思ってた。まあ後は小説連載まで一気に行きました。」

士

「言ってしまえばただやりたかっただけか。」

作者

「悔しいがそういうこと。それと趣味を探してた節もあるな。」

夏海

「趣味ね、お兄ちゃんはどうな趣味あるの？」

士

「俺か？俺は修行と作者いじめ。」

作者

「邪悪だな。」

士

「言ってくれるじゃないか、作者風情が!」

作者

「いやっ!!それはやめてー!!!!」

士

「羅漢適当に右パンチ!!」

作者

「ぐぼあ!!」

夏海

「うわあ、汚い・・・」

作者

「いつてえ・・・死ぬかと思った。」

士

「いつそのこと死ねばよかったのに・・・」

作者

「鬱だ・・・」

夏海

「そつえば今後の展開ってどうするの?」

作者

「ネタばらしになるかもしれないけど・・・一応A、S編の後は原作どおりStrikerS編、そして最終決戦ことマキナ編に入る予定。」

士

「そのあとはどうするんだ?」

作者

「そのあとは・・・4人で異世界にでもいつてもらいます。」

夏海

「例えば?」

作者

「ネギまとかゼ口魔とかF a t e。学園黙示録は今いつてるから除外。」

夏海

「なんだかんだでちゃんと考えてるんだね。」

作者

「まあな。でももうそろそろ受験勉強しないと希望の高校に入れないんだよね・・・」

士

「作者ってどこら辺？」

作者

「中の上、もしくは中の中ぐらい。」

夏海

「希望の高校は？」

作者

「上の中ぐらい。」

士

「無理じゃね？あと半年だろ？」

夏海

「地元には高校はないの？」

作者

「あるにはある。」

士

「どれくらいだ？」

作者

「中の下から下の中。」

夏海

「そこ入ろうよ。」

作者

「そつしたいけど・・・将来のことを考えると・・・」

士

「そこから名門の大学に進学した奴は？」

作者

「いる。」

夏海

「なら大丈夫だって。」

作者

「なんか自分で書いてる小説のキャラに慰めらる俺って・・・or
z」

夏海

「まあまあ気にしない気にしない。」

士

「さて、なんか飽きてきたから後書きもここで終わらすか。ラハール様、雨季様、デイスティニープラン様、感想どうもありがとうございます。」

夏海

「ラハール様からグローランサーのリングウェポンと精霊石にランデイの子供がきてるよ。子供の名前はこっちで決めてくれたって。それと佐助からモンスターワールドに行きたいって伝言がきてるよ。」

士

士

「あいつだったらゴジラだろうがなんだろうが倒しそうだな。」

作者

「デイスティニープラン様からはインパルスガンダムデイスティニーシルエット（士宛て）、フォースシルエット（アサシン宛て）、ソードシルエット（アーチャー宛て）、ブラストシルエット（夏海宛て）、・・・ドードシルエット（俺宛て）がきてるぞ。」

士

「ドードシルエット・・・こんなにフリーダムは・・・」

夏海

「雨季様からはアーチャーとアサシンにヘルメスのサンダルと子狐

丸が届いてるよ。」

士

「雷を反らす刀・・・雷切みたいなものか。」

夏海

「そういえばラハール様の贈り物のランディの子供って私達で育てればいいの？」

作者

「性別もわからんから下手に名前も決められんからな・・・」

士

「これでラハール様の小説に出てて性別とか全部出てますとか言うことになったら笑えるかもな。」

作者

「いや、俺は全く笑えないから。」

夏海

「ねえ、もう時間も時間だよ？」

士

「まじか。」

作者

「なら終わらずぞ。読者の皆様、今後とも魔法少女リリカルなのは〜チート？何それおいしいの？〜を宜しく願います。」

「・・・では、さようなら〜」「」「」

PV10万突破記念 土達のトークショー（後書き）

次回から本編に戻ります

19話 蒐集終了、そして現れる最後の守護騎士 上(前書き)

GNDドライブの数が間違っていたので修正しました

19話 蒐集終了、そして現れる最後の守護騎士 上

士 side

《士、時間だぞ。起きろ。》

「ん・・・わかった。ふぁく・・・」

士はベッドから降りた。現在の時間は6時半、ちょうど夕飯時だ

「なんか美味そうな匂いがするってことはもう飯か・・・」

そいつって居間に向かう。とそこには

「あ、士君おはようなの!!」

「もう、起きるのが遅いで?」

「お兄ちゃん、こっちきて食べよ?」

「早く早くー!!」

「そうだよ、早く!!」

「アーチャー殿、おかわりを頼む。」

「シグナムあなた、そんなに食べたかしら?」

「あ、から揚げ貰い!!」

「む、それは俺のだぞ。」

「士、早く席につけ。」

「早くしないと飯が無くなってしまふぞ。」

「あら、このお魚美味しいわね。」

「ユーノ、醤油とつてくれ。」

「わかったよ。」

「なのはちゃん、それとつて。」

アースラメンバーにヴォルケンリッター、それに海鳴在住組みと

「あううう~~~~」

「ようやく起きたか、士。」

士の異世界の親友、猿飛佐助がいた

「なのはたちはいい、だがなんで佐助がいる？それとその子供は？」

「いや、前に送ったアイテムが発動したらしくてな、気がつけばこ
つちの世界だ。それとこの子供はうちの作者からの贈り物で名前は
まだない。からつけてくれ。」

「まさかと思うが、俺たちで育てると？」

「そういうこと。」

「・・・また奇怪な贈り物だなあ、オイ。」

「気にするな。それより頼みがある。」

「頼み？なんだ？」

「俺をモンスターワールドにつれてってくれないか？」

「あそこにか？」

「ああ。あそこにいる怪獣の魂をスケイスゼロ3rdで喰らいたい。」

「

「別にいいが・・・ゴジラだけは遠慮願おう。」

「何故？」

「あそこにも王が必要なんだよ。もしゴジラが死ねば残りの怪獣が
暴走を始める。」

「そういうことか・・・わかった。で、いつ行くんだ？」

「まあ待て。俺はまだ飯を喰ってないんだ。その後でいいだろ？」

「まあいいか。んじゃ俺は準備して置くわ。」

「そうしてくれ。」

俺はそういつて飯を食べ始めた

30分後・・・

「ごちそうさま。」

「よし、さあ行こう!!」

「はいはい、今行くから待て。」

「士、何処に行くんだ？」

「ちよつくらモンスターワールドに運動しに。」

「あそこにか？死んでしまうぞ？」

「大丈夫、今回は佐助もいるんだ。死にはしないさ。」

「ならいいが・・・気をつけるよ？」

「はいはい、んじゃ言ってくるわ」

俺は佐助を連れてミネルバに転移した

ミネルバ艦内

「なあ、ミネルバって二人で動かせたっけ？」

「大丈夫だ。この艦の操縦は全てハ口達に任せてある。まあ武装とかは全部手動だけど。」

「まあなんという手抜き・・・大丈夫なのか？」

「大丈夫だ。いざとなったらトランザムで逃げる。」

「GNドライブでも搭載してんのか？」

「五つな。」

「まさかと思うが・・・」

「ツインドライブシステムの応用で同調させてるから出力は通常の5乗な。」

「なんというチート性能・・・」

「チートな転生者がチートな性能の物を作るのはもはや定石だろ。」

「いや、聞いたことないから。」

「そうだったか・・・まあいい。で、なんでお前はその子連れてきてるんだ？」

「いや、どうせだからここで名前を決めよう。」

「名前ねえ・・・ライルはどうだ？」

「ロックオンみたいな人生送るんじゃないか？」

「じゃあアレヤ。」

「二重人格になるわ!!」

「ティエリア。」

「男の娘!？」

「あ、それいいな。そうなるように育てるか。」

「いや、人格歪むぞ？それに流　ティエリアはおかしいだろ、語呂的に。」

「そうか・・・なら刹那にするか。」

「ていうかお前00関係の名前にしようとしてるだろ。」

「刹那は違うぞ。」

「ネギまか？」

「そういうこと。刹那なら男についても女についてもおかしくないしな。」

「お前まじで男の娘に育てる気か？」

「流石にそれは冗談だ。だが名前のほうは本気。」

「ならいいんだが・・・後どれくらいでつく？」

「大体1時間って所だ。トランザム使えば10分でつく。」

「なら気長に待つか。」

「んじゃあそのデータでも見るか？」

「賛成。」

俺は佐助にモンスターワールドのデータを見せながら時間を潰した。この時、俺は大事なことを忘れていた。そう・・・今あの星は怪獣達が守護しているということを・・・

1時間後・・・

「なあ、あれやばくね？」

「いや、やばいとかそういう問題じゃないだろ。」

俺達は今、結構な危機的状態にある。現在前方にキングギドラ、スペースゴジラ、デストロイアの3体の怪獣が集結、こちらに向けて殺気を放っている

「トリスタン、イゾルデ起動。後部ミサイル発射管1番から10番までデイスパール装填。相手が攻撃してきたと同時に迎撃開始。」
「なに言ってるんだ？」

「音声入力。一々パネルを打つのが面倒だからつけてみた。」

「もう何でもありだな。」

「気にするな。それよりもこの状況をどうやって打破するかだ。」

「トランザムで一気に突破。」

「オキシジェンデストロイヤーレイ喰らって原子崩壊しそうな気がする。」

「じゃあ陽電子砲使って撃滅。」

「それだな。タンホイザー起動、各武装安全装置解除、発射！！」

ミネルバから数多の攻撃が繰り出される。キングギドラたちはそれに光線を吐き、相殺させた

「GUGYAAAAA!」

「攻撃がくるぞ!!GNフィールド展開!!佐助、お前外に出て戦つて来い!!」

「無茶言うな!!流石の俺でも真空じゃ死ぬわ!!」

「なら死ななきゃいいんだな?シン・ライフオジョ!!」

俺が呪文を唱えた直後、佐助の身体に光が纏われた

「うわっ!?なんじゃこりゃ!?!」

「これは対象を全ての害から守ってくれる特殊な光だ。これを身に纏えば真空だろうが深海だろうがマグマの中だろうが何処だろうと生きていける。というわけで逝つて来い!!」

「字が違っわ!!って、まじでかあああああ!!」

佐助は八口たちに捕まり、そのままカタパルトまで連れて行かれた

「ちよっ、勝手にカタパルトに乗せるな!!」

「佐助、後十秒で発射するからな。」

「まじで!?「10」ちよっ、まだ「9」心の準備も何も「8

」って聞いているか!?「7」腹くるしかないのか!?「6」
・・2」おい!?今短縮しただろ!!「1」やばいやばいやば
い!!「0」、発射!!」うおおおおお!!?」

「佐助は出撃したか・・・佐助に当たらないように主砲を発射、GNフィールド出力アップ、現状を維持だ。」

俺が八口たちにそう命令すると、佐助から念話が入った

（士！！お前も出て来い！！）

（いや、俺が出たらこの艦落ちるから無理。てかお前一人で何とかなるだろ。スキース使えば。）

（うつ！！まあそうだが・・・もういい！！やってやる！！）

そういつて念話を切られた。そしてディスプレイには叫んでいる佐助が映っていた

「来い・・・俺は此処にいる！！——スケエエイイイイス！！ゼロオオオオオオ！！！」

佐助がそう叫ぶと、佐助の後ろに死神が現れ、佐助と一体化した。そして手には大鎌、黄昏ト万死ヲ刻ム影を持っている

「さあ行くぜ・・・死の恐怖を教えてやるよ！！！」

佐助はそういい、虚空瞬動を使って怪獣どもに突撃していった

士 side end

三人称 side

「おらあ！！！」

佐助がその手に持つ鎌でキングギドラを何度も切りつける。その猛攻を受けたキングギドラは全身が傷つき、苦しんでいた

「「「GYUAAAAAAAAA！！！」」」

だがキングギドラはゴジラのライバルとまで言われた怪獣、そうやすやすとやられるものではない。その証拠に佐助に向かって三つの首から引力光線を吐いてきた

「うおっ！？あぶねえ！！」

佐助は何とか回避し、安堵する。が、すぐにスペースゴジラが雷状の光線、コロナビームを吐いて攻撃してきた

「GUGYAAAAA！！！！」

「こっちもかい！！オメガファイア！！」

佐助の掌から出される紅蓮の焰がコロナビームを相殺する。そしてそのままスペースゴジラに突貫し、両肩にある水晶体を砕いた

「GYAGOOOOOOOOOO！！？」

「力が弱まった！！チャンス！！」

佐助はそういつて止めを刺すべく、スペースゴジラに向かった。だが、それはデストロイアによって防がれた

「GUGAAAAA！！！！」

「なっ！！わきりらんげっせん環伐乱絶閃！！」

デストロイアの角から発せられる巨大な斬撃、ヴァリアブル・スライサーと佐助の環伐乱絶閃がぶつかり合う。最初は拮抗したが、徐々に佐助が押され始めた

「ちっ！！テラクール！！」

佐助は黄昏ト万死ヲ刻ム影にテラクールを放ち、纏わせた

すいれいわきりらんぜっせん
「水冷環伐乱絶閃!!」

佐助の放った一撃は、デストロイアの攻撃を退け、デストロイア本体にダメージを与えた

「いい加減・・・死ねやああああ!!」

佐助は叫び、力の半減したスペースゴジラに虚空瞬動を使って肉薄し、黄昏ト万死ヲ刻ム影で喉元を切り裂いた

「GYAGOOOOOO・・・」

スペースゴジラはそのまま絶命した。そしてその魂はスケイスゼロ3rdに喰われた

「おっしやあ!!次い!!」

佐助がそういつてデストロイアに攻撃しようとした瞬間、デストロイアが急にばらばらになった

「んなつ!?!」

否、ばらばらになった訳ではなかった。デストロイアはその身を数十体の集合体にしただけであつた。そして集合体どもは佐助を狙わず、その後ろから援護射撃していたミネルバに向かっていった

「やばい!!間に合え!!」

佐助はミネルバに向かって飛び出すが、キングギドラがそれを邪魔した

「GYUAAAAAAAAA!!」

「邪魔だ!!どけっ!!」

佐助はそういつて何とかミネルバに向かおうとするが、それをことごとく邪魔される。その間に集合体はミネルバに近づいていく

「くそっ!!土、逃げる!!」

佐助がそういうが、既に時遅し。集合体は口を開け、攻撃態勢に入っていた。そして、その口から紫色の光線、オキシジェンデストロイヤーレイが発射された。光線はGNフィールドを容易く貫き、ミネルバに・・・

「土——!!!!」

・・・届かなかった。ミネルバに当たる直前に何かによって弾かれたのである。そしてミネルバの周りには長いコの字型の砲台、フィンファンネルが浮かんでいた

「・・・は？」

「GN粒子は貫通できてもそれ単体が攻撃力を持っているメガ粒子は貫けなかったか。タンホイザー、エネルギーチャージ開始。行け、フィンファンネル!!」

土は、ミネルバに搭載しておいた50機のフィンファンネルを使い、集合体を次々撃ち抜いていった。集合体は受けたダメージが大きくなったのか、合体して完全体に戻った

（なに？わかった。俺はその調査に行つて来る、終わつたらミネルバに帰つてくるように。）

（てめえは俺の母さんか。まあいいわ、んじゃ行つて来る。）

（おう、逝つてこい。）

「さて、俺は俺で第七島に行つてみるか。」

そういつて士は謎の島、第七島に向かった

三人称side end

士side

「・・・来てみたが、ミネルバで来て正解だな。まさかこいつらだったとは・・・」

俺は現在GNフィールド全開で第七島を進んでいる。なぜGNフィールドを張っているかというと

「GYAGOOOOOOOOO!!!」

「GYUAAAAAAAAAAAAA!!!」

「GYUGYAAAAAAAAAAAAA!!!」

黒龍、紅龍、祖龍の3体がミネルバの周りを飛んでいるのだ。しかも攻撃しながら

「GNドライブ出力最大、GNファング射出、できるだけ相手の体力を減らせ!!」

俺はそういつてミネルバに搭載されている——地上用に搭載した

——GNフアングを射出し、それぞれに10機ずつ飛ばした。まあ足止めできればよし、倒せたならなおよしといった所だろう

「さて、今のうちに・・・全武装照準、黒龍ミラボレアス、てえええええええ！！」

全ての武装からビーム、砲弾、ミサイルの雨がミラボレアスに降り注ぐ。それらを全て受けたミラボレアスは全身から血を流し、最後の一撃といわんばかりの巨大な火球を口内に作り出していた

G
A
A
A
A
A
A
A
A
A
A
. . ! !

「喰らうか!! トリスタン、最大出力!! トランザム!!」

ミネルバの両舷に搭載されている主砲、トリスタンの出力を最大にし、更にトランザム。これだけ使えば確実に相殺できる！！

「てええええええええええ！！！」

ミラボレアスから放たれた火球をトリスタンで相殺する。直後、ミラボレアスが力無く倒れ伏した

「よし！！もどれ、ファング！！」

俺は射出しておいたGNファンングを戻し、ミネルバの外に出た

「GYUGYAAAAA!!!」

「うるせえ！！——
トレース
投影、
オン
開始」

咆哮するミラバルカンに怒鳴り、俺は真紅の槍と漆黒の弓を投影した。真紅の槍は構造を変えて・・・

「いくぞ、紅龍——無駄なき死雷の矢！！！」
フエイル・ボルク

それは、弓と矢一体の宝具。その矢は無駄なしの弓と貫き穿つ死雷ゲイ・ボルクの槍の双方にかけられた因果逆転の効果が相乗し、より強力なものとなつてミラバルカンに襲い掛かる。ミラバルカンは火球を撃ち、矢を燃やそうとするが、因果逆転の効果があるこの矢には効くわけが無く、そのまま火球を貫き、ミラバルカン心臓に深々と刺さった。更に、その矢は心臓部で方向転換し、脳に向かつて体内を移動し始めた。そして10秒後、矢は脳に到達し、ミラバルカンは苦痛の叫びを上げた

「すまんが……ここで死んでもらうぞ。壊れた幻想、対象、矢。」
ブロックン・ファンタズム

その瞬間、ミラバルカンの頭が吹き飛び、絶命した。そしてその軀は地面に倒れ、流れる溶岩に飲み込まれた

「さて、後は祖龍だけか……アレを使うか。」

そういつて俺はミネルバに戻り、格納庫に向かった。

「GNフィールド最大展開、全GN粒子を防御にまわせ！！」

俺は音声入力で命令し、目の前にある一機の戦闘機に飛び乗る。それは本来三人乗りであるが、改造した結果一人での操縦が可能となった

「カタパルト起動、発進体制に入る。」

そしてそれはモビルスーツの発進するカタパルトから現れ、飛び立

った

「スーパーX3改、Take off」

スーパーX3。かつて核爆発寸前のゴジラを止めたことで有名な自衛隊最強の対G兵器である。そしてこの機体はその発展機である。動力はレーザー核融合炉、武装は冷却ミサイル、-200にも及ぶ超低温レーザー、機首部のバルカン砲、そして追加で取り付けた320mm超高インパルス砲『アグニ』を二門搭載している、その他カドミウム弾なども搭載されているがミラーツに核反応炉は無いので使い道がない

「GUGYAAAAAAAAAAAAA!!」

ミラーツが雷球を放ってくる。その威力はこのスーパーX3改を落とすのに十分な程である。が、機動力に優れたこの機体に

「そうやすやすと当てられると思うな!!冷却ミサイル、発射!!」

雷球をかわし、カウンターの要領で冷却ミサイルを当てていく。ミサイルが当たった部分から徐々に凍っていき、ミラーツは飛行能力を失った

「よっしゃ!!超低温レーザー、照射!!」

間髪いれずに超低温レーザーを照射し、ミラーツを完全に凍らせていく。そしてミラーツは完全に凍りつき、動かなくなった

「止めだ!!アグニ、発射!!」

そして最後の一撃に二門のアグニを放つ。アグニから放たれたビームはそのままミラーツに直撃し、粉々に砕いた

「殲滅終了つと……帰還するか。」

俺は機体を旋回させ、ミネルバに戻っていった

「で、お前は何匹喰らったんだ？」

「十匹ぐらい。主に平成以降の奴らを喰らってきた。」

「どうりで存在がでかくなってる訳だ。平成以降の奴らは存在がかいからな。」

「で、お前のほうは？」

「黒龍、紅龍、祖龍の三体と戦ってきた。その時にあれも使った。」

「あれ？」

「スーパードX3改。怪獣をも撃退可能な対G兵器の完成形だ。この艦に一機搭載している。」

「まじかい……この分だとあれも造れそうだな。」

「どんなのだ？」

「コロニー型外宇宙航行母艦『ソレスタルビーイング』。いけるか？」

「あれか。あれなら時間はかかるが造れない事は無いな。」

「流石。で、これからは？」

「もう地球に帰ろう。それにもうそろそろ闇の書を夜天の書に戻すし。」

「なら俺の魔力を使えば？」

「管制人格にお前の能力ついたら化け物になるだろ。」

「そこは大丈夫。データトレインで能力吸って魔力の塊にすればいいし。」

「その手があったか。なら戻ったら直ぐに行くか。」

「いいけどあいつらは？」

「猫姉妹なら何処かの管理外世界にリンカーコアと使い魔契約を破戒した状態で放置してるから邪魔は絶対に入らんな。」

「でもグレアム本人がくるんじゃない？」

「大丈夫。そのときは闇の書の闇ごと消せばいいし。」

「うわーお、なんて危ない思考だ。まあそれには賛成だけど。」

「なら言つな。んじゃ、地球に向かって航行を開始するぞ。」

「了解。で、刹那は？」

「刹那なら他の部屋で寝てるよ。ハロと遊んでたみたいだから疲れただろ。」

「まあ可愛いこと。」

「そうだな。それじゃ、さっさと帰るためにとばすぞ。機関全速、トランザム！！」

俺達は地球に向けてミネルバを発進させた

19話 蒐集終了、そして現れる最後の守護騎士 上（後書き）

作者「ようやくと書けた・・・」

士「毎度毎度そうだけどなんかネタ多くね？」

夏海「てか今回私の出番少ないよ!!」

作者「いや、今回は佐助との絡みを多くしたから士の出番しかね
」

士「あつそ、だけでももう少し夏海の出番多くしろよ」

作者「へいへい、次回からそうしますわ」

夏海「なんか作者が生意気・・・」

作者「気のせいですよ。では、ディスティニープラン様、雨季様、
SILVER様、感想どうもありがとうございます」

士「最初にSILVER様からの質問の回答を。あの転生者が聖骸
布を着用できたのは奴を転生させた下級神が吸血鬼でも着用できる
ように聖骸布の構造を弄ったからです。下級でも仮にも神、そのく
らいはできるようです」

夏海「次は頂き物の紹介です。ディスティニープラン様からトリイ
の着ぐるみ（お兄ちゃん宛）、エビ（作者宛）、ザクウォーリアの
ブレイズウィザード（アサシン宛）、スラッシュウィザード（アー
チャー宛）、ガナーウィザード（私宛）を、雨季様から橙子さんの

使い魔をいただきました。ありがとうございます」

士「またもや種ディステイナーネタ・・・しかもトリイとは・・・」

作者「このエビはあれか？デフォで装備すればいいのか？」

夏海「ガナーウィザード・・・これで作者を・・・」

士「ん？何いつてんだ？」

夏海「え？何も言っていないよ？」

士「そうか・・・」

作者「さて、最後にラハール様、次回も佐助を使わせてもらえると嬉しいですよ」

士「てか佐助がいないと話繋がらなくね？」

夏海「ほとんど準レギュラーだしね」

作者「というわけで、お返事待ってます」

士「さて、もうそろそろ終了の時間だぞ」

夏海「はい。それじゃ、次回もどうぞお楽しみに!!」

「」「ドライブ・イグニッション!!」「」

20話 蒐集終了、そして現れる最後の守護騎士 下

ガチャ

「「ただいま。」」

「あ、おかえり。」

「随分とかかったな。」

「まあそれなりに戦ってきたからな。アサシンは？」

「アサシンなら道場にいったよ。なんでも今日は隣町と大事な試合があるんだって。」

「まじかい……いますぐ決行しようと思ったんだがな……」
「何を？」

「闇の書の闇の討伐。残りのページを埋める術も見つかったからな。」

「なら今日の夜決行でよくない？」

「夜か……よし、そうしよう。佐助も残るな？」

「当ったり前よ！！これであのフルボッコに参加できる！！」

「へいへい、間違つてでも地球を割るなよ？」

「大丈夫、その辺の手加減はやるから。」

「いや、そう言われてもあんだだけ怪獣喰らったんだから些細なことでも大惨事だぞ？」

「あ、そうだ。喰らった怪獣の技も使ってみよう！！」

「オキシジェンデストロイヤーレイは禁止な。」

「なじめ！？」

「地球に当たったら原子崩壊起こすだろうが。」

「そうか……なら他のにしとくか……」

「そうしてくれ。」

「さて、夜になりました。」

「時間とばしすぎだろ。」

「気にするな、俺は気にしない。」

「士君なに言ってるの？」

今、俺達はある病院の上にいる。理由は簡単、闇の書を夜天の書に戻すためだ

「で、全員いるな？」

「ああ、誰一人欠けてない。」

「了解、リンディ達もいいな？」

「ええ、この艦の使い方もわかったから大丈夫よ。」

「使い方も何も、音声入力だから。」

「そんなことより、さっさと始めよう。」

「そうだな。よし、佐助、魔力を。」

「あいよ。ほいっとな。」

佐助が約150ページ分の魔力の塊を出す

「そしてデータドレイン!!」

佐助のデータドレインにより、魔力の塊から魔法の情報が全て取り出され、純粋な魔力の塊となった

「シャマル、これを。」

「はい、蒐集開始。」

魔力の塊が蒐集される。そして全てが蒐集された瞬間、闇の書が開き、光りだした

「蒐集完了を確認しました。」

その言葉を聞いた直後、シグナムたちが消え、はやての体が光り、管制人格のものとなった

「私はまた・・・破壊しなければならぬのか・・・」

「いや、お前はもう破壊なくていい。俺達が救い出してやるんだからな!!」

こうして俺達と管制人格の戦いが始まった

「魔法の射手、サギタ・マギセリウス連弾、雷の1001矢!!」

「!!・・・盾」

俺が放った攻撃を簡単に防ぐ。どうも佐助の魔力を取り込んだことで魔力の純度、とでも言うものが増したようだ

「アーチャー!!アサシン!!佐助!!」

俺はアーチャーとアサシン、佐助を向かわせる。現在アーチャーとアサシンの二人はヘルメスのサンダルを履いているため空中を自在に動くことが出来る

「ハッ！！」

「せりゃ！！」

「おらぁ！！」

三人がかりで切りかかるが、管制人格はそれをごとく避け、反撃を加えてくる

「・・・断罪の剣」
エクスキューションズソード

直後、管制人格の右手から光の剣が現れる。アーチャーは手に持つ剣、干将・獬耶を交差させて攻撃を防ぐ。だが、更に左手からも同じ光の剣が現れ、徐々にアーチャーを傷つけていく

「秘剣、燕返し！！」

わきりらんぜっせん
「環伐乱絶閃！！」

アサシンと佐助の攻撃により、管制人格はアーチャーから離れる。が、管制人格は再度こちらに向かってこようとする

「士！！まだか！？」

「もう大丈夫だ！！詠唱に入る！！黄昏よりも暗き存在、血の流れよりも紅き存在、時の流れに埋もれし、偉大なる汝の名において、我此処に闇に誓わん！！我らが前に立ちふさがりし、全ての愚かなる者に、我と汝が力持て、等しく滅びを与えんことを！！」

俺の掌の前に紅い魔力球が現れる。それが放つ魔力は、ゆうにSラ

ンクを超える

「ドラグ・スレイヴ!!」

魔力球が管制人格に向けて発射される。管制人格はそれを防ぐ気でいるのか右手を前に出し、障壁を張った。だが、黒魔術最強のこの術に

「障壁を張るなど愚の骨頂!!」

ドラグ・スレイヴが障壁に触れた瞬間、そこを中心に半径約500メートル程を覆う巨大な爆発が起きた。そう、この魔法は魔力の塊をぶつけるのではなく、魔力の塊を爆発させ、その衝撃と熱でダメージを与えるものだ。例えるなら、広島と長崎に落ちた原爆である

「なのは、フェイト、アリシア、クロノ!!いまだ、やれ!!」

「うん!!デイバイイイイイン・・・」

「プラズマアアアアアア・・・」

ウェニアント・スウェリヤス・フルグリエンデース
「来れ雷精風の精雷を纏いて《クム・フルグラティオーネ》アウストリーナ 吹きすさべ《フレット・テンペスターズ》南洋の嵐!!」

「ブレイズ・・・」

「バスタアアアアア!!」

「スマツシャアアア!!」

ヨウイス・テンペスターズ・フルグリエンズ
「雷の暴風!!」

「キャノン!!」

なのはたちから四つの魔力砲撃が放たれる。そしてそれは全て管制人格に直撃した

「これで少しくらい・・・って思ったんだけど・・・」

俺は管制人格を見てさういう。そう、管制人格は所々に小さな傷がついただけでほとんどダメージは与えられてなかったのだ

「嘘！？直撃させたのに・・・」

「どうするの、お兄ちゃん！？」

「慌てるな。ある程度は予測していた此处までとはな。」

俺がさういった直後、管制人格が何かを言い始めた

「・・・プラクテ・ビギ・ナル、契約に従い《ト・シュンボライオン》我に従え《ディア・コネート・モイ・ヘー》氷の女王来れ《エピゲネー・テート》とこしえの《タイオーニオン》やみ《エレボス》えいえんのひょうが《ハイオーニエ・クリュスタレ》」

「！？やばい、全員逃げろ！！」

管制人格の詠唱を聞き、すぐさま全員にさう言い放つ。もしあれが発動すればバリアジャケットがあるうとなのはたちは粉々になってしまう

「っちー！！ラス・テル・マ・スキル・マギステル！！契約に従い《ト・シュンボライオン》我に従え《ディア・コネート・モイ》
ホ・テュラネ・フロコス
炎の霸王来れ《エピゲネー・テート》
フロクス・カタルセオー・スフロギネー・ロンファイア
浄化の炎 燃え盛る大剣！
「！」

俺もすぐさま詠唱に入る。あれを相殺するにはこれが一番だ

「全ての《パーサイス》命ある者に《ゾーサイス》等しき死を《ト・イン・タナトン》其は《ホス》安らぎ也」
アタラクシア
「ほとばしれよ《レウサントーン》ソドムを《ピュール・カイ》焼

ハ・エヘフレゴン・ソドマ
きし《テイオン》火と硫黄罪ありし者を《ハマルトートウス》死の
塵に《エイヌ・クーン・タナトウ》！！」

詠唱が終わる。後は最後の一言を言うだけ

「おわるせかい《コミズケー・カラストロフエー》」
ウーラニア・フロゴシス
「燃える天空！！！！」

二つの上級呪文の衝突は、莫大なエネルギーを生み出した。幸い海の上での戦闘だったため、街には被害は出ていない。が、なのはたちにはある程度のダメージが行ったらしく、皆バリアジャケットの一部が裂けていた

「士！！まだ来るぞ！！」
「何！？」

アーチャーの声を聞き、管制人格のほうを見ると、右手を突き出して魔力を収束させていた

「響け、終焉の笛・・・」
「収束砲！？全員下がれ！！」

俺はなのはたちを一旦下がらせる。すると、市街地のほうに二人の人影が見えた

「民間人か！？くそつ、こんなときに！！」

俺は全速力でその二人の元に向かった

「その二人！！死にたくなかったら下がれ！！」

「えっ！？あんた士！？」

「何で士君が！？」

「そんなことはどうでもいい！！それよりも！！」

そうついた直後、なのはとフェイトがこちらに来た

「アリサちゃん！？それにすずかちゃんまで！？」

「どうしてここに！？」

「二人とも巻き込まれたんだ！！なのは、最大出力で障壁を張れ！

！収束砲が来るぞ！！」

「収束砲！？何それ！？」

「お前のスターライトブレイカーと同じのだ！！」

なのははそういうと理解したようで、アリサたちの前で障壁を張った

「フェイト！！お前も障壁を！！」

「お兄ちゃんは！？」

「俺なら大丈夫だ！！メタモルフォーゼ、ガンダムDX！！」

俺は最強の火力を誇るガンダム、ガンダムDXへと変化する

「サテライトシステムMk-2起動、マイクロウェーブ受信開始！
！」

空にある月からマイクロウェーブを受信する。本来は月にある送信施設がないと使えないのだが、月の魔力をマイクロウェーブとして受信して使うため問題なく使える

「ラグナロク・・・」

管制人格の右手から白銀の収束砲が放たれる。此方のチャージはまだ済んでいない

「――レイジングハート――」

《プロテクションEX》

なのはが俺の前に立ち、最大出力の障壁を張る。何とか拮抗するも、徐々に押されていく

「エネルギーチャージ完了――なのは、下がれ――」

俺はそういつてなのはを下がらせ、最大の一撃を放つ

「ツインサテライトキャノン、発射ああああ――」

二つの砲門から放たれる巨大な粒子砲が、管制人格の放った収束砲をぶつかり合う。が、収束砲の勢いを殺すことが出来ず、徐々に押されていく

「オメガファアア――」

佐助が収束砲に向かって焰の砲撃を放つ。これにより収束砲の勢いが弱まり、何とか相殺することが出来た

「ふう……なんつー馬鹿魔力だ。佐助の食わしたのが悪かったか？」

「だろうな。俺の魔力は純度が高いからな。」

「自分で言うな。それよりも、これからどう立ち回る？」

「遠距離だと砲撃が来るし……近接戦闘が一番いいんじゃない？」

「賛成。そんじゃ、行きますか――！左腕解放固定、千の雷――！右腕

エーミッサ・スタグネット　キーリブル・ドゥダラタス・コンプレクシオザロ・アルマティオーネ

解放固定、千の雷！！双腕掌握！！！！術式兵装、雷天双壮《タストラパー・ヒューペル・ウーラーヌー・メガ・デュナメネー》！！！！」

マギア・エレベア

俺は闇の魔法を使い、千の雷を2つ取り込む。その瞬間、全身が白く光り、髪が一気に伸びた。これこそ、闇の魔法最速の術式兵装、雷天双壮

「行くぞ！！」

そういつて俺は王の財宝からエクスカリバーとエクスカリバー・モリガンの二つを取り出し、双剣の要領で切りかかった

「カイト、蒼炎データ起動！！」

佐助も自身の持つデバイス、カイトを使い、蒼炎を発動させる

「二刀連撃、斬岩剣！！」

「蒼炎舞、百花繚乱！！」

二人の怒涛の攻撃に防戦一方の管制人格。何とか反撃しようとするも

「やらせはせんよ！！」

アーチャーの放つ矢によってそれも叶わない。そしてそちらに氣を取られてる間に

「神鳴流決戦奥義！！二刀連撃、真・雷光剣！！」

「三爪炎痕！！」

俺達の神速の剣技が直撃した。管制人格は障壁を張ることも無くそ

のまま海に落ちた

「ラストと行こうか。佐助、これを。」

「モリガンか。よし、やるか!!」

そういつて俺と佐助は手に持つ西洋剣を天に掲げ

「「約束された勝利の剣!!!!」」
エクスカリバー

真名を開放した。その剣から放たれる光と闇、二つの砲撃が管制人格を捉え、直撃した。直後、管制人格のものではない声が聞こえた

「こらー！ー！！やりすぎやー！ー！！もう少しで死んでしまう所やったやないか!!」

「はやてか!!そっちはもう大丈夫なのか!？」

「うん、あとは魔力ダメージでこの子を気絶させればいいだけや!!」

「わかった!!佐助、なのはたちを下がらせてくれ。」

「何をする気だ?」

「自作収束魔法を此处で試す。」

「そうか、わかった。だけどやたらと魔力を籠めるなよ?」

「わかってるって。アーチャー、アサシン!!お前たちも頼むぞ!!」

「了解だ。」

「よし、行くぞ!!」

俺はそういつて右腕に漆黒の魔力を纏わせる。そして俺はその右腕を

「神の裁き、その身に刻め!!ジャッジメントオオオオオ・・・ブレイカアアアア!!」

一気に突き出した。その瞬間、なのはのスターライトブレイカーを凌駕するほどの巨大な魔力が収束し、砲撃となって管制人格に直撃した

「うおっ！？眩しい！？」

その瞬間、管制人格が光りだし、その中から一人の少女、八神はやとと、その守護騎士達が現れた

「我ら、夜天の主の下に集いし騎士。」

「主ある限り、我らの魂尽きる事なし。」

「この身に命ある限り、我らは御身の下にあり。」

「我らが主、夜天の王、八神はやとの名の下に。」

「夜天の光よ、我が手に集え。祝福の風、リインフォース。セット、アップ！！」

その言葉と共に、はやてにバリアジャケットが展開されていく

「はやて、大丈夫か？」

「うん、もう大丈夫矢で。あとは・・・あれを。」

そういつてはやてが指す先には、夜天の書と切り離された防衛プログラム、闇の書の闇があつた

「ああ、これで闇の書の・・・いや、夜天の書の呪いを断ち切るぞ！！」

俺たちは、闇の書の呪いを断ち切るべく、最後の戦いに向かった

20話 蒐集終了、そして現れる最後の守護騎士 下（後書き）

作者「ふう・・・遂にA / Sも次回が最終話となりました!!」

士「大分駆け足できたけど・・・大丈夫だよな？」

作者「大丈夫大丈夫。なんかこれまでにないくらい頭がさえてるし!!」

夏海「めずらしい、作者がこんなにも張り切ってる・・・」

佐助「まあいいんじゃない？それだけやる気もあるようだし」

作者「というわけで、ラハール様、デイスティニープラン様、雨季様、感想どうもありがとうございました」

士「今回はデイスティニープラン様から即席ラーメン（作者宛）、ダンボール（俺宛）、カロリーメイト（夏海宛）、無限バンダナ（アーチャー宛）、ステルス迷彩（アサシン宛）だよ」

佐助「これまた山ほど・・・すごいな」

士「そういえば作者、前回貰ったエビは？」

作者「つけようと思ったけど余りにも魚介くさいからしまってきた」

夏海「へえ・・・で、お兄ちゃんはそれを着てると」

士「いいじゃん、トリイ」

佐助「背中のバックパックが気になって仕方ないんだけど・・・」

作者「まあいいじゃん。では、次回予告　次回　第21話　最終決戦、そして・・・」

「「「ドライブ・イグニッション!!」」」」

作者「あ、ラハール様、佐助は次回も使わせてもらいます」

21話 最終決戦、そして・・・（前書き）

今回は戦闘がメインです。あと短めです

21話 最終決戦、そして・・・

士side

「各員、闇の書の闇を取り囲むように移動。暴走開始と共に攻撃開始だー!!」

遂に始まった、闇の書の闇討伐。こいつを倒し、管制人格、リインフォースのバグを取り除けば、皆が笑顔になれる。そのためにも

「ここで終わるわけにはいかない・・・!!」

俺がそういった直後、遂に暴走が始まった。その姿は、原作とほぼ同じ姿。頭部の人形が無いことと、巨大な飛竜の翼を除けば

「行くぞー!!第一波、ユーノ、アルフ、ザフィーラ!!」

「チェーンバインド!!」

「ストラグルバインド!!」

「縛れ、鋼のくびき!!」

アルフ、ユーノ、ザフィーラの三人の攻撃により、周りに展開していた触手が全て消滅する

「第二波、なのは、ヴィータ!!」

「ちゃんと合わせろよ、なのは!!」

「ヴィータちゃんもね!!」

「鉄槌の騎士ヴィータと、鉄の伯爵、グラフアイゼン!!」

《ギガントフォルム》

ヴィータのデバイス、グラーファイゼンが巨大化し、自身の最大の
一撃を放てるようになる

「豪天、爆碎！！」

その声と共に、ヴィータがアイゼンを上に振り上げる。その瞬間、
アイゼンが更に巨大化し、全長約50メートルほどの巨大な鉄槌と
なった

「ギガントシュラーク！！」

一気にアイゼンを振り下ろす。その衝撃は凄まじく、闇の書の闇の
一層目のバリアを打ち砕いた

「高町なのはと、レイジングハート、行きます！！」

《魔力リンク開始、リミッター解除・・・いつでも行けます》

「わかったよ、レイジングハート！！インフェルノ・・・バスター
アアアア！！」

それは、燃える天空とディバインバスターを融合させたなのはのオ
リジナル魔法。その威力は、スターライトブレイカーにも匹敵する

「ブレイク・・・シュウウウウウト！！」

なのはの砲撃が二層目のバリアを破壊する。残りは2枚

「第三波！！シグナムとフェイト、アリシア！！」

「剣の騎士、シグナムが魂。焰の魔剣、レヴァンティン。」

シグナムがレヴァンティンを空に掲げる

「刃と連結刃に続く、もう1つの姿・・・」

レヴァンティンが鞘と一体化し、弓となる

《ボーゲンフォルム》

「駆けよ、隼!!」

《シュトゥルムファルケン》

シグナムが放った矢は、闇の書の闇のバリアを捉え、壊れた幻想も
かぐやというほどの爆発を起こした。これにより、三層目のバリア
が砕け、残り一枚となった

フロークンファンタズム

「流フェイト、バルディツシュ。」

「流アリシア。」

「「行きます!!」」

「バルディツシュ、リミットリリース!!」

《魔力リンク開始、リミットリリース・・・完了しました》

「プラクテ・ビギ・ナル!! 来れ《ケノテートス・》虚空の雷 薙

アストラプサト

ぎ払え《デ・テメー》!!」

「いくよ、アリシア!! ライトニングデイズタアアア!!」

「うん!! 雷の斧!!」
ディオス・テュコス

フェイトのオリジナル魔法、ライトニングデイズターと、アリシ
アの雷の斧がバリアに直撃する。そしてバリアと一瞬拮抗した後バ
リアを砕いた

「第四波!! アーチャー、アサシン、佐助!!」

「行くぞ、I am the bone of my sword .

《我が骨子は振れ狂う》」

「射殺せ、神槍」

「俺は此処にいる！！来い！！スケエエエエイス、ゼロオオオオオオオ！！」

アーチャーは詠唱し、アサシンは以前貸し出した刀、神槍を開放し、佐助はスケイスゼロ3rdと融合した

「カラドボルグ
偽・螺旋剣」

「秘剣、燕返し！！」

「ヴァリアブルスライサー！！」

アーチャーの宝具、アサシン、佐助の斬撃を喰らった闇の書の闇は、その身を吹き飛ばされ、悲痛な叫びを上げた。が、即座に再生、触手の先端に魔力を溜めはじめた

「盾の守護獣、ザフィーラ！！砲撃なんぞ、撃たせん！！」

ザフィーラがそういった直後、海から白銀の棘がいくつも生え、触手を貫いた

「第五波！！俺とはやて、クロノで行くぞ！！」

「うん！！彼方より来たれ、ヤドリギの枝。銀月の槍となりて撃ち貫け！！」

「ステインガーブレイド・・・」

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル！！来れウエニアント・スピアリヤス・フルグリエンテース雷精風の精！！雷を纏いて《クム・フルグラティオーネ》吹けよ《フレット・テンペスタース》アウストリーナ南洋の嵐！！」

はやての後ろに数多の銀の槍、クロノの後ろに数多の水色の短剣、俺の右の掌に魔力が集まる

「石化の槍、ミストルティン!!」

「エクスキューションシフト!!」

ヨウイス・テンベスターズ・フルグリエンス
「雷の暴風!!」

三人の攻撃により、闇の書の闇は粉々になった。が、即座に再生、更にグロテスクな風貌となった

「なのは、フェイト、はやて!!行くぞ!!」

「うん!!全力全開、スタアアアライトオオオオ・・・」

「雷光一閃!!プラズマハーケン・・・」

「ごめんな・・・お休みや・・・響け、終焉の笛!!ラグナロク!!」

「神の裁き、その身に刻め!!ジャッジメントオオオオオオ・・・」

俺たち四人の前に、膨大な量の魔力が収束していく。それは、アルカンシエルにも匹敵するほどの膨大な量。そして、今それを

「「「ブレイカアアアアアア!!」」」

開放した。膨大な魔力の奔流は、闇の書の闇に直撃し、とんでもない爆発を起こした。後はタンホイザーで消滅させれば終わる。誰もがそう思っていた

だが、現実はそう甘くなかった

「な、なんだと・・・!!」

「嘘・・・生きてる・・・」

「そんな・・・」

「嘘や・・・こんなの嘘や!!」

闇の書の闇は・・・健在であった。更に、その姿は先の姿よりより

動物的に、寧猛に変化していた

「まさか・・・まさか!!」

俺は気づいた。こうなってしまった理由に

「貴様の仕業か、マキナアアアアアアア!!!!」

そう、こんな芸当が出来るのは奴しかない。俺と夏海の最大の敵、死神マキナ

(夏海!!マキナの反応は!?)

(ある!!場所は・・・闇の書の闇の内部。)

「奴め、闇の書の闇に自身の力を注いだか!!」

「土君!!どうするの!？」

「どうするも何も、奴を・・・!!」

俺が何かを言おうとしたとき、闇の書の闇が最も大きな口を開け、そこから巨大な熱線を吐いてきた

「アーチャー、佐助!!」

「ああ!!」

「承知!!」

「I am the bone of my sword・
体は剣で出来ている」 “熾天覆う七つの円環” 《ロー・アイアス
》!!!!」

「フォトン・リアクティブ・シールド!!」

俺とアーチャーが宝具、佐助が結晶状のシールドを出し、熱戦を防ぐ。が、余りに膨大すぎる熱線を防ぎきれず、直撃してしまった

「士君!？」

「だ、大丈夫だ・・・はぁ!!」

俺は失った部分を再生させ、なのはたちの元に戻った。佐助とアーチャーは直撃こそしたものの、身体のどこかを持っていかれることは無かったので良かった

「どうするんだ？さっきのでもう魔力もすっかりかんだ。」

「私達ももう魔力は残ってないの。」

「私ももう投影はおろか強化もできん。」

「万事休す・・・だな。」

「いや、まだ手はある・・・最後のな。」

俺は答えを出す者を^{アンサー・トーカー}使って手段を探した。そして、見つけた。・・・
本当の最終手段を

「最後の？」

「ああ、最悪次元世界全てを滅ぼす本当の最終手段だ。」

「な!?そんな危険なものを使わせるわけには!!」

「だがこれしか方法はない!!それにこのまま奴を放っておけば結果は変らん!!」

「なら本局から次元艦隊を!!」

「無駄だ!!今の奴にはアルカンシエルがいくらあろうと効かん!!」

「そんな・・・」

「だからだ。今から俺が行う術も、制御さえ出来れば周囲2キロを吹き飛ばす程度で済む。」

「・・・制御に成功する確率は？」

「大目に見て・・・ざっと10パーセントだ。」

その言葉を聞いた全員が驚いた。俺が行おうとしているのはとんでもない大博打だからだ

「・・・皆がやめさせたいのはわかる。だが、これしか方法は無いんだ、頼む。」

俺がそういう。しばらくの沈黙の後、なのはが話し始めた

「・・・わかったよ。」

「え!？」

「なのはちゃん、本気なん!？」

「うん、土君を信じようよ。確かに私だってやめさせたいよ。でも、土君ならきつと・・・きつとやってくれるって信じてるから。」

なのはがそういうと、フェイトを始めに皆が後に続くように言った

「・・・私も、私もお兄ちゃんを信じるよ。」

「・・・うちも、うちもや。」

「うん、私も。」

「私も土を信じよう。」

「それしかないなら一発やっちまおうぜ!！」

「大丈夫、皆信じてますから。」

「ここはやるしかないだろ。」

「士ならできるよ。」

「大丈夫だよ、士なら!！」

「お前ならやってくれるだろう。」

「好機は今のみ。やってやれ。」

「士、お前なら、きつと。」

「不本意だが・・・やってやれ。」

「みんな、ありがとう。・・・行くぞ、これが俺の最後の攻撃だ！
」

そついつて俺は、詠唱を始めた

「闇よりも尚暗き存在、夜よりも尚深き存在、混沌の海にたゆたいし、金色なりし闇の王、我此処に汝に願う、我此処に汝に誓う！！」

突き出した右の掌に、闇が集まる

「我が前に立ち塞がりし、全ての愚かなる者に、我と汝が力持て、等しく滅びを与えんことを！！！！」

集まった闇を掌に収束させ、球体の物体をつくり、それをもって闇の書の闇に突撃する

「うおおおおおおおお！！！！ギガ！！！！スレエエエエエ
エエイヴウウウウツツツ！！！！！！！！」

その瞬間、世界が光に包まれた

士 s i d e e n d

三人称 s i d e

「う．．．ここは．．．ハッ！！土君！！」

皆が気絶している中、なのはだけが起きた。なのはは闇の書の闇があつた場所を見た。そこには、気絶した土がいた

「土君！！」

なのははそういつて土になけなしの魔力を使って飛行魔法を使い、近づこうとした。だが

ゴゴゴゴッ

「！？なんなの！？」

突如として次元震が発生、更に併発して次元断層が現れた。それも、土のいる場所に

「間に合つて！！」

なのははそういつて飛行魔法の速度を上げ、なんと少しでも土を助けようと手を伸ばす。が．．．間に合わなかった

「嘘．．．」

土は次元断層に飲み込まれてしまった。そしてその直後、次元断層は閉じた

「嘘だ．．．こんなの嘘だよ．．．」

なのはがそう言つても、世界は変わらない

「士く――――ん!!!!!!!!!!」

なのはの悲痛な叫びは、誰にも聞かれることなく、空に消えていった

21話 最終決戦、そして・・・（後書き）

作者「えー、今回は土が消えてしまったので私だけでやらせてもらいます。まずはラハール様、ディステニープラン様、感想どうもありがとうございます。プレゼントのほうですが、土が舞い戻ってきた時に一気に紹介したいと思いますのでそれまでご了承ください。それと今回なのはたちが使った魔法などの説明をさせていただきます

インフェルノバスター

燃える天空とディバインバスターを融合させた砲撃。着弾地点に凄まじい爆発を起こす。威力はスターライトブレイカーと同等

ライトニングディザスター

雷で出来た彗星状の魔力の塊を落とす魔法。物理ダメージと魔力ダメージの両方を併せ持つ。威力はプラズマザンバーブレイカーと同等

ジャッジメントブレイカー

自身の魔力を右腕に纏わせて放つ収束砲。習得自体は簡単。威力はスターライトブレイカーの約3倍

プラズマハーケンブレイカー

ザンバーフォームがまだ無いフェイトが放った収束砲。威力は実はこっちのほうが大きい

こんな所ですかね。佐助が使った怪獣の技に関してはスペースゴジ

ラ、デストロイアで検索してください。では、今回は此処までいたします。次回も楽しみに」

22話 混沌の海、そこで出会っは・・・

「う・・・こ・・・こは・・・どこ・・・だ・・・？」

俺は混濁する意識の中、周りを見た。そこには、混沌とした海のようなもの、そして、そこに立っているいくつもの杖のようなものであった

「どこなんだ・・・ここは・・・」

「此処は混沌の海。全ての始まりの場所。」

急に後ろから声が聞こえた

「っ！？だれだ！！」

そっいつて俺は後ろを向く。そこには、鎌を持った金髪の女性、いや、少女とも取れる人が立っていた

「我は金色の魔王、ロード・オブ・ナイトメア。」

「な、なんだと！？」

俺は驚いた。金色の魔王、俺が闇の書の闇を消滅させるために使った最強最悪の黒魔術、ギガスレイヴの力の根源であるのだ。そして、全ての母、神や悪魔、果ては世界の生みの親である。そのような者が俺の目の前にいるのだ

「なぜ、金色の魔王が俺に？」

「汝は私の力を正しく行使できた二人目の人物だからだ。破壊のためでなく、大切なものを助けるために・・・」

金色の魔王はそこまで言って黙った。そして、ある問いを俺に聞いて来た

「汝よ。汝は彼らのために、これからも戦う意思はあるか？」

俺はそう聞かれて、当たり前のように答えた

「当然、あるに決まっている！！俺の願いは、あの世界を、なのはたちを救うことだからな！！」

「ふっ・・・やはり汝は我の見込んだとおりの者だ。」

「それはどういった意味だ？」

「汝なら、マキナを・・・我が息子を救ってくれる。そう思っただけだ。」

「そうか・・・」

俺はそういつて金色の魔王を見た

「汝よ、これから汝に我が力の全てを譲渡する。」

「なんだよ、急に。」

「この混沌の海から出るには、我の力を持つしか方法は無い。代償として不老不死になってしまうが。」

「そうなのか・・・わかった。その譲渡を受ける。」

「ならばこの力を受け取れ。」

そいつって俺は金色の魔王の力を受け取った

「これは・・・凄まじいな。」

「さよう。我が力は創造神と同等。そして汝はその力を全て受け取ったのだ。」

「と、いうことは・・・まさか俺も神に？」

「さよう。汝は創造神として、この混沌の海の主として、無限の時を生きることとなる。」

「まじか・・・まあ、既に受け取ったんだから文句は言えないな。で、あんたはどうなるんだ？」

「汝がここから出た時点で我は人として転生する。この記憶は持っていくがな。」

「そうか、わかった。それと、今すぐあの世界に戻ることは？」

「出来ぬ。あの世界に戻るにはあの世界で10年、此方の世界で10000年の時が経たねば戻ることは出来ぬ。」

「なんとまあ・・・長いことで。」

「だが、その他の世界なら話は別。今すぐいける。」

「ということは、別の世界を回って、10000年の間過ごせということか？」

「さよう。10000年の時という長い時を旅するのは辛い。だが、その分得られるものも多いだろう。」

「得られるものか・・・よし、行つてやろうじゃないか!!」

「そうか・・・なら、扉を開こう。」

そういつて金色の魔王は1つの扉を出した

「我の最後の力を使って出した扉だ。これを通れば新たな世界に向かうことが出来る。」

「何から何までありがとうよ。じゃ、行ってくるわ・・・母さん。」

「気をつけて・・・我が息子よ。」

そして、俺は新たな世界に足を踏み入れた

22話 混沌の海、そこで出会つは・・・（後書き）

作者「さて、士が戻つてきたので前回の続きと行きます」

士「えーと、ラハール様からD↓A：BLACK（ディーエー：ブラック）の主人公の新城灯夜の鎌を、ディステニープラン様からガンダムOO「武力介入できないCB」全話が入ったBD、マリオシリーズのBGM全部が入ったCD、糸色望の衣装（俺宛て）、8時だヨ！全員集合！全話（？）が入ったBD、グラハムガンダム阿修羅スペシャル（詳しい事はわからないが、多分グラハムとフラッグファイターの皆さんが描く熱血ストーリー。どんなストーリーかは…ご想像にお任せします。）、ヴァルクのカードか・・・グラハムガンダム阿修羅スペシャルってなんだよ・・・」

作者「恐らくは・・・あれじゃね？グラハムがもしガンダムマイスターだったらの感じの」

士「うわーお、あつてはならん作品第一位を取りそうだな・・・」

作者「そういうなよ。それじゃ、今回は此処まで」

士「次回をお楽しみに」

作者「あ、土がどんな世界に行ったかは番外編でいずれ出します」

StrikerS編キャラ設定

流 士

性別 男

年齢 無し（創造神であるために時間の概念が無い）

身長 180cm

体重 50kg

好きなもの 宝具、なのは達、ガンダム、アーチャー、アサシン、アリエル（夏海）

嫌いなもの 管理局の腐った上層部、KY、マキナ

容姿 見た目は早い話が『新ゲッターロボ』の流 竜馬。他人の言うことはあまり聞かない（管理局の言うことは決して聞かない）が、なのは達の言うことは何時も聞いている

魔力光 漆黒（黒よりも更に黒い）

創造神のミスにより殺され転生したこの作品の主人公。転生前は公立の高校に通いながらリリカルなのはやFate/stay night、真ゲッターロボ^{チェンジ}、世界最後の日、各ガンダム作品にマジンカイザーなどのアニメを見ながら生活していた。そしてツタヤにDVDを返した帰りに事故にあい死亡、その後神のミスと知り転生する。転生後は神から授かった能力でなのは達と共に行動を開始する。

現在は自分を転生させた神であるアリエル、アリエルが召喚したア
ーチャーとアサシン、そしてフェイト・テストロッサとその姉であ
るアリシア・テストロッサと共に生活している。Strikers
では、金色の魔王の力を継承し、創造神となる。常に強固なりミッ
ターをかけており、不用意な力は出せない。自身でリミッターは解
除できる

F a t e式ステータス

筋力 A (G O D) 魔力 ∞

耐久 B + (G O D) 幸運 C + (G O D)

俊敏 A (G O D) 宝具 E \ E X

() 内はリミッターを解除した場合

希少能力

メタモルフォーゼ

効果 自分の知っているロボット、M S、M Aになることが出来る。
一部分のみ変化させることも出来るが少々扱いにくくなる。変化中
は常に魔力を消費し、攻撃時に追加で消費する。最大で原寸大まで
巨大化できる(その分消費する魔力量は増加する)

仮面の軍勢

効果 クウガより後の仮面ライダーなら全てなれる。(サブライダ
ーも含めて) 何かしらの条件が必要なものでも難なく使うことがで

きる。ベルトを他の人につけることもできるがその場合条件を満たしていないと変身できない。ベルトの召喚に魔力を消費するがその後の使用に魔力は必要ない。各最強形態にもなれる

この手に集いし魔法

効果 自分の知っている魔法や魔法のようなもの、能力がすべて使える。正直言つてこれだけでも世界最強になれる。ただし『とある科学の超電磁砲』の超能力に関しては使えない

トレース

効果 かつて正義の味方を目指した性格破綻者の固有結界の進化版。これは自分が名前と形を知っている物を創ることができる。だが一度の創造に使う魔力の量が半端ではない。（1回の使用で機動六課のフォワードと隊長陣全ての魔力を消費する）これを連続で使えるのは士の魔力が無限だからこそである。ただし人を創り出すのは世界の理に反するので不可能

王の財宝

効果 この世の全ての財を手に入れたといわれる最古の英雄王の宝具。その中には無限とも取れる量の宝具の原典が収納されている。中に収納されているのは原典だけではなく、何故か金や食材、調理器具などありとあらゆるものがある

答えを出す者

効果 全ての問いに対する答えが『思いつく』スキル。アカシックレコードの一端と繋がっているとも言われている

超速再生

効果 どんな傷だろうと一瞬で直してしまう再生力をもつ。頭だろうと臓器だろうと再生できる。殺すには存在から消滅させる必要がある

鋼の身体

効果 土の守りの要といっても過言ではないスキル。その防御力は熾天覆う七つの円環をも超える
ロー・アイアス

直死の魔眼

効果 存在する全ての物質の内包する死を点や線として見る事ができる。線を切ればそこが死に、点をつけば存在そのものが死ぬ。本来は使いすぎると廃人に近い状態になってしまうのだが、土の場合は永遠に発動していられる

エレクトロマスター

効果 ありとあらゆる電気を操ることが出来る。金属に電気を纏わせてレールガンとして発射することも出来る。最大出力で巨大な雷を任意の座標に落とすことが出来る

ハイデライトウォーカー

効果 真祖の吸血鬼の力を得る。通常なら不老不死化してしまうがアリエルから授かったために不老不死ではないのだが、創造神となったために不老不死となる。吸血する毎にその力を増す

召喚^{サモン}

効果 自身と縁のある人物（例えば家族、仲間など）を召喚される側の許可が出た場合のみ平行世界であるうがどこであるうが召喚できる。帰すときは転移させたように帰って行く

創造の神^{クリエイト・オブ・ゴッド}

効果 創造神としての能力。全ての平行世界の力を行使できる。その力は絶大で、世界の崩壊をいとも簡単に引き起こす。が、人の創造は世界の理に反するので不可能。蘇生は可能

幻想殺し《イマジンブレイカー》

効果 様々な世界を移動しているうちについた能力。はっきりいつて何故ついたかわからない。発動するか否かを任意で選べる

流 夏海（アリエル）

性別 女

年齢 無（創造神であるために時間の概念が無い）

身長 165cm

体重 赤く塗りつぶされている・・・

好きなもの 士、なのは達、アーチャー、アサシン、士やアーチャーの料理

嫌いなもの 管理局、KY、マキナ、士の敵

容姿 どこと無くイリヤに似ている。が、性格は似ていない。お兄ちゃん子

魔力光 純白（白よりも更に白い）

士を転生させた張本人。それでも一応創造神であるため天界での立場は最高。現在は反乱を起こしたマキナを倒すために士と共に行動している。士に対する呼び方はお兄ちゃん。この世界に来てからは士の提案で流 夏海と名乗る

F a t e式ステータス

筋力 B（G O D） 魔力 ∞

耐久 B（G O D） 幸運 B（G O D）

俊敏 B（G O D） 宝具 E→EX

（ ）内はリミッターを解除した場合

レアスキル

創造の神
クリエイト・オブ・ゴッド

効果 創造神としての能力。全ての平行世界の力を行使できる。その力は絶大で、世界の崩壊をいとも簡単に引き起こす。が、人の創造は世界の理に反するので不可能。蘇生は可能

うっかり

効果 言わずと知れたある意味最悪なスキル。全てのことをそつなくこなし、ここ一番というところでミスをしでかす。その力はもはや呪いレベルである

23話 再会、そして新たなる始まり（前書き）

作者「さあ、始めましたStrikers!!!ここから士無双伝説が始まります!!!」

士「これまで呼んでくれました読者の皆様、新たに読みはじめてくれました読者の皆様、これからもどうも宜しく願います」

作者「では、魔法少女リリカルなのは　くチート？何それおいしいの？くをお楽しみください!!!」

23話 再会、そして新たなる始まり

士side

「ようやくだ・・・ようやくこの日がきた・・・」

あの日から10000年、俺は様々な世界を渡り歩いてきた。スレイヤーズ、BLEACH、ONE・PIECE、めだかボックス、Fate、C'E、U'C、クウガ、アギト、龍騎、ファイズ、ブレイド、響、カブト、電王、キバ、ディケイド、ダブル、ネギま、ゼロの使い魔、バカとテストと召喚獣、とある科学の超電磁砲、とある魔術の禁書目録、など、数多の世界を

「さあ、帰ろう。皆の下に・・・」

そして、俺は混沌の海から消えた

士side end

三人称side

ここは第一管理世界、ミッドチルダの山岳地帯。現在此処で、激しい戦いが行われていた

「はああああー!!!リボルバー、シュート!!!」

「ヴァリアブルシュート!!」

次々と現れる敵、ガジェットを倒していく二人。既に倒した数は50を超えていた

「ティア、管制室が見えたよ!!」

「わかってるわよバカスバル!!」

「ううゝ、バカは無いでしょ!!」

「そんなこといいから前見なさい!!」

「え?うわあああ!?!」

二人のうち、スバルと呼ばれた少女がガジェットの残骸につまずき、盛大に転んだ

「もう、なにやってんのよ!!」

ティアナと呼ばれた少女が、スバルを起こす。その顔は怒りと焦りで染まっていた

「ごめん、ティア!!ちゃんとやるから!!」

スバルはそういつて、管制室に繋がる扉を壊した

「レリックは・・・あそこ!!」

ティアナは管制システムと一体化したロストログア、レリックを見つけた

「よし、これをとって・・・」

「待ちなさい!!衝撃を与えたら爆発するってなのは隊長に言われ

たでしょ!!」

スバル

「あ、そうだった!! 危ない危ない・・・」

ティアナはそういつてスバルを止める。そう、レリックは衝撃を与えると凄まじい爆発を起こす。その威力は空港を1つ吹き飛ばすほどである

「爆発しないように封印して・・・と、これでもう大丈夫ね。」

「やったー!! これで終わったー!!」

両手を挙げて喜ぶスバル。だが、その隙に近づく影に気づけなかった

「っ!! スバル、後ろ!!」

「え？」

そういつてスバルが後ろを向いた時には既に、ガジエットのアームが振り下ろされていた。ティアナが魔力弾を撃とうとするも、既に魔力はバリアジャケットを維持するだけで精一杯。魔力弾を撃つほどの余裕はなかった。そして、そのアームはスバルに・・・

ガキイイイイイン

振り下ろされなかった。アームは、赤い腕を持った謎の男によって阻まれた。その腕には3つの鋭い刃が付けられていた。そしてその腕は、ガジエットに向かって振り下ろされた。直後、ガジエットが真つ二つに切り裂かれ、爆発した

「ふう・・・大丈夫か？」

「あ、はい!! 助けてくれてありがとうございます!!」

「なに、当然のことをしたまでだ。」

「あの、名前を聞いてもいいですか？」

「ん？ああ、いいぞ。俺の名は・・・流、流 士だ。」

「あの、その腕は・・・」

「ああ、こいつか？これは俺の能力だ。」

そういつて士は真ゲッター1のものとなった右腕を元の腕に戻した

「！！・・・レアスキルですか？」

「まあ、そんなところだ。それと、周りに敵が集まりだしてきたが
いいのか？」

士がそういつと、ティアナとスバルは辺りを見回した。周りには、
100を超える数のガジェットがいた

「流さん、ここは私達が。」

「何を言う。君たちの魔力はもう枯渇寸前だろう、ここは俺がやる。
う。」

「でも、民間人に・・・」

「気にするな。これは俺の自己満足のための戦いだ、二人が気にする
ことは無い。」

士はそういつて二人の周りに王の財宝から出したアヴァロンを展開
した

「これは！？」

「防御結界のようなものだ。その中にいれば安全だ。さて、この世
界での久々の戦いだ！！メタモルフォーゼ・・・ガンダムエクシア
！！」

その瞬間、土の身体を光が覆い、青と白を基調としたロボット、ガンダムエクシアへと変化した

「さあ、蹂躞の始まりだ!!」

土はそういつて、右手に握るGNソードを振るってガジェットを切り飛ばした。それを見た他のガジェットは、ビームを撃ちながら突進してきた。だが、Eカーボン製の装甲に効くはずがなく、逆にライフルモードになったGNソードで撃ち抜かれた

「その程度か!!」

土は左腰にマウントされているGNロングブレードを抜き、左手に持って次々とガジエツトを切り裂いていった

「残りは10機程度か・・・一気に決める!!トランザム!!」

その瞬間、土の身体が赤く輝き、瞬間移動でもしたかのような速度でガジエツトを切り裂いていった

「周囲に反応無し・・・もういいか。」

土はそういつて装甲を消し、アヴァロンを回収してスバルとティアナを立ち上げさせた

「おーい、どうした？」

「え？あ、すいません!!ちょっとぼーっとしてました。」

「何しとるんだか・・・まあいいや、今から二人の隊長に会わせて貰えないか？」

「あ、此方もそう考えていたんで・・・あ、来ましたよ。」

ティアナがさういうと、車体にあいた穴から一人の女性、高町なのはが降りてきた

「二人とも、大丈夫!？」

「はい!!この人が助けてくれたんです!!」

スバルはそういつて士を指した

「あの、私の部下が迷惑をかけました。」

「何、お前の部下なら助けて本望だ。」

なのははその声を聞いた途端、ありえないものを聞いたような顔をして此方を見てきた

「え・・・士・・・君・・・?」

なのはは恐る恐る聞いた。そして士は微笑みながらこういった

「ああ、10年ぶりだな、なのは。」

その瞬間、なのはは士に抱きついた

「士君、会いたかったよあ・・・ふえ、ふええええええん!!」

「おいおい泣くなって、お前の部下だって見てるだろ。」

「そんなの関係無いもん!!」

「いや、俺も動けないから。」

「ずっとこのままにいる!!」

なのはがあまりに言う事を聞かないため、士は仕方なくそのまま空

に上がった

「仕方ない、このまま向かうか・・・なのは、ヘリは何処だ？」

「あそこだよ。ほら、フェイトちゃんが・・・」

その瞬間、士は強い衝撃を感じた。そう、フェイトが突っ込んできたのだ

「お兄ちゃん、お兄ちゃんなの!？」

「フェイト、いきなり突っ込んでくるなよ。」

「だって、だって・・・うわああああああん!!」

フェイトも泣き出してしまい、遂に収拾がつかなくなってしまった

「はあ・・・このまま乗り込むか・・・」

士はそういつてヘリに乗り込んだ

三人称 side end

士 side

俺は今、非常に困っている。なぜかというと

「ねえフェイトちゃん、なんで士君にくっついてるの?」

「なのはこそ、どうしてお兄ちゃんに抱きついてるの?」

なのはとフェイトが黒いオーラを出しながら俺に抱きついてるのだ。これでは身動きひとつ取れない

「なあ、俺動けないんだけど・・・」

「絶対離さない!!」

「はぁ・・・」

「あの、流さんとなのはさんとフェイト隊長はどんな関係なんですか？」

「私と土君は友達で、フェイトちゃんと土君は兄弟なの。」

「え！？そうなんですか!？」

「うん、アリシアもだよ。」

「アリシアもこっちにいるのか？」

「うん、いまは私達の部隊、機動六課のロングアーチ・・・って言うてもわからないよね。向こうについたら説明するよ。」

「夏海とアーチャーとアサシンは？」

「三人とも機動六課の民間協力者として手伝ってくれてるよ。」

「そうか・・・なら、俺が手伝わないってわけにはいかないな。」

「え？お兄ちゃんも手伝ってくれるの？」

「当たり前だ、お前達の部隊だろ？それを手伝わないでどうするんだよ。」

「にやはは、土君は全然かわってないね。」

「そう言うな。俺にとってはあれからの10年間は一瞬なんだよ。」

「あのときかぁ・・・あんまり思い出たくないね。」

「私はそのとき気絶してたから何があったか知らないけど、何があったの？」

「まあ色々だ。つと、見えてきたんじゃないか？」

「うん、此処が私達の部隊、機動六課だよ。」

「なんとまあ豪勢な・・・金かけすぎじゃね？」

「気にしちゃだめだよ。」

「へいへい。」

そして、俺は機動六課へと降り立った

「高町なのは一等空尉、入ります。」

「同じく流フェイト執務官、入ります。」

なのはとフェイトはそういつて部隊長室に入る。俺はその前で待つこととなった

「二人とも、今回の出勤ご苦労様や。怪我とかしとらん？」

「はやてちゃん、心配すぎだよ。大きな怪我は無いよ？」

「本当？なのはちゃんは直ぐ無理するんだから。」

「フェイトもだよ？」

「わかってるよ、姉さん。」

「それじゃあ二人とも、今回の報告ええか？」

「うん、リニアールは少し壊れちゃったけどレリックは確保できたよ。それと、一人保護した・・・っていうか、一緒に来てもらった人がいるの。」

「誰や？その人。」

「いま入ってもらっよ。もう入っていいよ。」

なのはの呼び声に答えて部隊長室の中に入る。ちょっとした悪戯をして

「あれ？どこいったの？」

「どうしたんや？」

「ついてきてもらったはずなんだけど・・・」

「ここだ。ここ。」

そういつて俺はミラージュコロイドをはやての後ろで解除する

「え．．．士君．．．？」

「お兄ちゃんなの．．．？」

「お兄ちゃん．．．？」

「ああ、10年ぶりだな。」

そういつた瞬間、三人が泣きながら抱きついてきた

「もう．．．もう会えないかと思つとつた．．．うわあああああ
ん！！」

「お兄ちゃん．．．良かった．．．ふええええええん！！」

「もういなくならないでよ．．．わああああああん！！」

「もういなくなったりしねえよ、だから大丈夫だ。」

俺がそういつと三人は一層大泣きした。なのはとフェイトも目じりに少し涙が溜まつてる

「なあ、もうそろそろ離れてくれないか？此処の説明も聞きたいんだけど。」

「ははっ、そうやな。」

そういつて三人は俺から離れ、はやてが説明を始めた

「ここはウチの部隊の機動六課や。主な仕事はロストロギアの搜索、封印、確保、それとレリックの確保や。」

「ロストロギアね．．．実際これもそれもロストロギアなんだけどな。」

俺はそういつてスネークとザ・ボスを指す

「え？反応ないけど・・・どういうことや？」

「色々とプロテクトをかけてるから反応が無いんだ。ロストロギア7個分の反応を消すのは苦勞したわ。」

「そのこと知ってる人おるん？」

「リンディとクロノが知ってるはずだな。あとエイミイも。」

「まあ土君のことやし、悪用はせんやろ。」

「嬉しいことで。で、他に何か言いたそうな顔してるけど、何か？」

「流石土君、わかってたか。実はな、ウチの部隊に協力して欲しいんや。」

「やつぱそれか。言うまでも無いが、協力させてもらうぞ。」

「土君、ありがとうな。」

「それはどうも。あと、海鳴から幾らか持ってきたものがあるから置く場所を確保して欲しいんだけど？」

「何を持ってくるつもりや？」

「俺の家に置いてある様々な機器。それと戦艦。」

「ミネルバ持って来るの？」

「ああ、10年も経ったから劣化してるかもしれんからこっちで修復する。」

「ハ口積んでるんじゃないの？」

「ハ口でも出来ない所があるからそっちの修理も含めて。いいかはやて？」

「大丈夫やと思うけど・・・ミネルバってあの艦やろ？此処まで持つてくるのに時間かかるんじゃない？」

「それは大丈夫。トランザムを使いまくれば2時間でつく。」

「2時間で・・・無茶苦茶やな。」

「それが俺クオリティー。俺に不可能なことはない。」

「ほんまそうやな・・・ほな、改めて宜しくな、土君。」

「ああ、此方こそ宜しくな、はやて。」

俺ははやてと握手をした。ここから、俺の新たな物語が始まった

23話 再会、そして新たな始まり（後書き）

作者「ようやくStrikersに入れたー!!」

士「無印からずっと書いてきたから大分時間がかかったな」

夏海「駄作者にしてはほんとがんばったよね」

作者「結局俺の呼び名は駄作者かい・・・まあいいや、今回はさつさと進むわ。ディスティニープラン様、感想どうもありがとうございます」

士「ディスティニープラン様から西川貴教（T・M・Revolutionとabingdon boy school）が歌った曲全部が入ったCD、ハイン専用ザクファントム（全ウィザード付き）（アーチャー宛）、ハイン専用グフイグナイトッド（夏海宛）、ハイン専用ディスティニーガンダム（俺宛）、ミゲル専用ジン（全装備とビームカービンと斬機刀付き）（アサシン宛）、ミゲル専用ストライク（全ストライカーパック付き）（もし最初にミゲルがストライクの奪還に成功していたらという前提で想像して作ってみた。ただオレンジ色を基調にしてみましただけですよ。）（作者宛）が届いてるぞ」

夏海「見事にザフト一色・・・連邦一色よりはいいね」

士「俺も同意見。連邦は腐ってる」

作者「二人とも、愚痴はそこまでな。それと今からアンケートを実施します」

士「アンケート？なんのだ？」

作者「士が10000年の間にいった世界を番外編で出すから出して欲しい世界を集計します。どしどし送ってください」

夏海「前にやったアンケートの結果は？」

作者「あれは番外編の一番最初にやるやつ。今回は二つ目以降の世界」

士「作者、もうそろそろ時間だぞ」

作者「まじか。読者の皆様、アンケートにご協力お願いします」

「」では、次回をお楽しみに！」「」

24話 力とは何なのか・・・（前書き）

自分で書いといてなんですが相当なグダグダ感です

24話 力とは何なのか・・・

士 side

「さて、今日は確かFWと顔合わせだったな・・・」

あれから二日、俺は機動六課の民間協力者として働くこととなった。まあそうはいつでもやることは出勤時に一緒に出たりするだけなので基本はやることがないが。それと俺は一度地球に戻った。理由は簡単、ミネルバを取りにいくためだ。あれは他の次元世界に赴く時に非常に役に立つ。ミラージュコロイドやゲシュマディツヒ・パンツァー、ハイパージャマー、ヤタノカガミ、更にはGNフィールドまで装備したこの艦は非常に防御力と隠密性が高い。故に宇宙海賊（この世界にもいました）や次元犯罪者などの襲撃を受けても大丈夫なのだ。更にこの艦はトランザムシステムを搭載してるため洒落にならないほど足が速い。通常なら何日もかかる航路をたったの2時間で終了させるほどだ。とんでもない速さである。まあこれが地球に戻った理由だ

「で、どっちなんだよ・・・訓練場・・・」

そして今は絶賛迷子中である。アニメでもそうだったがこの機動六課は入り組んでいて初めてきた者が迷子にならずに移動できるような建物ではなかった

「どうしたものか・・・」

「あれ？どうしたんですか？」

突如耳元から声が聞こえたのでそちらを振り向いてみると、其処に

はぶかぶかと浮いている少女がいた
う

「ん？妖精？」

「妖精じゃないです！！私にはリインフォース・？《ツヴァイ》って名前がちゃんとありますー！！」

「おお、そうか、すまん。リインフォースってことはやてのユニゾンか？」

「そうです！！私にはやてちゃんのユニゾンです！！」

「そうかい。で、リインはどうしてここに？」

「なのはさんがきつと迷子になってると思うから迎えについていたので来ましたです。」

「きつと迷子につて・・・わかってんなら連れてけや。」

「まあまあ、なのはさんも忙しいんですから。」

「はぁ・・・」

その後、俺はリインと談笑しながら訓練場に向かった

「ういーっす、迷子到着しましたーっつと。」

「土君、遅かったね。」

「迷子じゃ。てかなりそうなのわかってんなら連れてけや。」

「にやはは、まあ此処まで来れたんだから結果オーライってことで・・・」

「・・・今度モンスターワールドに一人で放り込んでやる。」

「にゃ！？それだけはやめてー！！」

「あ、あのー・・・なのはさん？」

「はっ！！・・・コホン。えーと、今日から機動六課に民間協力者

として協力してくれる流 士君です。」

「流 士だ。ま、宜しく頼むな。」

「それじゃ、みんなも挨拶して!!」

「スターズ4、スバル・ナカジマ二等陸士です!!あの時はどうもありがとうございました!!」

「スターズ5、ティアナ・ランスター二等陸士です。あの時は助けていただいてありがとうございました。」

「ライトニング4、エリオ・モンディアル三等陸士です!!宜しくをお願いします!!」

「ライトニング5、キャロル・ルシエ三等陸士です!!宜しくをお願いします!!で、この子がフリードリヒって言います!!」

「キユク〜!!」

「ああ、よろしくな。それとなのは、隊長陣は4人じゃないのか？」

「うん、この前は出張で2人いなかったんだ。で、今日帰ってきたから今紹介するね。入って来ていいよ!!」

なのはがそういうと、訓練場のドアから二人、在り得ない人物が出てきた

「スターズ3、キラ・ヤマト二等空尉です。宜しくをお願いします。」

「ライトニング3、アスラン・ザラ二等空尉です。宜しく。」

「・・・あ、ああ。宜しく。」

キラ・ヤマトとアスラン・ザラ。いる筈のない二人がいた

「それじゃ、いきなりだけど士君、模擬戦できる？」

「できるが、誰と？」

「キラ君たちと。」

「それにFWも追加するのならやろつ。」

「え!?!6対1でやるんですか!?!」

「ほんとに勝負になるんですか？キラ副隊長達もいて。」

「問題ない。何なら無傷で勝利してやろう。」

「じゃあ、みんな訓練場に行ってね。シャーリー！！」

なのはがそういうと、後ろのほうから一人の女性が出てきた

「誰？」

「機動六課所属のデバイスマスターのシャリオ・フィニーノです！！気軽にシャーリーって呼んでください！！」

「あいよ。で、訓練場ってあの更地か？」

「そうだよ。でも、まだセッティングが終わってないから此处で見えてね。」

「ふっふっふ・・・機動六課の最新技術をご覧あれ！！」

次の瞬間、何も無い更地に荒廃した都市が現れた

「ほう、質量を持ったホログラムか。中々だな。」

「そうです！！苦労の末に開発した私の自信作です！！」

「流石だな。」

「土君、もうそろそろ始めたいから皆の所にいつてくれる？」

「了解。それと、事前に言っておくが・・・医務室用意しとけ。」

俺はそういつて訓練場に向かった

「なのはさん、最後のどういう意味ですか？」

「・・・シャーリー、結界の強度最大にして。」

「え？どうしてですか？」

「きつと土君・・・暴れると思うから・・・」

「？良くわかりませんけどそうしておきますね。」

士 side end

三人称 side

「さて、そっちは準備できてるのか？」

「ええ、いつでもいいですよ。」

現在、訓練場には士とFW陣、そしてキラとアスランの7人が立っている。これから模擬戦を行うために

「なのは、合図を頼むぞ。」

「わかったよ。それじゃ、皆散らばって!!」

その声とともにキラたちが訓練場内に散らばった。そして

「それじゃあ、スタート!!」

なのはの合図を皮切りに、模擬戦が始まった

「さて、デバイスはハンデとしてしまっておくか。」

士はそういつて王の財宝の中にスネークをしまった

「まずはFW陣から仕留めていくか。」

士はそう言いながら訓練場の奥へと歩いていった。そして、それを見ている人物がいた

「ティア、あの人デバイス使ってないよ？」

「見ればわかるわよ。でも、どうしてかしら？」

「もしかして、壊れてるんじゃない？」

「そうなら模擬戦なんてやらないでしょ！！まあいいわ、此処から攻撃してみるわ。」

スバルとティアナであった。ティアナは此処から士を攻撃しようとしているようだ。だが、それは大きな間違いである

「ヴァリアブル・・・シュート！！」

ティアナが魔力弾を一発撃ち込む。それはまっすぐ士の頭を目掛け進み、そして捉えた

「やった！！手ごたえ有り！！」

ティアナはそう喜ぶが、その直後にありえないものを見た

「え！？うそ・・・効いてない！？」

ティアナのはなった魔力弾は確実に士の頭を捉えた。だが、ダメージが全く入っていないのだ。士の頭は10年前からそうだが、拳銃の弾丸程度なら軽く弾き飛ばすほどの硬度があるのだ。そして拳銃の弾丸にも劣る威力の魔力弾など、当たった所でダメージなど入るわけがないのだ

「ほう・・・あそこに隠れてるのか。なら、燻りだしてやろう。」

士は、ティアナとスバルが隠れている場所を見ながらそういった。そして、右手を向け、一言、呟いた

「エクセレス・ザケルガ」

その瞬間、×字型の巨大な雷が二人に向かって発射された。二人は急いでその場から離れ、次の行動に出た

「溜め無しであの威力・・・化け物ね。」

「ティア、どうするの!？」

二人はそう言いながら走る。が、その行動も無駄に終わった

「逃がさんぞ？」

「「!？」」

「魔法の射手、連弾、サギタ・マギセリウス雷の1000矢」フルグラリス

二人の前方から1000の雷の矢が放たれる。二人は突如現れた土に驚きながらも雷の矢をかわしていく。が、全てをかわせる訳がなく、その身に幾らか喰らっていた

「ほう、これを受けていまだに立つか。流石なのは、選んでくる奴の素質がいいな。」

そういつて二人に近づいていく。接近する反応を無視しながら

「だが、まだまだ甘い。やるなら一撃で仕留めようとしろ。」

「甘いのはどっちでしょうね・・・エリオ!!」

その瞬間、土の右側からエリオが突貫してくる。土はそれを見て、こういった

「ふう、だから甘いといったろう。」

そして、エリオの持つ槍型のデバイス、ストラーダが土に直撃する

「ふっ、これで私達の勝ち——！？」

ティアナがそれから先を言おうとした時、ティアナの横を何かが飛んでいった。それはティアナに掠り、後ろにある廃ビルに激突した

「・・・これで一人撃墜、いや、死亡だな。」

土は涼しい顔でそう言った。足元には気絶したエリオと、半壊したストラーダが転がっていた。ストラーダは刃の部分がほとんど砕けており、戦闘は不可能なレベルまで壊れていた

「さて、次は貴様らの番だ、ティアナ・ランスター、スバル・ナカシマ。」

そういつて土が二人に近づいていく。が、あとほんの数メートルという所で止められた

「ほう・・・貴様らか、キラ・ヤマト、アスラン・ザラ。」

目の前には、青と白を基調としたMS、ストライクフリーダムと、赤を基調としたMS、インフィニットジャスティスになったキラとアスランがいた

「僕らだって模擬戦の相手ですよ。」

「それに部下がやられるのを見過ごすわけにもいかないからな。」

「ふっ・・・そうか、なら、此処で部下がやられる姿をただ見てい

るがいい。縛道の六十三、六条光牢。」

その瞬間、キラとアスランの身体に六枚の光が刺さる

「くっ、これは!？」

「動けないだ!？」

「これはバインドのようなものだ。あとは・・・レストリクトロック、ルベライト、ライトニングバインド、チェインバインド、リングバインド、ストラグルバインド、フープバインド、追加で天の鎖、そして最後にクリスタルケージと・・・これだけ縛れば動けまい。」

士は即席で使えるだけの捕縛魔法を使い、更にその上からエルキドゥで物理的に縛り、その上にケージを張って完全に動けなくした

「さて、まずはFWを落とすか。仮面の軍勢発動・・・」

士の腰にベルトが、手に携帯が出現する

555——Standing by——

「変身」

complete——

その瞬間、士の身体に赤いラインが入り、光りだす。そして、光が晴れた其処には、φを模した仮面を付けた戦士、仮面ライダー555が立っていた

「さあ、早々にやられるなよ?」

そういつて士はスバル達目掛け走り出した

「はあああああ!!」

「おらあ!!」

士とスバルの拳がぶつかり合う。が、士にダメージはなく、スバルだけにダメージがいった

「まだまだいくぞ!!」

そういつてスバルに追い討ちをかけるため、駆け出す。が、後方から複数の魔力反応を感じ、士はその場に止まった

「これは・・・流石、というのか。」

魔力反応の中心に、ティアナが立っており、その周りには20ほどの魔力弾が浮いていた

「クロスファイア・・・シュート!!」

掛け声とともに魔力弾が飛んでくる。士はそれをかわすことなく一つ一つ拳で打ち落としていった

「この程度か!!貴様らの力は!!」

「そういつていられるのも今のうちよ!!キャロ!!」

「はい!!アルケミックスチェーン!!」

その瞬間、士の足元から無数の細い鎖が現れ、士を縛った

「これでお終いよ！！ファントム・・・ブレイザー！！」
「デイベイン・・・バスター！！」

オレンジ色と水色の砲撃が迫る。士は仮面越しにそれを見ながら笑っていた

「・・・この程度で、俺が倒せると思っなよ？」

士は瞬時にアルケミックチェーンを引きちぎり、迫り来る二つの砲撃を殴り、進行方向をキャロに無理やり変えた

「きゃあああああ！！」

「キャロ！！」

「余所見をしている場合か？」

「え？」

その瞬間、ティアナの腹部に強烈な蹴りが入る。ティアナはそのまま吹き飛ばされ、廃ビルの壁に激突して止まった

「ティアー！！」

「まだ気絶していないか・・・次で決める。」

士はそういつて、右足首にミッションメモリーを挿入した円柱状の機械、ファイズポインターを装着し、左手首の腕時計型の機械、ファイズアクセルのプラットフォームからアクセルメモリーをベルトに挿入する

complete――

その瞬間、胸部の装甲が肩に移動し、全身が銀と黒で染まり、ファ

イズアクセルフォームへと強化変身した

「さあ、止めだ。」

士は、ファイズアクセルのボタンを1つ押した

S t a r t U p —

次の瞬間、士の姿が見えなくなった

「っ！？どこ！？」

E x c e e d C h a r g e —

唐突にその機械音が聞こえ、スバルとティアナの周りに無数の円錐状の赤い光が現れた

「はあ！！」

そして、それは全て二人に向かってほぼ同時に直撃した。二人は直撃を受け、声を上げることもなく気絶した

3 — 2 — 1 — T i m e O u t —

その機械音とともに、今まで消えていた・・・否、視認できないほどの速度で動いていた士が現れ、それと同時にアクセルフォームからノーマルフォームに戻った

「これであとは貴様らだけか・・・」

士はそういつて変身を解く。それと同時にキラ達を縛っていたものを全て解除した

「・・・どういことですか？」

「何がだ？」

「何故拘束を解除した。そのまま倒せただろう。」

「ああ、そんなことか。理由は簡単、それだとつまらないからだ。」
「なん・・・だと・・・？」

「俺はこの模擬戦を遊びとしか捉えてない。二度の戦争を経験したお前なら死を理解しているがこいつら・・・なのは達もそうだが此処機動六課の連中は死を理解していない。非殺傷設定などという生温い設定を取り入れていることがその証拠だ。相手を無傷で無力化できる？俺はふざけるとしか思えんな。犯罪者のほうがよっぽど利口だ、なにせ相手を殺す覚悟が出来ているからな。」

「だけど・・・死人が出ないほうが！」

「そのほうがいいだろうがそれは無理な話だ。人は常に犠牲の上に生きている。常に誰かの人生を食い潰してな。お前らだってあの戦争で一体何人の命を奪った？一体何人の人生を潰した？お前らに撃ち落されていくザフトと連合の兵士のことを考えたことは有るか？大切なものを殺された・・・キラ・ヤマトに家族と恋人を殺されたシン・アスカのことを考えたこと有るか？」

「！？」

「シン・アスカは一度目の戦争の際に家族とともにオーブから脱出する途中、キラの乗るフリーダムの流れ弾を受け、自身を除いて皆死亡した。そして二度目の戦争の際には、恋人であったステラ・ル・シェを目の前で殺された。救出直前にな。」

「そ、そんな・・・」

キラは知らなかったようで、バリアジャケットを解除してその場に崩れた

「・・・この程度か。興ざめた。」

「待て、何処に行く!!!」

「もちろんなのは達の所だが？既にキラ・ヤマトは戦意を喪失した。これでは戦おうと結果は見えてる。否、万全の状態でも結果は変わらなかったがな。」

俺はそういつて訓練場を後にする。そして、なのはの元に向かうと

「土君・・・どうしてあんなこと言ったの？」

「お前達は甘すぎる。力を持つ者の覚悟がない。あの二人なら思っただけ全然、話にもならん。」

「だけど・・・」

「なのは、俺はもう寝る。俺の言った意味が知りたければ明日ロビ―に全員集めることだ。」

俺はそういつて自分の部屋に戻った

24話 力とは何なのか・・・（後書き）

作者「ふう・・・土が悪役っぽくなってきたな」

士「誰のせいだよ」

夏海「作者の所為でしょ。作者の」

作者「うつ・・・反論できない・・・」

士「やはり作者の所為か・・・集え、紅星、全てをかき消す焰となれ」

作者「ちよっ！？それはやめて!？」

士「却下の方針で、ルシフェリオン・ブレイカー!!」

作者「のわあああああああ!!?」

夏海「お、なんか耐えてるし」

作者「こ、これ以上消されてたまるか・・・」

夏海「なら追撃で雷神滅殺、極光斬!!」

作者「うそおおおおお!!?」

士「作者が消えたか・・・それじゃ、次のコーナーに進みます。ラハール様、デイスティニープラン様、感想どうもありがとうございます」

ます」

夏海「ラハール様からツバサの黒鋼の銀竜が届いてるよ」

士「中々の存在感だ・・・やる」

夏海「デイスティニープラン様からはジンハイマニューバ（作者宛）（クルーゼ専用の色に仕立て上げてみた。）、クルーゼ専用ディン（私宛）、クルーゼ専用ゲイツ（アサシン宛）、シグー（アーチャー宛）、プロヴィデンスガンダム（お兄ちゃん宛）

、レイの戦闘データをベースにした高性能A Iを搭載させたジン×962が届いてるよ。それとアンケートはF a t e / s t a y n i g h t だつて」

士「ラウ一色かい・・・まあラウ自体は好きだからいいか。それとF a t e に一票か」

夏海「次はあれかな、シャア一色だつたりして？」

士「ありえるな。つてかもう時間か」

夏海「それじゃあ久々の次回予告！！次回 第25話 力を持つ意味」

「「ドライブ・イグニッション！！」」

25話 力を持つ意味（前書き）

大変長らくお待たせしました。これより25話の始まりです。それと、最初に言っておきます

ど・う・し・て・こ・う・なっ・た・！！？

大幅修正しました

25話 力を持つ意味

「ふああああ・・・もう朝か・・・」

そういつて俺は起きた。今日はなのは達に昨日俺が言ったことを説明してやらなきゃならない。正直言つてめんどくさいが

「んなこといつても仕方がないな。ロビーに行くか。」

俺は眠たそうにロビーに向かった

「さて、全員いるな？」

俺はそういつて周りを見渡す。ちゃんと全員来ている様なので安心した

「うん、ちゃんといるよ。」

「ならいい。さて、まず話しに入る前にお前らに問う。お前らには覚悟は有るか？」

「覚悟・・・ですか？」

「ああ、相手をいとも簡単に殺せる力を持つ覚悟があるか、それを聞いているんだ。」

俺がそういつと、皆が驚いた

「殺すって・・・」

「魔法なんて元々は相手を殺すために生まれたようなもんだ。お前らが今使ってる魔法だってやろうと思えば今すぐ大虐殺が出来るような代物だぞ？」

「でも、それを出来なくするために非殺傷設定が・・・」

「非殺傷設定なんて物を使ってるからそんなことが言えるんだ。それに非殺傷設定だろうと魔力刃を心臓とかに刺せば相手をショック死させれるぞ？これが原因で毎年何十人かの武装局員が訓練中に死んでるそうだ。」

「ちょお待ち。なんして数日前に来た土君がそないこと知つとるん？」

「んなもん本局と地上本部のメインサーバーにハッキングしたからに決まってるだろ。まあ実際10年前にも本局のほうにハッキングしたけど。」

「ハッキングって・・・犯罪でしょ！！」

「ばれなきゃいいんだばれなきゃ。それに10年前はリンディ達の目の前でやったぞ？」

そう、俺はリンディ達の目の前でハッキングを行つたのだ。まあ、その時は気配を完全に消してやったが

「まあそんなことは置いといてだ、何故俺が模擬戦のときにあんなことを言つたかだが・・・お前らが現実を見ていないからだ。」

「どういふことですか？」

「今言つた通りだ。死人が出ないほうがいい、などという甘い考えを持っている時点で現実を見ていない。キラとアスランの二人には言つたが人というのは常に誰かの犠牲の上に生きている。誰かの人生を食い潰しながら生きているんだ。」

「甘い考えって・・・」

「事実だ。第一なのは達は特にそれを知らなければいけない。この

中で最も他人の人生を食い潰しているのは達はな。」

「そんなこと!!」

「いいから聞け。お前達は魔力量も多いし才能もある、故にもてはやされてきた。そして今じゃエース・オブ・エースと謳われるまでになった。さて問題だ。これまでエース・オブ・エースと呼ばれてきた者はどうなると思う?」

「・・・!!」

「なのははわかった様だな。そう、その者たちはいままでとは違いエースとではなく一般の局員と同じ扱いになる。これまでちやほやされて来たのにそれが一気になくなる、まあなんて可哀想なことか、そいつは思うだろう、人生を狂わされたと。」

「・・・」

「わかったか? お前達は他人の人生を食い潰して生きてるんだ。その自覚を持て。」

俺はそういった後、キラ達の方を向いて話した

「そうそう、キラとアスランは自身の過去を話したのか?」

「いや、まだ話してません・・・」

「なら此処で俺が代わりに話そう。この二人が歩んできた血に塗れた人生を。」

そういつて俺は二人の過去を話し始めた

「まずこの二人は幼少の頃からの親友だとは聞いているか?」

「うん、聞いたとるで。」

「ならこの二人がコーディネーターだということは?」

「コーディネーター?」

「その様子だと聞いてないな。コーディネーターとは受精卵の状態で遺伝子操作をし、健康面や能力面で普通に生まれた——ナチュラ

ルに生まれた——もの達よりも優れた能力を持つて生まれた者たちのことだ。」

「それが・・・キラ副隊長とアスラン副隊長なんですか？」

「ああ、そうだ。しかもキラに至っては・・・数多の兄弟の犠牲の上に生まれた最高のコーディネーター、フブキ博士の開発した人工子宮で生まれた世界に二人しかいない成功例だ。」

「……………!?」「……………」

「さて、何故そのことを知っている？」

「そ、そうや!!この二人は次元漂流者やから二人の世界のことは二人しか知らんはずや!!なして知つとるんや!!」

「何故・・・か。このことは俺の空白の10年間の間に有った事が原因としか言いようがない。それにその話はまだできないしな。」

「どうして？」

「お前達を知るには余りにも酷い話なのでな、俺が言った覚悟が出来た暁には話そう。」

俺はそういつてキラとアスランの全てを話した。途中エリオとキヤ口が吐いて退場となったが気に留めなくていいだろう

「わかったな?これがこの二人の過去だ。」

なのはたちは泣きながら話を聞いていた。恐らくはこれだけ悲しい話を聞いてこのとだろう。だが、この程度で泣いたりしているようじゃ俺の過去は話せない

「うん、わかったけど、どうして私達にこの話を？」

「この二人はお前達とは違って何人も人間を殺している。故にある程度の覚悟がある。だからお前達が知ること覚悟を決める糧にしてやろうと思ったんだ。」

まあ、俺の求めてるものとは程遠いかな

「まあ今すぐ覚悟を決めろってわけじゃないから焦ることはするな。お前達はまだ若い、時間だってまだまだある、だからゆっくり考える。」

俺がそういうと、なのはたちは少し肩の荷が降りたような顔をした

「さて、こんな辛気臭い話は此処までだ。それとキラ、アスラン、模擬戦の再戦はいつでもいいぞ。」

俺はそういつて自身の部屋に戻った

「で、お前達はずっとここにいたのか？」

「うん、ロビーで話を聞くのも有りだったけどやめたの。」

「まあいいじゃないか。どうせこの後はずっと寝る気だったのだから?。」

「まあそうだな・・・。」

「まったく、久しく顔を見ないうちに老けおって・・・。」

「いや、まだ十分若いから。」

「まあそういう話は此処までにして・・・。」

そついうと、夏海の纏っている雰囲気が一変した

「お兄ちゃん、この10年の間に何があったの?」

「何があったか・・・まあ、お前達には元から話すつもりだったか

らな、今から話すよ。この10年間のことを全て・・・な。」

俺はそういつて話し始めた

「まず俺がギガスレイヴを放った直後、俺は気絶したんだ。」

「ギガスレイヴって・・・また世界を破滅に導くようなものを・・・」

「仕方ないだろ、それしか方法はなかったんだから。でだ、俺はその後、ある場所で目を覚ました。」

「ある場所？」

「ああ、其処の名は・・・混沌の海、魔術的に言えば根源だ。」

「っ！！どうして其処に？」

「恐らくはギガスレイヴを使った所為だろう。リナ・インバースも一度混沌の海に行きかけたことがあるみたいだからな。まあその時はガウリイが光の剣を犠牲に連れ戻したみたいだけど。」

「土よ、根源と言っていたが一体どういったところなのだ？」

「混沌色の海のようなものに数多の巨大な杖が刺さっている状態だな。それ以外は何もない。」

「そうか・・・凜が知ったら何を言うだろうか。」

「話を戻すぞ。俺はそこで一人の人物——と言っていいのかわからんが——と出会った。」

「まさか・・・！！」

「そう、そのまさかだ。俺が出会ったのは混沌の海の主、金色の魔王、全ての母、悪夢を統べる者。」

ロード・オブ・ナイトメア

「やっぱり・・・お姉ちゃんと会ったんだね。」

「何？お姉ちゃん？」

「うん、私とお姉ちゃんは天界で生まれた双子なんだ。で、二人そろって天界の歴史上初の天才なんて呼ばれてね、お姉ちゃんが混沌の海、私が天界、其々の管理、即ちはトップとしての役職ついたんだ。まあ、もう何千年も前の話だからあんまり覚えてないけどね。」

「それはまた新事実・・・」

「まあ話してなかったしね。それよりも続き。」

「ああ、そうだな。俺はその後、夏海の姉に問われた。『これから彼らのために戦い続ける覚悟はあるか?』と。」

「戦い続ける覚悟か・・・」

「俺はその問いに『当然だ、それが俺の願いだからな。』と言った。すると夏海の姉は笑い出し、『やはりお前は我の見込んだとおりの男だ、お前なら我が息子・・・マキナも救ってくれるだろう。』と言ってきた。」

「やっぱお姉ちゃんはお姉ちゃんだ。」

「昔からこうだったのか?」

「うん、他人の本質を見抜くのがすごく上手かった。」

「へえ・・・でだ、直後に俺は『今からお前に我が力の全てを継承する。』と言われたんだ。」

「!？」

「まあそうなるよな。俺は混沌の海から脱出するためにもその案を承諾し、全ての力を継承し、新たな混沌の海の主となったというわけなんだ。」

「・・・お姉ちゃんはどうなったの?」

「記憶を持ったまま人間に転生すると言っていた。恐らくはどこかで平穩に暮らしてるだろ。」

「そう・・・良かった・・・」

「黄昏るのはいいがまだ話は続くぞ?俺はその後直ぐにこの世界に入れるか試した。が、いくら進入しようとしても弾かれる。俺はこの世界に入ることが出来なかった。」

「え・・・?」

「俺はその理由がすぐにわかった。マキナの仕業でな、この世界で10年、その他の世界で・・・10000年もの間、俺という存在がこの世界に入れないように結界を張ったんだ。故に俺はその他の平行世界を10000年もの間旅した。」

マキナの仕業、というのは真っ赤な嘘である。唯単に世界の理に引
つかったただけだ

「ということは、お前は10000年の間ずっと旅を続けたのか？」

「ああ、その過程で何度か結婚もしたがな・・・因みに平行世界の
俺の嫁と仲間達は俺が平行世界を旅していることを知っている。嫁
達に至っては他の婚約者の存在も伝えた。」

「その上で結婚したの？」

「ああ、全員に重婚を了承してもらったから問題はなかったな。」

「では、各地に子孫がいると？」

「ああ、中には吸血鬼との混血だったりエルフのクォーターだっ
たりするものもあるが、それでも立派な俺の子供達だ。」

「そっぴえばお兄ちゃん、一つ前の世界の嫁さんたちにどうやって
説明したの？」

「ああ、それは俺が金色の魔王となった時に手に入った能力で一回
一回召喚したんだ。」

「何十年も前の場合は？」

「それも問題ない。俺と交わったものは強制的に不老になるから。」

「その子供達は？」

「身体が最も充実した状態になった時点で老化が止まる。因みにそ
後の子孫も全てそうなる。」

「まるでサーヴァントだな。」

「ほとんどサーヴァント見たいなもんだ。一応俺も創造神だから子
孫は全て神性を少なからず持つてるからな、これまでに最大8枚の
翼が出た。」

「翼？」

「ああ、そっぴえばそのことは言ってなかったな。夏海、説明宜し
く。」

「うん、神って言うのは皆翼を持ってるんだ。地位の低い所から4

枚、6枚、8枚、10枚、12枚つて順々に増えていくんだよ。因みに天使は二枚ね。」

「そう。で、精神が善と悪、どちらなのかによって翼の色が変わる。完全な善は翼全てが白く、完全な悪は翼全てが黒い。そして悪よりの善ならその度合いによって翼が1枚1枚黒くなっていく。逆も然りで善よりの悪ならその度合いによって翼が1枚1枚白くなっていくんだ。因みに完全な中立は創造神のみだ。」

「そうなのか・・・」

「そうなんだ。で、話はもう終わりなのか？」

「じゃあ最後に一つ・・・旅の間に何人の人を殺したの？」

「・・・どうしてわかった？」

「お兄ちゃんからは濃すぎて逆にわからないくらい濃い血の臭いがあるもん。わかればだれだって聞くよ。」

「ははっ、流石夏海だな・・・もう何人殺したろうか、何度も戦争に介入したりしたからな・・・少なくとも100億人は殺したな。」

「そんなに・・・後悔はしてないの？」

「しなかったな。一度異世界に飛ばされたあの時に俺の中の何かが壊れたみたいでな、殺しに罪悪感を覚えなくなっただ。」

「異常だな、それも相当な。」

「ああ、だが俺はこうなったことを後悔したことはない。それに・・・」

「それに？」

「俺がどうなろうと俺が俺であることにはかわりないからな。」

「・・・クスッ」

「どうした？急に笑ったりして。」

「いや、お兄ちゃんは何所まで言ってもお兄ちゃんだなくって思っただけだよ。」

「当たり前だろ。それが俺なんだからな。」

「そうだね。もう聞くことはないから戻るね。」

「わかった、アーチャーは少し待っててくれるか？」

「私か？」

「ああ、少し伝言をな。」

「私も戻るとしよう。」

「了解、また後でな。」

「うむ。」

そういつて夏海とアサシンが出て行った

「で、伝言とは？」

「ああ、凜からの伝言を預かってる。」

「！！！」

「良く聞けよ。『アーチャー、今何処にいるかはわからないけど絶対に魔法に到達して会いに行くんだから待ってなさい！！』だそう
だ。」

「そうか・・・凜らしいな。」

「まあ良かったじゃないか、最愛の人が来てくれるそうだし。」

「む・・・まあそうなのだが、並行世界の私のところに行ってしまう
うのではないのか？」

「その問題はない。」

俺はそういつて凜の家宝を渡す

「これは・・・凜の家の家宝ではないか。」

「大方これを目印にしようとしても考えてるんじゃないのか？」

「凜の考えそうなことだな。」

「そうだな。ということで伝言は終わり。もう戻っていいぞ。」

「ああ、そうさせてもらう。」

アーチャーはそういつて宝石を持って部屋から出て行った

それから一週間、俺は再び訓練場にいた。キラとアスランが再度の模擬戦を申し込んできたので、俺はそれを受けたのだ。

「それじゃあ、始め!!」

「キラ・ヤマト、フリーダム、行きます!!」

「アスラン・ザラ、ジャスティス、出る!!」

「流士、押して参る!!」

そういつてキラとアスランが腰のシュペールラケルタビームサーベルを抜き、そのまま突撃してきた

「ビームサーベル相手に素手はきついな・・・ならば!!」

俺はそういつて王の財宝から黄金の聖剣、エクスカリバーと漆黒の聖剣、エクスカリバー・モリガンの二振り取り出し、そのままビームサーベルを受けた

「せい!!」

拮抗するビームサーベルを力任せに押し退け、右手のエクスカリバーを横に薙ぐ。が、キラはバーニアを噴かしてそれを軽々とかわした

「こっちにもいるぞ!!」

「わかってらあ!!」

すぐさまアスランの攻撃をかわし、左手のモリガンを振るう。アス

ランはそれを右足のグリフォンビームブレードで受け止めた

「当たれっ!!」

「誰がっ!!」

ビームライフルのビームを右足の蹴りで全て相殺し、すぐさまその場から離れる。キラとアスランは合流したようで、こちらを見ている

「流石は戦争を生き残った英雄だな。その力を称し、同じ土俵で戦ってやる。」

そういつて俺はネギまの世界で作っておいた自身の人造精霊を呼ぶ

「よう、俺を呼ぶとは何事だ?」

「何、少ーし面白い戦いをしてやろうかと思ってな。……………」
「ということだ。」

「ほう、それは面白いな。」

「だろ?という事で頼んだぞ。」

「了解だ。」

精霊はそういつて俺の右隣に来る

「何をする気ですか?」

「何、か・・・唯の変身だ!!メタモルフォーゼ、デイスティニ
ー(レジェンド)!!」

その瞬間、俺のと精霊の身体が光だした。そして光が晴れた其処には、背中に紅い翼を付けたガンダム、デイスティニーガンダムと、背中に遠隔操作兵器、ドラグーンとそのプラットフォームを付けたガンダム、レジェンドガンダムが立っていた

「「!?!」」

「さあ、モビルスーツ戦の始まりだ!!」

俺はそういつて背中中のバーニアを噴かし、キラ目掛けて突貫した。
精霊もワンテンポ遅れてアスランに突貫した

「すごい!!」

「は、速い……!!」

「にやはは、流石は土君だね。」

「あの、土さんってどれ位強いんですか？」

「土君？たぶん……六課全員で挑んでもかすり傷一つ与えずに、
一瞬で負けると思うよ。」

「え!?!それって本当ですか!?!」

「うん、それくらい強いよ。」

「でも、だいぶ攻撃されてますよ？」

「それはお兄ちゃんがすごく手加減してるからだよ。」

「フェイトちゃん、来てたんだ。」

「うん、書類のほうも終わったし。」

「あの、フェイトさん、どれくらい手加減してるんですか？」

「あれだと……ほとんど本気出してないね、大体1%くらいかな
?」

「え!?!」

（あの人なら……あの人に教われれば、きっと強くなれる!!）

「堕ちろ！！」

「くっ！！」

「キラ！！」

「よそ見してる場合か！！」

俺達の戦いは更に激しくなっていた。俺はアロンドイトを振りかぶり、キラを両断しようとは何度も斬りかかる。キラはそれを何度も紙一重でかわす。途中アスランが乱入しそうになったが、精霊が抑えているためそれは叶わなかった

「どうしたどうしたあ！！最初の威勢はどこいったあ！？」

「っ！！速い！？」

そういつて腰にマウントしてある高エネルギービームライフルを連射する。常人のそれを超越した俺の身体能力での連射のため、既にマシンガンと化している

「行け、ドラグーン！！」

「くっ、かわしきれない！！」

精霊は背中中のプラットフォームからドラグーンを射出し、アスランに向けてビームを連射した。更に右手の高エネルギービームライフルを連射し、非常に密度の濃い弾幕を形成してアスランを追い詰めていた。アスランはそれをシールドに搭載されたビームシールドを出力最大で展開することで何とか回避したが、全てを避けたわけではなく、何発か喰らってしまった

「アスラン!!」
「ああ!!」

二人はそついい、一気に俺達を距離を離れた。そして、後方に巨大な召喚魔方阵を展開し、巨大な何かを召喚した

「おいおい・・・」
「まじかよ・・・」

二人が召喚したのは、核動力を搭載したモビルスーツ専用の巨大補助兵装、ミーティアであった。二人は即座にドッキングし、こちらに向かって攻撃を始めた

「うおつ!?!」
「あぶねえ!!」
「当たれええええ!!」
「はああああ!!」

キラは背翼部にマウントされたスーパードラグーンを飛ばし、更には60cmエリナケウス対艦ミサイルを次々に発射してきた。アスランの方は、MA-X200ビームソードを使い、精霊に何度も切りかかっていた

「ちっ!!精霊!!一旦戻れ!!」
「何をやる気だ!?!」
「でか物にはでか物つてな!!」
「そついうことか!!了解!!」

精霊はそついつて王の財宝の中に戻っていった。俺は一度元の姿に戻り、全身に魔力をほとばしらせ、叫んだ

「行くぞ！！メタモルフオーゼ！！デンドロビウム！！」

その瞬間、全身を光が覆い、超巨大モビルアーマー、デンドロビウムへと変化した。デンドロビウム、ガンダム開発計画の中で唯一オーキスという巨大補助兵装を装備したUC史上最大のガンダム。その火力は戦艦10隻分をゆうに超える

「はあああああ！！」

キラとアスランは、全ての武装を放ち、攻撃してきた。デンドロビウムはその巨体ゆえ、攻撃が当たりやすい。そのためにエフィールドジェネレーターが搭載されているのだが、生憎相手の攻撃の6割はミサイル、フェイズシフトの無いこの機体では防ぐことは出来ない

「っ！？ならば、こちらも！！」

俺はそういつて武器コンテナからフォールディング・バズーカを二門取り出し、肩に担ぎ、連射した。更に武器コンテナ内の全てのミサイルポッドを射出、1000を超える小型ミサイルの弾幕を形成した。そして機体側面のエフィールドジェネレーターを最大出力で稼働させ、反対側のメガ・ビーム砲を砲身が使い物にならなくなるほどの出力で発射した。その結果、何とか相手の攻撃を全て弾くことが出来たが、メガ・ビーム砲の砲身、エフィールドジェネレーターは大破、武器コンテナも全ての武器を使い果たし、唯のデッドウェイトとなった。対するキラたちも、ミーティアのアームは大破し、ミサイルも全て無くなっていた。俺は即座にオーキスをパージし、格納されていたビームライフルとシールドを装備し、二人に攻撃した

「当たれっ！！」

次々に放たれるビームを二人はかわしていく。ミーティアの推進部分はいまだ健在なので、その速度はとても速い

「っっ!?!」

が、突如二人の速度がガクツと落ちた。俺はその理由が直ぐにわかった。魔力が枯渇したのだ。二人の魔力の量はなのは達と同等程度、その量の魔力であれだけの大量の攻撃を行えば当然魔力は枯渇する。たとえばデバイスに核動力が搭載されているようにもだ

「チャンス!!」

俺はそういつてビームライフルを投げ捨て、ビームサーベルを持って二人に突貫した

「っっ!!しまっ!!」

二人はそう言い終える前に首の後ろをビームサーベルで斬られ、気絶した

「なのは、二人を頼む。」

「わかったよ。でも、やりすぎ!!」

「すまんすまん。」

こうして、俺とキラ、アスランの模擬戦は終わった

25話 力を持つ意味（後書き）

作者「グダグダだ・・・この上ないほどにグダグダだ・・・」

士「明らかに題名と中身がかみ合っていないだろ」

作者「だってその場の流れで書いたんだもん」

士「もんとかいうな、気色悪い」

作者「ひどっ!?!」

士「無視無視。ディスティニープラン様、感想どうもありがとうございます」

作者「心が痛い・・・」

士「うるさい、其処で逆立ちでもしてろや。えーと、ディスティニープラン様からシャア専用ザク（俺宛）、シャア専用ズゴック（夏海宛）、シャア専用ゲルググ（アサシン宛）、シャア専用リックドム（アーチャー宛）、ジオング（作者宛）か、本当にシャア一色とは・・・それとシンとレイは出すのか・・・作者、其処はどうなんだ？」

作者「今のところは考え中、もしかしたらアグスタ終わった辺りで出すかも知れん」

士「だそうです。」

作者「それよりも、もうそろそろあの計画を・・・」

士「計画？」

作者「ああ、・・・というものだ」

士「ほう、あの二人の強化か・・・面白そうだな」

作者「だろ？というわけで次回からある二人の強化が始まります」

士「誰が強化されるかは楽しみってやつだな」

作者「ああ、てなわけで」

「「次回をどうぞ期待!!」」

26話 原作メンバー + α チート化計画始動（前書き）

えゝ、大変長らくお待たせしました。最近受験やらテストやらの勉強などで余り時間が取れない中、ようやく形に出来ました。では、26話をどうぞ。

26話 原作メンバー + α チート化計画始動

「「お願いします、鍛えてください!!」」
「・・・は？」

どうも、流 士です。いきなり鍛えてくださいなどと言われて驚いてしまいました。さて、読者の皆様はかなり混乱していると思われるので一度時間を巻き戻すでしょう

一時間前・・・

「ふう・・・此処の生活にも慣れたな・・・」

俺は食堂で朝飯を食べていた。なのはたちは早朝訓練に行ってるのもうそろそろ帰ってくると思われる

「アーチャー、何か面白いことでもないか？」

「私に言うな。はやてあたりなら何か漫才でもしてくれるかも知れんぞ？」

「あいつは今絶対に寝てるから無理。フェイトとアリシアは執務官の仕事だろうし・・・この際だからキラ達に寝起きドッキリでも仕掛けるか？ちょうど此処にそれ用の空砲もあるし。」

「やめておけ。襲撃か何かと勘違いされるのがオチだ。」

「ちつ、つまらん・・・」

俺がそういうと、丁度よくなのは達が戻ってきた

「土君、それは？」

「テレビのドッキリとかでよく使われる空砲。間違っても質量兵器じゃないぞ？これでキラ達に寝起きドッキリ仕掛けようと思ったんだがアーチャーに止められてしまったな。」

「にはは・・・そんなに暇なら訓練見に来ればいいのに。」

「大体内容はわかってるから別にいい。それともお前をいぢめていいならいくが？」

「にゃ！？それはやめてー！？」

「それよりもFWが待ってるがいいのか？」

「あつ、忘れてた！！」

なのははそういつてFWメンバーの下に向かっていった

「全く、昔から何故あもぬけてるんだか・・・」

「仕方ないだろう、昔からああなのだから。」

「まあそうだがな・・・」

その後、俺はアーチャーと世間話をしながら時間を潰した。ふとなのはたちのほうを見ると、食事を終えたようで、それぞれ自分の書類作業をしにデスクルームに向かっていた。その中で、何故かティアナとエリオの二人だけが残った

「あ、あの・・・」

「ん？どうした？」

「「お願いします、鍛えてください！！」」

「・・・は？」

・・・ということで冒頭に戻るわけだが、正直頭が回らない

「・・・で、何故に俺？」

「貴方に教われれば絶対に強くなれると思ったんです。」

「僕は以前にフェイトさんに貴方の話を聞いたときから教わりたいと思ってました。」

「なのは達に教わっても十分強くなれると思うんだが？」

「確かにそうですが・・・如何せん襲われる期間が短いので一人でも多くの人に教わりたいんです。」

「むう・・・そういわれても此方も色々とあるので出来て今日1日だけだぞ？それでもいいのか？」

「それでもいいです！！！」

「私です！！！」

「そうか・・・（アーチャー、どうする？）」

（受理してやれば良からう。それにあれを使えば今日一日だけでも相当レベルアップするぞ？）

（あれ？・・・ああ、あれか！！確かにその手があったな！！）

（忘れていたのか・・・まあいい。で、それに私も参加していいのか？）

（いいが、急にどうした？）

（ティアナから私と同じ感じがする。）

（同じ感じ？・・・固有結界か？）

（そうだ。魔術回路の数も相当なものだ。メインとサブあわせて軽く凜を超えている。まだ一つも起動していないがな。）

（チートだな。覚醒してないだけで。）

（エリオのほうも鍛えれば際限なく強くなるだろう。）

（なんというチート・・・スバルとキヤロは？）

（あの二人はそこまで育たんな。ってなのはたちと同等までだな。）

（スバル、キャロ・・・ドンマイ。）

（それよりいいのか？二人が返事を待ってるぞ？）

「（おっと、そうだな。）わかった。今日一日だけだがお前らを出来る限界まで鍛え上げよう。」

「「はい、ありがとうございます！！」」

「よし、それじゃあ早速だが一週間分ほどの衣服を持って俺の部屋に来てくれ。」

「え？今日一日ですよね？」

「確かにそうだ。だが、それはこの世界の時間のことだ。今から行く所は此処より時間の流れが早いんだ。」

「そうなんですか・・・」

「そういうこと。さ、準備に行つて来い。」

「「はい！！」」

そういつて二人は自分の部屋へと向かった

「後はつと・・・（なのは、今日一日ティアナとエリオを借りるぞ。）」

（え？どうして？）

（まあちよつとな。明日にはちゃんと帰す。）

（わかったよ、フェイトちゃんには私から言っておくね。）

（おう、頼む。）

俺はそういつて念話を切った

「さてと・・・俺も準備しますか。アーチャー、行くぞ。」
「了解だ。」

そういつて俺とアーチャーは自分の部屋に向かった

「二人とも、準備はいいな？」

「はい!!」

「全く、いきなり呼んだと思えば・・・」

「まあ良いではないか。それに此処を使うのだから思う存分身体を動かすことが出来る。」

「なんだアサシン、運動不足か？」

「そのようなものだ。」

「無駄話などしてないでさっさと行くぞ。」

「へいへい。それじゃ二人とも、其処の魔法陣の中に立ってくれ。」

「こうですか？」

「そうそう。そんじゃ、行くぞ!!」

俺はそういつて魔方陣を起動させ、ダイオラマ魔法球の中に入った

「うつ・・・ここは？」

「ここはダイオラマ魔法球の中だ。この中は非常に特殊な空間でな、円形に空間が存在し、その半径は約5000km、時間は外の1時間、この中では100年、老化は外の空間の時間分だけ起こらないという修行にはうってつけの空間だ。」

「まあそれはお兄ちゃんがそうしたからで元々はこの空間の10分の1くらいの広さ、時間は外の時間の24倍、老化は普通にこの空間の時間で起こってたけどね。」

「まあそういうことだな。ちなみに今回は外で10時間、この空間で1000年間修行するから。」

「1000年ですか!？」

「ああ、やるからにはとことんやるぞ?というわけで二人とも、デバイスを渡してくれ。」

「どうしてですか?」

「これからのためにデバイスを極限まで強化する。大体時間にして100年はかかるから、その間はアーチャーとアサシンに基礎能力を上げてもらえ。100年もあれば英霊と同等かそれ以上には成長するだろう。」

「あの、英霊ってなんですか?」

「ああ、お前たちは知らなかったな。英霊ってのは、過去に偉業を成し遂げた者が死後、世界と契約してなる存在なんだ。因みにこの二人も英霊だ。」

「そうなんですか・・・ってええ!?てことは幽霊ですか!?!」

「戯け、幽霊ではない。確かにこの身は一度滅んだがちゃんと此処に存在している。アサシンもだ。」

「良かった・・・」

「なんだ、お前達。幽霊がだめなのか?」

「っ!?だ、だめってわけじゃないですけど・・・その・・・少し怖いです。」

「僕は・・・完全にだめです・・・」

「まあ怖い気持ちはわからんでもないが・・・実際結構いるもんだぞ?ティアナの後ろにだってお前の兄らしき霊がいるし。」

「え!?兄さん!?!」

「恐らくは死んでもお前のことが心配で結果的に自縛霊化したんだろう。・・・そうだ、後で橙子を呼ぼう。あいつなら宝具の一つでも渡せばティアナの兄と全く同じ人形を作れるだろうからそれにその魂をいれて蘇生すれば何とかなるだろう・・・」

「あの・・・土さん?」

「おつとすまん、考え込んでしまった。それじゃあデバイスは強化しておくから、お前達は其処の二人に100年間みっちりしごかれてこい。」

「というわけだ。まずは基礎を固めるぞ。」

そういつてティアナとエリオはアーチャーについていった。アサシンはその後をつけている

「それじゃあやりますか。夏海、先に行つててくれ。」

「わかったよ。お兄ちゃんは？」

「少しやる事がある。」

「向こうじゃ出来ないの？」

「魔方阵が展開できるほどの広さが無い。」

「そうなんだ。まあいいや、先に行つてるね。」

夏海もそういつてこの空間の丁度真ん中に立てられた城、レーベンズシュルト城に行つた

「ふう・・・それじゃやりますか。数多ある平行世界よ、我が意思の元、わが盟友を今ここに！！召喚！！」サモン

俺がそういつた瞬間、足元に半径約30メートルの巨大な魔方阵が現れ、視界が遮られるほどの光を放つた。その光は直ぐにおさまり、一人の女性を出した

「久しぶりだな、橙子。」

「久しぶりだな、土。今回はどういう用件だ？」

「人形を一つ造つて欲しい。それも極限まで人間に近づけたものを。」

「造るのはいいが、見返りは？」

「大なる激情と小なる激情、モラルタ更に騎士は徒手にて死せず《ナイト・オブ・オーナー》と己が栄光の為でなく《フォー・サムワンス・グロウリー》でどうだ？」

「乗った。完全な人間を造る勢いでやろう。」

「そりやどうも。それじゃあ早速頼む。」

「あいよ。」

そういつて橙子はレーベンズシユルト城に向かっていった。因みに彼女は俺の妻でもある。子供は確か3人だったな・・・

「そんなことは置いといて、俺もデバイスの強化に取り組むとしますか。クロスミラージュ、ストラーダ、よろしくな。」

《《はい、よろしく願います》》

俺もそういつて橙子の後についていった

此処からは日記形式で書かせてもらう

1年目

ティアナとエリオは毎日走りこみをしている。二人とも開始直後よりは格段に体力が上がった。だがまだ英霊には程遠いが。デバイスのほうは現在どういった風に強化するかで試行錯誤中、一応フルドライブとリミットブレイクは追加する予定だが、それだけでは直ぐに終わってしまうのでこの際通常時のモードを増やし、バリアジャケットにも細工をすることにした。橙子の方は意外と順調にことが進んでいる。この分だとあと4年もすれば完璧な人形が出来ることだろう。楽しみだ

2年目

昨年同様ティアナとエリオは毎日走りこんでいる。アーチャーとアサシンの指導がいいのか予想を遥かに上回るペースで基礎が出来上がっている。これだと30年ほど予定を繰り上げられるかも知れん。デバイスのほうも夏海にストラーダを任せた所かなりのスピードで強化が施されいる。此方も予定を繰り上げられそうな感じた。それとクロスミラージュとストラーダのフレームと外部装甲をこれまでの素材からVPS装甲に変更した。これにより魔力消費は増えたがその分強度と軽さを格段に上昇することが出来た。デバイスコアのほうも人格データを拡張することでこれまで以上の受け答えができるようにした。橙子の方は何故かリンカーコアを弄っている。人形に付けるリンカーコアを渡したんだがやはり魔術師にとって見ればリンカーコアはかなり珍しいもののなのだろう。横で今度式に殺せるか見せてみようとかいっていたが気にしない、気にしない

5年目

ようやく橙子の人形が完成した。リンカーコア以外は完全にティアナの兄・・・ティード・ランスターのものだ。リンカーコアのほうは・・・橙子が弄くり回した結果魔力量が跳ね上がり、管理局側の測定方法でSSSランクが出るほどまでになった。これは思わぬ収穫だった。ティードの人形が出来たのでティアナを呼び、ティアナについていたティードの霊を媒体に、天界から魂を引っ張り出してきて人形に定着させてやったところ、うまくいったようで直ぐに起き上がった。その瞬間ティアナが泣き出してしまったがそれは仕方のない、というか俺まで泣きそうになったので当たり前ということにしておこう

10年目

橙子が帰った。ティアナとエリオの強化をやったのでもう此方でや

る事がなくなつたようだ。二人は橙子にリンカーコアの強化を施されたため、それぞれEXランクの魔力を手に入れた。二人とも喜んでいた。それと、ティードも修行に参加することになった。やはり妹がやっているのに兄が怠けてどうするという考えに至つたようだ。デバイスは此方で一から造ることになった。橙子製の身体はすべからく高性能なので必然的にデバイスも高性能なものにする必要があるため、既存のデバイスではまずもたないのである。因みにだが、ティードは重度のシスコンである。故にか、デバイスをティアナのお揃いにしてくれとほぼ毎日行ってくる。ティアナは嫌がっていないので、そうしてもいいかなと此処に書き記しておく

50年目

3人の基礎が充分出来てきた。この分だとあと20年で基礎は出来る上がるだろう。デバイスのほうも大分形になってきた。クロスミライージュにはこれまでのモードの内、ダガーモードを廃し、デュアルブレードモード、ロングブレードモード、ライフルモードを追加した。ストラーダにはデュアルランスモードを追加した。それと魔力を籠める事で刃の先端部分から魔力刃が出現するようにした。ティードのデバイスはブリッツミライージュと言う名で、基本モードはクロスミライージュと同じだが、クロスミライージュより射撃戦に重きを置いた設計になっている。セラヴィーのGNバズーカ？を参考にしたバズーカモード、ケルデイルのGNスナイパーライフル？を参考にしたスナイパーライフルモード、キュリオスのGNサブマシンガンを参考にしたマシンガンモードを搭載している。フルドライブ、リミットブレイクはまだ完成していないので未搭載である。あと20年で完成させなければ・・・

70年目

遂に基礎訓練が終わつた。3人とも英霊の中でも上位に入るほどの基礎能力を手に入れた模様だ。表に書き記せば

ティアナ			
筋力	B	魔力	EX
耐久	B +	幸運	B
俊敏	A	宝具	???

エリオ			
筋力	B -	魔力	EX
耐久	B	幸運	B -
俊敏	A +	宝具	A + +

ティータ			
筋力	A	魔力	SSS
耐久	B +	幸運	C +
俊敏	B +	宝具	A + +

となる。デバイスの方も、何度も徹夜を繰り返した結果、完成させることが出来た。表に書き記すと

クロスミラージュ			
ファーストモード	ハンドガンモード		
セカンドモード	デュアルブレードモード		
サードモード	ロングブレードモード		
フォースモード	ライフルモード		
フルドライブ			
エクシアフォルム			
デュナメスフォルム			
キュリオスフォルム			
ヴァーチェフォルム			
ナドレフォルム			

リミットブレイク
トランザム

ストラダ

ファーストモード ランスモード

セカンドモード デュアルランスモード

サードモード カノンモード

フォースモード ザンバーモード

フルドライブ

フォルムグングニル

フォルムブリューナク

フォルムゲイボルク

リミットブレイク

トランザム

ジェノサイド

ブリッツミラージュ

ファーストモード ハンドガンモード

セカンドモード バズーカモード

サードモード スナイパーライフルモード

フォースモード マシンガンモード

フルドライブ

セラヴィーフォルム

セラフィムフォルム

ラファエルフォルム

セラヴィー？フォルム

リミットブレイク

トランザム

となる。モード数が多いのはいかなる状況でも生き残れるようにす

るために必要だからである。因みにストラーダに搭載されているジエノサイドとは、非殺傷設定が解除され、ストラーダがより攻撃的な外見に変わるモードで、エリオ自身の人格も異常なまでに好戦的になり、殺人に快楽を感じるようになる。だが、一応1時間の制限時間を設けてあるので発動した後、ずっとそのままという事は無い。エリオにデバイスを渡した時には、このことを何度も言い、本当にヤバい時か、相手を殺したい時だけこのモードを使うように言い聞かせた。まあ、エリオのことだから使うことは無いだろうが。それとこれからはそれぞれ個別で修行することになり、ティアナはアーチャーとアサシン、エリオは俺が呼んでおいたランサーとデイルツト、ティーダは俺と夏海が教えることになった。残り930年、できる限りのことをやろう

2000年目

今日も今日とて修行中。ティアナは現在固有結界の制御に奮闘している。如何せんあれは制御が難しい。そのためいきなり使おうものなら暴走により身体が爆散して死んでしまう。そのため、ティアナは此処1000年間で1000回以上死んでいる。そのたびに俺が蘇生してるのだが。そして何度も死んだためか、ティアナの脳が死を理解し始めたようで、たまに至る所に線が見えるようだ。俺と夏海、それにアーチャーとアサシンには見えないと言っていたが恐らく近いうちにアーチャーとアサシンは見えるようになるだろう。しかし直死の魔眼か・・・俺ももっているが使うことはほとんど無いな。それに使うことがほとんど無いと言ったら真祖の吸血鬼の力も使ったことが無い。蝙蝠化とかなら便利なのでこれからは使ってみることにしよう

5000年目

ティアナが遂に固有結界を完璧に制御できるようになった。ティアナは非常に喜んでいたようなのでよかった。ティーダはその様を写

真に何度も収めていたが気にしないで置こう。エリオのほうはランサーとデイルットの槍術を七割方吸収した。とはいってもまだ七割なのでもっと修行しなければならぬが。ティードのほうは俺が使う収束砲、ジャッジメント・ブレイカーを完全に習得した。まあこの魔法はただ魔力をかき集めて巨大な砲撃として放つだけなので習得自体は簡単なのだ。ただ、どれだけ魔力を素早く、大量にかき集められるかによって威力が大きく変わってくるので今はそっちの修行中である。あと500年、時間はまだある

800年目

皆もう英霊と同等以上の力を身に付けた。ティアナは投影魔術特化型だったようで、ガンドなどの魔術は全くと言っていいほど使えなかったが、その分投影魔術の出来が凄まじいものになっている。宝具だろうがなんだろうが、武器であるならば95%もの完成率を誇った。それとアサシンの秘剣、燕返しをも習得した。ティアナには剣の才能が全く無く、アーチャーの剣技を習得して終わるかと思っただが才能の差を努力で全て埋めたようだ。エリオは、ランサーとデイルットを同時に相手にしても拮抗するほどにまで成長した。喜ばしいことだ。だが、性格が何故かランサーに近くなり、重度とまでは行かないが、戦闘狂になってしまった。それに敬語も完全に使わなくなってしまった。一人称も何時のまにか僕から俺になってたし……。ティードは徹底的に効率のいい魔力運用方法を教え込んだ結果、スターライトブレイカー級の収束砲でも一週間ほどぶっ放していられるほどまでになった。魔力弾の操作も既にお手の物で、一度に1000や2000は簡単に操っている。あと200年、教えられることは全て教えよう

1000年目

遂に修行が終わった。3人とももう英霊を超えてしまった。ティアナはアーチャーとアサシンを純粋な剣術で打ち倒し、エリオもラン

サーとデイルツトの二人を同時に相手し、勝利、ティードのほうも急遽来てもらったキャスターとセイバーの二人に勝利した。3人とも勝った時は物凄く喜んでいた。だが、俺は少し心配だ。これからあの二人が訓練に参加すると、確実に楽に感じてしまうだろう。それをなのはが見たら確実に怠けてると思ひ込み、O H A N A S H Iしようとするだろう。そして、なのはは絶対に二人に返り討ちにされる。そんなことになったらなのはは絶対自信を失うだろう。それだけは困る。それが今の俺の懸念材料だった

「さて、1000年間の修行お疲れ様。これでお前達も晴れて管理局一の魔道師だ。」

「え！？それって本当ですか!？」

「本当だ。英霊相手に、しかも二人同時に戦って勝てる魔道師など管理局には存在していない。そしてお前らはそれを成し遂げたんだ。堂々と誇っていいんだよ。」

「まあ、1000年も修行してそんなに育たなかったらそれはそれで問題だけだね。」

「そういうことだ。それじゃあ各自自分の部屋に戻って明日の備えてくれ。ティードは報告しないといけないから一緒に来てくれ。」

「わかった。」

「なんか久しぶりだな、キャロに会うの。」

「まあ前回あったのが体感時間で1000年前だからな。あ、道覚えてるよな？」

「大丈夫ですよ。それにわからなくなったら壁全部殺しながら進めばいいですし。」

「いや、そのほうが問題だから。頼むから壁殺すなよ？」

「わかってますよ。」

「ならいいが・・・」

「で、行かないの？」

「おっと、そうだな。それじゃ、各自行っていいぞ。」

俺がそういうと、ティードを除く全員が部屋に戻って言った

「んじゃ行くか。」

「了解。」

俺もティードとともに部隊長室に向かった

「はやて、入っていいか？」

「土君？ええよ。」

「それじゃ、失礼する。」

「失礼します。」

「土君、その人誰？」

「今から紹介するから。んじゃティード、自己紹介。」

「一度死んでから蘇りました、ティード・ランスターです。」

「え！？蘇ったってどういうこと！？」

「そのまんまだ。ティアナにくっ付いてた魂を俺の知り合いの人形師に頼んで造ってもらった人に限りなく近い人形に入れて蘇生させたんだ。」

「無茶苦茶や・・・で、話ってそれだけなん？」

「いや、もうひとつある。ティードは一度死んでるからもう管理局に席は無い。から此処で民間協力者として採用・・・ったら変だな。まあ此処で働かせてやってってくれて話だ。」

「そういうことなら最初からそう言えばいいものを・・・まあいいわ、実力はそれなりにあるんか？」

「それは大丈夫。砲撃戦ならお前となのはを同時に相手しても圧勝

だ。」

「ほーう……それはそれは……ティード君、明日模擬戦といこうや無いか。」

「え!？」

「あれだけ言われたからにはいつペンやらんと気が済まんのや!!ちゅうわけで明日は午前中になのはちゃんとわたし対ティードくんで模擬戦や!!」

「まじですか!?!おい、土!!なにやってんだよ!!」

「問題なんかないだろ。キャスターとセイバーに同時に勝ったお前だ、これに勝てなくてどうする。」

「そうじゃなくて!!此処で俺が圧勝なんかしたらこの人の威厳も何も無くなるだろ!!」

ティードがそういった途端、場の空気が凍った

「はぁ……墓穴を更に深くしてどうするんだよ……」

「は!？」

「ふふふ……やっぱフェイトちゃんも一緒や、3人で徹底的に痛めつけたる!!」

「なに!!？」

「仕方ないな……はやて、流石にそれじゃあフェアじゃないからFWから此方が二人選んで3対3でやらないか？」

「ふむ……FWからやつたらええけど、そのかわりにスターズ分隊とライトニング分隊、それぞれから1人ずつ選ぶこと!!それならええで!!」

「そうか……わかった。ならば此方からはティアナとエリオを出そう。」

「はぁ!?!お前本気で言ってるの!？」

「本気だ。」

「はぁ……もう何もいわねえ……」

「なんや、二人がどうかしたん？」

「いや、こつちの話だ。」

「ふうん・・・他に話はあるん？」

「いや、もう無いから部屋に戻るわ。」

「了解や。ああ、明日が楽しみやなあ・・・」

はやての呟きをバツクに、俺達は部屋から出た

「なあ、マジでふたりを出すのか？」

「ああ、何のために魔力封じのブレスレットをお前たちに持たせた
と思ってるんだ？」

「まさか・・・狙ってた？」

「そういうこと。こうでもしないと懸念材料が無くならんからな。」

「マジか・・・はあ、此処の訓練場持つかな・・・」

「十中八九持たないな。一応夏海に最大出力で結界を張らせるが万
が一それが破れた場合は・・・六課が消滅だな。主にお前とティア
ナとエリオの攻撃で。」

「手加減しないといけないのか・・・」

「その必要は無いぞ。あれでもあいつらはそこそ弱い。」

「弱いんかいっ！！」

「間違えた。そこそこに強いだ。三人ともSSランクは取ってるか
ら。」

「俺達は計測不可能だろうが・・・」

「まあな、一応デバイスの方も手入れはしとけよ？今度ロストログ
アを入れる予定だから。」

「お前は何を考えてんだよ。流石にロストログアはやばいだろ。」

「問題ない。どうせそこいらからレリック2、3個掻っ攫ってきて
埋め込むだけだから。」

「問題大有りだ！！大体ロストログアなんてデバイスに組み込んで
大丈夫なのか？」

「それは問題ない。俺のデバイスにはA A A級ロストログア、ジュエルシードが7個組み込まれてる。」

「ジュエルシードってあれか？10年前に虚数空間に全て落ちたって報告が来た奴か？」

「それだ。」

「何で持ってたんだよ。」

「あれは俺がリンディに脅し・・・ゲフンゲフン、頼んでそういう風に改ざんさせたんだ。」

「おい、今確実に脅したって言ったよな！？そうだよな！？」

「そんな細かいことは気にするな。」

「気にするわ！！」

「まあまあまあまああ。」

「此処でネタを使うな！！っと、ティアナから通信？」

「兄さん、さつき狸・・・ゲフンゲフン、はやて部隊長から明日模擬戦するからって言われたんだけど・・・なにしたの？」

「お前今狸部隊長って言いそうになったな？てか狸まで言っちゃってたろ。」

「え？なんのこと？」

「・・・まあいいか。模擬戦のことはこいつがな・・・」

「・・・ってこと？はあ・・・まあいいか、此処で圧勝してやれば面白そうね。」

「ああ、あの優しかったティアナは何処に行ったのやら・・・」

「気にしたら負けよ。それじゃあ兄さん、明日に向けてゆっくり休んでね。」

「ありがとうな、ティアナ。・・・さて、ティアナにも言われたし俺はもう休むとしようか。」

「なら俺の部屋を使え。俺は少し別荘に籠って物を造ってくる。」

「わかった。それじゃあ明日の朝な。」

「おう、明日な。」

そういつて俺は別荘に入り、ティーダは眠りに入った

26話 原作メンバー + α チート化計画始動（後書き）

作者「前回の後書きで2人と書いたのですが、急遽一人増やして3人にしました」

士「なんつつか・・・やりすぎ？」

夏海「だろうね。並みの転生者なんて片手で倒せるんじゃない？」

作者「まあこつちもノリで書いてた節があるからね」

士「まあいいか。それよりもどうやってあの3人にしたんだ？」

作者「ティアナは最初から確定してた。エリオはアミダくじで。ティードは死んだ後に言われた事とか考えたら余りにも不憫だったから」

夏海「要するに元々はティアナだけだったってことね」

作者「まあそういうことに・・・」

士「なんでもいいけどいいのか？さつさとしないと時間がなくなるぞ？」

作者「おっとそうだった。ディスティニープラン様、感想どうもありがとうございます」

士「プレゼントのほうはキャスバル専用ガンダム（アサシン宛）、ゼロ・ジ・アール（夏海宛）、百式（作者宛）、サザビー（アーチ

ヤー宛）、ナイチンゲール（俺宛）が届いてるぞ」

夏海「二度目のシャア一色・・・しかもゼロ・ジ・アールなんて知ってる人少ないんじゃないの？」

士「恐らくは読者の皆様の中にもあまりいないと思う。てか作者も知らなかったろ、この機体」

作者「結構ガンダムのゲームとかやってるんだけどこいつは知らなかったわ」

夏海「それよりも時間が迫ってるよ」

士「まじか、なら次回予告に移ろつか。作者」

作者「俺がやるんかい・・・次回 第27話 遂に判明する3人の実力！！」

「『ドライブ・イグニッション！！』」

27話 模擬戦という名の出来レース（前書き）

なんというグダグダ・・・ティアナたちが無双します

27話 模擬戦という名の出来レース

士 side

今、機動六課が誇る訓練場は、非常にピリピリとした空気が流れていた

「さて、土君。模擬戦の内容は3対3、勝敗は魔力切れか気絶でええな？」

「ああ。それと5分ほど作戦タイム的なものを貰っていいか？」

「ええけど、きっかり5分やで!!」

「わかってるって。」

俺は相手であるはやて率いる隊長陣と最終確認を取っていた。まあ、相手と言っても俺が戦うわけではなく、ティードとティアナ、エリオの三人が戦うことになっているのだ。さて、此处でお気づきだろうが、ティードたちは俺が1000年間もの間修行させてきた。故にその実力は本気で管理局一だ。それに俺と生活してきたことで三人は既に覚悟が出来ている。自分達が人を簡単に殺せるほどの力を持ち、それを使う覚悟が。一方なのはたちは、俺の話を聞いたことである程度の覚悟が出来ているが、それでもティードたちには及ばない。力と覚悟、その両方が負けているのはたちには・・・はつきり言って勝ち目は無い

「3人とも、模擬戦が始まったらまずはばらせる。」

「どうしてですか？」

「3対3で戦うより1対1で戦ったほうが面白いだろ？それに自分の力も確認できる。」

「それはそうだけだよ、この魔力封じのブレスレットは付けたま

「まか？」

「いや、それは自分の好きなタイミングで外してくれ。できれば相手を動揺させることが出来るタイミングで。」

「たとえば？」

「相手の攻撃を受けた直後とか。お前らのBJは物理、魔法防御力共に限界まで強化してあるから収束砲クラスの攻撃もシールドを使えば完全に防げるぞ。」

「なら最初は身体能力だけで翻弄して、後半に魔力を開放、一気に仕留めるでいいですね。」

「まあそんな感じだろうな。ただし、出しているのはマッハ10までな。それ以上はだめだ。」

「どうしてだ？」

「あのな・・・英霊でも追いつけないような速度の攻撃をあいつらがさばけるとでも？」

エリオ

「ああ、無理だな。」

「そういうこと。それとリミットブレイクも禁止。フルドライブはなのは達が使ってきたら。はやてはユニゾンしたらだ。」

「まあ、実際はフルドライブ無しでも勝てるんですけどね。」

「そう侮るなよ？あいつらは中々に弱い。」

「そのネタ昨日も言っただけだったか？」

「気にするな、俺は気にしない。」

「そのネタ何回目だよ・・・」

「まあまあそういうなって。もう5分経つな・・・よし、お前らがんばって来い！！」

「・・・はい（ういっす）（了解）。」「」

三人はそういつて所定の位置に行った。なのはたちはなんか不満・・・というかティアナたちの態度を見て不機嫌になってるといった感じだ

「そんじゃ、なのはたちの機嫌が悪いなかだが・・・模擬戦、開始！！」

俺の掛け声と共に、ティアナたちは散開し、それぞれ別の方向に跳んだ

士side end

三人称side

「ティアナ、待つてよ！！」

「敵に待てといわれて待つ奴がいますか！！」

ティアナは現在、後ろから追いかけてくるなのはを背に走っていた。士に言われたとおりに模擬戦直後に散開した後、なのはを此処まで誘い出したまでにはいいが、どうも先程の態度が気に入らないらしく、OHANA SHIするために魔力弾を後ろからバカス力撃たれているのだ。だが、英霊をも凌ぐ身体能力を持つティアナに当たるわけが無く、唯周りのビルなどを吹き飛ばし、自身の視界を塞いでいるだけである

（ここらへんでいいか・・・）

「ようやく止まった・・・ねえティアナ、どうしてあんな態度を取ったの？」

「どうして？言っ飛ばせばあなたの方が怒るように仕向けた・・・とでもいえいいですか？」

「どうしてそんなことしたの？」

「そんなの決まってるじゃないですか。怒りは冷静な判断を失わせる。私は・・・いや、私達はそれを狙ったんですよ。結果としては

大成功でしたし。」

なのははその言葉に更なる怒りを覚える。が、なのはは気づいていない。これすらもティアナの策略だということを

「ティアナ、私の言ったとおりでしょう?」

「断固拒否します。弱者の言うことなど、聞くものじゃない。」

ティアナはなのはを罵倒した。それを聞いたなのはは、完全に切れた

「・・・もういいよ。ティアナ・・・お話しよう?」

「黙りなさい。貴方のような弱者と話す口など持ち合わせてない。」

ティアナは何度も罵倒する。全ては、理性を失わせるために

「・・・レイジングハート、エクシードドライブ。」

《了解、エクシードドライブ起動》

「はじめっからフルドライブですか・・・高が知れますね。」

「煩いっ!! デイバイイイン、バスター!!」

なのはは自身の十八番である魔力砲撃を放った。箆められた魔力はBランクの魔道師を一撃で落とすのに事足りる魔力量であった。だが、ティアナはそれを右手で蠅を追い払うかのように弾いた。その際、右手首に付けられたブレスレットがなのはの砲撃によって破壊された

「っ!？」

「あゝああ、壊れちゃいましたね、魔力封じのブレスレット。これでもう手加減なんて出来ませんよ。どうなっても・・・知りませんかね?」

ティアナの身体から凄まじい量の魔力がほとばしる。なのはは怒りを忘れ、唯目の前の存在に恐怖した

「クロスミラージユ、モード、デュアルブレイド。」

《了解、デュアルブレイドモード起動》

ティアナの持つクロスミラージユが変形し、アーチャーの持つ双剣、干将・獬豸に似た双剣になった。その刀身は全て魔力刃で、オレンジ色の光を放っている

「さて、それではいきますよ？精々・・・逃げ回ってくださいな。」

その言葉を皮切りに、ティアナの猛攻が始まった

一方、その頃のエリオは・・・

「エリオ・・・どうしたの？何でそんな言葉を使ってるの？」

「煩い。俺がどういった言葉を使おうが俺の勝手じゃねえか。」

「うう・・・エリオが不良になっちゃったよー!!」

「だあああああ!!!煩えって言うてんだろ!!!聞こえねえのか!!!」

完全に不良・・・というよりもハレルヤとランサーとサーシェスがいい感じに混ざった性格のエリオを見てフェイトが泣き出してしまった。せめてデイルットやアレルヤに染まっていれば少しはまともだったかもしれない・・・

「さっさと構えろ!!!こちらさっさと戦いたくてうずうずしてんだよ!!!」

「じゃあ・・・私が勝つたら話し方、戻してくれる？」

「ケツ、いいぜ・・・ただし、俺に勝てたらなあ!!」

「いくよ、エリオ!!バルディッシュ、フルドライブ、ソニックフ
ォーム!!」

《了解、フルドライブ始動》

「いきなりフルドライブか・・・ストラーダアア!!モード、デ
ュアルランス!!」

《了解、デュアルランスモード》

エリオの持つ槍、ストラーダが二つに分かれる。フェイトはそれ
を見て驚いた

「え!?そんなモード搭載してないよ!？」

「んなもんは昔のことだ!!はあああ!!!!」

次々とエリオから放たれる連撃。英霊のそれをも超える手数と速度
を誇る攻撃に、フェイトは何とかついていき、防いでいた

「くつ、捌ききれない・・・!!」

「おらおらおらおらあ!!遅えんだよあ!!」

「エリオ・・・元に戻ってよぉ!!」

「うぜええええ!!さつさと落ちやがれ!!」

エリオの猛攻をギリギリで捌きながらもエリオが元に戻ることを願
うフェイト。だが、1000年間もの間使い続けた口調がそんな簡
単に変わるはずも無く、唯泣き叫ぶだけであつた

「ストラーダアア!!モード、カノン!!」

《了解、カノンモード起動》

エリオの掛け声と共にストラダが一本に戻り、刃の部分が変形し、中から巨大な砲門が現れた

「ブレスレットももういらねえ！！全力でぶっ飛ばす！！」

そういつて右手首に付けられているブレスレットを投げ捨てる。その瞬間、全身から途方も無い量の魔力がほとばしる

「嘘！？」

「吹き飛ばやああ！！ジオニック・ブラスター！！」

ストラダの砲門からフェイトの魔力光よりも薄い黄色の魔力砲撃が発射される。その威力、ディバインバスターの約3倍

「っ！！バルディッシュ！！」

《プロテクション・パワー》

フェイトは強固な障壁を張り、何とか凌ごうとする。が、その砲撃は

「その程度で、防げるなどと思うなあ！！」

いとも簡単に障壁を突き破り、フェイトに直撃した

「きゃあああああ！！？」

「まだ気絶したわけじゃねえよなあ！！さっさとかかってこいやあ！！」

エリオがそう叫ぶ中、フェイトは

「ううゝ、エリオゝ、お願いだから元に戻ってよゝゝゝ」

未だにそのようなことを言っていた

所代わってティードは・・・

「シュートバレット!!」

「クラウ・ソラス!!」

はやてと激しい撃ち合いをしていた。はやては得意の砲撃を撃ち、ティードはそれを魔力弾で相殺しながら飛び回っていた

「もうどういうことや!! なして砲撃が魔力弾一発で相殺されるん!?!」

「簡単なことですよ!! 箆められてる魔力の量が同じなだけです!」

そついいながら次々と魔力弾を放っていくティード。はやてはそれを相殺したと同時に空へとあがり、巨大な魔法陣を描いた

「これなら相殺できんやろ!! フレース・ヴェルグ!!」

はやては巨大な白銀の砲撃を5発、ティードに向かって撃った。ティードはそれを

「・・・マグナムバレット!!」

先程のものよりも巨大な魔力弾で相殺した

「なっ!?! これも相殺やて!?!」

「ふう・・・もう制限も解除していいか。」

ティードはそういつて右手首のブレスレットを外してどこかに投げ捨てた。そして、はやての魔力を優に超える量の魔力がティードから進った

「！！手加減してたんかい！？」

「そうです。一応ティアナとエリオも手加減してますよ？まあ、この様子だと二人も制限を解除したようですけど。」

ティードがそういうと、なのはとフェイトのいるほうから途方も無い魔力量の魔力反応が出た

「まさか・・・あの魔力がティアナとエリオの言うんか！？」

「正解です。さて、はやて部隊長。もうそろそろユニゾンなさったほうがいいですよ？」

「なんやて？」

「そうしないと、唯でさえ0に限りなく近い勝率が完全に0になりますよ？」

「言ってくれるやないか・・・ようし！！そこまで言うならユニゾンしたる！！リイン！！」

「はいですっ！！」

「「ユニゾン・イン！！」」

「ようやくですか・・・（ティアナ、エリオ。そっちはどうだ？）」

（こっちは最初っからフルドライブでかかって来られてるけど問題ないわ。）

（こっちもフルドライブで来られてるけど問題ない。）

（わかった。それじゃあ此方もフルドライブで一気に畳み掛けよう。）

（（了解。））

「こっちも本気で行くさかい、覚悟せえよ！！」

「それはこっちの台詞です。ブリッツミラージュ、フルドライブ、フォルム、セラヴィー!!」

その瞬間、ティーダの身体を光が包み、次々と装甲がついていき、そして光が晴れた其処には、両手に二つの巨大なGNバズーカ?を持ち、両肩と両膝にGNキャノン?を装備した巨大なガンダム、セラヴィーガンダムが浮いていた

「!?!」

「GNドライブ正常稼働、各部GNコンデンサー良好、オールウェポンズグリーン、はやて部隊長、行きますよ?」

ティーダはそういうと、右手のGNバズーカ?を撃った

「っ!?!クラウド・ソラス!!」

なんとか砲撃を砲撃で相殺したはやて。だが、ティーダの攻撃はまだ終わっていないかった。否、これから始まるのであった

「さあ、行きますよ。クアッドキャノン!!」

はやてに襲い掛かる砲撃。悪夢を統べる者の弟子と最後の夜天の王の戦いは更に激化していった

その頃、エリオは・・・

「おい、フェイト。落とされなくなかったらリミットブレイクしろ。」

「え?」

「今のお前じゃ詰まらん。だからさっさとリミットブレイクしろ。」

「・・・後悔しない？」

「んなもん誰がするか。大体俺の勝ち揺るがねえよ。」

「そんなのやってみないとわからないよ！！バルディッシュ、リミットブレイク！！」

《了解、リミットブレイク始動。カートリッジロード》

フェイトの掛け声と共に、BJが更に薄く、少なくなる。この姿こそ、フェイト最速の姿にして最強の姿、真・ソニックフォーム。その両手には、二つの双剣、バルディッシュ・ライオットザンバーが握られていた

「ケツ、いいねえ。それでこそ戦りがいがあるってもんだ！！ストラーダア！！フルドライブ、フォルム、ゲイボルクウ！！」

《了解、ゲイボルク起動》

その瞬間、ストラーダが変形し、紅い一本の槍に変形する。そしてエリオのバリアジャケットもこれまでとは違い、全身を青いボディスーツで覆い、その上から軽鎧をつけている姿になった

「さあて、第2ラウンド、おっはじめようじゃねえか！！」

「負けないよ！！」

両者が同時に駆け出す。光の獅子の弟子と金の閃光、その戦いは更なる激化の一途をたどった

その頃のティアナは・・・

「弱い！！弱すぎる！！これがエース・オブ・エースの実力ですか！？」

「くっ、アクセルシューター！！」

ティアナはなのはの放つ魔力弾をすれ違いざまに全て一瞬のうちに斬り捨て、さらになのはに斬りかかった。なのははそれを障壁で防ぐが、障壁はバターのようによいとも容易く切られた

「っ！？レイジングハート！！」

《フラッシュムーヴ》

何とか高速移動魔法により危機を脱したのは。ティアナはそれを見てあえて追撃をしなかった

「はぁ・・・もういいです。お遊びは此处まで。もう一気に潰します。」

「はぁ、はぁ、どういう意味かな？」

「簡単なことですよ。今以上の圧倒的な力で叩きのめす、それだけです。クロスミラージュ、フルドライブ、フォルム、ヴァーチェ！！」

その瞬間、ティアナを光が覆い、次々に分厚い装甲が装着されていた。そして、光が晴れた其処には、右手にGNバズーカを持ち、両肩にGNキャノンを装備するガンダム、ガンダムヴァーチェが浮いていた

「え！？」

「GNドライブ正常稼働、GNフィールド発生装置良好、オールウェポンズグリーン。なのは隊長、簡単に落とさねないでくださいね？」

ティアナはそう言って両肩のGNキャノンをなのはに向かって撃った

「っ！！エクセリオン・バスター！！」

なのはは抜き打ちで砲撃を撃ち、なんとか相殺した

「さあ、第2ラウンドの開始よ！！」

「くっ！！」

錬鉄の英雄の弟子とエース・オブ・エース。その戦いは更なる激しさを見せた

「おい・・・あれって本当にティアナか？」

「わからん・・・しかしエリオのほうも明らかに昨日の朝とは何もかもが違う・・・」

「土君、あの二人に何かしましたか？」

「いや、性格変えるようなことはしてないぞ？まあ、エリオのほうは絶対にあいつの所為だな。あいつの。」

「あいつとは？」

「俺が呼んだ恐らくは現時点でエリオの次に速い槍の使い手。元々は最速の槍の使い手だったんだが昨日のうちにエリオが速度を超えたんだ。」

「そいつがエリオに教えたのか？」

「ああ、もう一人と共にながつり教えてた。それはもう此処の訓練が生温く感じるほどにな。」

「ふむ・・・土、そのものたちと戦って見れぬのか？」

「やめとけ。何も出来ないうちに槍で滅多刺しにされるのがオチだ。」

「なあ、ティアナって剣なんて使えたか？」

「ああ、あれはアーチャーとアサシンが教えたんだ。」

「だがあの剣には才能などは全く感じられんぞ。」

「そりゃそうだろうな。元々アーチャーの剣は才能じゃなくて努力で手に入れたものだし、ティアナに才能は無かったし。」

「どうして・・・どうしてどうしてどうして!？」

「おわっ!？どうしたんだよシャーリー!？」

「なんなんですかあのモードは!？あんなの入れた覚えなんて有りませんよ!？それに入ってたはずの計測用のデータも全部消えてる!？どういうこと!？それにあの二つにはまだフルドライブなんて搭載してませんよ!？一体何がどうなってるんですか!？」

「なに？あの二人がデバイスを改造するとは思えんし・・・士、お前何かしたか？」

「あ、バレた？ちょっと強化するだけのはずだったんだけど調子に乗ってたら魔改造しちまっててな・・・最終的になのはたちのデバイスを超えちまったんだよ。データはその時に邪魔くさかったから全部消去したし。」

「なあ、そのことシャーリーに言ったほうがいいんじゃないか？」

「いや、この状況で言っても更なる混乱を招くだけだし、言わないほうがいいと思う。それにもしこれでシャーリーが「デバイスを元に戻す!！」なんて言い出したらあの二人に惨殺されるかもしれんぞ？シャーリーが。」

「惨殺とは・・・言い過ぎではないか？」

「いや、今のあいっならなりかねん。ようやく手に入れた力を奪おうとする奴を許すような奴らじゃないし、あいっら。」

「はやてが部隊長権限使ってもか？」

「ああ。てかははやてがそんなことしたらあいっらの前に俺が許さん俺の最高傑作をあいっらから奪おうものなら、素粒子になるまで分解してやる・・・」

「士、顔がとんでもないことになってるって!！」

「う、うむ、流石にその顔は威圧感が・・・」

「ん？ああ、すまん。今戻す。」

「ほっ、ようやく戻った・・・」

「しかし士、このままだとティアナ達はやられるのではないか？」

「それは無いな。今のあいづらは3人ともEXランクだし、人を傷つけることに迷い・・・っていうか戸惑いが無い。まあ、要するに覚悟が出来てるんだ。覚悟が出来ている奴と出来ていない奴とでは勝負しても勝敗は見えている。」

「しっかしよお、何でたったの1日であんなに強くなれんだよ。こちらら必死こいて強くなったつてのによお・・・」

「そうでもないぞ？てか、あいづらは此方の時間で1日修行しただけであって実際は相当・・・いや、数えるのも嫌になるほどの長い時間をかけて強くなったんだ。それにいくら俺でもそんな1日やそこいらじゃあそこまで強くなて出来んわ。」

「ならいいけど・・・具体的に何年ぐらい修行させたんだ？」

「ああ、大体100「圧縮粒子・・・開放！！」お、ティアナが勝負を決めるつもりだ。」

「圧縮粒子・・・開放！！」

ティアナは目の前の相手であるのはに向けて最も強力な砲撃、GNバズーカ・バーストモードによる砲撃を撃とうとしていた。本来はもっと長引かせようかと思ったようだが、なのはの消耗が余りにも激しいために此处で止めを刺そうと思ったのだ

「レイジングハート！！カートリッジロード！！」

《カートリッジロード》

なのはもそれを迎え撃つべく、自身の最強砲撃魔法、スターライトブレイカーを発動させた

「スターライトブレイカー!!」

ぶつかり合う二つの砲撃。それは激しい衝撃波を撒き散らしながら拮抗していた。だが、その拮抗も長くは続かなかった

「っ!!押されてる!？」

「GNドライブ、出力最大!!」

その瞬間、ティアナの砲撃がさらに巨大になり、なのはのスターライトブレイカーを飲み込んでなのはに直撃した

「・・・魔力反応無しと・・・クロスミラージュ、お疲れ様。」

《お疲れ様です、マスター》

「それじゃ、あそこで気絶している教官様を持ていきますか。」

ティアナはそういつて気絶しているなのはのもとに向かった

その頃のエリオは・・・

「おらおらああ!!その程度かああ!!」

「は、速い!?!追いつけない!？」

「そらそらそらそらああ!!」

フェイトはエリオの槍についていけないでいた。フェイトのリミットブレイク、真・ソニックフォームはBJを限界ギリギリまで削り、

そのかわりに速度を急上昇させることが出来るフォームであり、その最大瞬間速度は音速と同等である。だが、エリオの攻撃は音速を遥かに上回る。そのため、かわそうにも速度の違いから、ついていくことが出来ずにいた。それに後ろに回りこんで攻撃しようにも、回り込んだ時点で攻撃が来るので全く手出しが出来ずにいた

「もうそろそろ頃合だな・・・飛べ!!」

「きゃっ!?!」

エリオはフェイトを槍で吹き飛ばし、自身も空に飛び上がって槍を構えた

「この一撃・・・手向けと受け取れ!!」

「っ!!バルディッシュ!!」

《ソニックムーヴ》

「ゲイ・ボルク!!」

フェイトはエリオの放った槍の射線上から即座に離れた。通常、こうして離れてしまえば槍は当たらず、投げた本人は得物が無くなり無防備になる。フェイトは完全に丸腰になったエリオを攻撃するために急接近した。が、フェイトは見てしまった。エリオの口が歪む所を

「呪いの朱槍から・・・逃げられると思ってんのかあ!!」

その瞬間、フェイトの身体に衝撃が走る。かわしたはずの槍が後ろから自身の心臓部に突き刺さったのだ。フェイトはその瞬間を見た直後、意識を失った

「あっけない幕切れだったな。つまらん。」

エリオはそういつてフェイトを担ぎ、訓練場を後にした

最後まで残ったティードは・・・

「ほらほら、かわさないと落ちますよ？」

「うわっ、危なっ！！あんだ、鬼畜やなっ！！」

「そんなこと言ってるいいんですか？」

「だからっ！！そない数の砲撃をいっぺんに撃つなー！！」

はやて相手にティードは遊んでいた。砲撃を絶え間なく撃ち続けること1時間、その間ずつとかわし続けているはやては既に限界、Bを維持するだけで精一杯であった

「もうそろそろ飽きましたね・・・GNドライブ出力最大！！」

「嘘！？まだ上がるんかい！？」

「次いで高濃度圧縮粒子全面開放！！フェイスバーストモード！！」

ティードの前に巨大な魔力球が形成されていく。はやてはそれを見て、啞然とした

「1時間も砲撃撃つといてまだそない余力があつたんかい・・・」

「まあ、そういうことです。というわけで、おとなしく気絶してください。」

ティードはそういつて引き金を引いた。その瞬間、魔力球がはやてに向かって高速で撃ち出され、はやてに直撃した

「ミッションコンプリート・・・二人のほうも終わってるようだし、俺も戻りますか。」

ティードはそういつて気絶しているはやてを持ち、訓練場を出た

27話 模擬戦という名の出来レース（後書き）

作者「なんか出来レース書いてるみたいだった・・・」

士「いや、実際出来レースじゃん。なのはたち一撃も与えないで倒されたぞ？」

作者「まあそうなんだよね・・・一応ティアナ達がこれだけ強くなりました的な感じで書いてただけ、途中から大分ノリとか入ってきたし」

士「なんと云う適当さ・・・」

作者「言わないでくれ」

夏海「ほんと作者って適当というか・・・」

士「夏海？どこいつてたんだ？」

夏海「刹那をつれてきたの」

刹那「始めまして、流 刹那、10歳でしゅー!」

士「・・・刹那？」

作者「・・・まじで？」

夏海「そうだけど？」

士、作者「「どっからどう見ても刹那・F・セイエイにしかみえねえ……」」

作者「当初の予定ではネギまの方の刹那に似せる予定だったはずだが……」

刹那「？なに言ってるんですか？駄作者さん」

士「ブツ!!」

作者「刹那に……10歳の子供にまで駄作者言われた……」

夏海「はいはい、駄作者は放っておいて、刹那、これ読んで？」

刹那「はい。ディスティニープラン様、感想どうもありがとうございます」

士「プレゼントの方は……出た。シャアシリーズ第三弾。内容は……パーフェクトジオング（作者宛）、スーパーディアス（赤）（夏海宛）、シナンジュ（アサシン宛）、シャア専用エルメス（アークチャー宛）、ゾゴジュアッジュ（俺宛）だそうだ」

夏海「ゾゴジュアッジュ……ってなに？」

士「俺もわからん」

作者「俺もわからんが、これだけは言えるな」

士、夏海、作者、刹那「……物凄く気持ち悪い」……

夏海「こんなのにシャアが乗ってたら・・・ヴェッ」

刹那「お兄ちゃん、これ怖い」

士「お前までそう呼ぶのか・・・まあいいか」

作者「はいはい。こう大分時間も押してきたから今日の所は此処までな。てなわけで刹那！！次回予告を！！」

刹那「はい。次回 第28話 ホテルアグスタ攻防戦！！」

「『ドライブ・イグニッション！！』」

PV25万突破記念 馬鹿馬鹿しい企画（前書き）

今回の話は馬鹿馬鹿しいだけでなく、非常にカオスとなっております。それとほとんど・・・というか名前は出たのに全く喋っていないキャラがちらほらいるのでご了承ください

PV25万突破記念 馬鹿馬鹿しい企画

作者

「えー、何気にPVが25万を突破したので今回は番外編・・・と
いくつか閑話的なことをやってみたいと思います。」

士

「25万越え・・・当初の予想を遥かに上回る結果だな。」

夏海

「私も流石にここまで来るとは思わなかった。」

作者

「これも、ひとえにこの駄作を読んでくれる読者の皆さんがいるからこそ！！いままで続いたんだ、きつと。」

士

「そうであると願おうか。」

作者

「いやきつとそうだって。」

夏海

「それよりも今回はなにやるの?」

作者

「今回は寝起きドツキリを仕掛けようと。」

士

「寝起きドツキリ?」

作者

「ああ、それも少し前の時代のきつい奴。」

士

「面白そうだが・・・誰を標的に?」

作者

「キラとアスランとアーチャーとアサシン。」

夏海

「うわっ、後が酷そう・・・」

「酷いどころの話じゃないだろ。ミーティアと宝具の雨で殺されるぞ。」

作者

「そんなことで一々怯えていては後に続かん!!というわけで、やるぞー!!」

士

「どうなっても知らんぞ・・・」

作者

「てなわけで、やってきました地球!!」

士

「なんで地球？」

なのは

「そうだよ。どうして地球？」

夏海

「しかも時系列はどうなってるの？」

作者

「いっぺんにいうな。反応できないだろ。」

刹那

「駄作者さん、早く進めてください。」

作者

「おーい、誰だ刹那に駄作者なんて言葉教えたの。」

夏海

「そんなこと気にしてたら身が持たないよ?」

作者

「お前か、教えたのは。」

夏海

「さあ、何のことでしょう?。」

士

「そんなことよりもマジで此処の時系列どうなってんだ?。」

作者

「此処は本編とは全くと言っていいほど関係ないから時系列は無し。」

「

なのは

「へえー・・・そういえばフェイトちゃんたちは?。」

作者

「今回の特別ゲスト? 的な感じの人たちを連れてきてもらってるからもう来ると・・・。」

フェイト

「みんなー!! 待った?。」

なのは

「お帰りフェイトちゃん。皆少し前に来たばかりだから大丈夫だよ。」

「

はやて

「なのはちゃん、ウチには何もなしかい・・・。」

なのは

「あ、はやてちゃん。お疲れ。」

はやて

「軽い・・・なんかものっそい軽い・・・。」

ティアナ

「狸部隊長、この程度で一々落ち込まないでください。」

エリオ

「そうだぜ、豆狸。」

ティーダ

「ふたりとも、いくら部隊長が豆狸で腹黒くて豆狸だとしても声に出すのはやめとけよ。」

はやて

「ぐはぁ!？」

スバル

「ああっ!？はやて部隊長が血を吐いて倒れた!？」

キャラ

「はやて部隊長、大丈夫ですか!？」

ヴィータ

「はやてっ!!はやてええー!!！」

作者

「八神はやて、享年19歳、短い人生でした・・・」
はやて

「待ていっ!!うちはまだ死んどらんがな!!！」

作者

「あ、生き返った。」

士郎

「なあ作者、何時まで待たせるんだ？」

作者

「っておい!？まだ出てくるなよ!!！」

士

「・・・作者よ、まさか特別ゲストって・・・」

作者

「はぁ・・・もういいわ、出てきてー!!！」

士郎

「ようやく出れた・・・」

凜

「ほんと、何分待たせるの・・・」

桜

「まあまあ姉さん、そう言わないで。」

イリヤ

「士郎、疲れたからおぶって。」

セイバー

「シロウ、ここはどこですか？」

ライダー

「冬木市・・・ではなさそうですね。」

ランサー

「お、エリオじゃねえか！！久しぶりだな！！」

キャスター

「全く、宗一郎様と二人っきりで過ごしたかったのに・・・」

バーサーカー

「・・・」

ラミアス

「ムウ、ここは？」

ムウ

「地球みてえだけど・・・」

ラクス

「此処は自然がたくさんあっていいですね。」

カガリ

「オーブの会議を投げてまで来たんだから面白くないと・・・」

シン

「カガリさん、抑えて抑えて！！」

ルナマリア

「ふう、空気が美味しいわね。」

メイリン

「お姉ちゃん、なにのんきなこと言ってるの・・・」

イザーク

「よし、アスランの面白い顔を写真に収めて後の笑い話のネタに・・・」

ディアッカ

「やめとけって、殴られるぞ。」

作者

「てなわけで今回は特別ゲストとして衛宮士郎、アカイアクマ遠坂凜、間桐桜、イリヤスフィール・フォン・エミヤ・アインツベルン、セイバー、ライダー、ランサー、キャスター、バーサーカー、マリュー・ラミアス、ムウ・ラ・フラガ、ラクス・クライン、カガリ・ユラ・アスハ、シン・アスカ、レイ・ザ・バレル、ルナマリア・ホーク、メイリン・ホーク、イザーク・ジュール、ディアッカ・エルスマンの19人を呼びました。」

はやて

「何人呼んどんねん！！絶対に台詞回らんやる！！」

士

「こつちだって作者に俺に夏海、刹那、なのは、フェイト、アリスア、はやて、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、シャリー、ティアナ、スバル、エリオ、キャロ、ティーダ、の18人、全員合わせたら37人だぞ？」

作者

「なんという大所帯。がんばろう。」

夏海

「ほんとに出来るんだか・・・」

作者

「それじゃ、まずはキラ達の寝ている部屋に向かいまーす。」

作者

「さて、キラ達の部屋にやってきました。ターゲットの4人は泥酔で完全に寝てる模様です。」

凜

「ねえ、アーチャーもアサシンも英霊よね？それが泥酔ってなに飲ませたの？」

作者

「神代の酒をそれぞれに一升ほど飲ませたら程よく泥酔してくれたよ。」

士

「そうか、それで俺の蔵の中から何本も酒が無くなってたのか・・・」

「

夏海

「作者に死亡フラグが立ったね。」

作者

「あれ？他の皆は？」

カガリ

「アスランの寝顔・・・」

ラクス

「キラの寝顔・・・」

士郎

「うわぁ・・・こいつ寝相わるっ。」

凜

「ほんと、未来のあんたとは思えないわね。」

桜

「アサシンさんは寝相いいですね。」

セイバー

「こんなに食べ残しが・・・もったいない。」

士郎

「セイバー、あとで何か作ってやるから我慢してくれ。」

作者

「はぁ・・・なんでこう皆勝手やるんだか・・・」

ラミアス

「まあまあ作者さん、今回はかりはいいじゃないですか。」
作者

「そうですね・・・ありがとうございます、ラミアスさん。」
士

「作者、進めなくていいのか？」
作者

「そうだな。それじゃあこのまま外まで移送するから。」
シャマル

「どうやって移送するんですか？」
作者

「これ。」
シャマル

「これって・・・担架？」
作者

「魔力を使うとアーチャーが起きる可能性があるから物理的にもってくことにした。」

シャマル
「はあ・・・」

作者
「というわけで、男性陣はこいつらを外に運ぶのを手伝ってくれ。」
ムウ

「よし、いっちょやりますか。」
士郎

「慎重に運ばないとな・・・」

士

「で、ここまで慎重に運んできたが、ここはどこなんだ？」

作者

「ここは急遽造った特設ウォータースライダーでございます。」

夏海

「これほんとにウォータースライダー？流れてる水が赤いよ？」

作者

「この日のために言峰に頼んで言峰マーボーをものつそい量作ってもらってそれを流してるんだ。」

士郎

「こんな量作って勿体無いとか思わないのか？」

作者

「それは大丈夫。全部ギルガメッシュに食わすから。」

カガリ

「なあ、後でこの麻婆豆腐作ってもらっていいか？」

作者

「いいけど・・・食えるのか？」

カガリ

「大丈夫だ！！・・・きつと。」

ラクス

「カガリさんは大の辛い物好きなんですよ。」

士

「てことはキラもか？」

士郎

「何でそういうことになるんだ・・・それにオレ外道マーボー今後トモヨロシク的なものだぞ？これ。絶対食わないほうがいいって。」

凜

「士郎、この人についてもきつと止まらないわ。」

作者

「さて、スライダーの準備も出来たし後はこれを撃つだけだな。誰か撃ちたい奴いるか？」

エリオ

「んじゃ俺がやる!！」

ランサー

「俺もやるぜ!！」

ムウ

「面白そうだからやってやる!！」

イザーク

「俺もやろう!！」

作者

「おk。そんじゃあそれぞれ一本ずつ持って其処に構えて。」

エリオ

「こうか?」

作者

「そうそう。こうして構えて・・・此処を押せば撃てるから。」

エリオ

「ほうほう・・・ようし、いつでもいけるぜ!！」

ランサー

「こっちもだ!！」

ムウ

「こっちもいいぞ!！」

イザーク

「こっちもだ!！」

作者

「ならいくか。それでは、3・・・2・・・1・・・撃えええええええ!！」

ドオオオオオオオン!!!!!!!!!!!!!!

キラ

「うわああああ!!!?」

アスラン

「なんだああああ!!?」

アーチャー

「ぬおおおお!!?」

アサシン

「曲者かつ!?!つてむううう!!?」

キラ

「なんでウォーターライダー!?!つて辛い!!水が辛い!!」

アスラン

「痛いっ!!全身が痛いっ!?!」

アーチャー

「もしかこれは言峰マーボーかつ!?!あつううう!!?」

アサシン

「もがががが!!?」

キラ

「ぎゃああああ!!?!目に入ったああ!!」

アスラン

「のおおおお!!?」

アーチャー

「ああ、切嗣じいさんが見える・・・」

アサシン

「・・・」

作者

「いやゝ、綺麗に落ちていったな。」

士郎

「なんか・・・気の毒になってきた。」

凜

「あははははは!!!」

桜

「姉さん、笑いすぎですよ・・・」

イリヤ

「きやははははははは！！アーチャー面白い！！」

ランサー

「ぎやははははははは！！！！アーチャーの野郎、とんでもねえ顔で落ちていきやつた！！」

なのは

「あははははははは……なんか可哀想だね。」

フェイト

「面白けれど……可哀想。」

はやて

「あははははははははは！！もう最高や！！」

シグナム

「主はやて、笑いすぎですよ。」

ムウ

「ははははははははは！！！！こいつは傑作だ！！」

イザーク

「はははははははははは！！いいぞ、もっと哀れな姿をさらせ！！」

ディアツカ

「イザーク、お前性格悪すぎだぜ？まあ笑えるけどよお。」

作者

「さて皆さん、十分に笑ってもらえたようなので下で浮かんでる水死体？的な4人を回収に行きますよ。」

作者

「うわ……4人とも目がいつちゃってるよ……」

士郎

「此処までさせたのは作者だろ。」
作者

「いや、そうなんだけどさ・・・まさか英霊がここまでなるなんて
思ってたしな・・・」

凜

「そんなのはどうでもいいけど、この4人はどうするの？」

作者

「こつちで運ぶから大丈夫。」

凜

「そう、それじゃあ私達はもう帰るとしましょう。」

イリヤ

「えー、もつといたい!!」

士郎

「こらイリヤ、わがまま言うんじゃない。」

凜

「ほら、行くわよ。」

作者

「それじゃあ、またな。」

士郎

「おう、またな。」

ラミアス

「私たちも帰りましょうか。」

カガリ

「わかった。アスランの寝顔も取れたし・・・」

ラクス

「私もキラの寝顔が取れたので・・・」

作者

「お前ら本当の目的それだろ。」

ムウ

「ほらほら、マリューも待ってたんだからさっさと帰るぞ!!」

イザーク

「はあ、この写真をニコルと隊長にも見せたかったな・・・」
ディアッカ

「今更そんなこと言っても何にもならないっしょ。」

ムウ

「こら其処！！もたもたしてないでさっさと来る！！」

ラミアス

「このたびはお世話になりました。」

作者

「気にしないでくださいな。こちらも楽しかったですし。」

ムウ

「それじゃあな！！二人にもよろしく言うておいてくれ！！」

作者

「了解です。それでは、いずれ会う時まで。」

なのは

「なんか凄く騒がしい一日だったね。」

士

「まあいいんじゃないか？こんな時があっても。」

作者

「まあ、ほんとたまにだけだな。」

夏海

「それよりもいいの？4人にばれたら作者殺されるよ？」

作者

「げっ！？忘れてた！！」

士

「雷速で逃げるとか・・・なにやってんだか・・・」

フェイト

「ねえ士、作者って強いのか？」

士

「いや、逃げ足だけが異様に速いだけで雑魚だ。」

フェイト

「ふうん・・・」

夏海

「それよりも何時までこれ続くの？読者も大分飽き飽きしてると思うんだけど。」

士

「そうだな。では、読者の皆様。」

「次回を、お楽しみに。」

「」

PV25万突破記念 馬鹿馬鹿しい企画（後書き）

今回の後書きは作者が逃げたために無しです

28話 説明・・・なのか？（前書き）

今回はかなり短いです

28話 説明・・・なのか？

「・・・で、俺は何故に拘束されねばならんだ？」

「決まってるよ。ティアナたちに何をしたのか聞きだすため。」

「何って・・・ただ修行しただけだが？」

「嘘。一日やそこらであそこまで強くなるはずがない。お兄ちゃん、本当のこと言ってる？」

「本当のことって・・・唯単に修行しただけだって言ってるだろ？」

「なんなら本人達、ひいては3人に稽古を付けていたアーチャーにアサシン、それと今から呼ぶがランサーとディムルトにも聞くか？」

「それでこれが解決するならそれでもええ。」

「ならそうさせてもらおう。（アーチャー、アサシン、ティアナ、エリオ、ティード、今すぐに部隊長室に集合だ。書類作業が残っていてもいい、後で手伝ってやるから今すぐだ。）

（急にどうしたんですか？）

（早急に解決する必要があることが出来た。それにお前達と+αが必要なんだ。）

（とにかくいますぐなんだな？壁、ぶち抜いてっていいか？）

（それは一般常識からいって完全にアウトだ。それに誰が直すと思ってるんだ？）

（あんだ。）

（わかってるだけ尚悪いな。）

俺は今、なのはたちに捕まり、部隊長室で尋問・・・もといお話を受けていた。どうもやはりティアナたちのことを聞きたいらしく、部屋で寝ていた所をバインドて拘束され、そのまま部隊長室に連行された。別にバインドくらい直ぐに破壊できるんだけど跡で煩く言われるのも癪なのでされるがままにした

「もうすぐく」

ドガシャアアアア！！！

そんな轟音と共に部隊長室の扉が吹き飛び、エリオたちが入ってきた

「・・・なあ、俺さっき念話で言ったよな？壁ぶち抜いてくるなつて。」

「いいじゃねえか。それにぶち抜いたのは壁じゃなくて扉だ。」

「いらん屁理屈はいいからその残骸をどうにかしろ。」

「へいへい、わあつたよ。」

「・・・ねえはやてちゃん、あれ本当にエリオ？」

「わからへん。けど、魔力光は一緒やったからエリオやと思うけど・

・・・」

「ううゝ、エリオゝ、元に戻つてよゝ」

「うつせえぞ！！殺してバラして並べて揃えて晒してやるうか！？」

「ヒツ！？」

「はいはいそこまでな。二人とも一旦落ち着け。エリオはさつさとその残骸を片す。フェイトは口調についてはあきらめろ、長年使ってきた口調はおいそれと変えられるもんじゃない。」

「あれ！？何時の間にバインド解いたの！？」

「エリオが「殺してバラして並べて晒してやるうか！？」って言った時にはもう外していたが？」

「うそ・・・全然氣いつけへんかった・・・」

「この程度も氣づかないなんて本当にこの部隊大丈夫か？」

「兄さんの言うことはよくわかるわ。いつそのこと兄さんか士さんを部隊長にしたほうがいいんじゃないの？」

「酷い・・・うちのこと全否定された・・・」

「はあ、何でも収拾がつかなくなるんだか・・・？」

「・・・これは一体？」

「アーチャー、来るのが遅い。そしてこの場を何とか抑えてくれ。」
「無理だ。止めたければ真祖の姫君でも連れて来るべきではないのか？」

「アホか。んなことやったら抑止力がでしゃばってくる。それを押さえるのは結構骨が折れるんだよ。」

「あの・・・土君？」

「おっとすまん。さて、あとはランサーとディムルツを呼ぶだけだから・・・」

そういつて俺は召喚用の魔方陣を展開する。部隊長室は他の部屋よりも結構大きい造りになってるので部屋の隅々まで魔方陣を展開すればギリギリ展開できる

「数多ある平行世界よ、我が意思の元、我が盟友を今此処に！！召^{モシ}喚！！」

部隊長室が光で包まれ、光が晴れた其処には、二人の男が立っていた

「兄貴！！よう！！ディムルツも！！」

「ん？お、エリオじゃねえか！！」

「あれから鍛錬はやってるか？」

「おう！！」

「・・・お兄ちゃん、あの人たちは？」

「エリオの師匠ズ。因みにあの青いほうはエリオの性格の原因でもある。」

そういつた途端にフェイトから黒いオーラが吹き出る

「あれが・・・エリオを不良にした・・・殺す！！」

「おい・・・ダメだな、聞いてねえ。」

そしてフェイトは一瞬でデバイスを起動し、ランサーに向けて

「よくも・・・よくもエリオをー!!」

「ん？つてぎゃあああああ!!」

ジェットガンバーを全力で放った。ランサーは完全に油断していた
ようで、かわすこともなく直撃し、窓を突き破って飛んでいった

「兄貴ー!!」

「あー、よう飛んだな。」

「えっと・・・それでいいの？」

「てかあの人大丈夫なん？いくら非殺傷設定でも海に落ちたらどう
なるかわからへんで？」

「大丈夫、あいつは狗「ああ!?誰が狗だゴラァ!!」ほら、もう
帰ってきた。」

俺が狗というランサーは一瞬で戻ってきた。だが何故か右手に持
っているゲイボルクには魚が何匹も刺さっている

「とりあえず、ランサーも戻ってきたことだし、説明を開始するぞ。
・・・

1時間後・・・

というわけだ、質問はあるか？」

「それじゃあ、どうしてティアナとエリオだけ鍛えたの？スバルとキヤロも一緒に鍛えてくればいいのに。」

「あの二人は才能……っていうか潜在能力が無かったんだ。ティアナたちと同じ鍛え方をしても精々お前らと同等がいいところだ。それに基礎訓練の時点でティアナたちとは天と地ほどの差が出来るから同じ修行も出来ないしな。で、ほかに質問は？」

「じゃあ聞くけど、なしてティアナとエリオはあない魔力を持ってたん？」

「リンカーコアを俺の能力で強化した。因みにこれは適性がないと強化できないやり方で、ティアナとエリオはとんでもなく適正が良かったんだ。」

「うちらは？」

「最低。強化しても増えるどころか減るな。」

「どれだけ相性悪いんねん……」

「落ち込んでるはやては置いといて、フェイトは質問ないのか？」

「じゃあ……どうしてエリオの口調がこんなに悪くなったの？」

「それか……まあ、長い間ランサーと修行してたせいだな、うん。」

「そつか……じゃあ、ランサーさんを殺ればいいんだね……」

「待て待て、ランサーを殺ったって……ってお前らは何のんきに魚焼いてる！？」

「あんまり話が長かったんでお腹がすいたんです。」

「だからって部隊長室で七輪を使うな！！煙たい！！」
「気にするな。この部屋が少々魚臭くなるだけだ。」
「いやここうちの部屋！！魚臭くなったらうちが困るわ！！」
「」「黙れ、喚くな。狸は黙って地蔵にでもなってる。」「」
「・・・もうあかん、うち、おしまいやあ・・・」
「あ、もう焼けたんじゃない？」
「ふむ、その様だな。」
「んじゃ、さつさと食っちゃまおうぜ！！」
「おうよ！！早く食わねえとなくなっちまう！！」
「10匹以上いるのに直ぐ無くなる訳無いだろ。ゆっくり食べゆっくり。」
「はあ、もういいや、俺にも食わせろ！！」
「あ、士さん。はいこれ。」
「おう、あんがとよ。」
「しっかしこら辺の海は信じらんねえほどの種類の魚がいるな。」
「俺としては吹っ飛ばされて1分経たない内に魚を10匹以上獲ってきたお前のほうが信じらんねえよ。」
「・・・フェイトちゃん、これどうしたらいいの？」
「・・・私にもわからないよ。」

そして結局この後1時間話は進まなかった

「さて、魚も食ったことだしはやて、一つ提案がある。」

「なんや？その提案で。」

「部隊をひとつ増やさないかって話。」

「メンバーは？」

「俺と夏海、アーチャー、アサシン、刹那、ティアナ、エリオ、テ
ィーダを予定してる。」

「戦力割きすぎやんけ。全員現状機動六課の最高戦力やんけ。」

「まあ刹那でさえSSS+だしな。」

「呼んだ？」

「うおっ！？いきなり出てくるなよ。そして何故に肩車状態？」

「此処が一番居心地がいいから。」

「全く、何でもこう甘えん坊になったんだか・・・」

「とりあえずいきなり後ろに現れるのはやめてくれ夏海。」

「気にしない気にしない。」

「はあ・・・で、部隊の話だが、スターズとライトニングを統合す
れば何とかなるだろ、きつと。」

「訓練はどうするんや？」

「合同でもいいし別々でもいいぞ。」

「うーん・・・じゃあ、一週間試験運用して何の問題も無かったら
でどうや？」

「それでいいぞ。」

「ならそれで決定や。」

「んじゃ、俺は退散するので後はティアナたちと話し合ってくれ。」

俺はそういつて部隊長室を出た。所謂丸投げである

28話 説明・・・なのか？（後書き）

作者「ああ、ようやくテストが終わる・・・」

夏海「お兄ちゃん、作者どうしたの・・・？」

士「なんでも12月2日のテストで今年の分が終わるんだと」

作者「この1ヶ月間、ろくに小説を書けなかった文、12月はがつり書くぞー！！」

夏海「何たるテンション、高すぎてウザい」

士「確かにウザいな」

作者「早速だがディスティニープラン様、感想どうもありがとうございます！！」

士「プレゼントの方は、トールギス（アサシン宛）、トールギス？（アーチャー宛）、ガンダムエピオン（夏海宛）、ガンダムエピオンカスタム（俺宛）、ウィングガンダムゼロ（刹那宛）、ザクポン&シャア専用サク（作者宛）か。刹那にウィングゼロ・・・暴れる？」

夏海「どうしてその考えに至ったのかすんごい不思議なんだけど」

士「気にするな。それとディスティニープラン様、以前感想に『刹那是谁の子？』と書いてありましたが、刹那はラハール様のところの佐助がつれてきた子供です。わからない場合は19話を見てくだ

さい」

作者「次回予告行くぞー!!」

夏海「はやっ!?もつとゆっくり行こうよー!!」

作者「時間が足りないんじゃないじゃああー!!遊戯王の方なんて完全に連載がストップしてるし、学園黙示録のほうもスピードががた落ちしてるんだよおおおおお!!」

士「一回黙れえええ!!ガイアフォー――ース!!」

作者「効かぬわあああ!!コキユートス!!プレス!!」

夏海「はあ・・・今回の次回予告は私がやります。次回 第29話
ホテルアグスタ・・・壊滅?」

士「ファイナルエリシオン!!」

作者「ジユデツカプリズン!!」

夏海「いい加減にしなさーい!!ギガ・デス!!」

士「むっ!!テンセグレートシールド!!」

作者「やべえ!!防ぐものが・・・ねええええええ!!」

夏海「ふう、ようやく静まった・・・」

29話 ホテルアグスタ・・・壊滅？（前書き）

ノリであいつを出しちゃいました。まあ気にしないで見てくださいな

29話 ホテルアグスタ・・・壊滅？

士 side

機動六課部隊改変から一週間がたった。試験的に運営していた新部隊、ネセサリウスは何の問題も無く機能し、成果も上々だったため、ようやく正規の部隊として運営が始まった。因みに、スターズとライトニングは統合され、その名をスレイヤーズと改めた

「で、今回の任務の内容は？」

「うん、今回の任務は今から行くホテル・アグスタの警備だよ。」

「警備ね・・・大方オークションに出展されるロストログアの反応にガジェットが寄ってくるかもしれないから駆除しろってんでじよ。」

「まあそんな感じだね。」

余談だが、なのはとはやては既にティアナたちの口調について諦めている

「でもよあ、なんかやな感じがすんだよなあ・・・」

「やな感じね・・・まあ一つ確かなのは何も無く終われるって事は無いことだな。」

「土君、そんなこと・・・ないよね？」

「いや、あるだろうな。その証拠にいつもおっとりしてるはずのフエイトが殺気立ってるし。」

「え！？そんなに！？」

「周りから見れば明らかだ。何かあったのか？」

「うん、これを・・・」

そういつてフェイトは空中に画面を出し、一人の男の写真を出した

「うわっ、趣味悪っ。」

「髪の毛紫に染めるとか・・・ババアかこいつは。」

「とりあえず率直な感想どうも。確かにクズって感じしかしねえけどな。」

「この男はジェイル・スカリエッティ、今回の事件の主犯と思われる・・・というか主犯だよ。」

「ガジェットに名前でも刻まれてたんか？」

「うん、三型に組みこまれていたジェイルシードに「ちょっと待て。どうしたの？」

「ジェイルシード？あれが向こうにあるわけ無いだろう。」

「どうして？」

「忘れたんかい・・・ジェイルシードは現在俺と夏海とアーチャーのデバイスのコアに7個ずつ組み込まれてるんだぞ？つまりは全てのジェイルシードが機動六課にあるわけだ。この状態からどうやって盗むと？」

「ああ、そういえばそうだったね。」

「だめだこりゃ・・・こんな奴が執務官とか、管理局は終わってるな。」

「確かに、管理局には雑魚でKYな執務官もいるし。」

「それって絶対にクロノ君のことだよな！？」

「なのはからもそういう目で見られていたか、哀れクロノ。」

そんな感じに談笑していると

「あの・・・シャルさん、その箱はなんですか？」

「これ？これは隊長さんと土君のお仕事着。」

ホテル・アグスタに到着した

「・・・はあ、動きづらいつたらありやしねえな。」

俺はすぐさま愚痴を言った。今の俺の姿は背広である。因みにだが、俺の顔は流 竜馬と同じ顔である。故に背広など着たらはつきり言つてヤクザにしか見えないのだ。その証拠に俺を見るほとんどの人が恐怖の目で見てくる

「はあ・・・こんなんだつたら外の警備にすりや良かった・・・」

俺がそういうと後ろから

「ちょっといいかね？」

「なんですか？」

「其処の婦人が君の姿が余りにも怖いから外に出してくれと言ってるんだ。なので今すぐ会場から退場願いたいのだが。」

「・・・まじですか？」

「まじだ。」

「・・・ひでえ・・・」

「おまたせ・・・ってどうしたの？」

「はっ、高町一等空尉、この様なところに何様で？」

「今日はここの警備に来たんですが・・・この人がどうかしましたか？」

「あそこにいらつしやる婦人がこのかたの顔が余りにも怖いので外

に出して欲しいと。」

「・・・あの、この人私達と一緒にで今日この会場の警備を任される人なんですが・・・」

「はっ、そうでしたか。申し訳ありませんでした。」

警備員はそういつてその場から離れた

「・・・土君、大丈夫？」

「・・・なあ、もう俺我慢しないでいいよな？十分頑張ったよな？」

「え？土君、なに言ってるの？」

「もう・・・ゴールしてもいいよな？」

「なのは、どうしたの？」

「フエイトちゃん、土君がおかしくなっちゃったの。」

「なあ・・・このホテル滅してもいいよな？」

「お兄ちゃん、それだけはダメだから！！」

フフフ・・・もうどうにでもなれ・・・

「あちゃー、やっぱりこうなっとったか。」

「え？はやてちゃん、どういうこと？」

「いやな、今回の警備で土君のことを伝え忘れたんよ。それに土君の顔ヤクザみたいやからもしかすると・・・って思っとなんやけど、見事に的中ってわけなんや。」

はやてが笑いながらそういつている中、俺ははやての後ろに回りこんで肩に手を置いた

「ん？土君、どうし・・・た・・・ん・・・や・・・？」

恐らく今の俺の顔には獰猛な笑みが張り付いているだろう。俺はそ

のまま魔力を変換し

「・・・エレクトリックショーーク!!」

はやてに身体に電流として流した。無論、服などに触れても燃えな
いようになっているものだ

「あばばばばばばばばば!!?」

「はやてちゃーん!!?」

ギャグ漫画の如くしびれるはやて。もう面白いったらありやしない。
現にフェイトは笑ってるし

「ふう・・・お仕置き終了つと。」

「だ、だめや・・・しびれて動けん・・・」

「土君、やりすぎだよ!!」

「大丈夫だ。10分ぐらいしびれるだけだから。それとフェイト、
お前笑いすぎ。」

「だ、だって・・・ププツ、面白すぎるんだもん!! あははははは
はは!!」

会場中に広がるフェイトの笑い声。と、それを聞きつけてか一人の
男がこつちに來た

「なのは、久しぶり。」

「あ、ユーノ君、久しぶり。」

「出たな淫獣、ますます女顔が進んだな。」

「誰が女顔・・・って土!? 生きてたのか!?」

「あほか、あの程度で死ぬかってんだ。」

「まあ、非常識かバグで身体が構成されてるんだろうし、あの程度

じゃ死ななさそうだ。」

「ほうほう、お前は今すぐにも混沌の海に帰りたいのか。よし、わかった。魂ごと送ってやるから感謝しろ。」

「ちよつと！？混沌の海って何処！？てかなんでそんなにイライラしてるの！？」

「ユーノ君、士君はさっき警備員さんに追い出されそうになったの・・・」

「そういうことだ。というわけで生贄に・・・」

俺がそう言おうとした瞬間

（みんな！！ガジェットの反応が！！）

「っち、タイミングがわりい。命拾いしたな、ユーノ。」

俺はそういつて会場を後にした。・・・何かやな予感がする

士 side end

ティアナ side

私は今、元相棒のスバルと一緒に警備に当たっている。なぜ元かというと、部隊が一新された時に所属が変わったからだ。私はネセサリウス（避けられないという意味らしい。）、スバルはスレイヤーズ（滅する者達という意味らしい。）に所属することになった。この二つの部隊、とんでもなく戦力差が開いている。スレイヤーズ分隊はSSランクのなのは隊長とフェイト副隊長が最高戦力で、そこか

らS+、S、AAA+、AA+、Aランクとなっている。まあ実際、管理局内でもここまで戦力のある部隊は早々無いだろう。だが、ネセサリウス分隊はこれを遥かに凌駕している。最高戦力にリミッター付きでEX++の士隊長、夏海副隊長、EX+の私とエリオ、兄さん、EXのアーチャー、アサシン、SSS+の刹那で構成されている。正直言つて此処までくると呆れる。恐らく私達が全力を出せば管理局など簡単に落とせるかもしれない。いや、士隊長だけでもいけそうな気がするのは私だけ・・・？因みにだけど、私の隊での序列は上から3番目、つまりは副隊長補佐つてわけ。仕事なんて自分の分だけしか回つてこないけど。つと、大分話がずれたわね。今回の仕事はここ、ホテル・アグスタの警備だけ・・・

「かつたる・・・てか何？何でこんなに穴だらけな警備体制なの？」

正直言つてやる気が起きない。それに警備体制も穴だらけ。空戦魔道師は5人しかいない。地上勤務の魔道師は30人以上いるけど空を飛べる奴が来たらなす術も無いだろう。そうなれば空戦魔道師が対処に追われることになる。誰が見てもそうなることは予測できるだろう。だけど本局は私達のほかにたったの5人しか派遣しなかった・・・はあ、本局は一体何を考えてるのか・・・

「ねえティア、お菓子食べる？」

「あんたは仕事に何持つてきてんのよ！！仕舞いなさい！！」

「えー！？だつて暇なんだもん！！」

「よし、そこまで言うなら永遠にお菓子でも食べてなさい・・・あの世で。」

そういつて私は一本の太刀を投影する。太刀の名は飛竜刀【椿】、何でも火竜の中でも特に希少な銀火竜を材料にして作られた太刀だそうで、振るたびに超高温の炎が刀身から出てくる。この炎が曲者

で、巧く使わないと自分まで焼かれる羽目になる

「え！？ちよつとティア!？」

「大丈夫、痛みは一瞬よ。」

「そうじゃなくて!!!」

私が太刀を振りかぶったそのとき

(みんな!!ガジェットの反応が!!)

「ちつ、タイミングが悪いわね。スバル、六課に戻ったらたつぷりお仕置きしてあげるから覚悟しなさい。」

「そ、そんな殺生なー!!」

スバルが後ろで騒いでいるが気にしない。私は瞬動で一気に跳んでいった

「はあっ!!」

これで何機目だろう、もうそろそろ飽きてきた。既に100は壊したはずだが、まだ沸いてくる

「鬱陶しい!!消えなさい!!」

そういつて目の前の?型を切り倒す。超高温の炎で熱せられた刃で切られた?型は見るも無残な姿となった

「だー！もうめんどくさい！！ここら辺一体全部焼き払おうかしら！？」

私がそう叫んだ直後、これまでとは明らかに違う威圧感が襲ってきた

「っ！？」

威圧感のする方を見ると・・・

「ターゲットカクニン、ハイジヨコウドウニハイル。」

両肩に巨大な砲門を付けた、機械の竜がいた

ティアナside end

士side

「シャル！！状況は！？」

「いまティアナちゃんが先行してガジェットを倒して・・・っ！？」

「どうした！？」

「なに・・・あれ・・・」

シャルの指す方を見ると

「なっ！？ムゲンドラモン！？」

全身がクロンデジゾイド製のパーツで作られたサイボーグ型デジモン、ムゲンドラモンがいた。しかも、その先にはティアナが飛竜刀【椿】を構えている

「ティアナ！そいつを相手にするな！！クロンデジゾイドにはクロンデジゾイドしか効かん！！」

俺は叫ぶが、その声はティアナには届かない。距離がありすぎるのだ

「っち、トレース・オン！！ドラモンブレイカー！！」

俺は刃が3つに分かれた大剣、ドラモンブレイカーを投影し、縮地を使ってティアナの元に向かった

士side end

三人称side

「ったく、どういうこと！？何で椿で切っても効かないのよ！？」

「コノクロンデジゾイドノカラダニソノヨウナブキナドキカン！！」

「なによそのクロンデジゾイドって！！どんだけ頑丈なのよ！？」

「オシャベリモココマデダ、キエロ！！ムゲンキャノン！！」

ムゲンドラモンの砲門から強力な砲撃が放たれる

「っ！？やばっ、かわしきれない！？」

ティアナはとつさに回避しようとするが、距離が近すぎたために巻き込まれてしまった

「キャアアアアア!？」

そのまま吹き飛ばされるティアナ。ムゲンドラモンはティアナに向けて再度攻撃する

「トドメダ!!ムゲンキャノン!!」

再び発射される砲撃。それはティアナに

「ビクトリーチャージ!!」

直撃しなかった

三人称side end

side

「ティアナ、大丈夫か!？」

「問題ありません、まだ戦えます。」

「なら他の所を当たってくれ。こいつは俺がやる!!」

「わかりました。」

そういつてティアナを他の所に行かせる。そして俺はムゲンドラモンの方を見て

「貴様、マキナの手下か。」

「ソウダ。ワタシハキサマヲノハイジヨノタメニヨミガエッタノダ。」

「そうか、ならもう一度此处で死んでもらおうか！！エヴォリユージョン！！」

直後、俺の身体を青いバーコード、デジコードが覆う

「ナニッ！？」

「デュークモン！！」

デジコードが晴れた其処には、全身を純度99.9%のクロンデジゾイドの鎧に身を包み、右手に聖槍『グラム』、左手に聖盾『イージス』を持った聖騎士型デジモン、ロイヤルナイツがー、デュークモンがいた

「ふむ・・・ぶつつけ本番にしては調子もいいな。」

「キサマ、ニンゲンノクセニデジモンニシンカスルナド！！」

「俺が人間？いや違うな。今の俺は金色の魔王、創造神だよ。」

「ザレゴトヲ！！シネ！！」

「そういうわけにも行かないんだよ！！ロイヤルセーバー！！」

ムゲンドラモンの攻撃にあわせるように神速の突きを放つ

「ナニッ！？ワタシノカラダガ！？」

「クロンデジゾイドを持っているのが自分だけだと思っなよ？セーバーショット！！」

グラムの先端から聖なるエネルギーの弾が発射される。ムゲンドラモンはそれを直に受け、後ろに吹き飛ばされた

「ガハッ!!」

「そら、もう一発くらっておけ!! ロイヤルセーバー!!」

倒れたムゲンドラモンに更なる追い討ちをかける。ムゲンドラモンは既に虫の息で、全身を覆っていたクロンデジゾイドも既にボロボロであった

「グッ・・・ワタシハ・・・ワタシハマダシナン!!」

「まだ息があったか。もういい、此处で引導を渡そう。」

俺はそういつてイージスを構える。ムゲンドラモンも全身のエネルギーを肩の砲門に集中させ、最後の一撃を放とうとしている

「コレデキエウセロ!! ムゲンキヤノン!!」

「それはこっちの台詞だ!! ファイナル・エリシオン!!」

二つの砲撃がぶつかり合う。その衝撃は激しく、周りの木々をなぎ倒していく

「ナニッ!？」

「これで・・・終わりだ!!」

俺はイージスに一気にエネルギーを送り、砲撃の勢いを増大させ、ムゲンドラモンの攻撃を弾き飛ばして、砲撃を直撃させた

「ガアアアアアアアア・・・」

「永久に眠れ、ムゲンドラモン。」

完全にばらばらになったムゲンドラモンを放置し、俺は空へと飛び上がった

29話 ホテルアグスタ・・・壊滅？（後書き）

士「まさかのデジモン・・・しかも何故にムゲンドラモン？」

作者「なんか見た目がガジェットぽかったから。理由はそれしかない」

夏海「なんという適当さ・・・これからもデジモンは出てくるの？」

作者「一応予定では出す。とはいっても基本的に究極体の奴だけだけど」

士「完全体以下を出すときは？」

作者「群れさせる」

夏海「メタルグレイモンとか群れさせたらやばくない？ギガデストロイヤー連射されて管理局終わるよ？」

作者「管理局など知ったことか。大体俺は管理局が嫌いだ」

夏海「じゃあ何で管理局サイドに置いたの？」

作者「仕方なかったんだよ・・・物語を円滑に進めるには・・・」

士「辛気臭いぞ、作者。早く進まんと読者が飽きるぞ」

作者「だな。さて、気を取り直して・・・ディステイニープラン様、感想ありがとうございます」

夏海「今回のプレゼントは、リーオー（OZ）（お兄ちゃん宛）、スモー（ゴールドタイプ）（アーチャー宛）、ガンダムシュピーゲル（アサシン宛）、ラフレシア（私宛）、アルティメットガンダム（刹那宛）、グランドマスターガンダム（作者宛）だよ」

士「リーオー・・・何気に強いよな、こいつ」

作者「グランドマスターガンダムね・・・色々詰め込みすぎだろ、こいつ」

夏海「刹那宛のアルティメットガンダムも十分詰め込みすぎだよ」

士「金ぴかのMSってのもな・・・狙ってくれと言ってるようなもんじゃね？」

作者「それ同感」

夏海「シュピーゲルは普通だよな、普通」

士「これと言って何か特殊なことがあるわけでもないし・・・普通だな」

作者「ああ、普通だ・・・っと、もうそろそろお開きにするぞ」

士「あいよ。そんじゃ、次回を・・・」

「・・・お楽しみに・・・」

30話 デバイス強化とテスト（前書き）

えー、今回も士がはっちゃけます。そしてティアナたちが更に強くなります。（武器的な意味で）

30話 デバイス強化とテスト

「ロイヤルセーバー!!」

ムゲンドラモンを破壊した後、俺は姿を変えずにガジェットの殲滅に向かった。とは言っても既にティアナとエリオによって大部分が破壊されている中でなのでほとんどいないが

「ここでまたデジモンが出てきたら厄介だな・・・っと、セーバーショット!!」

ムゲンドラモンが出てきた為にこれからはデジモンの方にも気を配らなくてはいけない。もしもクラナガンに七大魔王級のデジモンが出てきたらミッドチルダ、ひいては管理局の終焉だ。もしそうなれば何かとまずい。管理局は裏では違法行為に手を染めているが、表では次元犯罪者や違法研究者などを捕まえたりしているためになくなりでもすればそういった関係の連中が暴れだす可能性がある。故に管理局は抑止力として必要なのだ

(ティアナ、そっちに変なのはいないか?)

(変なのはいませんが・・・卵が落ちてます。)

(卵?どれ位のだ?)

(サイズは・・・赤子くらいはありますね。)

間違いない・・・デジタマだ。しかし何でこんな場所に?

(わかった。今から回収に向かう。)

俺はティアナとの念話を終え、ティアナの元に向かった

「ティアナ、これか？」

「はい・・・って、誰ですか？」

「ああ、そういえば姿を戻してなかったな。士だ。」

「・・・まじですか？」

「まじだ。」

「・・・とりあえず、物凄い疑問が残りますが士隊長、これです。」

ティアナがデジタマを出す

「・・・確かにデジタマだな。一体誰のだ・・・？ムゲンドラモンのものではないだろうし・・・まさかと思うがルーチェモンとかは生まれないよな？ギルモンとかにしてくれよ、生まれるなら。」

「どうしたんですか？」

「ん？ああ、少し考え事をな。とにかく、この卵は六課に持って帰ろう。もしかしたら何か生まれてくるかもしれないし。」

「生まれるって・・・どんなのが出てくるんでしょうね。」

「さあな。だが、鳥とかそういうのではないことはわかる。」

「でしょうね。」

そして俺たちはヘリへと戻った。因みにだが・・・ホテル・アグスタの被害は尋常じゃないほど出たらしい

「で、土君。何か言い訳はある？」

「一応ある。あれは事故だ。俺も故意にやったわけじゃないんだ。」

「故意か過失かなんて関係ないわー！！今回の被害の損害賠償が六課に来とんねん！！」

「んな事言つたつて、あれを跳ね返さなきゃティアナが怪我してたかもしないんだぞ？それに比べたら・・・ホテルの一つや二つ、無くなつても問題は無いだろ。」

現在俺ははやてに説教されていた。なんでも、俺が跳ね返したムゲンキヤノンがホテルに直撃、そのままホテルは瓦礫と化したらしい。幸いにも、避難が済んでいた後なので死傷者は一般人側からは出なかったらしい。一般人側からは

「問題大有りやー！！それにな、陸の部隊の人達も怪我しとんねん！！それを問題なんて何もありませんでしたでかたずけられるかー！！」

「じゃあここはひとつ、全てはやての所為にして・・・」

「なんでやねん！！」

思いっきりハリセンで叩かれた。てか、何処から出したそのハリセン？

「あれか！？土君ほんまはうちのこと嫌いなんか！？」

「いや、それは無い。」

「え・・・ほんま？」

「ただ、いじりがあるだけだ。」

「ひどっ！？期待した私が馬鹿だった！！」

「まあまあ、気にするな。とりあえず、ホテルの方には修理班送つとくから何とかかなると思うぞ。」

「修理班？そんなのうちに無いで？」

「俺が所有している修理班だ。戦艦だろうと一週間で組み立てられる連中だ、ホテルぐらいなら三日で完成させれるだろう。」

「へえ、そない凄いなら六課にも置いてほしいくらいやな。」

「それは無理だな。シャーリーが暴走する可能性がある。」

「どういうことや？」

「ようするに人間じゃなくてロボットなんだよ。」

「・・・なんか土君がよくわからんくなってきたわ。」

「そういうなよ。んじゃ、俺は修理班を送りに行くから。」

俺はそういつて部隊長室から出た

「・・・さて、カーペンターズも送ったことだし、どうしようか・・・」

部隊長室から出て2時間後、完全に暇をもてあましている俺は六課内をうろつろしていた。書類作業はどうしたと思う人もいるだろうが俺は来た書類を全て即座に片付けてしまうので基本的に30分程度しか仕事をしない。故に本来の仕事時間の大半を余してしまうのだ。正直言つて廃スペックが仇になるとは思ってもしなかった

「しっかしどうしたものか・・・うちの部隊の連中は暇してるだろうけど模擬戦なんてやったら殺し合いに発展するのは眼に見えてるし・・・はあ・・・」

因みにだが、最も高確率で殺し合いに発展するのはエリオである

「よし、別荘に籠ってMSでも造ろう。うん、そうしよう。」

そついつて俺が部屋に戻ろうとしたとき

「あ、士隊長。少しよろしいですか？」

「ん？どうした？」

「デバイスの強化を頼みたいんですが・・・」

ティアナの話の聞くと、この前みたいに自分の攻撃が全く効かない相手が出てきた時のためにも戦力を強化したいらしい。まあ、ムゲンドラモンに使われていたクロンデジゾイドはクロンデジゾイドでしか破壊できないし、万が一複数の地点にクロンデジゾイドの鎧等を着けているデジモンが現れたら流石に対処しきれないだろうし、このタイミングで強化するものいいかもしれない。因みにだが、クロンデジゾイドはクロンデジゾイドでしか破壊できないと言ったが、アンティラモンのように自身の身体をクロンデジゾイド並に硬くするか、大威力のデジモンの技（ガイアフォースやエクストリーム・ジハードなど）を直撃させれば破壊することも可能である。現に原作でもピエモンが自身の技でウォーグレイモンのクロンデジゾイド製の鎧とドラモンキラーを粉碎していたし

「強化ね・・・わかった。ついでにエリオとティータのデバイスも強化しておくから二人のデバイスも持ってきてくれないか？」

「わかりました。それと、カーペンターズから連絡が。」

「早くね？まあいいか、なんて？」

「ホテルの復元が終わったから戻る、だそうです。」

はやっ！？さつき送り出したばかりだぞ！？

「流石はカーペンターズ、大破したガオガイガーをものの1時間で修理したことはあるな。」

実際その腕を見込んで製作したのだ。まあ、此処まで早いとは思わなかったが

「んじゃティアナ、先にクロスミラージユを受け取っておくから後でストラダーをブリッツミラージユを別荘に持ってきてくれ。」

「わかりました。」

そういつてティアナは戻っていった

「さて、まずはクロスミラージユから取り掛かりますか。基礎フレームはゴールドデジゾイドにしろくか。あれは強度もかなりの物だし、フレームにはうってつけだろう。外部装甲の方はフレームに重いゴールドデジゾイドを使うから軽さを追求してブルーデジゾイドでいいか・・・いささか強度に心配があるが早々デバイス本体で殴ったりなんてしないだろ。」

俺は別荘に籠り、順調にティアナのデバイスを強化していた。これから先、ティアナ達がデジモンと戦う可能性もあるのでクロンデジゾイドを用いた強化を施さないとともに戦えないのである

「・・・待てよ？魔力刃を使うんじゃあクロンデジゾイドには対抗できないんじゃないか？なら・・・ロングブレードとデュアルブレイドを魔力刃じゃなくてクロンデジゾイド製の刃に変えるか。材料

は・・・オブジタンデジゾイドでいいか。ルーチェモンの攻撃にも耐えたんだ、並みのデジモン相手なら何とかなるだろう。」

そついいながらクロスミラージュの改造案を考えていると、ティアナが別荘に入ってきた

「士隊長、持つて来ましたよ。」

「お、ありがとう。それともうひとつ頼まれていいか？」

「いいですが・・・なんですか？」

「この前拾ってきた卵を刹那に持たせといてくれ。」

「刹那に・・・ですか？」

「ああ。」

「わかりました。それと、後でデジモンに関して教えて欲しいんですが。」

「わかった。デバイスが完成したときに話す。」

「わかりました。では。」

そついつてティアナは別荘から出て行った

「んじゃ、作業再開と行きますか。クロスミラージュのバレルを少し長くするか・・・取り回しは少し難くなるけど何とでもなるだろ。後は、プログラムをアップデートして魔力の使用効率を徹底的に改善してと・・・これでクロスミラージュはいいか。次はストライダーだな。こいつの基礎フレームはデュークモンの鎧に使われてる純度99.9%のクロンデジゾイドだな。外部装甲にはブルーデジゾイドを使おう。刃の部分はオブジタンデジゾイドで、細かい装飾とかにはゴールドデジゾイドを使うか。あとはプログラムのアップデートと・・・ストライダーもこれでいいか。ブリッツミラージュは基礎フレームをレッドデジゾイド、外部装甲をオブジタンデジゾイドにして、一応近接戦闘も出来るようにクローモードを付けとく

か。外見は・・・ブラックウオーグレイモンのドラモンキラーでいいか。手甲部分にはオブジタンデジゾイド、刃の部分は・・・純度99.9%のクロンデジゾイドを使うか。後はプログラムのアップデートと・・・」

3機全ての強化案が出来た所で俺は早速取り掛かった

「まずはクロスミラージュから行くか。」

10時間後・・・

「ふう・・・ようやく全部終わった・・・」

作業開始から10時間後、ようやく強化が終了した

「クロスミラージュは重量が150%、魔力消費が70%、ストライダーは重量が80%、魔力消費が70%、ブリッツミラージュは重量が200%、魔力消費が50%・・・まあ、上出来だな。」

強化後のデータを見て、俺は頷く

「全機とも強度は以前の800%か・・・此処まで行くとは思ってなかったな。」

元々チート仕様に造ったデバイスだが、ここまでくるとデバイスと言っているのかわからない。いや、デバイスというより魔道兵器と言った方がいいのかもしれない。もしくは魔道質量兵器

「さて、あとは起動実験だけだな・・・外の訓練場でもいいか。」

俺はそういつて別荘から出た

「ティアナ、デバイスの強化が終わったぞ。」

「本当ですか？」

「ああ、エリオとティードの分も強化済みだ。それと、この後訓練場で起動実験やるから。」

「わかりました。相手は？」

「スレイヤーズ分隊全員を予定してるが無理だった場合は俺が3人

まとめてやる。」

「隊長とやったら絶対に負けますから。」

「んなもん当たり前だろ。部下に負けてたまるかってんだ。」

「まあ、そうですね。」

「というわけだ。俺はなのはたちの所に行つて来るから3人で訓練場に行つててくれ。」

ティアナ

「了解。」

「なのはー、暇かー？」

「あ、土君！！いい所に！！」

「どうかしたのか？」

「スバルが・・・」

なのはの指す方を見ると、頭から煙を上げて机に倒れ掛かつてるスバルがいた

「・・・大方、書類作業に追われて限界が来たか・・・」

「うん。で、何か用でもあったの？」

「ああ、ティアナ達のデバイスを強化したから模擬戦でもやろうと思つたが・・・この調子じゃ無理だな。」

「うん、スバルもあんな状態だし・・・模擬戦は無理だね。」

「仕方ない、俺がやるか・・・一応訓練場でやるから気になったら見にればいいさ。」

「うん、そうするね。」

そういつて俺はオフィスル・ムから出た

「それじゃあ、デバイスの起動テストに入る。それと、今回は対デジモン戦を想定したものにする。」

「対デジモン戦・・・どうやるんですか？」

「そうだが、捕獲でもして来たのか？」

「でも士隊長なら何とかしそうな気がするな・・・」

「さすがに捕獲は難しいな。とりあえず、模擬戦を開始するぞ。」

「了解。」

「それでは行くぞ・・・模擬戦開始！！」

その瞬間、ティアナとエリオが突っ込んできた

「そうくるか・・・エヴォリュージョン！！」

俺の身体をデジコードが覆う。二人はそれを見て、破壊しようと攻撃するが、びくもしない

「ちっ、硬すぎて割れねえ！！」

「嘘でしょ！？明らかに柔そうじゃない！？」

そうこうしている内に、デジコードが晴れ、晴れた其処には、蒼い身体に金色の鎧を付けたデジモン

「マグナモン！！」

マグナムがいた

「はぁ!?!」

「行くぞ!! マグナムキック!!」

突然の事に驚いているエリオに向かって蹴りを繰り出す

「ぐう!?!」

「そらそら!! マグナムラッシュ!!」

次々に繰り出される連撃。エリオはそれを全てストラーダでギリギリで捌いていた

「こつちも忘れてもらっちゃ困りますね!! クロスファイア、シュート!!」

「忘れてなどいない!! プラズマシュート!!」

鎧の一部が開き、其処から幾つものミサイルが発射される。それは全てクロスファイアに直撃し、相殺した

「ブリッツミラージュ!! モード、バズーカ!!」

ブリッツミラージュ

《了解、モード、バズーカ》

後方でティードがバズーカを構える

「二人とも!! 下がれ!!」

「了解!!」

ティアナとエリオが瞬時に離れる

ティーダ

「魔力充填完了・・・カラストロフカノン・・・発射あ!!」

「そう来たか・・・エクストリーム・ジハード!!」

俺とティーダの砲撃がぶつかり合う。そして一瞬の拮抗の後、盛大な爆発を起こした

「チャンス!! ストラダ、モード、デュアルランス!!」

「こつちも行くわよ!! クロスミラージュ、モード、デュアルブレイド!!」

爆発の際の煙が残る中、エリオとティアナは両手に自身の得物を持ち、一気に突っ込んできた

「はあああ!! マグナムラッシュ!!」

二人の連撃を連撃で捌いていく

「俺がいるのを忘れるな!! ブリッツミラージュ、モード、クロー!!」

ティーダが両手にドラモンキラーを模した手甲を付けて跳んでくる。そして始まる3人同時の猛攻。俺はそれを全て紙一重でかわす

「流石だな!! 攻撃のキレもいいぞ!!」

「よくもこの状況で軽口が叩けますね!!」

「長年の経験というものだ!! エクストリーム・ジハード!!」

「こつ!!?」

俺の周囲に膨大なエネルギーが放出される。3人は瞬時に瞬動を使ってその場から離脱した

「よく回避したな。一応隙を突いたんだがな。」

「私達もそれでやられるほど甘くないってことですよ。」

「それもそうだな。でだ、デバイスの方はどうだ？」

「最高だ。前より軽いくせにかなり堅え、これならいくら振り回しても壊れなさそうだ。」

「魔力消費率もかなり凄いことになってるな。前の半分ほどしか使っていないぞ。」

「まあ、お前のはそういう風に強化したからな。」

「で、これでテストが終わってわけじゃないですよね？」

「当たり前だ。今までののは近接戦のテスト、今からは・・・中、遠距離戦のテストだ！！マグナモン、スライドエヴォリューション！！」

その瞬間、俺の全身をデジコードが覆い、そして

「インペリアルドラモン・ファイターモード！！」

クロンデジゾイドの鎧に身を包んだ皇帝竜、インペリアルドラモンへと進化した

30話 デバイス強化とテスト（後書き）

作者「H A H A H A、完全にやっちまったぜ」

士「デバイスにクロンデジゾイドとか・・・やりすぎだろ」

作者「いいのだよ！！これくらい強くしとかないと後半苦戦ばかりになるだろうし」

士「てことは・・・後半、つまりはマキナ戦の時にはティアナクルスの敵が一杯？」

作者「一応予定では」

士「・・・それなんて無理ゲー？」

作者「さあな、難易度はとてつもなく高いといっておこう」

士「手がこんな所でネタ晴らしていいのかよ」

作者「気にするな。んじゃ、進めるぞ。雨季様、デイスティニープラン様、感想どうもありがとうございます」

士「えー、雨季様からは・・・まさかの性転換薬が・・・」

作者「お、いいじゃん。今度本編で飲まそう」

士「誰にだ！？」

作者「無論、お前」

士「却下！！訂正を申請する！！」

作者「アーキコエナイキコエナイ」

士「ちつ、まあいい。ディステイニープラン様からはグラハム専用ユニオンフラッグカスタム（夏海宛）、GNフラッグ（アサシン宛）、ブシドー専用アヘッド（刹那宛）、マスラオ（アーチャー宛）、スサノオ（俺宛）、ブレイヴ（隊長機）（作者宛）が送られてきたぞ」

作者「グラハム祭り・・・今日は乙女座の運勢が最高なのか？」

士「さあな、しかし・・・ディステイニープラン様から送られてくるMSに乗ってるパイロットって全員仮面付けてるよな？」

作者「確かに・・・仮面の人だな」

士「えーなにに？「仮面の人」のMSが無くなったから次からは俺的にカツコイイ死に方をした漢の機体を送ります」・・・なあ、嫌な予感がするんだが・・・」

作者「ああ、俺もした・・・」

作者、士「あの人のMS真っ先に送ってくるだろうな・・・」

士「ま、まあ、とりあえず今回はここまでにしよう」

作者「そ、そうだな。次回は出来るだけ早めに投稿したいな・・・」

士「まあ、頑張れ」

作者「あいよ。というわけで」

作者、士「次回もお楽しみに!!」
「」

31話 海上MS戦記（前書き）

受験が終わり、ようやくと投稿まで持ってくることができました。
久々の投稿ですが、どうぞお楽しみ？ください

31話 海上MS戦記

ティアナside

私達は今、かなりのピンチにたたされている。なぜなら・・・

「メガデス！！メガデス！！メガデス！！メガデス！！」

「ちょっ！？やりすぎですって！！」

「はっはっは！！聞こえんなあ！！ポジترونレーザー！！」

「てめっ！？少しは手加減しやがれ！！」

「そうだ！！いくらなんでもきつ過ぎるわ！！」

「そんな口聞いている暇があったら接近してみろや！！メガデス！！」

士隊長からとんでもない威力の砲撃がバンバン飛んでくるからである。少しでも気を緩めれば砲撃の餌食となってしまうためにずっと動いていなければならず、体力と魔力がどんどん減っていく。なんとか接近しようにも近寄る前に砲撃が飛んでくる。しかもこの砲撃、着弾するととんでもない範囲に爆発を起こすために大きく回避しなければその爆発に巻きこまれる。そうなれば一発KOで終わりだ。因みにだが陸戦は考えていない。士隊長がずっと飛んでることもあるが、訓練場の床が既に8割方崩壊していて非常に危ない。踏み外せば海にまつさかさまに落ちていくだろう。流星にそうはなりたくない。なのでなんとか隙を見つけようと頑張ってるが・・・

「ポジترونレーザー！！次いでメガデス！！」

・・・はい、隙なんてあったもんじゃありません。トランザムを使えば何とかなるだろうけど使った後が怖い。魔力切れと同時に砲撃が直撃すること必至だ

「くっ、ティアナ、エリオ！！下がれ！！」

「何する気だ！？」

「収束砲で道をつくる！！」

「それはいいが、時間など与えんぞ？ポジトロンレーザー！！」

迫り来る巨大な砲撃。兄さんの収束砲はまだ撃てない。・・・仕方ない、危ないけどやるしかないか・・・

「・・・そこっ！！」

私は投影したナイフを砲撃に突き立てる。その瞬間、砲撃は元から無かったかのように消滅した

「直死の魔眼を使ったのか・・・いい判断だな。」

「それはどうも。それと、そんなに余裕ぶっこいてていいんですか？」

私がそういった瞬間、後ろの方で声が聞こえた

「収束終了・・・ティアナ、下がれ！！」

「了解！！」

「ジャッジメントオオオオオ！！ブレイカアアアアア！！！！」

濃いオレンジ色の巨大な魔力の奔流が士隊長目掛けて突き進んでいく。今のうちに接近する準備を！！

「エリオ、行くわよ！！」

「おう！！」

私とエリオは一気に加速し、士隊長の視界の外から奇襲をかける。
士隊長はまだ気付いてない！！

「ポジトロンレーザー、最大出力！！」

士隊長の右腕の砲門から今までよりも巨大な砲撃が放たれる。そしてそれは・・・兄さんの砲撃を相殺して霧散した。今なら！！

「はあああ！！」

「おらあ！！」

「っ！？何！？」

突然の奇襲に驚く士隊長。そのまま畳み掛ける！！

「二連、燕返し！！」

「マッハスペシャル！！」

私から計6つの斬撃が同時に放たれ、エリオから音速を遥かに超えた速度の槍の猛攻が放たれる

「ガハッ！？」

鎧に輝が入る。これまでいくら攻撃しても傷一つつかなかった鎧にだ

「このまま・・・沈みなさい！！」

「今までの恨み、いつぺんに晴らさせてもらっぜ！！」

クロスミラーージュがライフルモードに、ストラーダがザンバーモードに変形する。このチャンスに逃すわけには行かない！！

「カリドウスブラスター!!」

「斬界剣!!」

オレンジ色の砲撃と黄色の斬撃が士隊長に迫り、そして・・・

「・・・オメガブレード!!」

士隊長が振るった一本の剣によって一瞬で霧散した

「「っ!?!」」

「ふう・・・たかがデバイスの起動テストと思ってたらいつの間に本気で戦ってたな。流石にこれ以上やると訓練場が瓦解・・・というかもつ瓦解してるな。」

士隊長の言うとおり、既に訓練場はその原型を全く留めていない。それも、足場が全く無いくらいに

「さて、なのはたちに説教されるのは流石に御免なんだな、此处で終わらせてもらうぞ。」

そう言った直後、鎧の中心部分にある竜の顔らしきものが開き、其処から砲門が出てきた

「喰らえ・・・!!ギガデス!!」

そしてその砲門から漆黒の超高密度の砲弾が発射され、私達を訓練場もろとも吹き飛ばした

ティアナ side end

士 side

ふう、流石にやばかった。まさかインペリアルドラモンの鎧に輝を入れるとは・・・おかげでパレディンモードまで出しちまったよ。そして更にやばいのが俺の下に有った筈の（・・・）訓練場である。これまでの攻撃で8割方瓦解した所にギガデスを撃つたもんだから完全に消滅してしまった。このままではなのは達にOHANASHIどころかSEKKYUUされてしまう。それだけは勘弁なので何とか訓練場を修理する方法を模索中なんだが・・・

「やばい・・・いい案が出ない・・・」

現在並列思考を1000ほどに増やして修理方法を模索しているが出てくるのは『カーペンターズを使う』や『訓練場そのものを投影する』や『アーチャーに修理を依頼する』などの案しか出てこない。特に最後のなんかアーチャーが過労でぶっ倒れること間違い無しだろ

「どうするべきか・・・」

そう思っていた時、並列思考の一つが中々にいい案を出した

「目の前の空間の時間を逆行させるか・・・確かにいい案だが、それでは・・・」

実を言うとこの案には欠点があった。時間を逆行させれば確かに訓

練場は元通りになる。だが、時間が経過すると逆行前の状態に戻ってしまうのだ。つまり、一日前の状態にしたとすると一日経過した時点で今の状態、つまりは消滅した状態に戻ってしまうのだ。しかも一度に戻せる時間は精々一週間が限界。いくら神でも時間逆行は難しいうえに、俺は創造神とはいえ、まだ10000年ちよいしか生きてない青二才、夏海や他の神と比べるとまだ力の使い方が荒いのだ

「・・・仕方ない。他に案が無いんだ、はやてには悪いが諦めて貰うか。」

俺はそういつて訓練場の空間内の時間を一週間逆行させた

「これで表面上は解決つと。一週間後のこの時間に訓練が無いことを祈ろう・・・」

俺はそう祈りながら訓練場を後にした

「あ、土君お帰り。起動テストどうだった？」

「上々だ。期待以上の性能アップが見られた。」

「そう、良かったね。で、3人は？」

「医務室。」

「・・・え？」

「だから医務室だ。最後の最後でデカいの喰らわしたからそのまま気絶しちまったんだ。」

「・・・本当に起動テストだったの？」

「そうだが？」

俺がそう言っただけきりなのはこの事について問いかけてくることはなかった

「あ、そうだ。これからスバルとキャロと模擬戦やるんだけど土君
見にくる？」

「ん？ああ、そうするわ。」

丁度原作で言う魔王降臨のあれだろう。まあ、うちのティアナはそんなことにはならんがな

「・・・そういえば、スバルとキャロのデバイスのリミッターってどうすんだ？」

「今回の模擬戦で一応決める予定だけど、私的にはまだはいかな
？って思うんだよね。」

「そうも言ってられんだろ。必要な時に全力が出せなくて死んだら元も子もない。」

「・・・まあ、そうだよね。」

なのはがそう呟く

「ま、俺がいる限りはそんなことさせないけどな。」

「にやはは、やっぱ土君は頼もしいね。それじゃ、私は行くから。」

そいつってなのはが訓練場に向かおうとした時

ビー……ビー……！！

「「っ！？」」

警報が鳴り響いた

「はあ、ガジェットか。」

「そうみたいだね。」

俺となのははそれだけ言ってヘリポートに向かった

「現在、ミッド海上にガジェットの団体を確認。規模は一個大隊程度。今回はキラ副隊長とアスラン副隊長、それと土君に行って貰い、他の隊員はこのまま六課で待機や。」

「なあ、ひとついいか？」

「ん？どうしたんや？」

「今回のガジェットは恐らくはデコイ、こちら側の戦力を調べるために飛ばしてきたんだと思うんだが。」

「確かに、スカリエッティにしては随分とガジェットの動きが単調やし、そうかも知れんな。」

「じゃあ、どうするの？」

「確かに、それが問題だ。出来るだけ此方の戦力を見せずに敵を殲滅する、口で言うのは簡単だが実行できるかといわれたらかなりき

「ついな。」

「確かに。アウトレンジ、それも相手が全く気付かないほどの距離から狙撃できれば問題は無いんだが……」

「ふむ……あー！」

「土君、何かいい案があったの？」

「ああ、アウトレンジもアウトレンジ、この六課隊舎から狙撃する方法があった。」

「ここから!? 100kmは離れてるで!？」

「問題は無い。地表から成層圏を狙撃できるほどのものの発展強化系の物を使う、確実に成功する、いや、成功させる。」

「……わかった。そんならお願いしましょか!！」

「ああ。」

そしてところ代わって機動六課隊舎屋上。現在此処には俺となのはたち隊長陣が集まっている

「よし、やるか。メタモルフォーゼ、ケルディムガンダム!！」

俺は空に上がり、身体を白と深緑の装甲、9つのシールドビット、2丁のGNビームピストル?、そしてGNスナイパーライフル?を装備したガンダム、ケルディムガンダムへと変化させた

「ガンダム……」

「見たことの無い機体だな……」

キラとアスランがMS乗り特有の感想を漏らすがこの際無視しよう

「トランザム!!」

その言葉と共に身体が紅く光る。そしてバックパックから突起物が飛び出し、そこからホログラムスコープが現れる。それと同時に額のカバーが開き、狙撃用のカメラが現れる

「これで準備は整った・・・そんなじゃあ、狙い撃つ!!」

その瞬間、GNスナイパーライフル?の銃口から光が放たれ、遙か先にいるガジェットに直撃し、爆散した

「まだまだ行くぜえ!!」

次々と放たれる粒子の塊。その全てがガジェットに吸い込まれていく。そしてその数分後、全てのガジェットが撃墜された

「……………」

なのはたちが思考を停止させている中、急にシャマルから連絡が入った

『はやてちゃん!!今其処にアンノウンが接近してるわ!!数は30、今いる地点から隊舎まで・・・うそ!?あと5分で接触するわ!!』

「なんやて!?!どんだけ速いんや!?!」

はやてがそう叫ぶ。そしてそれと同時に俺が変化しているケルディムのセンサーに反応があった。ケルディムのセンサーに反応のあるほうを見ると、ケルディムのカメラが飛んでくるMS、ジンクス?

20機とアヘッド9機、そして隊長機と思われるマスラオがこちらに向かつてきていた。しかもサイズは原寸大、つまり18m程はあるのだ。なのはたちでは太刀打ちすることもできない。例外としてティアナたちは戦えるがな

「MSが30機か・・・しかもマスラオはトランザムを搭載してる筈・・・ったく、仕方ないか・・・キラ、アスラン!!」

「何!!」

「今から出すものに何も言わず乗れ。いいな。」

俺はそういつて王の財宝の中から“ストライクフリーダム”と“インフィニットジャスティス”を出す

「なっ!?!これは!?!」

「いいからさっさと乗れ!!そら、敵が目の前まで迫ってるぞ!!」

「でもなんで貴方が!?!」

「こっちも色々あんだよ!!先行くぞ!!ネオメタモルフォーゼ、ダブルオークアンタ!!」

俺は瞬時に身体を18mほどの、純粹種のイノベーターの刹那の為に、対話の為に生み出された青と白の装甲を纏ったMS、ダブルオークアンタへと変った

「流士、ダブルオークアンタ、目標を駆逐する!!」

そう叫んだ俺は一直線に敵MSへ飛び出す。そして機体後部についているサブカメラの映像を確認すると、キラとアスランがMSに乗り込もうとしているのが見えた

「これでマスラオ相手に集中できるな。いくらフリーダムとジャス

「テイスでもトランザム状態のマスラオと戦うのはきついだろっしな。」

「そう呟いて俺はGNソード？を構え、すれ違いざまにジnkス？を一機切り、撃墜した」

「士さん！！何故貴方がこの機体を！！？」

「キラが叫んで聞いてくる。それでも攻撃の手を休めず、瞬く間にジnkス？を3機撃破する」

「それは後で教えてやる！！だから今は目の前の敵に集中しろ！！」

「叫びながら迫り来る粒子ビームの弾幕を回避する。直後にGNソードビットを全て射出し、ジnkス？とアヘッドに殺到させた」

「貫けっ！！！」

「次々とコックピット部分を貫いていくソードビット。キラ達のほうもビームライフルとビームサーベルを使ってジnkス？とアヘッドを落としていった」

「これで後はマスラオ一機のみ・・・どう動く？」

「そう考えていると、マスラオがビームサーベルを構え、一気に突撃してきた」

「速い・・・だが、クァンタの敵ではない！！！」

「そういつてGNソード？を構え、マスラオのビームサーベルを受け」

止めた。だが、マスラオもそれで終わらず、もう片方のビームサーベルを振ってきた

「無駄だ!!」

ビームサーベルを紙一重でかわし、右足を振りぬく。右足はマスラオに直撃し、そのまま吹き飛ばした。だが、それだけにとどまり、撃破とまではいかなかった

「キラ、アスラン!! 一気に畳み掛けるぞ!!」

「わかった!!」

それぞれの武装を全てマスラオ目掛けて構える。マスラオはビームサーベルを構え、紅い光を出し始めた

「!?! まずい、トランザム!!」

GNソード?をライフルモードからソードモードに戻し、マスラオへと突撃した

「はぁ!!」

クアンタとマスラオが交差する。その瞬間に斬撃が放たれ、剣と剣同士がぶつかり合う。ぶつかった衝撃でGN粒子が空中に四散する

「おおおお!!」

何度も、何度も何度も交差し、その度に斬り合う。その速度は常人どころかスーパーコーディネーターですら見ることは叶わないほどの速度だった

「ちつ、向こうが二刀じゃこっちが不利だ・・・仕方ない!!ビツト!!」

俺はビツトを放ち、GNソード?に合体させ、バスターライフルへと変えた

「喰らえ!!トランザムライザー!!」

直後、銃身から直径50mを越える極大のビームが放たれた。マ斯拉オはそれを回避するが

「こいつは砲撃じゃない・・・ビームサーベルだ!!」

その後をビームが追いかける。そう、トランザムライザーはビーム砲ではなく、ビームサーベルなのだ。その長さは成層圏からラグランジュポイントを切り裂けるほどである

「当たれええええ!!」

そのままビームサーベルはマ斯拉オを切り裂こうと接近するが、後一步のところで回避されてしまった。だが、その瞬間にマ斯拉オのトランザムが解け、一気に失速した

「今だ、キラ、アスラン!!」

そう叫んだ瞬間、キラとアスランの機体から砲撃が放たれ、マ斯拉オは跡形も無く消し飛んだ

31話 海上MS戦記（後書き）

士「・・・さあ、これまで更新が途絶えた理由を言ってみる」

作者「・・・はい、受験勉強に追われていました」

夏海「受験勉強ね・・・なんかうそくさい」

作者「いや、ほんとですから！？必死こいて今までやってきましたからー!!」

士「・・・はあ、仕方ない、受験は本当のようだし、今回ばかりは許してやる」

作者「ありがとうございますー!!」

士「ただし・・・これからはちゃんと更新しろ、いいか？」

作者「サーイエスサーー!!」

士「よろしい」

夏海「というわけで、これからは今までどおり更新される予定です」

士「それと今回から作者がまたやらかした際の処刑方法を皆様に募集したいと思います。いかなる方法でも構いません」

夏海「というわけで」

士、夏海「次回をお楽しみに!!」

外伝 1 ネギまの世界（前書き）

この外伝は土の空白の一万年の話です

外伝1 ネギまの世界

関西魔術教会総本山。今此処は壮絶な戦場と化していた

「雷の暴風！！」

少年、ネギ・スプリングフィールドは、眼前に聳え立つ大鬼神、リョウメンスクナノカミに向けて自身が持つ最大の魔法、雷の暴風を叩き込んだ。だが

「アハハハハ、それが精一杯か！？サウザントマスターの息子が！
！まるで効かへんなあ！！」

圧倒的質量、魔力を誇るスクナには微塵のダメージも与えることはできなかった

「このかお嬢様の力でこいつを完全に制御可能な今、もう何もコワイモノはありまへんえ！！明日到着するとか言う応援も蹴ちらしたるわ！！」

「そしてこの力があればいよいよ東に巣食う西洋魔術師に一泡吹かせてやれますわ！！アハハハハハハ！！」

「く……くそおっ……こ……このかさん……」

「兄貴、兄貴！！しっかりしろ！！」

絶望の色を見せるネギ。だが、最悪な状況は更なる最悪を呼び寄せた

パキヤアアアン

「善戦だったけれど……残念だったねネギ君……」

拘束していたフェイト・アーウェルンクスが動き出す

「ネギの奴間に合わなかったの!？」

「わかりません!!でも助けに行かなければ……」

「そ、そうは言っても……こいつらが……」

「センパイ、逃げるんですかあ……?」

刹那に月詠が迫るなか、二発の銃弾が放たれた

「あら」

「行け刹那!!あの可愛い先生を助けに!」

「ここは私達に任せるアルよ!」

「しかし……」

「大丈夫だ!!仕事料ははずんでもらうがな!!」

「……すまない!行きましよう明日奈さん!!」

「う、うん!!」

「あーん邪魔しはってー、神鳴流には飛び道具は効きまへんえー」
「知ってるよ」

真名は拳銃を二挺構え、月詠を迎え撃った

（姐さん!!刹那の姉さん!!そっちは大丈夫か!?)

「カモ!？」

「カモさん!？」

（力を貸してくれ、こっちは今大ピンチだ!!）

「今そつちへ向かつてるわよ!!」

（それじゃあ間に合わなねえ!!!カードの力で喚ばせてもらっぜ!!）

「よぶ!?!」

「殺しはしない・・・けれど自ら向かってきたということは相應の傷を負う覚悟があるということだよな」

その問いにネギは答えない

「体力も魔力も限界だね、よくがんばったよネギ君」

ネギにフェイトの手が迫る瞬間

「・・・くっ」

「?」

「召喚!!!!ネギの従者、神楽坂明日奈!!!桜咲刹那!!!」

仮契約カードの効果が発動され、明日奈と刹那が召喚された

「アスナさん刹那さん僕・・・すいません、このかさんを・・・」

「わかつてるネギ!!!つてぎゃああ~~~~!!?何よあれ~~~~~!!?!」

「落ち着け!!!姐さん!!!」

スクナの巨体に驚く明日奈を抑える力も

「……それでするの?」

その瞬間、明日奈と刹那、カモを見えない衝撃が襲う

「きゃあ!」

「くっ!」

「ぐへっ!」

「アスナさん!! 刹那さん!! カモ君!!」

心配するネギ。だが、そのネギめがけてスクナの右手が振り下ろされた

「っ!?! 先生!」

「ネギ!」

「兄貴!」

瞬間、水飛沫によって視界が遮られる。そして水飛沫が晴れた其処には

「なっ!」

「嘘!」

「はあ!」

スクナの腕を左腕一本で受け止める青年の姿があった

「・・・え？」

何時になっても来ない衝撃にネギは顔を上げた

「つたく、無茶するなよ、先生」

「あなたは・・・出席番号32番の・・・流 土さん？」

「ああそうだが？」

ネギは驚愕した。いままで一般人だと思っていた自分の生徒が、あ
るうことかスクナの攻撃を左腕一本で受け止めているのだから

「先生、下がっている。・・・怪我するぞ」

ネギはそれを聞いてすぐに明日奈たちの元に向かった

「アスナさん!!」

「ネギ、あんた大丈夫!？」

「はい、僕は大丈夫です」

「ネギ先生、彼は・・・？」

刹那がそう聞こうとした瞬間、ありえないものが目に映った

「・・・嘘」

「あ、ありえない・・・」

「どうなってやがる・・・!!？」

「あわわ・・・」

彼らは見た。土の右腕が巨大な竜の腕に変わるのを

「ディガル・クロウ!!」

スクナ目掛けて振られた竜―アシュロン―の腕は、正確にスクナの腹部を捉え、吹き飛ばした

「な、なんや!? あんた何モンや!!」

「名乗るほどのもんでもねえよ!! ゴウ・バウレン!!」

一瞬にして元に戻った右腕に波動を纏わせ、スクナの右腕へと振り下ろし、粉々に砕く

「ハーフメタモルフォーゼ!! アルトアイゼン・リーゼ、ライトアイム!!」

右腕がアルトアイゼン・リーゼのものに変化する

「どうな装甲だろうと・・・撃ち貫くのみ!!」

リボルビング・バンカーをスクナの左腕に撃ちつけ、砕く

「エヴォリューション!! オメガモン!!」

身体をオメガモンに変化させる

「グレイソード!!」

左腕の剣、グレイソードを使い、千草を護っていた残りの腕を細切

れにする

「なっ!?!」

「このかは返してもらっ!?!」

そのまま右腕にこのかを抱え、刹那の元に向かう

「っ!?!お嬢様!?!」

「このかを連れて離れろ、刹那」

そういつて後ろを向き、スクナに向けて右腕を突き出し

「ガルルキャノン!?!」

氷の塊を撃ち出した。それも一発ではなく、何発も

「ス、スクナが・・・」

氷の塊を全身に受け、凍りつくスクナ

「仕上げだ。オメガモン、スライドエヴォリユーション、デュークモン・クリムゾンモード!?!」

身体をデュークモン・クリムゾンモードに変化させ、そのままスクナの上まで飛ぶ

「喰らえ、クオ・ヴァデイス!?!」

放たれた神槍グングニルは、スクナに直撃し、その身体を原子にまで分解した

「ひ、ひい!？」

「逃がさん!!」

逃げようとする千草の後ろに回りこみ、首に手刀を一発打ち込み、
気絶させた。

こうして、関西魔術教会総本山での戦いは、正史とは違う終わりを
見せた

外伝 1 ネギまの世界（後書き）

こんな感じで気が向くたびに書いていこうと思います

32話 いざいかん!!海鳴市!! 上(前書き)

グダグダですよ、ええ。ネタにも走りましたし

32話 いざいかん！！海鳴市！！ 上

あれから3日がたった。六課に戻ってからというもの、キラとアスランの質問攻めにあって疲れた。なぜフリーダムとジャスティスを持っているのかとか、あのMSはなんなのか、何を動力にしたらあんな巨大なビームサーベルを維持できるのか、などできれば答えたくないものまで聞かれたので何とかばかした

「まあただ逃げただけだな。」

「だれに言ってるんですか？隊長。」

「ん？気にしないでいいぞ、少なくとも俺は気にしない。」

「はあ、そうですか。」

まあ、こんな感じで逃げ切った俺だが、今は部隊長室に向かっている。何故かは知らんがはやての声が妙に嬉しがってるように聞こえた。・・・ああ、もしかしてアレか。確かに原作イベントであったな、まあ時期が違うのはこの世界が平行世界であるが故だな

「はあ・・・」

「どうしたんです？ため息なんかはいて。」

「自分の運命を呪って。」

「なに言ってるんですか、大衆から見れば隊長は幸せ者ですよ。何せ女性局員、しかも全員美少女に美女の部隊にいる数少ない男性ですよ？他の男性局員が見たら殺されますね、確実に。」

そんな感じに話しながら歩いてると、直ぐに部隊長室についた

コンコン

「入ってええよ。」

「失礼する。」

「失礼します。」

一応そういつてから室内に入る

「あれ？夏海ちゃんやのうてティアナ？夏海ちゃんどうしたんや？」

「朝から出かけてるよ。大方娯楽求めて、だろうがな。」

「にはは、夏海ちゃんらしいね。」

「そうは言うがな、たまにティアナに仕事押し付けて行く事があるんだぞ？前まではそんなこと無かったんだが・・・」

「まあ、お姉ちゃんも息抜きしたいんだと思うよ。」

「それが何度も続いてるからお兄ちゃんもこんな感じになってるんだよ、フエイト。」

「まあそれは置いといてだ、今回呼び出した理由は？」

「そうやったな、今回呼び出した理由はなんと！！出張任務が入りました！！」

「出張任務？場所は？」

「場所はなんと！！第97管理外世界、地球や！！」

「「「「え！？」「「「「」

「・・・ほう？」

「なんや土君、反応薄いで！！」

「気にするな。特別驚くことでもないんでな。」

「・・・どうして？」

「いや、もう情報は入ってたし。」

「・・・てことは、また本局のサーバーにハッキングしたんかい！？」

「せいかーい。よくできましたー、よくできましたー。」

「平成教育委員会か！！もう土君に突っ込むのは疲れたわ。」

「こんなことで疲れてたらだめだろ。そんなときはこれを飲むんだ。」

「ん？ありがとさん……………ってマズっ！？なんやこれ！？」

「プロテイン。」

「よし、土君。そこに立ってるんや。」

そうつとはやては後ろに下がり

「アホか……………！！！！！」

と叫びながら仮面ライダー顔負けの跳び蹴りをしてきた。もちろん俺に直撃し、そのまま俺は……窓を突き破って外に落ちた

「我が生涯に一片の悔いな——し——！！！」

もちろん最後までネタをやり通して

「ふう、酷い目にあつた。」

「自業自得です。大体あのタイミングでプロテインなんて渡すから悪いんです、もっと他のものにしましょうよ。」

「いや、そうはいつでも直ぐに用意できたのがアレだったから仕方なかったんだよ。」

「言い訳はいいですから。」

「……お前、だいぶ毒舌になってないか？」

「別になっていませんよ？」

「そうか……。」

あの後、何とか着地した俺はティアナと共に転移ポートのあるところまで向かっていた

「あ、土君、大丈夫？」

「問題ない。」

「骨の一本くらい折れれ、ドアホ!!」

「は、はやて、そんなこと言っちゃダメだよ!!」

「そうだよ!!お兄ちゃんに暴言吐いちゃだめだよ!!」

・・・ん？

「夏海・・・何時戻ってきた？」

「っ!?!・・・お兄ちゃん？」

「二度は言わんぞ、いつ戻ってきた？」

「アハハ・・・逃げるっ!!」

夏海がそついった瞬間、夏海の目の前の空間が開いた

「あつ!!待て!!」

「無理!!」

そのまま夏海は空間の裂け目に飛び込んだ。その直後に裂け目は消えた

「くそつ、逃げられた!!」

流石に空間の裂け目を通られたら追いようが無い。諦めるか・・・

「土君、いま夏海ちゃん、空間に入ってたよね・・・」

「なのは、気にしてはいけない、気にしてはいけないんだ・・・」
「・・・と、とりあえず、皆転送ポートに乗りつか。」

はやての声に頷きながら俺は転送ポートに乗り込んだ。

「シン・ドラゴス・ブローア」

と呟きながら

オマケ

「ふう、何とか逃げれた・・・」

夏海が空間の狭間でそう呟く

「まあこれで心置きなく休める!!」

そういつて腕を伸ばすが、そうは問屋が卸さない

「シン・ドラゴス・ブロー」

「へっ？」

その声のほうを見ると

「ええええええええええ!!!!?」

空間に穴が開き、そこから直径100mにも及ぶ巨大な火球が出てきた。しかも夏海に向かって飛んできている

「いやあああああ!!!!」

そして、夏海と火球の追いかけっこが始まった

32話 いざいかん!!海鳴市!! 上(後書き)

作者「今回は簡易的にパッパと行きます」

士「デイスティニープラン様、感想どうもありがとうございます」

作者「今回はガトー専用リック・ドム(アサシン宛)、ガトー専用ゲルググ(アーチャー宛)、GPO2A(土宛)、GPO2(MLR S装備)(夏海宛)、ノイエ・ジール(刹那宛)、ガトー専用ギガンティック(私宛)を送ってくれました」

士「・・・なあ、何をこんなに焦ってるんだ？」

作者「明日の宴会の準備が!!」

士「・・・そうか、なら・・・・・・此処で死ぬがいい!!」

作者「はいっ!?!?どうしてそうなる!?!」

士「俺だって宴会行きてえんだよ!!!!!!プルート・ディ・シュヴエスタアアアアアアアアア!!!!!!」

作者「月が、月が落ちてくるうううううう!!!!」

士「・・・・・・・・・・・・これで悪は滅びた」

作者「いや、生きてるから………ガクッ」

33話 いざいかん！！海鳴市！！ 中1

海岸線が直ぐ目の前にある街、海鳴市。この街の一角で十数人の団体が忽然と姿を現した

「ここが海鳴市ですか？」

「そ、ここがなのはとはやて、ひいては俺の故郷だ。」

「え！？ここって魔法がないんですか！？」

「うん、この星はリンカーコアをもつて生まれる人が極端に少ないの。でも、わたしやはやてちゃんみたいに高ランクのリンカーコアを持って生まれる人も希にいるんだよね。」

「まあアレや、突然変異ってやつや。」

「それにしても何も変わって無いね、この街は。」

「そうだな。まあ、変わられていても困るんだがな。」

そんな感じで話をしていると、後ろの方から声がした

「なのはー、フェイトー、はやてー！！」

「おいー！！」

「アリサちゃん、すずかちゃん！！」

「久しぶりやなー！！」

其処に居たのは10年前とは違い、美人に成長した月村すずかとアリサ・バーニングだった

「誰がバーニングだー！！」

何処から出したのか、ハリセンが飛んできた。なんというツッコミ、恐れ入った

「地の文につっこむとは・・・アリサ、恐ろしい子!!」

「死に晒せええええ!!!!」

まさかのヤクザキック。綺麗に腹部に直撃、しかもハイヒールでやるもんだからやばいほど痛い

「ぐおおおおおお・・・」

「だいたい士!!あんた10年も何処行ってたの!!」

「そうだよ、士君。どこいったの?」

「・・・」

あまりの痛さに声がでない。仕方なく王の財宝からエリクサーを取り出して飲む。ふう、痛みが引いた

「10年ねえ・・・まあ、いろんなところ?」

「心配したんだよ?特にアリサちゃんなんか毎日探してたし。」

「す、すずかつ!!あ、アンタなにいつてんのよ!??」

「・・・これが真のツンデレというものか。」

「誰がツンデレじゃー!!!」

顔を真っ赤にして叫ぶアリサ。お前しかないだろうに

「まあそんなことは置いといて、やることやらんのかおんどれら。」

俺がそういうとなのはたちが焦りだした

「そ、そうだった!!みんな、早く作業やる・・・」

だが、現実とは常に無常なものだ。既にフォワード陣はティーダの

指令でサーチャーを設置しにいった。つまりあれだ、隊長陣だけが働いてないのである

「みなさん遅いですからもう皆設置しに行きましたよ？」

「ご苦労ティード、おかげで仕事が減ったよ。」

「それはティアナとエリオに言ってください。俺だって実質サボりですから。」

「ま、そうだよな。」

「H A H A H A H A H A H A H A H A」

ふと、横を見るとなのはが沈んでる。もうなんていうかやばい、いちめたくなる

「なのはや、そんなところで沈んでないで元気出せ。んな姿フワードに見られたら恥だぞ。」

「・・・そうだね、次頑張ればいいよね。」

「そうだ。まあ、既にフワードは帰ってきてたりすんだけどな。」

俺がそういつとなのはがギギギと古い人形の首を動かしたような音を出しながら後ろを見ると、苦笑いしてるスバルとキャラコ、完全に呆れてるティアナとエリオが居た

「はぁ・・・」

フォワードの迅速な行動（主にティアナとエリオ）により、サーチヤーをセットし終わった俺たちは、現在翠屋へと向かっていた

「なのはや、いい加減元氣出せよ。」

「そうや、さもないとウチが土君貰ってくて!!」

「それはだめなの!!」

「ちよつと待とうか、何故そんな話に繋がる？」

「そうだよ、それにお兄ちゃんは私のだよ!!」

「だめだこりゃ、全然話にならねえ・・・」

そうこうしてる内になのはの元氣も戻り、翠屋に到着した

カランコロン

「いらつしゃいま・・・あら、なのはじゃない!!」

「ただいまー!!」

そういつてぞろぞろと店内に入っていく。元々結構な広さがあるので余裕で入れた

「お久しぶりです。」

「土君じゃない、久しぶりね。土郎さんなら道場よ。」

「ありがとうございま・・・」

・・・なぜここにいる

「ん？どうした？」

アーチャー・・・

「朝からいらないと思えばこんな所にいたのか・・・」

「別にいいだろ。」

「何が別にいいだろだ、こん畜生め。」

そうアーチャーに毒づいて、俺は道場に向かった

「久しぶりですね、土郎さん。」

「ああ、久しぶりだな、土君。」

「あれから縮地の方はどうですか？」

「ああ、このとおり・・・」

瞬間、土郎さんが消える。俺は即座に王の財宝から巨大な出刃包丁のような刀、斬月を取り出して後ろから来た斬撃を防御した

「マスターさせてもらったよ。」

「流石ですね。実戦でも十分使えますよ。」

「それは嬉しいことだ。それじゃあ、模擬戦でもどうだい？」

「いいですね。武器はなんでも？」

「ああ、あそこに木製の得物があるから選んでくれ。」

士郎さんに言われ、その得物のあるところまでいく。そこには木でできたエクスカリバーやらゲイボルクやら干将・獬豸、バーサーカーの斧剣、デュランダル、アロンドイト、ガラティーン、カラドボルグ、etc.....

「・・・これはどこから？」

「アーチャー君が暇な時に作ってくれたものでね、結構なものだよ。」

・・・アーチャー・・・

「・・・とりあえず、俺はこれにしますね。」

俺はそういつてバーサーカーの斧剣を模した木刀を持った。中々の重量だ

「それにするのか・・・よし、始めようか。」

「そうしましょう。」

互いに距離をとり、得物を構える。そして、踏み出そうとした時

「流士！！俺と戦え！！」

勢いよく道場の扉を開け、結婚しても変わらないシスコンこと高町恭也が入ってきた

「・・・空気読もうや、KOS。」

「何だその呼び方は！？」

「キング・オブ・シスコン、略してKOS。」

「そんな呼び方するな！！とりあえず・・・俺と戦え流士！！俺に勝たなければなのはやらん！！」

「恭也、今俺とたた「親父は黙つてろ！！」・・・」

士郎さんがいじけてしまった。はあ・・・

「はあ・・・お前は結婚してるくせにまだそんなことを言うのか・・・」

「それとこれは関係ない！！」

ああ、いらつく・・・よし、ぶっ飛ばそう

「KOS、今すぐ逃げるか、星になるか選べ。」

「黙れ！！貴様を倒してなのはを救う！！」

「・・・はあ、もういいや。」

俺はシスコンにバインドを掛け、王の財宝からオンバシラを取り出した

「っ！？なんだこれは！？」

「そーら、吹っ飛べー！！」

勢いよくオンバシラをスイングする。それはもう綺麗なフォームで

「ホームラーーーーーン！！」

「ぬあああああああ！！！！？」

シスコンは星になった。ついでに道場の屋根に巨大な穴が開いてしまったが

「士郎さん、試合なんですけど、また今度にしませんか？あのシスコンのせいで興が削がれました。」

「そうだな、後で恭也にはきちんと書いておくから。」

「ありがとうございます。」

俺はそう言って道場から出た。因みに、道場にできた穴はアーチャーに修理を任せた

「で、お前らはどんだけ食ってたよ。」

店に戻ってみると、スバルとエリオが何十皿という数のケーキを平らげていた

「ああ、隊長、この馬鹿二人を何とかしてください。すでにこの店のケーキの7割がこの二人に食われました。」

「なのはとフェイトは？」

「苦笑いしたままですよ、ほら。」

ティアナの指差すほうには、苦笑いしてるだけのなのはとフェイトがいた

「はぁ・・・仕方ないな。二人とも、食うのをやめろ。でないと機神拳ぶちかますぞ。」

俺がそういうも、二人は一向に食うのをやめない。こいつらもしや気が付いてない・・・？

「最後通告はした。覚悟しろ。転移。」

俺は二人を海鳴公園に転移させ、すぐさま結界を張った

「！？ここはどこだ！？」

「さっきまでケーキ食べてたのに！？」

「さあ、お二人さん、お仕置きの時間だぞー。」

殺気を噴出させる。スバルはそれで完全に固まり、エリオは冷や汗をかいた

「お、おい・・・ほんとに？」

「ほんとにだ。というわけで、メタモルフォーゼ、神化ヤルダバオト！！！」

身体を一瞬で神化ヤルダバオトへと変える

「さあ、懺悔の時間だ！！機神拳、極奥義！！！」

極限まで覇気を高め、双霸竜を出現させ、二人を拘束する

「なんだこりゃ！？」

「そら、行くぞー！！！」

そして始まる猛攻。エリオとスバルはそれを何とかガードしようとするが、あまりの威力にそれもできなかった

「おおおおおおおおおっ！！」

「うぐっ！？」

「どらああああああ！！」

「がはっ！？」

「だああああああああ！！」

二人を遥か上空まで打ち上げる。そして、3匹目の覇竜を出現させて一気に突撃する

「さあ喰らえ！！真覇、猛撃烈破あああああ！！！！」

その後、真覇猛撃烈破を食らった二人は遥か彼方まで吹き飛ばされたが、夕食時にはなぜか戻ってきていた

33話 いざいかん！！海鳴市！！ 中1（後書き）

作者「フオッフオッフオッフ、大分時間がたってたの」

士「うわっ！？作者が近衛門ばりのじじいになってる！？」

作者「なに、少しだけ老けただけじゃよ」

士「うわー・・・なんかその達観してる感じがキモい」

作者「何を言うかつ！！儂だって好きでこんなことやってるんじゃないわい！！あれじゃ、明日テストがあるから現実逃避してるだけじゃ！！」

士「するな。そして蒸発しろ。真面目にウザい」

作者「ひどいつ！？お主は老人をいたわる気持ちがないのか！！」

士「ない。特にお前みたいなじじいはな」

作者「シクシクシクシクシクシクシクシクシク・・・」

士「気持ちわりい・・・まあいいや、次行くわ。デイスティニープラン様、感想どうもありがとうございます」

作者「シクシクシクシクシクシクシクシク・・・」

士「今回の贈り物はジンHM2型（アサシン宛）、ムラサメ（アーチャー宛）、フラッグ（刹那宛）ヒルドルブ（作者宛）、ツダ（夏

海宛）、カスペン専用ゲルググ（俺宛）か・・・量産型の名機も入ってきたな」

作者「シクシクシクシクシクシクシクシクシク・・・」

士「あー！ー！ー！まじでこの作者ウザい！！メタモルフォーゼ、サイバスター！！」

作者「ちよっ！？何する気じゃ！？」

士「決まってる、お前を消す！！コスモ・ノヴァ！！！」

作者「光が、光が迫ってくるうううううう！！？」

士「ついでにこいつも喰らえ！！メタモルフォーゼ、ランスロット・コンクエスター！！そして、ハドロンブラスター！！」

作者「ノオオオオオオオオオ！！？」

士「ふう、これで消えたな」

34話 いざいかん!!海鳴市!! 中2(前書き)

みなさん、投稿が遅れてすみませんでした

「・・・で、てめえらはあれか？ここをフードファイトの大会かなんかと思ってたのか？ああ？」

隕石の如く落ちてきた二人を捕まえ、現在尋問中

「いやさ、目の前に食いもんがあつたら食っちゃまうだろ？」

「ほうほうほう・・・それでお前らは俺たちの分までみんな食つたと。」

「そうだ。」

「そうかそうか・・・アリサ、電源引つ張つてきてくれないか？」

「え？いいけど・・・」

アリサがそういつて電源を持ってくる間に俺は王の財宝からある装置を取り出した

「持ってきたわよ・・・って、何よこれ！？」

「お仕置きマシーン一号、通称『サイト騾け装置』だ。」

この機械、その名の通り、ゼロ魔の世界で女癖が強かったサイトを騾けるために作り出したもので、一度作動すると約10分間、360度すべての方向に時速500kmで乱回転する鬼畜仕様である

「ねえ、座席に血がついてるけど・・・」

「ああ、あれは以前これを使った奴のだ。気にしないでいいぞ。」

「いや、そこは気にしろよ！！」

「いいんだよ、別に。それにこれからお前らがこれに乗るんだぞ？」

俺がそういった瞬間、エリオはストラダを起動して全力で逃げた

「逃がすかつ！！縛道の六十三、鎖条鎖縛！！」
なごうじやわへ

エリオに向かって太い鎖が蛇のように進み、巻きついた。そして簀巻状態になって落ちてきた

「ではでは、楽しい楽しいお仕置きタイム！！」

簀巻状態になったエリオを機械にセットする。因みにこの次はスバルだ

「それじゃあエリオ、あと10秒で始動するからそれまでに遺言でも。」

「ティアナ！！てめえそこで見てねえで助ける！！」

エリオがティアナに懇願する。しかし、ティアナは

「エリオ？私たちの分まで食べたんだからせいぜい良い悲鳴を上げて頂戴。」

微笑みながら死刑宣告をした

「はい十秒経過。回転スタート！！」

俺の言葉と同時に機械が回転を始めた。その速度はどんどん増し、30秒経過した時点で最高速度に到達した

「ああああああああああああつ！！！！！」

「良いぞ、もつと叫べ。」

「死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ！！！」

「そのまま死んじやいなさいよ。」

俺とティアナが叫ぶエリオを罵倒する。なのはたちはその後ろで青い顔でエリオの様子を見ていた

「さて、もうそろそろだな・・・バリアー展開。」

俺がそういうと、エリオの周囲にバリアーが展開される

「お前ら、ここから先は見ない方がいいぞ。」

「え？ど、どうして？」

なのはが不思議そうに聞いてくる。その直後、エリオに異変が起きた

「うつぶ・・・ヴォエエエエエエエエエエエエ！！！」

一瞬にしてバリア内がうすい茶色で染まる。そう、それはゲ。エリオが先ほどまで食べていたもので構成されたゲ。だった。まあ、あれだけの高速回転で吐かないわけがないが

「ほらな？」

俺がそういつてなのはたちの方を見ると、気分を悪くして後ろを向いているのが数名、貰いゲ。をしているのが数名、そして大爆笑しているのが1名いた

「きやははははははははは！！！！ヴォエエエって、ヴォエエエって

「！！きやはははははは！！」

「笑いすぎだろ。そしてスバル、次はお前だからな？」

「えっ！？無理無理、死んじゃうよ！！」

「生憎、俺は男女差別はしない主義でな。それに今回の原因はお前にある。」

「そ、そんな〜！！」

それから少し経ち、機械の回転がストップしてエリオがボトリと落ちた。その顔は既に蒼白を通り越して緑になっている

「うわっ、こりゃスバルを乗せるのは無理だな。」

エリオのいなくなった機械を見て呟く。機械全体にエリオのゲ。がこびり付いているため、生半可な洗浄では取れなさそうだ。因みにスバルはこの呟きを聞いて安堵の表情を浮かべていた

「仕方ない・・・スバルはこっちにするか。」

俺はそう言つてスバルを見る

「スバル、お前のお仕置きはこっちにすることにした。」

「へっ？」

王の財宝の中からある機械を取り出す

「『サイト躰け装置二号』だ。一号よりは軽いから安心しろよ？」

「いやいやっ！！全然安心できませんって！！」

「ダイジョウブだよ。シニハシナイヨ。」

「なぜに片言！？」

「そんなことはいいいからさっさと乗れ。」

「いやですっ！！逃げます！！」

そういつてスバルがマツハキヤリバーを使って全速力で逃げた

「無駄だ！！メタモルフォーゼ、グレンラガン！！」

俺はグレンラガンに変化し、スバルが逃げた方向に向けて

「必殺！！ギガアアア、ドリルウウウウ、ブレイクウウウウ
ウウウ！！」

ギガドリルで突進した

「えっ！？ちょ、うそおおお！！！！」

スバルは後ろから迫りくる巨大なドリルを見て驚き、マツハキヤリバーに魔力を送った

「マツハキヤリバー！！もっとスピード上げて！！」

《マスター、これが全速力です》

「え！？」

スバルは一瞬だけ固まってしまった。後ろからギガドリルが迫っているのを忘れて

《マスター、ドリルが直撃します》

「へ？」

そういつてスバルが後ろを向いた直後、スバルにギガドリルが直撃した

結局そのあとスバルはマシンに乗らずに済んだ。代わりにもう一発ギガドリルブレイクを喰らったが

「ふう、なんか風呂入りたいな。アリサ、ここって風呂ある?」

「ないわよ。」

「マジか・・・仕方ない、あそこいつてくるか。」

俺がそういつて立ち上がろうとした瞬間、アリサに肩を掴まれた

「あんた何一人で行こうとしてんのよ!!」

「全員で行くのか?」

「当たり前でしょ!!」

「へいへい、んじゃ他の連中に準備させといて。」

俺はアリサにそう言っていまだに伸びてる二人を持ち上げ、シェイクした

「ちょ、おま、何やってんだよ!!また吐きそうになっちまったじやねえか!!」

「いつまでも伸びてるお前らが悪い。風呂行くからさっさと仕度し

るよ。」

「けっ、どうせムサイ男の裸しか見れないような所いったって・・・」

「因みにだが、１１歳までなら女風呂にも行けるぞ。」

「いつでもいいぜ!!」

いつの間にかエリオは仕度をすべて終わらせていた。ここまで欲望に従順だったとは・・・全部ランサーのせいだな、うん

「そんじゃ、いくぞー。」

全員が仕度を終えたので、俺たちは風呂へと向かった

「ふうぅ・・・やつぱ風呂はいいな。」

「ああ、一日の疲れがすべて取れる。」

「修行中はしょっちゅう入ってましたけど最近はずっとシャワーでしたからね。」

湯船に浸かりながら爺くさいことを言う俺とアーチャーとティード「しかし、エリオは結局女風呂に行ったつきりだな。」

「あいつはランサー以上に女癖が悪いからな、以前も修行中にティ

アナを襲おうとしたし。」

「・・・やっぱあの時殺しておけば・・・!!」

「お前も大概シスコンだよな。」

「シスコンの何が悪いんですか、隊長!!」

「別に悪くはないけどよ、流石にティアナが好きになった奴のことを攻撃したりするなよ？某平行世界の提督のように。」

この世界の某提督は妹がいないので関係ないからな？

「誰ですか、それ。」

「気にはいけないのだよ、ティード君。」

俺がそういうと、入り口から見知った顔が入ってきた

「士郎さんじゃないですか。」

「土君、さっきぶりだね。」

「そうですね。」

士郎さんがちょうど俺の前に座る

「おや、エリオ君だったか、彼は？」

「向こうに行ってますよ。」

そう言っただけの方を指す

「一人だけ女の園にか・・・羨ま、ゲフンゲフン、ずるいな。」

「言い換えなくても言ってること同じですよ。」

「ははっ、そうだね。でだ、本題に入るんだが・・・」

一瞬で士郎さんの纏う空気が変わる

「・・・土君

「・・・なんですか？」

「・・・いつなのはと結婚するんだい？」

・・・！？

「結婚・・・ですか？」

「前に言ってただろ。『あと10年たってなのはに彼氏ができなかつたら俺がもらっ』って。」

「・・・あゝ。思い出した。」

確かにそんなことを言っただ覚えがある

「しっかし結婚ねえ・・・今は忙しいのでそれが済んでからにしますかね。」

そしてその後は・・・定例集会の招集か・・・ゆうかりんとか大丈夫だよな？エヴァの時みたいに死闘に発展しないよな？

「そうか、なら挙式を挙げるときは是非呼んでくれよ。」

「わかってますって。」

その後俺達は談笑しながら風呂を堪能した

「やっぱ上がった後は牛乳だな。」

風呂から上がった俺はマッサージ機に乗りながらそんなことを呟いた

「何言ってるんですか、コーヒー牛乳に決まってるじゃないですか。」

「

「・・・なんだと？風呂上がりの一杯は牛乳に決まっている!!」

「いやコーヒー牛乳だ!!」

「やるか!!」

「やってやろうじえねえか!!」

「「表出る!!」」

「人様に迷惑がかかるだろうが!!」

ティードをボコろうとしたらティアナにハリセンでぶっ叩かれた

「ティアナ、何をする!!」

「不毛過ぎんのよ!!その言い争いが!!大体・・・」

そう言つてティアナが懷から

「風呂上りはフルーツ牛乳って相場が決まってるのよ!!」

フルーツ牛乳を取り出した

「・・・ふっ、まだまだ子供だな。」

「そういうあんたも普通の牛乳なんて飲んでるただの爺くさいおっ

さんじゃない。それに兄さんもいまだにコーヒ―牛乳から卒業できてないし。」

「なんだと！？コーヒ―牛乳のどこが悪いつてんだ！！」

「そんなコーヒ―の風味を消し飛ばしちゃってる飲み物が美味しいわけないわ！！泥水と大差ないわよ！！」

「それを言ったらフル―ツ牛乳もただ果物を入れるだけ入れただけの物だろ。コーヒ―牛乳と大差はない。」

「！！・・・いい度胸じゃない。」

「ほう、やるのか？」

「お前ら二人まとめてぶっ倒してやらあ！！」

「「表出る！！！！」」

そう言つて施設から出ようとしたとき

（みなさん、サーチャーに反応がありました！！）

（でも他に巨大な魔力反応が5つ離れたところから検出されてるの！！）

キヤロとシャルルの念話を聞いて意識をそちらに向ける。確かにロストロギアと思われる魔力の他に明らかに量のおかしい魔力が5つある。恐らくこれは・・・転生者のものだな

（シャルル、離れた方にはネセサリウスで対処する。ロストロギアの方は任せた）

（わかったわ、はやてちゃんには私から言っておくわ！！）

（了解、頼んだ）

俺はそう言つて二人の方を見る

「これよりネセサリウス分隊は転生者狩りを行う。エリオが戻り次

第仕事に入るぞ。」

「了解。喧嘩はお預けね。」

「仕方ない、一肌脱ぐか。」

俺たちはそう言って転生者狩りへの準備を始めた

34話 いざいかん！！海鳴市！！ 中2（後書き）

士「遅い。今まで何やってたんだ」

作者「すみません、家でリトルバスターズEXをやっていました」

士「あのなあ・・・お前も高校生になったんだからさあ、もっと時間の使い方とか考えろよ」

作者「面目ない・・・」

士「はあ・・・まあいい、とりあえずこの小説が生き残ってるだけでもいい方だしな」

作者「まあそうだよ、こんな駄文を読んでもくれる読者がいてくれるだけでほんとううれしいよ」

士「自覚あんなら直せよ・・・まあいいか。そうじゃ、ちゃっちやと次行くぞ」

作者「あいよ。ディステイニープラン様、感想どうもありがとうございます」

士「えー、今回の贈り物はビッグザム（作者宛）、ハンマ・ハンマ（アーチャー宛）、ガルス（刹那宛）、ザク？改（夏海宛）、リーンホースjr.（俺宛）、ヴァル・ヴァロ（アサシン宛）か。個人的にザク？改はいい機体だと思う」

作者「俺は個人的にヴァル・ヴァロだな」

士「へえー」

作者「興味なさそうに言うなよ・・・ってもうそろそろ切り上げないと次のグループが来ちまう!!」

士「誰だよ、それ」

作者「まあいろいろだ。そんじゃ」

「「次回もお楽しみに!!」」

35話 いざいかん！！海鳴市！！ 下

三人称 side

ロストログアの反応があつた場所から南東に約10kmの地点。現在ここに5人の男が立っていた

「取りあえず今回の目的はこの『流 士』とかいう奴の抹殺でいいんだよな？」

「ああ、そいつを抹殺した後は原作キャラをどうしてもいいそうだ。」

「フヒヒツ、キャロやヴィータを雌奴隷にできると思うと涎がとまらねえ・・・」

「なんだお前、ペドフェリアか？」

「しかしマキナ様もどうしてこんな奴に転生者の中でも精鋭中の精鋭である俺たちを差し向けたんだ？」

「さあな？それだけ危険だってことじゃないか？」

「高々Aランク程度の魔力しか感じない此奴がか？」

この男たちはマキナによつて転生した転生者たちである。もっとも、ミスなどで殺してしまった者達ではなく、前世で悪行の限りを尽くした極悪人を転生させたのだ。自分の駒として

「取りあえず目標がここに来るのを待つぞ。」

その一声に転生者たちは所定の位置につく。が、彼らは気付いていないだろう。彼らの目標が最高位の神であるなど・・・

三人称 side end

士 side

「魔力が分散していく・・・隠れたのか？」

現在俺たちは連中から1kmほど離れたところにいる。ここで待機して連中が何か話さないかと思っていたが予想以上に様々なことが聞けた。連中の目的は俺の抹殺らしいが、本当の目的は俺の力を見極めるためだろう。大体、存在から消滅させてもしないと死なない俺をどうやって連中が殺すと？俺を殺せるのは俺が夏海しかないぞ

「これより作戦を開始する。ティアナとティードは奥の二人を、エリオは先頭の一人を狙え。残りは俺がやる。目標は欠片も残さず処理しろ。わかったか？」

「了解。」

．．
そう言って散らばる。さてさて、転生者どもはどれだけもつんだか．．

士 side end

ティアナ side

私視点？珍しいわね・・・まあいいわ。取りあえず私と兄さんは今転生者だか何だかがいる地点に向かっているの。土隊長曰く確実にしとめる必要がある連中だそうよ。私には良くわからないけど

「ん？あれね・・・」

「ティアナ、お前は右を頼む。俺は左を。」

「わかったわ。気を付けてね。」

「もちろんだ。」

兄さんと別れて目標に接近する。と、相手もこっちに気付いた

「っ！！ティアナ・ランスターか？」

「どうして私の名前を知ってるのかしら？もしかしてストーカー？」

「んなわけねえだろ！！まあいい、まず手始めにお前をたっぷり可愛がるとするか・・・」

キモっ！！一瞬で鳥肌が立ったわ。でも仕方ないから戦うしかない。ホント、面倒だわ・・・

「仕方ないわね、クロスミラージュ、モード、ロングブレード!!」
《了解、モード、ロングブレード》

「っ!?!」

「さ、いくわよ!?!」

目標に向かって一気に駆け出し相手の首目掛けて得物を振るう。並みの相手ならこの一撃で首が落ちるけど、此奴はどうなんでしょうね?

ガキイイイイイン!!

「あ、危ねえ。」

「へえ、やるじゃない。」

どうやら当たりだったみたいね。久々に楽しめそうだね

「それじゃあ、精々壊れないように足掻きなさい!!」

さあて、どこまで持ってくれるんでしょうね?

ティアナ side end

エリオside

ん？次は俺か？ま、どうでもいいが。俺は今転生者だかと対峙してる。連中の魔力量はかなり多いが、どうやら連中はそれをフルに使えねえようだ。ちゃんと扱われてねえのか

「なんかハズレくじ引いたみてえだな・・・こんな雑魚相手にしても面白みなんてクソもありやしねえ。」

「なんだと！？」

「当然だろ。自分の魔力もフルに使えねえやつが俺に勝てるかっての。」

「黙れ！！高々Bランク魔導師のくせにほざくな！！」

・・・は？こいつ今なんて言った？Bランク魔導師？俺は今EXランク魔導師だぞ？大体俺がBランクだったのなんて何時の話だよ。そつえばさつき盗聴を聞いてた時原作キャラがどうこうとか言ってたな・・・もしかしてあれか？俺たちが漫画とかアニメの中の存在だって世界から来たとかいうオチじゃねえよな？

「おいてめえ、てめえが元々いた世界じゃ俺らは漫画とかアニメの中の存在だったのか？」

「！？・・・よく気が付いたな。そうだよ、お前らはみんな空想の存在！！全部偽物なんだよ！！」

偽物ねえ・・・取りあえず此奴の頭がイカレてるのは良く分かった。大体平行世界概念がある以上存在する存在に偽物はねえ。まあこれはうちの隊長の言葉だが、「世界というのは、行動一つで次々に分離し、平行世界を作り出していくものだ。例えば、ここで右手を挙げたとして、すると、この時点で俺が左手を挙げた世界、両手

を挙げた世界、手を挙げなかった世界等、様々な平行世界が誕生する。そして、俺たちがアニメや漫画になってる世界もあるだろうし、俺という存在がいない世界もある。だが、それらはすべて本物だ。偽物なんてありはしない。世界とはそういうものだ」なんてことを前に言ってた。つまり、此奴はそれを全く知らないということになる。馬鹿にも程があるな

「馬鹿馬鹿しい・・・世界に偽物なんてありはしねえよ。俺という存在は確かにここに確立している。それが偽物だっていうなら同じ世界に存在するてめえも偽物だろ？」

「っ！？なんだと!？」

「そんなことも理解できてねえ糞ガキに慈悲なんていらねえな。絶望に沈めて殺してやる。さあ、こいよ。」

既にストラダは展開済み、いつでも奴の心臓を抉り出せる。ま、殺るのは徹底的に痛めつけてからだけだな

「後悔するなよ!!光よ!!」

奴が刃の無い剣を持って叫ぶと光の刀身が出てきた。あれって『ホルン・ノヴァ烈光の剣』じゃねえか？うちの隊長も持ってたよな、あれ・・・

「まあいいか、どうせこいつは死ぬんだし。」

「はあああああ!!」

・・・こいつ、ド素人じゃねえか・・・どこの世界に馬鹿正直に剣を振り上げてこっちに飛び出してくる奴がいんだよ。スピードはまあまあだから恐らく此奴はこの一撃で勝負をつけてたんだろうな

「馬鹿にも程があるだろ・・・」

はあ、やっぱり他の奴に行った方が手ごたえあっただろうな・・・

エリオside end

ティーダside

お、ようやく回ってきたか。俺はティアナと分れた後、左にいた転生者だか何だかの所に向かった

「フヒヒ・・・」

・・・なんかイカレてるぞ、此奴。なんだよ、フヒヒって。笑い声なのか？笑い声なのか、あれ！？

「あー、その転生者その1、悪いが今すぐ死んでくれねえか？主に俺の精神衛生のために。」

「ん？なんだてめえ？」

「いや、だからさあ、今すぐ死んでくれない？自殺用のナイフとかないなら貸すからさ。」

取りあえず懷からナイフを一本取り出して差し出す。一応不慮の事態にならないように俺の手から離れて3秒後に爆発するようになってるけどな

「だれが自殺なんかするか！俺にはヴィータやキャロ、リインフオース？を雌奴隷にするという大いなる目的があるのだ！！それを成し遂げるまでは決して死なん！！」

「はいはい、取りあえず遺言はそれな？てなわけで、死ね。」

一瞬で接近してナイフを糞ゴミ虫の頭に突き刺す。そして手を放して離れる。3・・・2・・・1・・・

ボカアアアアン！！

「うつし、これで一人始末つと。」

流石に頭が木端微塵になれば復活できないだろ。ウチの隊長はできるけどな

ティーダ side end

士 s i d e

ティードの向かった方から転生者の反応が消えた。ティードの奴、一撃で殺したのか・・・流石だな。1000年も鍛えた甲斐があったってものだ

「つつわけだ。今なら17分割で済みますが、そこんどこどうするよ、転生者？」

「ハッ、高々Aランク程度の魔力しか持っていないてめえに何ができるー!!」

「ああ、10年前に張った結界まだ残ってたのね。んじゃ、解除。」

取りあえず特殊結界を解除して再度結界を張りなおす。因みに今回ののは隔離結界。この結界の中と外を完全に隔離する優れもの。しかもこの結界を破ろうとしても俺と同等の魔力でぶち抜くしか方法がない。俺が解除すれば話は別だけど

「っ!?!なんだここは!?!そしてなんだその魔力は!?!」

「ここは隔離結界の中。そしてこの魔力は俺の魔力さ。」

「なんだと!?!さっきまで感じてた魔力はなんだったんだ!?!」

「あれは特殊結界の効果で俺と俺の仲間の魔力をAランク程度に誤認させてたんだよ。」

「っ!?!だ、だが、それでも貴様の不利に変わりはない!!」

「っ!?!そうだ、俺達は二人、向こうは一人、いくら魔力があつたって俺達には勝てない!!」

なんとまあ、単純な考えなこと。こいつらは数の暴力すら無に帰す絶対的な力を知らないのか?少なくとも俺はその絶対的な力を3人は知ってるぞ

「そう思つのは勝手だが、これを見ても本当にそう言えるのか？」

俺はそう言つて魔力の放出を止める。そして

「フルリミット、バースト」

バサア

瞬間、魔力とは違う力、神力が全身から噴きだし、背中から右側に漆黒、左側に純白の6対12の翼が出現した

「・・・なんなんだよ、なんなんだよ、これ!!」

「勝てねえ・・・勝てるわけねえ!!」

転生者が俺を見て恐れ、慄く。しかし、俺はそれで見逃すほど慈悲深くもないし、お人好しでもない

「どうした？小さき者よ。我を討つのだろう？」

どうせなので威厳ある口調にでもしてみる。こいつらの反応が意外と面白くてな

「なんなんだよ、お前は!!」

「我か？我は『永久の闇と悪夢を司りし金色の魔王』『全ての祖たる者』。汝ら小さき者の知識の中の姿で言えば『悪夢を総べる者』ロードオブナイトメアと言われる存在だ。」

ここまで言えば流石にわかるだろう。金色の魔王はスレイヤーズ最強の存在にして全ての存在の母。神然り、魔族然り、人間然り、自然然り、世界然り、ありとあらゆる存在の産みの親でもあるのだ

「・・・ハッ、ハハハハハ・・・」

転生者の一人が力なく笑う。まあ、仕方ないだろう。弱い転生者だと思っていたのが蓋を開けてみれば創造神、もしこれで立場が逆だったなら俺も同じ状況に陥っていただろう

「既に戦う意志さえ失ったか・・・よい、汝らは苦しませず、一撃で屠ってやろう。」

「っ!?!やられてたまるか!!」

転生者の一人が逃げるように走っていく。だがしかし、逃げられぬぞ!!

ガンッ

「っ!!なんだこれ!?!出れねえ!?!」

「当然だ。この結界は神の力を以てしても破ることは敵わぬ。」

因みに消滅の概念を直接ぶつければ消える。ただし、そんなことができるのは俺と夏海くらいしか・・・ああ、あとMUGENの鬼巫女12pくらいか？

「さて、何か言い残すことはあるか？小さき者よ。」

「・・・認めない、俺はこんなの認めないぞおおおお！！！！！」

「ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ・・・」

完全に一人壊れてる・・・キモい、だからさっさと排除しよう

「ではな。
ラグナフレード
神滅斬」

腕を一振り。その動作と共に、腕から闇が噴き出し、転生者どもを消滅させた

「殲滅終了つと・・・フルリミット、ロック。」

全てのリミッターを掛けなおす。これをやらないと後で非常にまずいことになる

「あとは結界を解いてつと・・・他の連中も終わったみたいだな。」

転生者の魔力が完全に消えている。どうやらティアナたちも殲滅し終わったようだ

（ティアナ、エリオ、ティーダ。なのはたちの元に戻るぞ。）

（（（了解。）））

ロストログアの反応も消えてるのを確認し、俺たちはみんなの元に戻った

35話 いざいかん!! 海鳴市!! 下(後書き)

作者「最近また新しく小説書き始めたんですよ」

士「は!?! またなのか!?!」

作者「いやさ、ネタは結構前からあったからためしに書いてみたんだよ」

士「お前また投稿作品増やす気が!?!」

作者「いや、今書いてる小説がひと段落ついてから投稿しようかとそれに最近リアルがかなり忙しいし」

士「リアルが??.?.この時期だと学校祭か」

作者「そ。いろいろと決めなきゃいけないこととか会議とか...正直言って仕事が多すぎる。しかも部活の方もなんかやるっていうし...」

士「あきらめろ。お前が多忙なのは昔からだ」

作者「ひでえ...誰かおれを労ってくれる人はいないのか!?!」

士「とりあえず無視で。えーと、ディスティニープラン様、感想どうもありがとうございます」

士「今回はマスターガンダム(作者宛)、ガンダムデュナメス(夏海宛)、グレン(俺宛)、ラガン(刹那宛)、バルゴラー1号機(ア

ーチャー宛）、バルゴラ2号機（アサシン宛）か。どんどんガンダムからスパロボに方向がずれてるな」

作者「おそらくMSが尽きたんじゃ・・・」

士「かもな。ディスプレイ様からもらったMSとかおそらく100機超えてるぞ」

作者「お前はお前で核ミサイルとか送りつけたりしてたよな」

士「あれはあれだ、若気の至りだ」

作者「若気の至りねえ・・・おれにはそう見えないけどな」

士「なんだっていいだろ。まあいい、もうそろそろ上がるぞ」

作者「そうだな。ではみなさん、次回をお楽しみに!!」

士「見ないとぶっ飛ばすぞ」

お知らせ

えー、まずは『魔法少女リリカルなのはS.T.S 神となりし転生者の軌道』を読んでくれている読者の皆様へ感謝を。どうもありがとうございます

作者のアルビオンです。今回はタイトル通りお知らせなのですが、前置きなしに言いましょう。この小説を書きなおそうと思います

理由なんです、まず一つ目に、自分で読み返してみても話が全くまとまっていないと感じたこと。二つ目に、感想の方で『主人公がチートすぎるのはどうかと思う』という感想をいただいたこと

やはり読者の目線としてはチートが過ぎるのは面白くないようです。何とか完結させたかったんですけどね

ですので、この作品の更新はこれからはありません。そして、次回作の投稿と同時に消そうと考えています

なお、その際にこの作品から派生した学園黙示録の小説も削除します。ISの小説は残す予定です

最後に、最後まで読んでくれた読者の皆様へ、謝罪と再度の感謝を

すみませんでした。そして、ありがとうございました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8138k/>

魔法少女リリカルなのはS T S 神となりし転生者の軌道

2011年8月13日16時18分発行